
うつけ無双

ザッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うつけ無双

【Nコード】

N7615S

【作者名】

ザッキー

【あらすじ】

本能寺で明智光秀の謀反により生涯を終えるはずだった織田信長。しかし、まばゆい光に包まれた。

この小説の信長の強さは信長の野望 革新を元にしております。
統率92、武勇89、知略96、政治105です。
これだけでいくと三国志IXの張遼武勇90とためを張ります。信長様強いです・・

恋姫キャラの強さは恋姫の世界を考えて作者の都合によらせます。
実際は孫策と周泰は同じぐらいの強さらしいですが恋姫世界では明らかに孫策のが強いですからね。

戦国無双、信長の野望、センゴクの信長の影響を受けています。しかし戦国無双の信長ではありません。しかし鎧や剣は戦国無双をイメージしてください。

更新は超不定期です。すみません・・

うつけのうつけによる、恋姫

「是非に及ばず」

燃え盛る本能寺で信長はそうつぶやき、持っていた刀を握り締めたまま本能寺の奥へと歩んでいった。

信長は普段から愛用している甲冑にマント姿のまま正座し、この今日の出来事や今までの覇道を振り返った。

桶狭間、信長包囲網、長篠、そして部下明智光秀の謀反。

これが自分の半生であった。

何故光秀が？しかしもうそれは遅い。

弱肉強食のこの乱世、下克上が当たり前のこの時代であり、そしてついに自分にもそれが起きただけ。

「くく・・・この信長ともあろうものがここで朽ち果てるか。

光秀よ。貴様にこの天下を飼いならせるか？貴様の器、この信長がしかと見届けようぞ」

そして、信長が覚悟を決め甲冑を脱ごうとしたとき・・・

あたりにまばゆい光が輝きはじめ、そしてそこに一本の道がある。

「ふん・・・面妖な・・・」

そして声が聞こえる

聞いたことのない不思議な声だ。

「どうか・・・この外史を導いてちょうだい・・・ご主人様を・・・」

信長はこの不可思議な状況を面白いと思った。自分にはもう選択がない。

ならば、とことんこ流されてやろうと思った

「誰ぞ知らんが・・・、おもしろい。日の本でのワシはもう時代の亡霊らしいでな。この信長の力を欲するか。ならば・・・」

信長は歩いていった。ここ日の本での自分は終幕であり、そして求められたのならその世界でもう一度半生をやり直そうと。信長は裏切りに何度も会ってきた。浅井や、松永、光秀のような裏切りに・・・

今度は、失敗しないようにと。

「キンカン、サル。日の本はつぬらにまかせようぞ」

出会い

信長はまぶしい光を感じ目を覚ました。

そしてそこは見渡す限り荒野であつた。自分の記憶の中ではあれが夢でなければ本能寺であつたはずである。

「ふむ・・・」

そして信長は顎のあたりに手をあて、今の状況を整理しようとしたときあることに気づいた。

自分の記憶が正しければ、自分の体が20代頃にまで若返っているのである。

しかし、記憶や知識は本能寺でのあの瞬間までしつかりと覚えている。

「ッハッハッハ・・・、天はこの信長の死を拒んでおるようだな。よもや50に近いこのワシをどうするつもりぞ・・・おもしろい」

そして荒野でひとしきり笑う信長を見つめる3つの視線があつた。

「アニキ・・・」

「どうしますかい？」

「できれば関わりたくねえが・・なかなかいい鎧とか持つてんだよ・
・おいお前ら。奪えるもん奪って殺っちまうぞ！」

そしてこの3人は信長に近づき、話しかけた。

「おい、あんた。なかなかいいもんもってんじゃねえか」

「ほう・・この地にも人はいたか」

「あん？」

「うぬらがなにものか知らんが、この地はどこぞ？」

そして、三人の男は困ったような顔をして、仲間内で話し始めた。

「アニキ・・やっぱこいつ頭おかしいんじゃないやねえんですかい？」

「わからねえ。だが頭が悪くてもよ、こいつの持ち物はしっかりと金に変わってくれんだぜ」

「ふむ・・賊であつたか。そしてこの信長から追いはぎをするか」

「死にたくなかったら有り金とその鎧と剣おいていきな。へへ・・もし、断つたら・・」

アニキと呼ばれた男が、腰に刺してある鞘から剣を抜く。

「で、あるか・・」

そつつぶやくと信長は愛刀 妙法千五村正 を抜刀した。

「なんだてめえ！？やる気か！？チビ。デク。殺っちまいな！」

残りの二人も抜刀し。信長へと襲い掛かった。

「死ねや——！！！！！」

「いくぞお！」

チビとデクが信長に切りかかる

「……………」

しかし、信長はまったく動揺することなくチビの攻撃を必要最小限の動きでかわし、チビの首を一突きし殺した。

「…無価値」

「ぎゃあああああ——！！！！！」

「あ…ああ…」

そして、動揺しているデクを肩からバツサリと切り捨てる

「そ、そんな・・・」

信長は腰を抜かしているアニキの元へゆっくりと歩いていく

「ま、待て！話せばわかる！！金か？金ならさっき商人から奪ったばっかなんだ！

それをやる！あんたに全部やるよ！！だから」

「・・・・・・・・」

「ギャアアアアー！！！」

信長は無言でアニキを切り捨てた。信長には彼の甘言はまったく聞こえていないようだ。

「して・・・いつまで見ておるか」

信長は荒野にある一つの大きな岩に問いかける

「あ、あはは。ばれてました？」

「お見事です。貴方のその太刀筋。堂々とした佇まい。そうとうな腕をお持ちですね」

「にはは、お兄ちゃんすつごく強いのだー」

その大きな岩の陰から三人の少女が現れた。

一人は桃色の髪をしており、笑顔がとても似合いそうなおっとりとした印象を持つ少女。

もう一人は黒髪で、背が少女たちの中で一番高く、キリツとした目を持つ意思の強そうな少女。

最後の一人は背が低く、まだ幼い風貌の赤毛の女の子。体に不釣り合いなほど大きな矛を持っている。

「うぬらは何者ぞ」

「あ、待ってください。私たちは決して怪しいものじゃありません」

桃色の髪の少女が手を顔の前でぶんぶん振りながら、あわてた様子でそう答える。

「桃香様。私が説明します」

黒髪の少女がそう言い信長に近づいてくる。

「私たちはこの乱世を鎮めるために旅をしているのです。そして管路という占い師が天の御使いが天より参られるという占いを出し、私たちはその御使い様を探すために旅をしている最中なのです」

そして、桃色の髪の少女も少し、困ったような顔で信長の元に近づき、話の続きをする。

「でもなかなか見つからないんですよ。あ、そうそう。あなたは光り輝く人を見ませんでした？」

「光り輝く人・・・？」

「はい！なんでも天から来る御使い様は光り輝いているらしいんです！見ませんでした？」

「ふむ・・・見ておらぬ」

「はあ・・・そうですかぁ・・・最初は貴方かと思ったんですが・・・
真っ黒な鎧ですもんねえ・・・」

そう呟くと桃香と呼ばれた少女は見てわかるほどに落ち込んでしまった。

そして、赤毛の小さな少女がダダをこね始めた

「もう疲れたのだー！愛紗く探しても、探してもどこにもいないのだー！！」

「こら鈴々。初対面の方の前でわがままをいうな」

「・・・・・・・・」

「ほら見る。この方もあきれているではないか」

「ふむ、気にするな・・・して、愛紗とやら」

「！！？？」

「！！！？？」

「！！！？？」

信長がそう呟くと急に三人の表情が変わりだした。

ガキーン！！！

辺りに金属音が鳴り響く。

どうやら黒髪の少女が本気で信長に切りかかってきたようだ

「貴様ー！！なんのつもりだー！！」

「ほう・・・この地の人間はいささか人を切る癖があるか・・・」

信長と愛紗がつばぜり合いの状態に対峙している

「と、取り消してください!!!」

桃香がそう叫ぶ

「どうして愛紗ちゃんの真名を呼んだりしたんですか!? 取り消してください!!! 今すぐ取り消してください!!!」

「真名・・・とな?」

「貴様・・・真名も知らんのか」

「ふむ・・・この地に来てまだ短いのでな」

「くっ・・・ぐっ・・・ふうー」

そういうと愛紗は一步下がり、苛立ちながらも深く深呼吸をして心を落ち着けているようだ

「まだ・・・許したわけではないが私も失念していた。確かに貴方のその鎧や剣。どれも見たことがないものだ。どこか異国の文化を思わせる」

「そ、そうだね!!! 愛紗ちゃん!!! この人きつと本当に真名を知ら

ないんだよ！！だから！っね？」

桃香があたふたと手を動かし、必死に愛紗を説得し始める。

すると・・・

「はあゝ・・・わかっていますよ。本当に知らなそうですし、今回はしょうがなかったということにします」

少し落ち着いたのか、愛紗は構えていた、武器を下ろし、警戒を解いたようだ。

しかし、まだ苛立ちながらも、説明を始めた

「いいですか？真名とは、本当に親しい者同士にしか教えることのない真の名のことです。その人間の人生そのものがつまったとても大事な名。

本人からの許可を得るまで呼ぶことは決してはいけません。真名を許可なく呼ぶことは殺されても文句が言えないのです」

「ほう・・・それでうぬは切りかかってきた・・・とな」

「はい。それにしても本当に何も知らないのですね」

「して、それではうぬの事なんと呼べばよいのだ?」

「あ、そうですね。私は性は関、名は羽、字は雲長と申します」

「・・・・・・・・・・」

信長はその名を聞き少し驚いた表情をする。そして、残りの二人の少女も自己紹介を始めた

「私は性は劉、名は備、字は玄德だよ」

「鈴々は性は張、名は飛、字は翼徳なのだー!」

信長は驚いた。よく知っている三国志に登場する人物たちの名がそこにはあったのだ。しかし、ここにいる劉備たちは女性。信長の知っている三国志では三人は男性なのだ。

これはいったいどういうことなのだろうか?

賊

「それで貴方の名はなんというのですか？」

関羽が、信長に対して自己紹介を求めた。

「織田上総介信長・・・ぞ」

「変わったお名前ですね。姓が織、名が田、字が上総介信長ですか・
・・・不思議なお名前ですね」

劉備が信長の名前を聞き、そう答えた。不思議だと思ってもしようがないだろう。

国や時代が違うのだ。

「日ノ本には字はない。姓が織田、名は上総介信長」ぞ」

「へー、やっぱり異国の方だったんですね。それで日ノ本・・・ですか？そのお国はどこら辺にあるんですか？」

「ふむ・・・ここより東の海上にある島国よ」

「まさか蓬萊・・・ですか？」

「蓬莱・・・か。それがワシらの日ノ本であるとはいえぬ。仙人などというものも存在せぬ。ただこの地より東にある島国とだけ覚えておけばよい」

4人がそれぞれ質問しあい、そろそろここから移動しようとしたとき。

「はあ・・・はあ・・・」

信長たち一向の数十メートル先を、一人の男が必死に走っている。その、様子はただ事ではなく、劉備が真っ先にその様子に気づいた。

「愛紗ちゃん！あの人なんだか必死だよ！どうしたんだろ！？」

「確かにただ事ではなさそうですね。そこの者！どうされた！！」

関羽が大きな声でそう叫ぶと、その男はこちらの存在に気づき止まってくれたようだ。

そして、こちらへと必死に走ってきた。

「た、助けてくれ！！村が！！俺たちの村が！」

「村がどうされたのだ！落ち着いて話してくれ！それではわからん！！」

関羽がその男を落ち着かせようとまずは、呼吸を整えるよう指示した。

そして、少し落ち着いたので男は今度はゆっくりと話始めた。

「さ、さっきそこに頭に黄色い布をまいた連中がいたんだ！俺は聞いたんだ！！そいつらがこれから村を襲おうと相談してたんだよ！！」

「村を・・・酷い・・・」

「むー！！そんな連中許せないのだー！！」

劉備と張飛が共に険しい表情をし、それぞれ怒りの声を漏らす

「それでその村が俺たちの・・・俺たちの村だったんだ！！」

あいつらはこれから人数が集まったら村を襲うらしいだ！！ここら辺は結構やつらが多いってうわさもあるんだ。きつと300人は集まるんじゃないか！！」

「300人か・・・貴方たちの村はどれぐらいいるのですか？」

「そうだな・・・人口は500人ぐらいだが・・・あんたまさか！！？」

「ああ、戦おう。賊共など追い返せばよいのだ！！」

「ば、ばか言っちゃいけねえ！！俺たちはただの農民なんだ！！それにじーさんや女、子供だっているんだ！男だけ集めても200人ぐらいしかないんだぞ！勝てるわけねー！」

「それではそのまま賊共に村が蹂躪されるのを黙って見てるというのですか？あなたの家や家族だつてすべて奪われるのですよ？」

関羽は男を宥めかすように必死に説得した。その表情や声色は真剣そのもの。

そして、男の心もだんだんと怒りに満ちてくる。

「ぐう・・・確かに・・・そうだが・・・」

「とりあえず行きましょう。私たちを貴方の村に案内してください。そして皆で話し合つのです」

「だ、だがなんであんなたちは・・・」

そして、劉備は立ち上がり。笑顔で両手で腰の辺りでガッツポーズをする。

「大丈夫です。私たちはただ困ってる人たちを見捨てることなんてできないだけですから」さあ、行きましょう」

「信長殿。貴方はどうされますか？」

関羽が信長に視線を向け、そう問いかけた。

それを聞き、劉備、張飛も信長に顔を向ける。
信長は三人からの視線を受け、こう答えた。

「無論・・・ワシも行こう」

そう答えられ、三人は一斉に笑顔になる。

「おお！そうですか！それは頼もしい。戦うとなれば今は少しでも戦力がほしいところです」

「にゃはあー。愛紗の一撃をとめたお兄ちゃんなら確かに安心なのだ」

特に、関羽、張飛が喜んでいた。

先ほどのやり取りで、信長の武は只者ではないと思ったのだろう。

そして、ともに戦えることに感謝しているようだ。

劉備も笑顔で信長へと感謝の言葉をつける。

「信長さん、ありがとうございます。さあ！みんな！行こう！」

「で・・・では、村にご案内します・・・本当に戦う気で・・・？」

「はい」

「もちろん！」

「なのだー！」

「・・・」

未熟な軍神関羽のカリスマ

「あそこです！あそこが俺の村です！！」

村が見え始め、男は村を指差し、信長たちにそう告げた。

その村ではまだ何も知らない村民たちが普通に生活をしている風景が広がっていた。

田んぼで作業し、母親と子供は笑顔で手をつなぎながら村を歩く、とても和やかな光景。

しかし、その光景は一瞬で終わりをとげた。

男が大声で村人全員に聞こえるように必死で叫んだ

「おい！！みんな聞いてくれ！！これから・・・これからこの村に賊がくるんだ！！！！」

「！！！！！？！？」

「！！！！！？！？」

「！！！！！？！？」

・
・

「わー！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

一斉に村が混乱に陥った。皆が作業をやめ、急に走り出し、ぶつかっている者たちでさえいる。

完全に収集がつかない状態であつたが……

「村のものたちよ聞けい!!!」

関羽が一喝した。

すると村人たちは関羽の声に反応し、関羽を見つめる。
しかし、関羽はまったく動じない。何百とある目を向けられようと

も動じず、話し始める。

「皆このまま村を蹂躪されてよいのか？選択は耐えるか逃げるの二択しかおぬしらにはないのか？それでよいのか？

おぬしらが必死に作った作物や家を奴らは奪うのだぞ？そしておぬしらを斬るのだぞ？それでもおぬしらは耐えるのか！逃げるのか！」

「そ、そんなこといったってどうすりゃいいんだよ！！」

「俺たちに何ができるってんだよ！！」

「そーだそーだ」

村人たちが一齐に声をあげる。あきらかに諦めが入った声だ。しかし、関羽は先ほどと変わらず、熱意の籠った声で話を話す。

「戦うのだ」

「は？」

「戦えばよいのだ！！！！！！！！」

さらに、大きな声で関羽はそう叫ぶ

「そ、そんなこと俺たちにできるわけねーだろ！」

「できる！！」

「ど、どうしてだよ・・・」

村人たちは関羽の圧力に推され始めている。先ほどまで勢いは村人たちから消えた。

「それはおぬしらが初めから戦おうとしないからだ。

農民だからや、戦ったことがないという理由だけを述べ最初から戦おうとしないその逃げ腰！それこそが今までのおぬしらが作り上げた未熟な心！

やつら賊ももとは農民だ！！そしておぬしらも農民！どちらも同じなのだ！

ここに勝てない道理がどこにある！！敵もおぬしらと同じ存在なのだ！！

そして敵は悪！！我らは正義！！

正義が負ける筈がない！！！！！！

関羽が自慢の武器の石突をドンツッと地面に叩きつけ、そう叫んだ。

「だ、だけど・・・」

まだ煮え切らない村人たちに関羽は最後の切り札を切った。

関羽は村人たちの目をそれぞれ、見つめ、一つ深呼吸し、こう言った。

「そしてここに、黒髪の子が手を貸そう。共に悪を打ち滅ぼすのだ！！！！」

そう言われ、村人の様子が一斉に変わった。ざわざわと隣の者たちと話し始める。

「く、黒髪の子が手をつけて・・・」

「き、聞いたことがあるぞ。たしかきれいな黒髪をなびかせ・・・賊

を容赦なく叩きのめすって言う・・・」

「ああ。私のことだ。どうだ？これで勝てる気がしたか？

私のほかにこの燕人張飛と私たちの主の劉備様がいらっしゃる。そしてこの私の一撃を受け止めた信長殿も。

どうだ？皆もう一度聞こう。共に賊共を討ち果たそうぞ」

関羽が武器を天に掲げ、村人へそう告げた。

「か、勝てるのか・・・俺たち」

「いや、わからねえ・・・でも・・・」

「ああ・・・勝てそうな気がするぞ」

「どうせ、賊共に殺されるくらいならやつらに一矢報いて死んだ方がましだな」

「ああ！そうだそうだ！！どうせ死ぬなら家族を守って死にてえ！！」

「俺もだー！！好きな女ぐらい守って死にてえ！！」

村人が一斉に声を上げた。どうやら気持ちは固まったようだ。

先ほどまでの暗い雰囲気はもうない。今は希望に胸を膨らませている。

勝てるかもしれない。そのことしかもう頭にないようだ。

「さすがだね愛紗ちゃん♪みんな張り切ってるよ」

劉備が関羽にねぎらいの言葉をかけた。

「ふう、さすがに緊張しました」

「ふむ・・・関羽よ見事であつたぞ」

「信長殿・・・」

関羽が信長へ視線をむける

「うぬの鼓舞で民の士気はおおいに上がっており。そして村を落とされれば民には何も残らぬ背水の陣。死兵とまではいかぬがこれならばなんとかなろう」

「そうですね。できれば村人たちの負担を軽くするために私や鈴々ががんばるしかありません。桃香様、指揮をお願いできますか？」

「うーん・・そうだね。私はみんなみたいに戦えないもんね。うん！がんばる！！」

「はい！！私たちの初陣がんばりましょう！」

そこで、信長はあることに気づいた。

「うぬらは戦は初めてなのか？」

「そうなんです・・世の中を平和にしようって立ち上がったんですけど・・信長さんは戦を経験したことあるんですか？」

「うむ」

「なるほど。それは頼りになります」

「それでは軍議を始めようぞ」

「軍議・・・ですか？」

劉備、関羽、張飛が困ったような顔をしたまま信長へ視線を向ける。

「賊共は陣形など関係なくただまっすぐ向かってくるであろう。それを利用しない手などない」

「し、しかし・・・私も桃香様も鈴々も策など考えられません」

三人は肩を落とし、残念そうな表情でうつむいた。
だが、信長は変わらず話を続ける。

「ならばワシに任せよ」

その言葉に三人は一斉に顔を上げた。その表情は三人とも期待に満ちた笑みであった。

「の、信長殿は策を練ることができるのですか？」

「すでに一つある。・・・だれぞ！この付近の地理に詳しいものはるか」

そつ、村に向かって声をかけた。

そして信長は周辺の地形に詳しい村人と3人を引き連れて一つの民家を借りた。

そして、信長たちによる軍議が始まった。

そして・・・

「な、なるほどー!!」

「すごいー!!これならきつと勝てるよ!」

「お兄ちゃんはすごいのだー!!」

「ふん・・・このようなもの策とはいえんがな」

初陣

「張飛、うぬは賊共がどこまで迫っているか偵察してくるのだ」

「合点なのだー!!」

「関羽、うぬは武器の扱い方を教授するのだ」

「わかりました」

「劉備、うぬはその性格をいかし村人たちの不安を解消してやるのだ」

「わかったよ」

信長は劉備たちにそれぞれ適材適所な指示をだし、村を見て回る。そこには関羽に指導され武器の持ち方や使い方を教わっている男たちがいた。その顔にはもう不安はないようだ。

そして、劉備は村の女性たちといっしょに差し入れを作っているようだ。劉備も女性たちも共にいい顔をしている。

信長は感じていた。劉備のその歴史どうりの仁徳に。当然信長は知っている。劉備玄德がどんな人物であつたかを。民や部下から信賴され圧倒的なまでの仁徳。民をいたわるやさしい心。人を笑顔にさせる才能。

これがあの本当の劉備玄德とはいえないが、おそらく同じような方法で男の劉備玄德も民から慕われていたのである。この地に来て歴戦の英雄たちが3人も女性だったのだ。名前だけが同じなだけで実際は全然違ふかもしれないと思つたがどうやらそれは杞憂だつたようだ。

劉備から感じる仁徳。関羽、張飛から感じる猛将としての氣質。どれも本物に引けをとらないだろう。

信長も戦国時代にいたのだ。英雄たちをよく知っている。そしてこの3人から同じものを感じるのだ。どうやら性別が違っただけで本物と言つても過言ではないだろう。だがまだまだ未熟である。これから成長していきさらに英雄としての才能を開花していくのであろう。

「フハハハハ・・・天はこの信長に何を望んでおる。英雄たちの教育か？この地の支配か？おもしろい。この信長天が何を望むか知らぬが、この乱世を生き抜いてみよう・・・ぞ」

張飛がダダダダッつと勢いよく信長の元へ走つてきた。

「お兄ちゃーん！！！！敵がもうそろそろこっちに向かってくるのだ！！！」

「そうか、張飛よくやった。クク・・・この世界の初陣である。ではこの戦の開幕・・・ぞ」

たくさんの男たちがとある村へ向かい歩いている。
その男たちはどれも、頭に黄色い布を巻いているようだ。

「おい。もうそろそろ村につくんだよな」

「ああ、この荒野を抜けたところにあるぜ」

「はっはー！！早く女にありつきたいぜ」

「まったく、お前も好きだな。ま！俺もだけどな」

賊たちは互い互いに村を襲った後の事を考えている。全て下卑た内容だ。

その男たちの視線の先には一歩前に出た一人の少女と、たくさんの人間がいた。

「ん？おい、あれはなんだ？」

「あれは・・・」

「そこまでです！！止まってください。貴方たちにはこの村に一步も入れさせません！どうかこのまま引いてください！！」

劉備が精一杯大きな声で賊たちに呼びかけている。しかし、賊たちは全員笑っている。

「なんか言ってるぜ？」

「はっはっは！馬鹿があ。引くわけねえだろ？それよりあの女なかなか上玉じゃねえか」

「輪したあとに、売り飛ばせばいい金になんじゃねえか？」

「いいや、俺の女にするぜ」

賊たちがそれぞれ劉備のことを馬鹿にしながら、尚も村へと向かってくる。

「うつ・怖いよう。・・・でも！私はここで立ち止まれません！皆さん構えてください！」

村人たちが一斉に武器を構える。その様子を見た賊たちも表情が変わった。

「お？やる気かよ！おもしれー！！たかだか100人程度だろ？一氣にぶっ潰してやるぜー！！！」

「うおおおおおー！！！！！！！」

賊が一気に加速して向かってくる。

そのとき……

「うわあああ——！！！！！！！！」

「な、なんだこりゃ——！！」

「お、落とし穴だ——！！！！」

族の前衛にいたものたちは加速していたため一気に落とし穴におち、後続もその流れのまま何人が落ちたようだ。

「おいお前ら——！落とし穴は迂回して進むぞ」

「敵は混乱してる。今だね。よし合図を——！！」

桃香は村人に狼煙を上げるよう指示した。これは信長から聞いたものである。

そして桃香はそのまま部隊の後方に待機した。

「ふむ・・・時が来たか・・・ゆくぞ!!」

伏兵として潜んでいた信長の部隊30人が賊たちの後方に出現した

「お、おい！後ろに敵がいるぞ!!」

「なんだたかだか30人ぐらいじゃねえか・・・おいお前らあいつらをつぶして来い！」

「おつよ!!!!」

賊たちは信長の倍60人ほどで信長の部隊の討伐に向かった。しかし・・・

「クク・・・来るか。やはりただの烏合の衆であつた・・・か。滅せよ。ここが汝らの殺し間・・・ぞ」

信長は指笛をピーツッと鳴らした。

「かかれー！ー！！賊共を打ち滅ぼすのだ！ー！」

「鈴々たちも突撃、粉碎、勝利なのだ！ー！！！」

「な、なんだと！ー！！？？」

信長を殲滅しようと向かってきた60人の右方、左方に、関羽隊約30人、張飛隊約30人が奇襲してきたのだ。

これで賊約60人の部隊は信長、関羽、張飛3部隊に挟撃されることになったのだ。

「・・・滅せよ。控えよ。この信長に抗うものはすべて死す」

「はあー！ー！！お前たちが今まで殺した罪もない者たちの怒りの気持ちを受けてみよ！」

「にゃー！鈴々の邪魔をするなのだー！！」

「な・・なんだこいつらつえー！つえー！！！！！あああああ
ああー！！！」

3人の猛将たちの挟撃を受けた部隊はあっさりと壊滅した。

「関羽。うぬはこのまま敵本体の右翼へ回れ。張飛は左翼ぞ。ワシ
は後方をこのまま突く」

「はい！」

「合点！」

「お、おい後ろと右と左から敵が来たぞ！！」

「なにー！このままじゃ・・・」

そう。完成したのである。包囲網が。

劉備の本体約100人が敵の前方に。関羽隊約30人が右翼、信長隊約30人が後方、張飛隊約30人が左翼へと。

そして・・・

「お、おい押すな！！！！これ以上押すな！！！！！！うわああ！！！！」

敵の中心には先ほど迂回した落とし穴があるのである。

「えーっと、確かこの包囲網が完成した後は、私たちの部隊から兵を送っていけばいいんだよね」

劉備隊の本体は100人近い大部隊である。こちらの兵の総勢は約200人。そして兵を送りそれぞれ約50人の4つの部隊に変えたのだ。

「敵はうまく、包囲されたようだな。押せ押せー！！敵を押すのだ」

「や、やめろー！！！！うわああー！！！！」

敵は完全に包囲されているため敵の中心の部隊は戦えないままなすすべなく落とし穴へと落ちていくのである。

「・・・無価値」

そして信長や関羽、張飛といった猛将たちの攻撃のままに敵は殲滅されていくしかなかったのである。

「やったなあ！おい！！！」

「俺たちが・・・俺たちの手で村を守ったんだ！！！」

村人たちは互いに隣にいたものや、友人を抱きしめている。皆はどれも顔をクシャクシャに泣きながら喜び合っている。それは劉備も関羽も張飛も同じようである。

「やったね愛紗ちゃん！！鈴々ちゃん！！」

「はい！まさか本当に勝てるとは・・・」

「にやはあー。愛紗負ける気だったのかあ」

「そんなわけないだろう！！っと・・・それより、信長殿」

関羽が信長の前へと歩み寄ってきた。

「なんぞ関羽よ」

「貴方の知略、武勇、そして部隊をまとめる統率力どれもすばらしいものでした。貴方はいたい・・・」

関羽は今まで思っていたことを聞いた。信長の武勇、統率力、知略。どれも素晴らしいものであった。

それは、明らかに知識だけでは不可能なものであった。幾度も実戦を重ね戦場で培った、体に染み付いたもの。まさに修羅場をくぐり抜けてきた者の動き。

この男はいつたい何者なのだろう・・・そして、その信長の答えは・
・

「ただのうつけ者・・・ぞ」

「え？それはいつたいどういう」

「ねえ、愛紗ちゃん。鈴々ちゃん」

関羽が期待はずれな答えに、口をポカーンとあけていると、劉備が二人を手招きする。

そして3人で固まりひそひそと言葉を交わしている。

「本当によいのですか？」

「うん。きっと大丈夫だと思う。それに・・・これしかもう方法がないよ」

「鈴々は賛成なのだー!」

「確かに・・・我々3人ではこれが限界かもしれませんね」

「じゃあ・・・いくよ」

話が終わったのか、三人が信長の下へ近づいてくる。

その表情は、まさに真剣そのもの・・・

「信長さん。聞いてください」

劉備が代表して、言葉を切り出した。

「ふむ・・・申せ」

「今の時代は乱世。漢王朝が腐敗し、国は混乱し、盗賊たちが跋扈しています。そして私たちはこんな国をなんとかしたい。直したい

って思っています。

私たちは弱い人たちが傷つき、無念を抱いて倒れることに我慢がで
きなくて、少しでも力に慣れるのならってそう思って今まで旅をし
てきたの。

でも、3人だけじゃもう、何の力にもなれない。そんな時代・

でも、そんなことで挫けたくない。無力な私たちにだって何かでき
ることはあるはず。

だから・

私たちに力を貸してください！！！！！！

戦えない人を、力なき人たちを守るために。

力があるからって好き放題暴れて、人のことを考えないケダモノみ
たいなやつらをこらしめるために！みんなが笑って暮らせる世のた
めに！！！！」

劉備が、頭を下げ、とても力強くそう叫んだ。劉備の後には関羽も張飛も頭を下げた。

劉備は必死に、そして、これが私たちの全てだと言わんばかりにありつただけの思いを込めて信長へ伝えた。

信長は劉備たちの思いを聞き、腕組をし、言葉をきりだした。

「・・・で、あるか。しかしワシはうぬらの求める天の御使いにあらず」

自分はお前たちの探していた天の御使いではない。むしろ、その逆を往く者だ・・・

そう、言われ、劉備はゆっくりと頭を上げ、話し始めた。

「それは・・・もういいんです。

確かに私たちには風評や、名声はありません。御使い様がいれば確かにその名に惹かれて私たちの元へたくさん人が集まってくれるかもしれない。

でも、本当にいるかわからない御使い様を探して各地を旅するよりここで、覚悟を決めて信長さんと一緒に力なき人々のために行動したほうがきつと早く、そして少しでも国がよくなるかもしれないから！

だから信長さん！私たちに力を貸してください！！」

三人はもう一度信長に頭を下げた。その行為は絶対に諦めません！と体がそう伝えてくるようだ。

「・・・・・・・・」

信長は劉備が話している間ずっと3人の目を見つめていた。それはとても綺麗な、一つも汚れていない綺麗な目だった。あの信長のいた戦国の世では騙し騙されが日常茶飯事の乱世。

そのため誰もが騙されぬと初めから人を疑ってかかるのである。しかしこの3人は今日出会い、そして一緒に戦っただけの自分に必死に思いをぶつけ頼み込んできたのである。

まだきつと何も知らないであろう。酷く騙されたこともないのであろう。だからこれほどまでに綺麗な目をし、そしてあきらかに「綺麗事」を言っているのだ。

力のない人のため、みんなが笑って暮らせる。そんな事は民心をつ

かむための口実として使うだけであるが彼女たちは本気で言っている。それが信長にはひしひしと伝わった。

彼女たちはきつといつかこの後、酷く馬鹿にされ、騙され、裏切られるであろうと信長は確信した。

信長は目を瞑り心の中でこう思った。

（クク・天よ。この信長をこの者たちの所に寄越したか・おもしろい。この信長にこのような無垢なる者たちを導けと・そういうことか）

そして・・・

「面を上げよ」

「・・・」

劉備たちが不安そうな顔で信長を見つめる。

「任せられよ。この第六天魔王 織田信長の霸道。しかとうぬらに見せてやるつぞ」

「やつ！……え？……え？……え？魔王？霸道？」

劉備たちの顔は一瞬で歓喜に変わったが、急に表情が疑問系になった。

まるで、百面相のようであった。

「クク……おもしろい。もう一度始まるか……この信長の天下布武……が」

「あの、信長さん。霸道って……」

劉備が困ったような顔ではほに笑みを浮かべながら、信長へと問いかけた。

そして、信長は劉備へこう問いただした

「劉備。うぬの願いは天下の安寧、そして民の平和であろう」

「う、うん！」

「ならばそのためには力が必要である。そして智謀、謀略が・・な」

「で、でも私はそんな暴力とか人を騙したりとかはあんまりしたくないよ!？」

劉備は、あきらかに戦を嫌っている。そして、人を愛している。だから、非道なことや外道、暴力を嫌っている。

信長は桃香の目を見つめ話を続けた。

「天下は統一せねば、決して平和にならぬ。戦がなくなれば民が安心することはない。しからばすることは一つ。

天下統一よ。

ワシがそれまでの道を切り開いてやろう。そしてこの信長が天下をとった暁にはうぬにすべてを任せる。

うぬの仕事はそれからが本番よ。うぬの描く皆が笑って暮らせる世をそれから作るのだ」

「天下・・・統一ですか」

劉備も真剣な目で信長を見つめ返す。そこにはたくさんの思いが詰まっているだろう。

「うむ。徴兵される恐れがあるうちに誰が笑ってくらせようぞ。うぬの申す笑って暮らせると矛盾する」

「た、確かにそうですけど」

「我に任せい！！貴様の掲げる理想を阻む泥や矢をこの信長が吹き飛ばしてくれようぞ！！」

そう言い今度は信長が真剣に劉備の目を見つめる

（すごく・・・真剣な目。この人は笑わないで私たちに真剣に向き合ってくれてる・・・）

「わかりました。信長さん。・・・いえ、ご主人様」

「・・・む？」

「貴方は私たちのご主人様です。だって私たちを導いてくれる人なんですから」

そう劉備が言い、関羽、張飛も続く。

「確かにそうですね。私たちの主人であるわけですからご主人様ですネ」

「にやは、でも鈴々はやっぱりお兄ちゃんのほうが言いやすいのだ」

「・・・好きに申せ」

「それじゃあご主人様。受け取ってください。私は桃香。私の真名は桃香です」

「ご主人様。我が真名は愛紗」

「鈴々の真名は鈴々なのだ」

「ふむ・・桃香、愛紗、鈴々。どれも良き名ぞ」

「あ、ありがとうございます／＼／＼／」

桃園の誓い

「すみません」

ある男が信長たちの元へ近づいてきて頭を下げた。

「なんであるか」

「先ほどは失礼しました！！！！」

信長たちが出会ったあの場所で村に賊が来ると教えてくれたあの男であつた。

「まさか本当に村を賊から守れるなんて・・・夢にも思つてなくて・・・」

そう言われ、桃香は男に向かって話し始めた。

「いいえ。それが今の世の中ですから。事実、賊に襲われたほとんどの村が壊滅しています」

「はい。そして俺たちの村は貴方が守ってくれた。本当にありがとうございました！！」

そして、男が深く頭をもう一度下げた。その後頭を上げ、信長も含め、桃香たちに嬉しい話をし始めた。

「それで、俺たちは貴方たちにお礼がしたい。だから今日はこの村に泊まっていてください。おいしい料理もだしますので」

「おいしい料理！？ごちそうなのだー！！」

その言葉を聞き、鈴々はヤッター！と両手を上に突き上げながら飛び跳ねた。

「こ、こら鈴々、あんまりはしゃぐな。みっともない」

「だって久しぶりのごちそうなのだー」

「確かに・・・私たちもあわよくば御使い様が見つかったらご相伴にあずかるうとしてたもんね・・・」

どうやら、この三人は全然路銀（お金）をもっていなかったようだ。食事もいつも狩りをして、その日暮らしのようなものだったのだらう。

そして、愛紗が信長へ告げた。

「ご主人様。彼らの好意に甘えましょう。そして今後の方針なども話し合いましょう」

「ふむ・・確かにその必要があるな」

「わーい♪今日はお布団で眠れる〜」

「ごっちそう♪ごっちそうなのだ〜」

「こゝ、こら！桃香様も！」

鈴々と桃香がハイタッチをして喜びあっている。その様子を見て、愛紗が二人を咎める。
なんともほえましい光景であった。

それは、とても乱世とは思えないようであった。

その様子に信長は・・・

「ハッハッハッ」

「ご、ご主人様も笑ってあげないでください！」

（ふむ・・見た目は女であるが・・先ほどの決意やまなざしを見たら真に劉玄德や関雲長、張翼徳であると思ったが・・その実やはり女であつたな。しかしそれもまた一興・・ぞ）

「それで信長様、劉備様。今後はどうされるおつもりですか？」

村人が四人へと問いかけてきた。

「え？え〜つと・・・ご、ご主人様？」

しかし、桃香は何も考えていなかったのだろう。困った表情で信長へと問いかけてきた。

「・・まずは旗揚げをするために名や風評、そして兵が必要である。しかしワシはまだこの地の文化や状勢、風習。どれをとつても知らぬ」

「確かに・・・ご主人様は異国の方。そしてこの地に来てまだ日が浅いでしたね。この地にいつごろからいらしたのですか？」

愛紗は顎に手を当てて、信長の現状を考え納得したようだ。そして、気になっていたことを聞いた。

「今日・・・ぞ」

「え？」

「先ほどである」

「ま、またまた、ご主人様ったら意外と冗談が好きなんですね」

「真実である。本能寺で光に導かれ気がつけばこの地で眠っておった」

「・・・・・・・・・・」

その場に一瞬の沈黙が訪れた。三人は口を開けたまま時間が止まっている。

そして、動き出した・・・

「えええええー！！！！！！！！！！」

「そ、それは誠ですか!？」

「うむ」

信長は当然だと言わんばかりに腕組をし、答える。

「話だけを聞けばご主人様が天の御使い様でもおかしくないよね」

「はい。しかし天の御使いは流星を乗り物とし、そして光り輝くお姿だと聞きました。しかしご主人様は黒い鎧。そして気づけばこの地で眠っていたと」

「流星に乗ってきたけど、寝ていて気づかなかったとかは考えられないかな？」

「しかしそれでは光り輝く姿とは？」

「そんなことはどうでもよい。この信長では不満である・・・か？」

「い、いえ！失礼いたしました！！」

「そ、そうだね！今はこれからのことだよね！」

桃香や愛紗はまあ、いつか。と、いった様子でこの話を収めた。

その様子を見た村人がタイミングを見計らって、話をかけてきた

「信長様、劉備様、それでは公孫贇様のところにいつてみてはいかがでしょう。最近、近隣を荒らし回っている盗賊どもを懲らしめるため、義勇兵を募集しているとか」

「公孫贇・・・あー！！！！そういえば白蓮ちゃんが納める地がこの近くにあるんだった」

桃香が、今まで忘れていた様子で声を上げ、懐かしい友のことを思い出した

「桃香様・・・そういうことは早く教えてください」

「ごめん、すっかり忘れてた」

「では・・・決まり・・・であるな」

「はい！次は公孫賛殿の所へ参りましょう！」

そして・・・

「これが桃園かーすごいねえ・・・」

「美しい・・・まさに桃園という名にふさわしい美しさです」

「そんなことより早く酒なのだー！！」

「まったく鈴々め。雅というものがわからんのか」

4人は昨日助けた村人たちからお礼として大量の酒をもらっていた。

そしてついでに綺麗な桃園があると教えてもらいここへ来たのであった

「ご主人様は本当にいいの？」

「うむ。姉妹の中に男はいらぬ。うぬらだけで契りを交わすがよい」

「そっかー、じゃあしょうがないよね」

三人は三角形の形で並び、ここに誓いを果たす。

「それでは・・・我ら3人！」

「姓は違えども、姉妹の契りを結びしからは！」

「心を同じくして助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ」

「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも！」

「願わくば同年、同月、同日に死せんことを！」

そして3人が杯を天に掲げ、信長のほうを見る

「乾杯・・ぞ」

信長の合図に全員が一斉に杯の酒を飲み干した

こうしてこの4人は深く絆を深めたのであった。

真の天の御使い（前書き）

しばらく原作どおりの流れが続きます。
申し訳ありませぬ・・・
許してたも。

真の天の御使い

一方時はさかのぼり、信長が桃香たちと出会っているころ。

一人の少年がとある少女たちと運命的な出会いを果たしていた。

「君・・・誰？」

少年が中心にいた少女に問いかけた。

「それはこちらの台詞よ。あなたこそ、何者？名を尋ねる前に、自分の名を名乗りなさい」

「えっと・・・北郷一刀。日本で、聖フランチェスカ学園の学生をしている。日本人だ」

「・・・はあ？」

そこにいる者全員がわけがわからないといった表情を浮かべた。

「それより、ここはどこなの？日本でも、中国でもないって言うし・・・」

「貴様、華琳さまの質問に答えんかあつ！生国を名乗れと言っておるだろうが！」

黒髪のチャイナドレスの様な服を着た女性が剣を構え今にも斬りかかりそうな勢いだ。

「い、いやだから！日本だって、ちゃんと答えてるじゃないか！」

「姉者。そう威圧しては答えられる者も答えられんぞ」

この青髪の女性と先ほどの女性は姉妹のようだ。
こちらのほうは冷静であり、先ほどの直情的な女性よりも話しやすそうだ。

「ぐうっ・・・し、しかし秋蘭！こ奴が、盗賊の一味という可能性もあるのだぞ！そうですよね、華琳様！」

「そう？私には殺気の一つも感じさせないほどの手練れには見えないのだけれど。春蘭はどう？」

「それはまあ、確かに」

「北郷・・・と言ったかしら？」

「あ、ああ」

「ここは陳留・・・そして私は陳留で刺史をしている者」

「・・・しし」

「刺史も知らないの？」

「初めて聞いた言葉かな」

少年が頬をかきながら、苦笑いでそう答えた

「・・・呆れた。秋蘭」

こちらの少女もめんどくさいのか青髪の女性に、全てを丸投げした。すると、女性はさま当たり前かのようにその役目を引き受ける。

どうやら、主従関係のようだ。

この一番背が小さい少女がこの中で一番偉いらしい。

「刺史というのは街の政事を行い、治安維持に従事し、不審者や狼藉者を捕まえ、処罰する務めのことだ。これなら意味は分かるか？」

「・・・なんとなく。要するに、警察と役所を足して二で割ったようなもんか」

「またわけの分からん事を・・・」

皆、いいかげんこの少年のわけのわからない言葉になれてきたようだ。

「要するに、税金を集めたり、法律を決めたり、街の治安を乱す悪い奴や怪しい奴を捕まえたり処罰したりする仕事なんだろう？」

「分かっているじゃない。なら、今の自分の立場も分かっているわよね？」

「・・・税金の未納はともかくとして、街の治安を乱した覚えはないんだけど」

「少なくとも、十分以上には怪しいわよ。春蘭。引っ立てなさい」

「はっ！」

黒髪の女性が少年の下へ近寄り、少年を拘束した。

歳も自分とさほどかわらないだろうが、力は明らかにこの女性の方が何倍も強い。

まったく、不思議な世界である。

「まだ連中の手がかりもあるかもしれないわ。半数は辺りを搜索。残りは一時帰還するわよ」

こうして本当の天の御使いと霸王が出会った。
この地に二人の霸王が存在する。

はたして、二人の運命はどうなるのか？

公孫？の元へ

信長たちは公孫？の元へやってきた。

兵を持たずして訪ねて大丈夫だろうかと心配であったが、桃香が「きつと大丈夫だよ」だって私と白蓮ちゃんはお友達だもん」

と、桃香の短絡的な性格で無計画でここまでやってきたのだ。

信長も少し、自信がないのか桃香へと最後の確認をしておく。

「あとは・・・桃香の仕上げに頼るだけ・・・ぞ」

「うん。私たちはすつごく仲が良かったんだよ、白蓮ちゃんは秀才で、よく一緒に勉強したりしてた。大のお友達なんだよ」

「うむ・・・人脈は広く、そして深く持つておいた方が良い。桃香。うぬの性格は後々こうして役にたつのだ。これからもうぬはそれを貫き通すのだ」

桃香は公孫？との思い出を頭によぎらせながら、楽しそうにそう話す。どうやら本当に仲が良かったのだらう。

そして侍女らしき女性の誘導に従って、玉座の間へと足を踏み入れた

「桃香！ひつさしぶりだなー！」

「白蓮ちゃん、きゃー！久しぶりだねー♪」

桃香が一直線に公孫？の元へ走り出し、桃香が公孫？の片手を取り、両手で包み込むように握りこむ。

「盧植先生のところを卒業して以来だから、もう三年ぶりかー。元氣そうで何よりだ」

公孫？も嬉しそうに、そして懐かしむように桃香を見つめ、笑顔で話す

「白蓮ちゃんこそ、元氣そうだね♪それにいつのまにか太守様になっちゃって。すごいよー」

「いやあ、まだまだ。私はこの位置で止まってなんかいられないかな。通過点みたいなもんだ」

「さっすが秀才の白蓮ちゃん。言うことがおっきいなー」

「武人として大望は持たないとな。．．それより桃香の方はどうしてたんだ？全然連絡が取れなかったから心配してたんだぞ？」

「んとね、あちこちでいろんな人を助けてた！」

「ほおほお。それで？」

公孫？は桃香の話を聞き、やはり桃香は昔から変わらないな、といった表情を浮かべ話の続きを促す。

それに対し桃香は．．．

「それでって？それだけだよ？」

「．．．．．！？はあーーーーーっ！？」

「ひゃんっ！？」

一瞬にして、公孫？の表情は変わった。まったく予想だにしていなかったのだろっ。

思考が三秒ほど停止し、そして、事に気づき突如として大声をあげた。

その声に桃香が変な悲鳴を漏らすほどに。

「ちょっとまって桃香！あんた、盧植先生から将来を囑望されていたぐらいなのに、そんなことばっかやってたのかっ！？」

「う、うん・・・」

「どうして！？桃香ぐらい能力があつたなら、都尉ぐらい余裕でなれたろうに！」

「そうかもしれないけど・・・でもね、白蓮ちゃん。私・・・どこかの県に所属して、その周辺の人たちしか助けることが出来ないっていうの、嫌だったの」

桃香は公孫？に真剣に話す。その目は熱く語っている。

私は、困っている人を助けたい。できれば、全ての人を。

だから私は、この道を歩んできたのだと公孫？の目を見据え真剣に話す。

「だからって、お前一人ががんばっても、そんなの多寡が知れてるだろうに・・・」

「そんなことないよ？私にはすっごい仲間たちがいるんだもん」

「仲間？桃香が言っているのはこの三人のこと？」

公孫賛は今まで気にはなっていたのだろう。チラチラと信長たちを何度も横目で見ていた。

そして、やっと聞けたと言わんばかりに桃香へと説明を求めた。

「そうだよ。んとね、関雲長、張翼徳、それに織田信長さんだよ」

「ん・・・なんか一人だけ変わった名前の奴がいるな」

「んとね、信長さんは私のご主人様で、すつごく強くて、頭が良く、すつごく頼りになる人なんだよ」

「ふ〜ん・・・」

そうして公孫？は腕組をしている信長のつま先から頭のとっぺんまですじつくりと見回す。

そして、彼女が出した結論は・・・

「確かに・・・こいつは並みの者とは違うようだ。覇気というか・修羅場をこなしてきたようだ。」

冗談でも、大げさでもなく、彼女は信長をそう評価した。

目は一切笑っていない。長年の、そして太守として築き上げた彼女の観察眼がそう告げたのだ。

「公孫？よ・・・うめの噂、聞いておるぞ。善政を敷き民からの信頼も厚いようだ。」

「桃香が真名を許したのなら私のことも白蓮でいい。友の友なら私にとつても友だからな。つでだ、桃香。今日は何の用向きでここにきたんだ？」

公孫？は信長へと、そう告げ、そして気になっていた桃香たちの今日ここへ来た理由を聞いた。

「うん。白蓮ちゃんところで盗賊さんを退治するために義勇兵を募ってるって話を聞いて、私たちもお手伝いしようかなって思ってた。」

「おおー！そうか。そうしてくれると助かる。兵の数はそれなりに揃っているが、指揮できる人間が少なく、悩んでいたところなんだ。」

「そっかゝなら、私たち頑張っちゃうよ、初陣は最近済ませたばかりだし、少しでもお役に立てると思うよ」

「そうか！桃香もついに初陣を済ませたか！つで、その三人に実力はどれぐらいなんだ？」

そう言われた信長、愛紗、鈴々はそれぞれの自己紹介を白蓮へとし始めた

「鈴々はすつごく強いのだ！！」

「我が名は関羽。字は雲長。桃香様の第一の矛にして幽州の青龍刀。以後お見知りおきを」

「我は第六天魔王が織田信長」

「う、うーん。・・・宜しく頼む、と言いたところだが、ずいぶん濃い連中だな・・・だがこの三人の力量が分らん。どうなんだ桃香？」

白蓮がぼりぼりと頬をかき、苦笑いで桃香へと視線を向けた。

「三人ともね、すつごく強いよ！私、胸張って保証しちゃうよ」

「保証ねえ。・・・桃香の胸ぐらい大きな保証があるなら、それはそれで安心なんだけど・・・」

白蓮が腕を組み、うーんと唸りながら三人を見つめていると、白蓮の後ろから突如聞きなれない声加わった。

「人を見抜けと教えた伯珪殿が、その三人の力量を見抜けないのでは話になりませんな」

「むう・・・そう言われると返す言葉も無いが、ならば趙雲はこの三人の力量が分かるとでも言うのか？」

そこには趙雲と呼ばれた青髪 of 槍を持った女性が現れた。

「当然。武を志す者として、姿を見ただけで只者で無いことぐらいは分かるというもの」

「へえ・・・まあ星がそういうならば、確かに腕が立つんだろっな」

「ええ。・・・そうだろう？ 関羽殿」

趙雲は愛紗へとその視線を向けた。その腕が立つ者は貴女だと言わ

んばかりに

「そういう貴女も腕が立つ・・・そう見たが？」

そして、愛紗もそう趙雲へと返した

「うんうん！ 鈴々もそう見たのだ！」

「ふふつ、さて・・・それはどうだろうな。しかしその実、真に気になる人物は・・・織田殿。貴方ですな」

そして趙雲は今までしていた目よりもさらにキツつきつく信長を見据える。

それに対し信長は・・・

「クク・・・我を見るか・・・さすがは趙子龍・・・ぞ」

「・・・っ！？ ほお。さすがは私が目を付けた方。なぜ我が字をお知りに？」

まさかの返答に趙雲は驚いた。こればかりは何故知っているのかと・・・

「うんうん。私もそう思う。子龍という字を呼ばなかったのに、織田は何故知っていたんだ？」

そこで桃香がはいと手を上げ、何も知らない白蓮と趙雲に対し、自分が知っている説明をする。

「信長さんはね！不思議な人なの。ほんのうじ・・・？とか言うところで光に導かれて、気づいたら荒野の真ん中で眠っていたんだって」

「な、なんだそりゃ！？」

「それで・・・何故我が字を？」

「ただの知識・・・ぞ」

「知識？」

「我のいた世界ではうぬらの事を知っている人物はごまんとおる。ワシもその一人というわけぞ」

「はあ？どついつことだ？」

趙雲と白蓮はまさに意味がわからないといわんばかりの表情をする。白蓮は考えるのをやめたのか、もうただ笑っているだけだ。

趙雲は顎に手を当て、うーん、と考えこんでいる。話の整理をしているのだろう。

「クク・・・ただのたわ言とでも思っておけばよい」

その言葉を聞き、趙雲も考えるのをやめたようだ。そして、にやつと笑みを浮かべながら信長を見つめる

「ふむ。・・・なかなかおもしろいお方のようだ。これは退屈しないですみそうだ」

「白蓮。うぬは我らの参加・・・どうされる？」

「ああ。そんなの決まっている。お前たち三人は星が認めるほどの只者ではない。うちは今は藁にもすがりたい。是非お前たちの力を貸してくれ」

白蓮は信長たち一向に笑顔を向けながらよろしくな！と、二度目の挨拶をする。

「うん♪もっちろん！私、すっごく頑張っちゃっからね♪」

「織田殿、関羽殿、張飛殿。こちらも宜しく頼むぞ」

「うむ」

「ああ。我が力、とくにご覧じろ」

「鈴々に任せるのだ！」

こうして、信長たち一向は白蓮と共に戦うことになった

子龍は一身すべてこれ胆なり

信長たちはここ幽州に跋扈する盜賊たちを排除しようと軍議を開いていた。

その軍議には白蓮を始め、趙雲、信長、桃香、愛紗、鈴々と全員が揃っている。

「っでだ、この付近に総勢二万もの大群がいる。私たちはこれを見逃すことなんてできない。ここでやつらを叩かなければいけないんだ」

白蓮は全員にゆっくりとそう話した。

今までの報告などでわかったことがある。それは・

「また、黄色い布を頭に巻いた人たちだね・」

桃香がそう、言葉を漏らした。

そう、最近の賊は全て頭に黄色い布を巻いているのである。その規模はすさまじく数十万人にも上るらしい。その全員が頭に黄色い布を巻いている。

「何か意味があるのでしょうか？」

愛紗がそう言葉を漏らした。その言葉を受け、信長がこう話す。

「ふむ・・黄巾賊・・か」

「え？」

「なに、ただのたわ言ぞ。呼び名が無ければいろいろ不都合である」

「なるほど、黄巾賊か。確かにそれは言い得ているな。よし、それもらった」

黄巾賊。黄色をベースに彼らの服装は作られている。

確かにこれはわかりやすい。これから奴らをそう呼ばうと彼女らは決めた。

「それで、白蓮殿。こちらの軍勢は如何ほどなのでしょう？」

信長達はこの白蓮の城で生活させてもらううちに親しくなり、お互いに真名を交換し合ったのだ。早速、愛紗も公孫賛の事を慣れた感じで白蓮と呼ぶ。

「こちらは一万三千といったところか。敵とこちらでは約七千の兵力差だな」

その言葉を聞き、星はいきり立った様子で立ち上がった。

「ならば敵はただの烏合の衆！正規軍にあらず！！ここは一騎当千の猛将が当たれば敵は混乱しすぐに総崩れとなるでしょう！今すぐに出陣すべきです！」

「な、何言つてんだ星！！そんな無茶苦茶なこと出来るか！？兵法の基本は敵よりも多くの兵を用意し、そして当たることだぞ！！」

「しかし、その兵を多くすることができぬではありませんか。それにそれは先ほども申し上げた通り敵はただの賊！正規軍にあらず！！ここで必要なのは猛将の猛撃のみ！」

「し、しかし・・・それはいくらなんでも無茶だ！七千もの兵力差だぞお前一人では・・・」

「何を申しております伯珪殿。ここにいるではありませんか、一騎当千の猛将が四人も・・・」

星がその人物を順番に見つめる。

それを見て白蓮もその四人が誰か気づいたのだろう。

「愛紗に・・・鈴々に・・・信長、そしてお前か？」

「ええ。そうです。この四人で前線に立ち、敵に当たれば敵は大混乱の総崩れ間違いなしですよ！」

「だ、だがやはりそれは駄目だ！！確かに敵は混乱するかもしれない。だが危険すぎる！！そしてそれでは無駄に兵を失うだけだ！そんな無謀で無策な突撃なんて認められるわけない！！」

「はあ・・・やはり伯珪殿は手緩いな。そのような甘い考えでは、一国の主とはなれまい。一県 of 将にはなれるかもしれませんが」

そんなことを言われては白蓮も黙ってられない。
あきらかにいらついた声色と口調で怒鳴る。

「ぐっ・・・ならば好きにしろ！！星！！」

「御意に・・・」

星は一礼し、一人部屋から出て行った。

その二人のやり取りを見ていた桃香も黙ってはいらなかった。
星がいなくなると早速白蓮に話しかけた。

「ぱ、白蓮ちゃんいいの！？星ちゃん一人で本当に行っちゃうよ！？」

その桃香の言葉に白蓮ははーっとため息を吐き、話し始めた。

「なあに、どうせ一人では何もできないさ。すぐに戻ってくるよ。あいつはここに来たときからそうだったんだ。いつも自分に突撃させてくれとか、どうも武勇を振るいたがる。」

でも、あいつの気持ちもわからんでもない。私も一応武人の端くれ、戦況を自分の力だけで変えてみたいって気持ちがあるさ。

単騎駆け・・・そんなことを是非してみたいものさ」

白蓮の表情には憧れのようなものも籠っていた。自分には星のような武は無い。だが自分も武人。

そのようなことをやってみたいとは思った事がある。だがそんな事自分にはできないし、やろうとも思わない。自分はたくさん兵の命を預かる身なのだ。

様々な思いが詰まった表情を白蓮はしている。

その気持ちを愛紗も感じていた。そして、彼女も語りだす。

「確かに私もその気持ちわかります。この青龍堰月刀一本で敵をなぎ倒し敵を止めてみたいですな」

「鈴々もなのだー！」

愛紗や鈴々もどうやら星の気持ちに共感できるようだ。武の頂を目指すものとして少しでも戦いの経験を積み、いつか夢見る天下無双の称号に一步でも近づきたいのだろう

「だがそれは許可できない！！自分の夢や理想のために兵を無駄死にさせるわけにはいかない！自分のわがままのために兵を死なせてしまつてはその家族にどう顔向けすればいいんだ！」

白蓮が机を両手でドンと叩きそう語る

「クク・・・白蓮。うぬは真に優しき女よ。民や兵のことよく考えておる。うぬの元で働き暮らす者共は果報者・・・ぞ」

「よ、よせよ！？照れるじゃないか！？」

白蓮が真っ赤になり、信長の方を見る。

「ハッハッハ、まっこと愛い奴よ！」

「あー！ご主人様白蓮ちゃんばかりずるい！！私だって民や兵隊さんの事考えてるんだよ！」

ぶーぶーと桃香が頬を膨らませた顔でそう信長に詰め寄る

「うむ。桃香も優しき女よ。同門だけあり、思想はよく似ておるわ」

「だよね」
♪ 私たち仲良しさんだもん♪

そう和やかに話していると・・・一人の兵が部屋に勢いよく入ってくる。

「た、大変です！！！殿ッ！　趙雲殿が一人で陣を飛び出し、敵部隊に突撃する構えを見せています！」

「な、なんだってー！！！！？！？？」

白蓮が頭を抱え、動揺している。

「ま、まさか・・・星がこんなにも早く突撃するなんて・・・」

「にははゝ星はせつかちなのだー」

「ど、っとうしよう！！星ちゃんが死んじゃうよ！！」

皆が慌てているなか一人信長は笑っていた。

「ご、ご主人様・・・？」

「・・・ツクク・・・ツハツハツハ！趙子龍！真に噂に違わぬ豪傑よ！
！子龍は一身すべてこれ肝なり！！」

信長が腕を組みながら大きく笑っている。

「な、なに言っただ信長、こんな無謀な事やってなんであいつを
褒めてんだよ！！」

「ふむ、確かに奴のした事は下策中の下策。だがこれで奴の実力が
しれるわ。女の身でどこまでやれるか。勝家を超えられるか・・・見

せてもらおうぞ趙子龍・・・可能ならば忠勝を超えよ」

そうして信長は席を立ち、この部屋から出て行くとする。

「お、おいどこにいくんだよ！」

「ふむ、特等席で見てくる・・・」

「はあ？」

何を言っているんだと、そういう表情で白蓮は首をかしげた。

そして、信長は振り返らないまま、淡々と話し出す

「白蓮、うぬは敵の後方より敵を強襲するのだ。我らの部隊を先行させて敵を引き付ける。うぬはその間に敵の背後へと回り込むのだ。

桃香。鈴々。うぬは旗手の数を倍以上用意するのだ。少しでも多く虚兵を作り敵の動揺を誘うのだ。

愛紗。うぬはワシのあとに続けい。敵の先鋒に一当てし、星と共に戦い時間を稼ぎ、頃合をみて引くのだ。

そして敵を釣り、桃香と鈴々で左翼、右翼より横撃をかけるのだ。

そしてワシらは反転じゃ。

白蓮、うぬは到着を遅らせるでないぞ」

白蓮どころか桃香、愛紗、鈴々までもが驚いた。
まったく、予想だにしていなかったことなのだ。

「お、お前星が突撃して・・・、私たちが話し合っている間に一人でこの策を考えたのか・・・？まだ策の話なんて一つもしてなかったろ・・・？」

「クク・・・愛紗。うぬは兵を準備させたらすぐに出立するのだ」

そう言われ、愛紗は、ハッ！？と今意識を取り戻したかのような表情をする

「はい！し、しかしご主人様。貴方はどうされるのですか？」

「特等席・・・ぞ」

そして信長は一人部屋を出ていった。

そして、白蓮は机に両腕を乗せ、その腕に顔を置き、寝そべるかのような体勢になった。

「な、なんなんだあいつは・・・策を考えていたとしても、星のあの行動は考えていなかっただろ？それをうまく組み込んで考えたのか？即興で・・・？」

すると、桃香も机に寝そべる。二人は向かい合わせの位置にいるため、桃香が寝そべったまま前を向くと、白蓮と同じ目線になり、目が合った。

そして、桃香はニコニコ顔で白蓮へと話しかけた

「白蓮ちゃん。やっぱりご主人様ってすごいでしょ？」

「ああ。たいしたやつだ。それに、やはりあいつにはすごい才能を感じるよ。間違いない。あいつは私と違って本物だ」

二人のやり取りに、緊張感が感じられず、愛紗はせかすように話しかけた。

「そんなことより早く兵の準備をしましょう！間に合わなくなってしまう！」

そう、話していると・・・

「た、大変です！！織田殿がお一人で出陣なされました！！！」

「はあああ！！！！？？？」

そこでは、一人の女性が戦っていた。

周りには大量の死体。頭に黄色い布を巻いた黄巾兵だ。

「はあ・・・はあ・・・やはり一人では少々疲れるな」

星は疲れていた。一人でもう何十人、いや、百人は殺しただろうか。まさに豪傑である。

「へへへ・・・あなたは確かに強えよ。だがなあ！！こっちは万の人数がいるんだよ！！所詮一人じゃどうしようもねえんだよ！！この馬鹿があああ！！！！！」

そう言つて数十人が突撃してくる

「く・・はああああー！！！！！」

星が必死に槍を振るう。

「はい！はい！はい！！！！！！」

そして力の限りを揮い迫つてきた数十人を倒す

「へへ・・やるなあ・・だがなあ！！てめーの周りを見てみる！！
そんな状態じゃどうしようもねえだろ！！」

そういわれ見ると星の周りに倒し、積み重なった死体があり、身動きがうまく取れなくなっていた

「くつ・・迂闊であつた・・この趙子龍としたことが・・こんな失態を・・」

「っはっはっは！！！！もう終わりだな女ー！！！！てめーはそのまま死ねやあああー！！！！」

敵がまた突撃してくる

「ふ．．．これまでか．．．やはり、私はただの馬鹿でしかなかった
のであろうか．．．」

星は天を見上げ、そしてゆっくりと瞼を閉じた．．．．．

「クク．．．第二幕の開幕．．．．ぞ」

星はハッと目を開けた、すると隣に馬に跨った信長がいた。

「の、信長殿！！??」

「うぬの働き、見事であった。勝家を思い出したわ。だがまだ忠勝

には及ばん」

信長が妙法千五村正を振り敵の死体を崩れるように切り刻み、蹴飛ばした。

「星……うぬのしたことは軍の崩壊を招く、下策中の下策。

失態をし、責を感じ、逃げるは悪、死は極悪……ぞ。

失態を作ったならば働きで、失態を取り返すほどの働きをしてみせよ。勲功をあげよ！

此度はワシもこの三国の猛将の実力を見る良き機会であった。やはりうぬは趙子龍であった！！うぬの力・ワシは欲しい。よってうぬを死なせるわけにはいかぬ！！手を貸そうぞ！！」

そして信長は星の前に立ち、疲れている星を守るかのように星の方の敵を切り捨てる

「ふふ……男に守られるとは、女冥利に尽きますな。だが私はまだ女の幸せを手に入れる気はありませんゆえ、ここで隣に立たせてもらいますぞ」

星は信長の隣に立ち、槍を構え、再び闘志を燃やしたようだ。その様子に信長も笑みを浮かべる。

「ふむ・・ワシもうぬをひな壇に飾り、化粧をさせ、鑑賞するだけにはしたくないのでな」

「ふふ・・さあ！・！ともに戦いましょうぞ！・！」

そして二人は背中を合わせ、互いを守るように敵をバサバサと切り捨てていく

そして・・・・

「ご主人様――！！！！いったい何を考えておられるのですか！・！」

愛紗が兵を率いて到着したようだ。

「まったく、貴方は私たちの主人である自覚がおりますか？確かにご主人様はお強い。しかし人には変わりないんですよ！斬られれば死ぬのです！」

「ッハッハッハ。ならば愛紗。うぬも人・ぞ。うぬも死する者。そんなうぬらを先頭に立たせ、ワシは安全な後方で控えておれと？ 兵が数万をこする大軍であればよいが、今は寡兵ぞ。そんな今ではそれほど余裕はなからう。」

今は星の言うように猛将の力が一人でも必要・・ぞ」

「た、確かにそうですが・・」

ガンガン

「む、合図が出ましたね。星！今は一緒に引いてもらっぞ！」

「なるほど。敵を釣るわけですな」

「さすがに頭の回転が早いな」

「ハハハ、ちゃんと将としての知識などはあるさ。猪武者ではないさ」

「こんなことをしておいてか？まったくお主も世話のかかるやつだ」

「鈴々ほどではないさ。さあ！引くぞ！」

そして信長、愛紗、星は兵を反転させ後方に引いた

「まちやがれ！！散々俺たちをコケにしゃがって！！おいお前ら！！敵はただの小軍！！一氣に蹴散らすぞ！！！」

敵はうまく釣れたようだ、そして・・・

「にゃー！！！！突撃、粉碎、勝利なのだー！！！！！」

「みんな！！守りたい人やこの地の平和のため、今は私に力を貸して！！」

鈴々と、桃香の部隊による奇襲が始まった

「よし！！皆！反転だ！！！」

信長、愛紗、星の部隊が反転し、これで三方からの挟撃が成功した。

「くそが！！なめやがつて！！おいお前ら！気合いれろ！！！」

賊も挟撃され混乱しているようだが、数が多いためまだ戦う意思を奪うまでにはいかないようだ。

敵の様子に愛紗がしかめた顔で呟く。

「敵もなかなかやりますね・・・、白蓮殿はまだなのか・・・」

「ふむ・・・後方まで迂回してからの強襲であるからな。いま少し時が必要か・・・」

「どうしますか？このままではせつかくの包囲が崩れてしまいます」

「ならば、先ほど言った星の言葉。今一度使い、敵を混乱させようぞ」

「と、言いますと？」

愛紗と、星が信長の隣で次の言葉を待つ

「うむ、一騎当千の猛将による猛撃・・・ぞ。愛紗、星。うぬらまだ戦えるか？」

信長が二人へ、その視線を向ける。その瞳には（この信長の背中を追いかけて来い）とっているかのようだった。

「はい！まだいけますー！」

「ええ。私もいけますぞ」

二人は自慢の武器を握りなおし、まだまだいけると信長へ伝える

「ならば、このまま馬に乗ったまま突撃をかけるぞ。賊の集まりといえど必ず兵を指揮する者がある。その者を討つのだ！三人で突撃するぞ！」

「く・・・本来ならばご主人様にこんな危険なことさせたくないですが・・・仕方ないですね」

「ハハハ！信長殿はおもしろいですなあ・・・良いですとも」

「では往くぞ！！我に続けい！！兵はそのまま防御の構えを崩すな！！」

信長と愛紗と星は馬に乗り敵兵の中に突撃していった。その猛撃はすさまじいものであった。

「誰ぞ！！この信長と張り合えるものはおらんか！！」

「賊共！！この青龍堰月刀の錆にしてくれようぞ！！」

「この常山の趙子龍の武の糧になりたいもの我が前にでられよ！！」

三人がまさに一騎当千の如き武を揮い、賊はその気迫に押されている。黄巾には猛将がいなかったため、ただただ、その様子は恐ろしく映ったであろう。

「お、おい・・・なんだありやあ・・・バケモンじゃねか・・・お前ら！！あいつらをこっちにこさせるな！！俺を守れ！！」

敵の将とは呼べないがリーダー格のような男がそう叫ぶ

「む・・・」

信長はそれを聞き漏らさなかった。

「クク・・・この信長に目を付けられたこと、後悔するが良いわ!!」

50メートルは離れていただろうが信長はキツとその男の目を見つめたまま一点も反らさずその男に突撃をかける

「な、なんだありゃ・・・なんでこつち見てんだ・・・やめろ!!来るな!!来るな!!ああああああ!!」

「クク・・・滅せよ・・・」

信長が一刀の元に男の首を刎ねた

「聞けい!!汝らの将。この信長が滅したぞ!!」

そして時を同じくして

「進め!!!公孫の力を見せ付けるのだ!!!賊共!!!今すぐ蹴散らしてやる!!」

白蓮の部隊も到着したのだ。そして混乱に、さらに後方を付かれての奇襲、包囲による大混乱が起こり敵はついになすすべなく殲滅されるのであった。

子龍は一身すべてこれ胆なり（後書き）

子龍は一身すべてこれ肝なり

これは劉備が趙雲に言った言葉です。

ようするに趙雲は全身が肝でできてるみたいに、
すげー度胸の持ち主だっということです。

織田軍

信長たち一向は白蓮の城でしばらく生活させてもらっていた。

白蓮の要請でここ幽州の賊たちを何度も征伐し、そして城に戻る生活を繰り返していた。

愛紗、鈴々、信長は兵の調練を任され、桃香は白蓮の事務の仕事を手伝っていた。

愛紗も暇があれば白蓮の手伝いをしていたが、信長には出来なかった。

なぜなら彼は字が読めなかったからだ。

そのことに信長は軽くショックを覚えたのか、兵たちの調練が終わればすぐに与えられた自室へと戻り、寝る間を惜しみながら、字を勉強していた。

その信長の熱心さには桃香はおろか、白蓮にまで「あいつはいつ寝ているんだ？」と、心配させるほどであった。

信長は桃香たちや愛紗、星、白蓮だけでなく、暇そうにしていれば鈴々にも字を教えてもらっていた。

それはおろか、字が読める侍女たちにも恥じることなく字を教えてもらっていた。

まさに知るは一時の恥、知らぬは一生の恥を教訓にしているかのようだった。そのため、信長の成長はすさまじく、自身の才能も手伝っているのだろうか、一ヶ月もたてば、普通に生活するには支障をきたさないまでに字が読めるようになっていた。

そして、ついに時は動き出した

信長は侍女に連れられ、皆が集まっている部屋にきた。

全員が揃った事で、白蓮は話を始めた

「全員揃ったか、さて皆、この城に朝廷よりの使者が来たのは知っているよな？」

「ふむ、黄巾の討伐を命じに来たようだな」

「そつだ。私はすでに参戦することは決めているのだが・・・」

「白蓮ちゃんがね、これは私たちにとって好機なんじゃないかって」

桃香がよく意味は理解していないが、白蓮がそういていたように

と言わんばかりの口調でそう告げた

「好機？なんなのだー？」

鈴々はその言葉で理解できなかったようだが、信長は理解したのか、ポツリと漏らす・

「好機・・・か」

そして、白蓮が信長たち一向を見つめ、話を再び続けた

「黄巾党鎮圧で手柄を立てれば、朝廷より恩賞を賜ることになるだろう。桃香たちがその気になれば、きっとそれなりの地位になれるはずだ。そうすれば、もっともっと多くの人たちを守ることが出来るだろう？」

残念ながら、今の私の力はそれほど強くない。・・・そりゃもちろんもっともっと力をつけて、この動乱を収めたいとは思っているけど、でも今すぐは無理だ。そんな私に桃香を付き合わせる訳にもいかない。時は金よりも貴重なんだから」

白蓮が少し難しい顔をしながら口を閉じた。

それを見ていた信長はやはりな、っといった表情で口を開いた。

「ふむ・・・白蓮よ。うぬのおかげでワシらは良き生活を送らせてもらった。ワシらが出ることがうぬの望みなら是非もなし。そうさせ

てもらおう」

「・・・え？ご主人様、どういうこと？」

その言葉に桃香は首をかしげ、意味が分からないといった表情であった

「ワシらは活躍すぎたのだ。星は客将として十分に働き、ワシらも黄巾の討伐に積極的に参加し、何千人もの賊を滅ぼし、名を上げてきた。太守としての面目が潰れるほどにな」

「え！？そんな・・・」

桃香が困った顔で白蓮の顔を見る。すると、白蓮は困ったような引きつった笑顔を桃香へと返した

「この功名を上げる絶好の好機にワシら自身の手で手柄を立て独立したいのだな。これが最も効率の良い対処法ぞ。しかしながらこれはワシらにとって利はあるがうぬにとってはただの現状を回復させる手段でしかないのだがな。真に優しき女ぞ」

白蓮はそう呼ばれ少し照れたのか顔が赤くなっている。そして、顔を元に戻し力強く喋りだした。

「私は・・・お前たちに何かを感じるんだ。きっと・・・この乱世を終結へ向かわせる可能性が！私じゃきっとできないでかい事をお前たちならやってくれるってな！」

「白蓮ちゃん・・・」

桃香はただただ嬉しかった。自分の親友がここまで自分たちのことを考えてくれていたとは思ってもいなかったのだろう。

だが、自分たちにはどうしても必要なものがある。それを愛紗が告げた。

「しかし・・・私たちには手勢がありません・・・」

「私の街で・・・やってみろ」

白蓮のさらなる援助に桃香たちは驚きの声を上げた。信長でさえも少し驚いた表情をして、白蓮を見た。

「えー！！！？？そんな！？いいの！！？？？」

「ああ。これは私からのお前たちへの最後の援助だ。友の門出に贈ってやるぞ」

「クク・・たいした女子・・ぞ。ならばそうさせてもらおう。白蓮、いつかうぬが困ったときはワシらを頼るのだ」

「ああ、そのときまでにはでっかくなっていてくれよ。なんせ私の町の人を使うんだからな」

白蓮はグツッと親指を立て、笑顔で信長たちに顔を向けた。

「無論！ 桃香、愛紗、さっそく手配するぞ！」

「まっかせーなさーい」

「はい、では早速行動に移りましょう」

そして、一週間の時がながれ・・・・

「ふむ、思ったよりも集まったようだな」

そこには総勢六千人もの人数が集まっていた。

桃香の仁徳、愛紗、鈴々の武勇。そして信長自身には魔王というあだ名が白蓮の城下の民や兵、黄巾の間で流れていた。

信長自身が第六天魔王と称していることもあるだろうが、

信長の武、知略、統率力。信長たちは白蓮の要請での黄巾の討伐では全勝していた。敵がただの烏合の衆ということもあるが、そこには信長自身の采配のうまさもあるだろう。

白蓮の城下の者たちにとってはそれは大きな希望だった。付近の村や町は黄巾により滅ぼされたという噂は商人伝いに流れ入ってくる。しかし、そんな黄巾たちに全勝している者達がいる。そんな者たちがいまここにいるのだ。

それはヒーローとして城下の者たちに映るだろう。自分たちは彼らに守られている、魔王と称しているがそんなこと関係ない。自分たちの暮らしを賊共から守ってくれているのだ。

その評価は六千人もの兵を集めるには十分だった。魔王をただ見たいというだけの者もいるだろうが、彼らに付いていきたいというものの方が多だろう。

「白蓮ちゃん、お別れだね」

「ああ。だがまたすぐに会えるさ。桃香。お前たちが活躍すればその活躍は私の耳にも届くんだ。それでお前たちの無事を確認するさ。

だから精一杯人助けをするんだな」

「うん♪それが私のやりたいことだから♪」

桃香と白蓮は親友に別れの挨拶を告げた。

「愛紗、またいつか手合わせしたいものだな」

「ああ。お前との手合わせは非常にいい訓練になる」

こちらは愛紗、星。二人には何か通じているものがあるのだろう。そして、またいつか会えると確信しているのだろう。

二人はお互いのこぶしを前に突き出し、合わせている。その様子を見た鈴々は

「ずるい！鈴々もなのだー！！」

「ああ。鈴々ともまた手合わせしたものだ」

星は笑顔でもう片方のこぶしを少し低めに突き出し、鈴々ともこぶしを合わせた。

そのやり取りが終わり、信長は星に近寄り話を切り出した。

「星、うぬは仕えるべき主を探しているといっておったな」

「ええ。そうですぞ」

「ならば、ワシら織田も候補に加えておくのだ。うぬの力、この信長は欲しておる」

「っはっはっは。伯珪殿の目の前で勧誘ですか？やはり貴方は面白
いお方だ。ええ。是非参考になせてもらいますよ」

「ううゝ．．星、どうせお前もいつかここを出てくんだろ？」

白蓮はすごく情けない顔をして、泣きまねをしていた。
それを見て、ひとしきり笑いあい、そして、笑いがやむと空気が変
わったようだ。

そして、愛紗が新しいスタートの言葉を言った

「では、ご主人様。さっそく出立しましょう！」

「私たちの第一歩だね。」

「これからどうなるのか楽しみなのだー!!」

「では、往くぞ皆の者!これより天下布武への道を共に歩もつぞー!」

「おおおおおー!ー!ー!ー!ー!ー!ー!」

これより、この地に織田軍が誕生した……

伏竜鳳雛（前書き）

信長の名前は織田上総介信長に変更しました。

伏竜鳳雛

信長たちは荒野を進軍していた。

この辺りには黄巾の目撃例や商人、旅人の被害が多数報告されているからだ

「ご主人様、偵察の者が戻ってきたようです」

「うむ、通せ」

そして偵察に行っていた者が急いで戻ってきた。その様子はどこか慌しい。

「報告します！！ここより一里ほどいったところに数人が賊に囲まれておりました。賊の数は10人ほどおり、私ではどうしようもありませんでした！」

そのような報告をされては桃香が黙っていない、すぐに声を出した。

「ご主人様！！助けにいきましょう！」

「桃香様の仰るとおりです！」

愛紗にも正義の心がある、そして鈴々にも。

三人は顔を見合わせたあと、信長に視線を向ける

「うむ。では往くぞ。桃香はここで兵の指揮をとっておれ。ワシと愛紗、鈴々は共にゆくぞ！」

「はい！！！！」

「わかったのだー！！」

信長、愛紗、鈴々は馬で先に先行してその襲われている人たちの救援に向かった

「は、はわわわ………」

「あ、あわわ………」

「い、命だけは助けてくれ！！」

そこには商人らしき男と二人の少女がいた。
少女のうち、一人は頭にベレー帽のようなものをかぶっている少女。
もう一人は頭に魔女のような帽子をかぶっていた。

その一向は危機を迎えていた。

「助けて欲しかったらその荷物を全部置いていくんだな、おっと、
金も忘れんじゃねえぞ」

「おっと、お嬢ちゃんたちは俺たちの相手をしてもらっぜ」

「お前・・・こんなガキが好みなのかよ」

「はわわ・・・わ、私たちは子供じゃないです！もう大人でしゅ！
あう・・・噛んじやった」

ベレー帽の少女がそう叫んだが、声が震えており、そして元々人見
知りする性格なのだろう。大勢の人間に囲まれてうまく喋れないの
か噛んだようだ。

「はっはっは、こうやって大人になりたがってる子供を俺好みの女にするんだよ。見るよ、きつと上玉に成長してくれるぜ」

「ああ、そういうことか。確かに成長すりゃ高く売れそうだな」

「まあ、そのまえに今の段階で味見はするけどなー!!」

「あ、あわわー!!!!」

その様子を見て、商人風の男が二人の少女をかばう様に前へたち、盗賊たちに話しかける。

「ま、まで!!まだこんな子供じゃないか!!おびえているじゃないか。この子達はこれから平和な世のために自分たちを雇ってくれる方を探している旅に出ている立派な志をもった子たちなんだ。だから見逃してやってくれ!」

「ああん?うるせーなあ・・・お前はとつとつ、金と荷物を置いてきやいいんだよ!」

「だ、だが君たちはこの子たちに・・」

「うっせーんだよ！！ボケがああああああ！！！！！！！」

黄巾の一人が剣を抜刀し、その商人の体を肩から斜めに切り捨てた。

「お、おじさん……はう……う……う……う……」

「あわわ……しゅ、朱里ちゃん……ど、どうしよお……」

二人は泣いていた。その商人の男の死体を揺さぶるようにして、泣いている。

「っかつっかつ、馬鹿があ。善人ぶりやがつて、おとなしく素直にしたがつてりやあ命だけは助かったかもしんねーのになあ」

「さあて、お嬢ちゃん。俺たちと仲良くしよーぜえ……」

そして男の一人が女の子二人に近づいてくる

「待つのだ――！！！！！！！！」

そこへ、鈴々がぎりぎり間に合ったようだ。鈴々も二人の少女の前へと出た。

「あん？またちびっこが一人増えたぞ」

「こいつも将来上玉になりそうじゃねえか」

「お兄さんたちと仲良くしような？な？」

「うるさいのだー！！！！こんなちびっこをいじめてお前たちは恥ずかしいのか！？」

「あう・・・このこもたいしてかわらないと思うんだけど・・・」

魔女っ子が、鈴々をジト目で見る。

「鈴々！一人で先行するな！！まったくお前は軽いから馬も速いんだな」

そしてようやく愛紗と信長も到着したようだ

「なんだあこいつら？」

「くっ・・・一人殺されてしまったか・・・だがこの子たちだけでもなんとか助けねば・・・さあ！下衆ども！！この青龍堰月刀の錆にしてくれる！！！」

愛紗が商人の死体を見て、悔しそう顔をゆがめ、青龍堰月刀を構えた。

「ああん！？なめてんのかこらあ！てめーら三人で勝てると思ってんのかこらあ！！！！！」

「クク・・・うぬらこそこの黒髪 of 山賊狩りの名を知らぬか」

「く、黒髪 of 山賊狩り・・・この女が・・・？」

突然その名を聞き、賊たちは困惑の表情を浮かべた。
自分たちにとっては尤も聞きたくない、その名。

黒髪 of 山賊狩り・・・

「ああ！私がそうだ！お前たちは罪無き人間を何人もいたぶり、そして今日この私の前で一人の人間を殺した。私は貴様らを許しはせんぞ！！でやああー！！！！！！」

そうして愛紗は約十人はいる賊の中に飛び込むかのように突撃した

「愛紗ずるいのだー！！！！鈴々もー！！！！うりゃうりゃうりゃー！！！！」

「ふむ。たかだか十人程度この二人に任せておけばよいな。して、うぬら怪我はないか」

信長は愛紗と鈴々に任せれば大丈夫だろうと、確信し、二人の少女の前へ歩み寄る。

「はう！ー！しゅ、しゅみましえん！あう噛んじやった」

「あわわ・・・た、助けていただいてありがとうございます」

「構わぬ。ワシらはワシらの成すべき事をしただけにすぎぬ」

「成すべき事・・・あのお、貴方たちの成すべき事とは・・・」

二人の少女が信長へと、問いかけたとき・・・

「ご主人様ー！！大丈夫だった！！」

桃香が兵を連れて到着したようだ。

「ふむ・・・残念だが一人は賊にやられてしまった」

「そう・・・でもでも！！その子たちは助かったんだよね！！良かったね♪」

桃香が満面の笑みで二人の少女に微笑みかける

「あの・・・貴方たちは？」

「私たち？うーん・・・私は劉玄德♪そしてこの方は私のご主人様の織田・・・か、かずさの・・・の、信長さんだよ♪」

「織田信長でよい」

「しゅ、朱里ちゃん・・・」

「うん。わかってるこの人たちが・・・」

二人はなにかこそこそと会話しているようだ。

「ん？どうしたの？」

そして、二人は信長、桃香の目を見て、話し出した。

「あ、あのですね、私たち荊州にある水鏡塾っていう、水鏡先生という方が開いている私塾で学んでいたんですけど、でも今この大陸を包み込んでいる危機的な状況を見るに見かねて、それで、えと・・

「力の無い人たちが悲しむのが許せなくて、その人たちを守るために私たちが学んだことを活かすべきだって考えて、でも自分たちだけの力じゃ何も出来ないから、誰かに協力してもらわなくちゃいけないって」

「それでそれで、誰に協力してもらえば良いんだろうって考えて、最近幽州にはびこる賊の方たちに全戦全勝している方の一向の名前をお聞きして・・それでその方のお名前が織田上総介信長さんって・・あ、あと魔王とも・・」

「ふむ。それでうぬらはどうしたいのだ」

「それでいろいろ話を聞くうちにそこにおられる、劉玄德様のお考えと私たちの考えが一緒だって思って」

ベレー帽の少女が桃香へと顔を向けた。

「え？わ、私・・？」

桃香は自分の顔を指差し、ちょっと焦ったような表情を浮かべた。

「だから、あの……私たちを戦列の端にお加えください!!!」

「お願いします!」

二人は勢いよく頭を下げた。まるで、ブンッと音がするかのようであった。

それだけ、二人は必死なのだろう。

その姿に心を打たれたのか桃香は信長に懇願の目を向けた。

「ご主人様……」

「ふむ。愛紗と鈴々が戻ってくるまで待つのだ」

そして……

「戦列の端に加えるにはいささか歳が若すぎる気もしますが……」

愛紗が、困ったような表情でそう告げた。

「うぬら．．名を何と申す」

「は、はい！！わ、私はしよ、しよ、諸葛孔明れしゅ！！」

「わ、私は、あの、んと、ほと、ほーとう、？統でしゅ！！」

「二人ともカミカミすぎなのだ．．」

「．．．．．」

信長は顔には出さないが心底驚いた。やはりこの世界はおもしろい。このように幼い二人があゝの稀代の軍師、諸葛孔明と？統土元なのだから。

やはり、人は見かけで判断してはいけないのだと信長は己の辞書にさらに深く書き込んだ。

「クク・・歳が若い・・か。ならばそれは鈴々も同じ。しかし鈴々は若くとも一騎当千の武勇を誇る。しかし、戦う方法は何も剣を持ち敵を斬ることにあらず。頭で敵を斬ればよいのだ」

「て、敵を頭で斬る・・？」

うーんと、桃香はどういう意味か考えているようだ

「っと、いいますと・・この子達は軍師や文官としての才がある
とご主人様は見られたのですか？」

「うむ。こやつらは必ずやワシらの力になる。ワシの目を信じよ」

「そうですか・・ご主人様がそうお決めになられたのでしたら私は
何も言いません」

愛紗は諦めたような表情で、だが信長を信じていた。
彼のやってきたことに今まで間違いや失敗はなかったのだから・・・

「うむ。では早速だが孔明、土元。うぬらはワシらの今の状況をみるにこれからどうすべきか答えよ」

「は、はい！あ、えと、あ、ありがとうございます！私の真名は朱里つていいです！」

「あ、えと、ひ、ひな、私の真名は雛里つていいです！宜しく願います！」

二人はそれぞれ、自分の自己紹介のときにもう一度頭を下げ、名前を言った。

そして、顔を上げるとそこには軍師の目があったのだ。

「そ、それですね。私たちの勢力は、ほかの黄巾党征伐に乗り出している諸侯に比べると極小ではありません。

今は黄巾党の中でも小さな部隊を相手に勝利を積み重ね、名を高めることが重要だと思います」

「敵を選べと言っのか？」

愛紗が明らかにムツとした表情でそう言った。

「うむ。ワシもそう思っておった」

「ご、ご主人様ですか。しかしそれはいささか卑怯ではありませんか？」

「ワシらはまだ弱小勢力。どうあがこうが今は名を高め義勇兵を募ることが第一の目標ぞ」

「た、確かに……」

「しかし、一つ問題がある」

「兵糧……ですね」

朱里が顎に手をあて、そう呟く

「うむ。それに関しては名を上げつつ、付近の村や町に住む富豪たちに寄付を募るか・敵の補給物資を鹵獲するしかない」

「そっか……うーん、だったらやっぱり弱い敵部隊を狙って倒していった方がおとくだね」

「なるほど、そういうことなら確かにそうするしかありませんね」

愛紗が納得したの今度は明るい顔でそういった。

軍師たちは信長の機転の利く頭や、智謀に驚いていた。

「す、すごいです！！そこまでお考えになっていたなんて！！やっぱりすごく機転が利くんですね」

「うん・・・すごい・・・」

「そうだよ」すごいでしょ」ご主人様は今までの戦いで全部作戦を考えてたんだから」

桃香はニコニコ顔で自分が褒められているわけでもないのだが、すごく嬉しそうな顔でそう話す。

「ああ。そのおかげで私たちは負け戦をすることなく、ここまで名を上げることができたんだ」

愛紗もまんざらではなく、鼻高々と、今までの戦歴を話した。

「すごいですね・・・はうう、そんなすごいお人のところでうまくで

きるかな」

「できる。うぬらは伏竜鳳雛であろう」

「はう！―ど、どうして水鏡先生が私たちにつけたあだ名を！―？
？」

「クク・・・ただのたわ言よ」

こうして伏竜鳳雛が信長の戦列に加わった。天下の軍師を二人も信長は手に入れたのだ。

伏竜鳳雛（後書き）

ふくりゅうほうすう
伏龍鳳雛

伏龍とは地中で空へと駆け上がる機会をまっっている龍のこと。
鳳雛とは名前の通り鳳凰の雛のことです。

うまいこと表しますねえ水鏡先生・・・
その二人を手に入れた劉備もすごいですね。
ある意味曹操並の人材コレクターですね・・・

魔王の策

「朱里と雛里はちっこいのだー！」

「むっつ鈴々ちゃんだってそんな変わらないじゃない」

「あわわ、私のほうがちょっとだけおおきい」

「まったくお前たちは何の話をしているのだ」

「愛紗は黙ってるのだー！！」

荒野は広く果てしないため、各方面に細策を放ちその報告をまっ
ているため、ただ進軍するだけであつたため一向は話しているうちに
仲良くなつたようだ。

信長だけはかたくなに遠くを見つめているが、桃香がしきりに話し
かけているようだ

「ねえねえ、ご主人様。ご主人様って元の世界では何してたの？」

「ふむ・・・とあるものを手に入れようとし、その道中失態をおかし、諦めざるをえなくなった」

「えっ？？どういうこと？」

桃香はよくわからないといった表情で首をかしげる

「ワシがうぬのような仁徳を持つておればそのような失態を犯すこともなかったかもしれんな。桃香」

「そんな仁徳なんて／＼私はただみんなと楽しくすごしてるだけだよ」

桃香は照れた表情で信長にはにかんだ。

しかし、信長は遠い過去を見るような表情で空を見上げた。いろいろな意味が籠っているのだろう。

仁徳・・・自分にはおそくないだろう。

だから自分は裏切られ続ける生涯、そして、終幕だったのだろう・・・と

そんなことを話していると・・・

「報告します！！！！ここより前方五里の所に黄巾党とおぼしき集団が陣を構えております！！その数一万！！」

その報告を受け、信長はすぐさま表情を変え、軍師を呼んだ。

「一万・・・か。策を練る必要があるな。朱里、雛里！」

「は、はひ！！あうっ噛んじやった」

「へい！！あわわ・・・」

「うぬらの力ここで見せよ」

「大丈夫？朱里ちゃん、雛里ちゃん？」

桃香は心配そうな顔で二人の顔を見つめた。
しかし、それは杞憂なようだ。

二人ももう、切り替えたのだろう。二人は軍師の顔を桃香へと返し

た。

「はい、私たちはそのために今まで勉強をしていました。その勉強の成果をやつと披露することができるんですね」

「べんきょって朱里と雛里は何を勉強していたのだ？」

鈴々が朱里と雛里へとそう質問をした。だが、その答えは想像を超えていた。

「えと、孫子、呉子、六韜、三略、司馬法・それに九章算術、呂氏春秋、山海経・あとはいくつかの経済書と民政書を勉強しました」

「うわー・・・それ、全部勉強して覚えたの？」

桃香はポカーンつと口を開けている。愛紗も目を驚きで見開いていた。鈴々だけはその本がなんなのか分からないのだろう。特に変わっていないかった。

「はい」

「すごーい！！愛紗ちゃん愛紗ちゃん！！この子達ひょっとしたらすっごいかも！」

桃香が手をパチパチとたたいている。

「確かにすごいですね・・・それより、この見た目でその才を見抜いたご主人様の方がすごいと思うのですが」

「朱里、雛里。策を挙げよ」

「はい。伝令さんからの報告では敵はここより五里先に陣を構えているとのことですが、ここより五里先というのは兵法でいう衢地となっています」

「くちー？なんなのだそれ？」

「衢地とは、各方面に伸びた道が収束する場所のことをいいます」

「ふむ・・・そのような要所に雑兵か。狙い目ぞ」

「ご主人様あ・・・どういうこと？」

桃香がうるうる目で訳がわからないといった表情を信長へ向けた。

「えとですね・・敵は私たちより多くの兵を持つとはいえ、雑兵でしかありません。またその雑兵が守っている地は黄巾党全軍に影響を及ぼすであろう重要な地」

「そこを破れば、私たちの名は否応無く高まります。だからこそ、これは千載一遇の好機」

「それでそれで!!どうするの?」

「はい、第一に敵を陣地から引つ張り出すこと」

「その後野戦に持ち込むこと、ただし平地で対峙してはいけな」と

「数で負けているなら数で負けない状況を作り出せばいいんです」

「ふむ・・されどここらは荒地ばかり、峡間なぞどこにあるのだ」

信長は朱里へと疑問をぶつけた。その答えを聞き、朱里は驚いた。

「はわわ！！本当に私たちの考えがお分かりになるんですね！」

「どういうこと？」

桃香は相変わらず先ほどから首をかしげっぱなしである。鈴々はもはや話を聞いていない。

「はい。数で負けているなら道が狭くなっているところで戦えばいいんです」

「そして、ここより二里ほど行った所に川が干上がってできた谷があります」

「真か？」

「はい」

「ええ？でもそんなところ地図に載ってないよ？」

桃香が地図を開き、地図をジーンツと見つめて探している。その様子を見て、雛里が言葉を発した。

「その地図市販の物ですね？」

「う、うん」

「なら、商人さんたちがよく使う道や山とかしか書いてないんです」

「もっと細かい正確な地図は漢王朝や官軍しか持っていません。戦略などを練る上で地形を把握するのはとても大切なことですから」

「うぬらは漢王朝や官軍しか持っておらぬような地図をどこで見たのだ？」

「はい、私たちは水鏡先生のツテで見ることができました。だからおおよその地理は把握しています」

「ふむ、ならば敵をうまく誘引すればよいのだな。幸いワシらは正規兵には見えぬ。黄巾の者共を釣るには絶好の餌よ。敵は必ずや釣れるだろう。」

「愛紗は前衛を頼む。うまく敵を釣るのだ。そして、鈴々、うぬには伏兵をやってもらおう」

「伏兵？どこでやるのだ」

「朱里、雛里。谷があるということは、崖があるということだな」

「はい。落石・・・ですか？」

朱里が信長の考えを読み、そう答えた。しかし、信長はさらにその上をいつていた

「ぬるいわ。ここに森や木々が生い茂っているところはあるか？」

「はい、少し行ったところにあります」

「ならば木を伐採し、丸太を縄で縛るのだ。人が乗り越えられないほどにな。そして木材を集めよ！！大量にぞ！！」

「敵を閉じ込めてどうするのですか？あ！！それで、敵の退路を断ち、鈴々ちゃんに奇襲してもらうのですね。でも、落石じゃないとは？」

「どういふこと――！ご主人様と朱里ちゃんと雛里ちゃんだけで話さないでよー！」

桃香が手をバタバタと動かし、二人の顔を交互に見つめる。

「後で話す！！さあゆくぞ！！！」

そして・・・

「敵が開門してきました!!!」

「私は織田の堰月刀関雲長……！賊共……！私が貴様らの前に現れた以上貴様らに明日はない……！」

「うおおおおああああ——！！！！！！！！！！」

愛紗たち前衛の部隊と黄巾の兵がぶつかりあった。

「はあ！！やあ！！」

愛紗にはたくさんの黄巾兵が攻めてくる。やはり女ということがあ

つて敵はなめているのだろうか？しかしその考えが自分の命を無駄に早く散らしていかせるのだった

「く、やはり雑兵といえど・・・数の違いはきついか・・・」

「関羽様！！このままでは前衛がもちません！後退はまだですか！
！」

関羽隊の者が焦ったような声でそう告げる

「後方で戦況を観察している後方の部隊を引き出さなくては・・・
しかし・・・」

まだ敵は動きそうにない。だが、なんとしても敵を引きずり出さなくてはいけない。

まだ、ここで下がるわけにはいかないのだ。

だからここではまだ戦うしかない・・・ならば！！

「もう少しだけ耐えてくれ・・・うつおりやああああー！！
！！」

愛紗が兵を鼓舞するために一人勇敢に突撃していく。

「星、お主もこのような気分だったのだな。やはり私とお前は似ている。このように一人で敵の大群の前に立ちはだかるといふのは武者震いがするものだ。私の中の猛将の血が騒いでいる。」

聞けい賊共！！この関羽！！貴様ら賊を許しはせぬ！！後方で震えておらずこの関羽の首を討ち取つてみせよ！！この臆病者どもが！！！！でやあああああー！！！！！！！！！！」

「おお．．関羽様．．すばらしい戦ぶりだ。まさに軍神．．．」

「俺たちも戦うぞ……！ 関羽様ばかりに戦わせるな……！ 俺たちも続け……！！！」

兵たちは愛紗の奮闘に鼓舞され士気を取り戻したようだ。

「皆、この関羽に続け――！！！！！」

「うおおあああああ——！！！！！」

「うお！？なんだこいつら！？急に勢いが！？」

黄巾の兵たちは急に勢いづいた関羽隊に押され始めていた。やはり、猛将の存在というものは軍に多大な影響を与えるのだらう。

「関羽様！！後方の陣が開きました！！」

ついに待っていた報告が兵よりもたらされた。

その報告を受け、愛紗はすぐに撤退の準備をする。

「よし！！ついに釣れたか！！皆よ引くぞ！！敵とつかず離れずの距離を保つのだ！離れ！！」

「はい！皆さん、後退します！！敵が諦めないように絶妙な距離を保ちます！！」

一方……

「華琳さま。西方に砂塵を確認しました。恐らく黄巾党とどこかの軍が戦っているのだと思われます」

猫耳少女がそう話す。相手は、クルクル頭の少女だ。二人の会話は続く。

「そう。この辺りの敵に目を付けたとなると、その部隊官軍では無

さそうね

「恐らくは・・・主戦場より離れた地であるのに、戦略上重要な拠点となりうるこの場所に目を付けるなど、愚昧な官軍に出来るはずがありません」

「諸侯の中にも、なかなか見所のある人物がいるということでしょうな」

「ふむ、一度顔を見てみたいわね」

「どうされますか？」

「とりあえず、この戦い傍観に徹するわ。どのような戦をするか見させてもらっわ」

「峡間が見えたぞ！！！！ここを一気に抜ける！！後方の部隊は敵の

追撃を受けるかもしれないがすぐにご主人様が助けしてくれる！！今しばらく耐えよ！！」

「おおおーーーー！！！！！！」

愛紗たちは狭い峡間を抜ける。しかし狭いために部隊が一度に通り抜けるわけではなく、どうしても細長い形になってしまったために後方はどうしても追いつかれてしまうのだ

「つく・・・もう少しだ・・・もうすこしでここを抜ける全員全速前進！！峡間を抜ければ私たちの勝ちだ！！！！」

そしてついに峡間を抜けたのだ

「よし！！！！しばらく敵をそのまま引きずり出せ！！あとはご主人様がやってくれる！！！！」

敵も峡間を抜け、数百人が出てきたころ・・・

どーーーーーん!!!!!!!!!!!!!!

「ぐわあああー」

「ぎゃあー!!!!!!」

「うわあ!!!!なんだこりゃ……丸太を縄で縛ったもの……」

突如として降ってきたもの……それが谷間を抜けている黄巾兵の何人かを踏み潰した

どーーーーーん!!!!!!!!!!!!!!

それが後方にも降ってきてそこでも黄巾兵を踏み潰し、その退路を断った

「くそ!!!!閉じ込められたじゃねえか!!!!!!」

「やれい！……！！！」

信長が谷を見下ろすように立ち何かを落とすよう指示した。

「な、なんだこりゃ……火、火だ——！！！！！」

「ぐあああ——！！あっち——！！」

突如として降ってくる松明、燃えた木材が彼らに降り注ぐ。信長は大量の木を伐採し、敵の退路を断ち彼らを火責めにしたのだ。

「クク……火をつけよ……油をそそげ……全てを断罪してやるのだ……」

そして油を上から投下した

「ぐああああー！！！！や、やめろおおおおああああああー！！！！」

「クク・・・よく燃えておるわ。もっと木材を落とせ！・・・ここに地獄を作ろう・・・ぞ」

「お、おい！！中のやつら大変な目にあってるぞ」

峡間にはいる手前で丸太を縄で縛ったバリケードが落ちてきたために谷間に入らなかった兵たちは自分たちがもう少しで火責めにされるところだったと安心したところ。

「にやにやにやー！！！！鈴々隊参上！！！！この瞬間をまっていたのだー！！！！」

「な、なにー！！！！」

「反転しろ！！ご主人様の計が成った！！敵は分断されたぞ！！
！固まっていたら厄介な奴らだが、分断された今はただの小勢！一
気に叩く！！」

「く、くそがあああああ！！！！！！」

「クク・・・よく燃えておる。乗り越えられぬぞ。丸太で作ったのは
それ自体も燃え、汝らが乗り越えられんようにするため・・・ぞ」

閉じ込められた兵たちは必死で逃げようと、バリケードを乗り越え
ようとする。

だが、そのバリケードも燃えているのだ。

油があらかじめ染み込ませてあり、すでに業火を上げている。

「ぎゃあああああ！！！！！」

「熱い……がああああー！！！！！」

「うう……ひどい臭い……それに……」

その光景はまさに地獄であつた。人間が生きたまま焼かれているのだ。そしてその酷い臭気と熱気が崖の上にいる桃香たちに届いてくる

「このために木を切つたのですね。でも、確かにこれなら兵の被害を少なくし、且つ、敵の兵を一気に減らすことができますね」

朱里も崖から下の惨劇を眺めている。

「朱里。うぬらの当初の計はこの狭い峡間で戦い、兵力差を無効化するものであつたらう？」

「はい」

「ワシの前では最善の策を述べよ。それが最善であれば実行する。ワシはいち早くこの乱世を終わらせ、天下を統一するのだ」

「天下を・・統一ですか」

「うむ。そのためにうぬらの真の知略が必要なのだ。無駄に格好をつけるな。すべては兵の命を救うためぞ。兵の命を格好や風評のために散らすな。皆が笑って暮らせる世の中に兵の命を無駄にする者は必要ないのだ！」

その言葉に桃香ははっとした。桃香は最初この策に反対した。あまりにもむごすぎる。生きたまま人間を焼くのだ。だから桃香は反対した。

だがしかし、この策の効果は実際どうだろう？

峡間で兵力差を無効化にして戦っていれば当然兵が直接戦う機会が多い。だがこの策では、実際に戦うのは愛紗たち先行の部隊、そして、分断された少数の部隊を愛紗たち先行の部隊と、伏兵となっていた鈴々も分断された少数の部隊と戦うだけなのだ。

あとは、火が敵兵と戦ってくれる。こちらの被害はなしで・・・

兵の命を無駄にしない・・・私は、反対していたということとはそれは戦死する兵を増やしてくれていったのではないか？

そんな私が・・・皆が笑って暮らせる世を作りたい？皆が笑顔・・・？
違う！！！！兵にだって家族がいるんだ！！兵の命を無駄に散らせる者は笑って暮らせる世に必要な・・・か・・・私もまだまだだなあ・・・

「桃香、見よ。これが戦ぞ」

「うん。私はこれを見なくちゃいけない。これが戦うってことなんだね」

「うむ。人の死の元に平和は作られるのだ。そして、人は気づくのだ。争いが馬鹿げていることにな。今はこうして手を血で汚すしかないのだ。」

汚れずに手に入るものなどない！！彼奴らの死が平和な世の礎になるのだ！！！！」

「うん！私は見る！！決して目を離さないよ！！彼らの死が・・・皆が笑って暮らせる世の礎になるなら！！！！」

「桃香様・・・」

信長、桃香、朱里はこの光景を目に焼き付けるようにしっかりと見つめるのだった

魔王と霸王

俺はその噂を耳にして衝撃を隠せなかった。

最近幽州の方で黄巾党討伐で名をはせている者たちがいるという噂だ。

彼ら自体は公孫賛に世話になっているらしいが、その実力は太守である、公孫賛よりもはるかに実力が上らしい。

それだけならよかった。この時代、英雄はいたるところにいるし、俺を世話してくれている華琳だってそうだ。なんせあの曹孟徳なんだからな。

英雄だけじゃなく、豪傑としても公孫賛よりも名をはせることは可能だろう。春蘭だってその武勇は俺から見たら天下一品だろう。彼女が負けるところなんて想像できない。

秋蘭だってその弓の腕前はこの大陸でも五本の指に入るだろう。俺たちの時代にいたらオリンピックで金メダルなんてたやすいんじゃないかって思う。

それぐらいこの時代には優秀な人材が山ほどいるんだ。

だが、その人物たちは俺をただ驚かせるだけじゃすまなかったんだ。
・

だってこの時代にいるはずもないし、国がまず違う。そして時代も違う。そして考えられるは彼もきつと俺と同じで不思議な力に導かれてここへ来たんだらうと簡単にその推測にいたれた。

そして、俺は彼に会って話がしたいと思った……

敵を殲滅したあと、信長たちは放置された陣に物資や武具を確保しようとした。

「此度の働き皆大儀であった」

「はっ！これぐらい造作もなきことです」

「鈴々もこれぐらい余裕なのだー」

信長はそこにいる将たちにねぎらいの言葉をかけた。

「私たちは結局ご主人様の策の手助けにしかありませんでした……」

「あわわ・・・すみません」

朱里と雛里は残念そうな顔をしている。彼女らは今回、峽間を教えただけのようなものであった。実際一番の功績は愛紗と信長である。

しかし、そんな事関係なかった。桃香は優しく二人の下に近寄り笑顔に向けた。

「そんな心配しなくても大丈夫だよ。朱里ちゃんに雛里ちゃんはどうしても頑張ったよ」

そう、桃香に言ってもらえて、二人は瞬く間に笑顔に変わった。

「そう言ってもらえるとうれしいです」

「うむ。うぬらの情報がなければ此度の策は成しえなかった。その記憶力は見事ぞ。これからこの織田の為にその才を揮えい」

信長も二人へ視線を向け、そう声をかけた。

「はい！」

そしてつかの間の休息を楽しんでいると・・・

「申し上げます！」

一人の兵が皆の下へやってきた。

「はいはい。どうかしたの？」

桃香がその応対をした

「はっ。陣地の南方に官軍らしき軍団が現れ、我等の部隊の指揮官にお会いしたいと・・・」

「官軍らしき、とはどういうことだ？」

愛紗が考え込むような顔でそう話した

「それが・・・通常、官軍が使用する旗を用いず、曹と書かれた旗を掲げているのです」

「官軍を名乗りながら、官軍の旗は用いず。・・・恐らく黄巾党征伐に乗り出した諸侯でしょうね」

「曹と言えば・・・許昌を中心に勢力を伸ばしている、曹操さんかと」

朱里の言葉に雛里もそう言葉を漏らす。

「ふむ・・・。通せ」

「そうですね。上手くいけば共同戦線を張れる可能性もありますし」

「しかし・・・我等の手柄を横取りするということも考えられるのでは？」

愛紗がそう提案した。しかし・・・

「普通の官軍ならばそうでしょう。でも私が聞き知っている曹操さんが、そんな恥知らずなことをするとは思えませんけど・・・」

「曹操ってどんな子なのだ？」

「誇り高き覇者・・・その言葉通りの方ですね」

「器量、能力、兵力、そして財力。全てを兼ね備えていると言っても過言じゃないと思います」

「ほわー・・・なにその完璧超人さん」

桃香が口に手を当て、驚いた表情をした。

「何を言っているのですか桃香様。我等のご主人様もまさに完璧超人ではありませんか」

そして、愛紗はフンと鼻をならすような表情でそう話す。しかし、思わぬところからツツコミが入った。

「でも、兵力も財力も全然ないのだー！」

「うつ・・・確かに・・・でもそのような人物が、どうして我等のような弱小部隊に声をかけたのだ？」

その言葉に落胆した。そして、体勢を直し、朱里へ話をふる。

「それは分かりませんが……」

「とりあえずやっぱり会うしかないって事だね」

桃香の決断に一向は曹操に合う事で決定した。そして、愛紗が朱里、雛里の方を向き、こうたずねた。

「曹操殿についての知ってる噂は朱里や雛里は何かあるのか？」

そう言われ、少し二人は考え込み、言葉を発した

「そうですね・・・治政の能臣であり、詩人でもあり・・・そして何より、乱世を生き抜く奸雄でもある人物だって噂です」

「治政の能臣、乱世の奸雄・・・か」

治政の能臣、乱世の奸雄・・・当然信長はこの言葉を知っていた。曹操をあらわす一番わかりやすい言葉である。まさか、この言葉をリアルタイムで聞く事になるとは・・・

「そうですね。あと・・・一点だけ分かっているのは、自分にも他者にも誇りを求めるとのこと・・・」

「クク・・・なかなか面白い人物よ」

「あら？そう言ってもらえると嬉しいわね」

突然、知らない声が聞こえた

「誰だ貴様！！」

愛紗が勢いよく声が聞こえたほうに振り向き、キツつとにらみつける。

「控えろ下郎！このお方こそ、我等の盟主、曹孟徳様だ！」

その睨みを睨み返したのは黒髪のチャイナドレス風の女性。彼女も愛紗を一点ににらみつけている。

「改めて名乗りましょう。我が名は曹操。官軍に請われ、黄巾党を征伐するために軍を率いて転戦している人間よ。そして彼が……」

「こ、こんにちわ」

そこには白い服に身を包んだ青年がいた。

「うわ……すごい。太陽に光を反射してるよこの着物……」

「確かに……これほど見事な着物は見たことがありません……」

桃香と愛紗は感嘆の声を漏らした。朱里や雛里、鈴々も例外でなく、ジーツと彼を見つめている。

信長でさえもその服は見た事がなかった。少し興味がそえられるが、自分が見ない分、他の者に見てもらおう。

信長は気を抜かずに曹操たち一向から目を離さない。いつ何がおき

てもいいように。

「そうでしょうね。なんせ彼は天の御使いなんだから」

「て！？天の御使い様――！！！！！？？？」

桃香たちはひたすら驚いた。しかし信長だけは決して驚きはしなかった。信長は自身がこの異世界にタイムスリップしているのだ。だから自分と同じ境遇にあっている人物は自分だけではないだろうと考えていた。

それはもちろん、異世界に来てしまうぐらいなのだから何がおきても不思議ではないと。時間を越えてくるものもいてもおかしくないだろうと考えていた。

「こ、こんにちわ。私は劉備って言います」

桃香がペコッと頭を下げた挨拶をする。

「りゅ、劉備！？君が……。あ、俺は北郷一刀。一応天の御使いってことになってるかな」

北郷は一度とても驚いた表情をし、彼も挨拶を返す。

「劉備。．．．いい名ね。貴方がこの軍を率いていたの？」

「え？それはその．．私が率いていたのじゃなくて、私たちのご主人様が」

「ご主人様あ？」

曹操と北郷が不思議な顔を桃香に向ける。

「はい。えと．．」

「ワシがこの織田の指揮者。織田信長よ」

「織田．．信長．．聞いたことある名ね．．」

「華琳様。最近幽州を中心に黄巾党征伐で名を上げている魔王と呼ばれるものではないかと」

「織田．．信長．．．．．」

北郷だけは難しい顔をしている。

「魔王・・・貴方がこの部隊を率いていたというわけね」

「うむ」

「織田・・・と言ったわね。あなたがこの乱世に乗り出したその目的は何？」

「ワシの望みは天下を平定することよ。天下布武を掲げこの地より戦乱を無くす。それがこの劉備の願いの手助けになるからな」

「劉備の・・・それは何？」

曹操は顔を桃香へと向け、その全てを図るような目で劉備を見つめる。

そんな目で見つめられ、桃香も姿勢を正すようにし、真剣に答えた。

「・・・私は、この大陸を、誰しものが笑顔で過ごせる平和な国にした
い」

「それがあなたの理想なのね」

「うん。そのためには誰にも負けない。負けたくないって。そう思ってる」

「・・・そう。分かったわ」

「ならば、劉備、織田よ。平和を乱す元凶である黄巾党を殲滅するため、今は私に力を貸しなさい。」

今の貴方たちには独力でこの黄巾の乱を鎮める力はないでしょう。ただ今は一刻も早く暴徒を鎮圧することこそが大事。・・・違うかしら?」

「その通りだと思う」

「それが分かっているのなら、私に協力をしなさい。・・・そう言っているの」

「え・・・でも」

桃香は信長の方へ視線を向ける。自分の一存では決められないと。

「うむ。構わぬ」

「あら。意外と物分りがいいみたいね」

「今は黄巾がこの大陸を支配しておる。そしてワシらは大陸で言えば名すら馳せてはいないだろう。ならばワシらが名を馳せるためには黄巾をつぶすしかない。ワシらの土台になってもらおう」

「あら？ずいぶんと自信があるのね」

「無論。黄巾程度で留まり、天下統一なぞ成しえるはずがないからな。そのためにうぬらの力を利用してもらうだけよ。そしてそれはうぬらも同じであろう、曹孟徳よ」

「ふふ・アーッハッハッハ！おもしろいじゃない。たかだか義勇兵風情の貴方たちがこの私たちの軍を利用してもらう？たいした事を言うものね」

「この乱世は弱肉強食を地でいっておる。ならば力こそがこの時代でものをいうことができるのだ！官軍であろうが力が無ければ所詮はただの弱者よ。」

今、天下の英雄は、ただ使君とこの信長のみぞ！..」

信長は曹操の目を一点も反らすことをなく射抜く

曹操もその目を反らすことなくただただ見つめ続けている

その二人のやりとりを一刀をはじめ、両軍の将たちはただ見ていることしか出来なかった。言葉をはつすることはできるがこの場の空気がそれをさせてくれなかった。

なにより二人から感じる王としての気、その圧力が誰をも寄せ付けない、なにもさせてくれなかった。
この私たちのやりとりを邪魔するなど。

「ふっ、本当にたいした自信ね。まだまだ兵も少なく、兵糧だって満足ではないでしょうに。」

でも貴方からはそれがただの口からのでまかせではないと感じることもできる。まあなにより貴方には実績があるしね。

では、共闘の件はお互いの軍師に任せましょうか。今日は私は下が

らせてもらっわ。

信長。貴方の實力、この戦いで見させてもらっわ。貴方の言、とくと見させてもらっわ。せいぜい口からのでまかせじゃないことを祈ってるわ。

春蘭、秋蘭、一刀。いくわよ」

曹操が帰ろうとしたとき・・・

「ちょっとまってくれ華琳。俺はもうちょっと残っていいかな？」

「・・・？まあいいわ。すぐに帰ってきなさい」

そして、曹操、夏侯惇、夏侯淵は先に自分の陣へ戻っていった

「なあ、貴方が本当にあの織田信長なのか？」

北郷は真剣な顔で信長へと詰め寄った。

「うぬがどの信長のことを申しているかわからぬがワシはワシでし

かない。織田信長よ」

「じゃあ・・・どうやってここへ？そしていつ来たんですか！本能寺の変はあつたんですか！？」

「ほう・・・本能寺を知っておるか。やはりうぬはワシの時代より先の未来からきたか」

「ええ、そうです！俺は・・・信長さんの時代の約四百年後から来た。だから知ってるんだ・・・この三国志を、そして信長さんの戦つてきた桶狭間や長篠でどんな風にして勝つたのかも！

・・・信長さん。貴方はどうやってここへ？」

「ふむ。ワシもよくは知らぬが本能寺で光がワシの元に現れその中に光の道があつたのだ。そしてその光に導かれワシは気づけばこの地で眠つておつた」

「そうなのか・・・光に導かれて・・・だから本能寺で貴方の死体がみつからなかったのか？」

俺は・・・本当に・・・気づけばここにいたんだ・・・。信長さん、貴

方は帰りたいて思わないんですか？」

「思わぬ」

「どうして!？」

「元よりワシには日ノ本にすでに居場所がない。そしてワシはもう日ノ本の亡霊に過ぎぬ。あれよりキンカンやサル。新しき役者の出番よ。ワシの余興は終わったのだ。」

恐らく、ワシが死した後にサルあたりが天下をとるだろうな。あやつには才がある。兵や将の心を掴むのがワシより上手いからな。それが家康であろうな。だがあやつは少々臆病なところがある。だが部下は有能である。」

もともと天下に近きはあの二人よ」

信長は空を見上げそう一刀に話した。

「そつか・・余興は終わり・・か。貴方は確かに天下の半分を占めた。あのまま死ななかつたら確実に天下を取ってた!満足したとはいえないけどそれなりにやることはやったんですよね!

でも・・俺はまだ何もしてないんだ!!!貴方みたいに俺はなににも

あの時代に残していない！残したのは精々後悔ぐらいさ！！こんなことならもっと毎日を必死に生きてりゃよかったってな・・

もつと・・・真剣に生きてれば良かったって・・・」

北郷は悔しそうな顔で、握りこぶしを作り、うつむいている。そんな彼を見た信長は・・

「ならばこの地で真剣に生きればよい」

「え？」

北郷が顔を上げた

「今更悔やんだところで何も答えは出ぬ。後悔は過ぎてからするものよ。何か起こる前に後悔はすることは出来ぬ。そして、うぬはその様子から帰る方法が分かっておらぬと見える。

ならばすることは一つ。この地でうぬが満足することを見つけ、そしてそれを成しえることよ。

また帰れるとは言えぬがもし帰れたとき、恐らくうぬは日ノ本に戻ったとき同じ事を後悔するだけよ。今は諦めよ。そしてうぬは真剣

に生きればよかったと答えを見つけているではないか。

ならば何故それをせぬ？いつまで恐れておるのだ！答えを見つけておるなら実行せよ！天の御使いよ！」

信長は一刀に非常に残念な、失望したかのような目を向けた。

「（これが・・・天の御使いであるか・・・桃香たちの話ではこの乱世を終結に導く者といっておったが・・・）」

「・・・。そつか・・・そうだな！！ああ！わかった！！まだ・・・あんまり心の整理は付いてないけどさ。俺は真剣にこの世界に向き合ってみるよー！」

一刀はどうやら元気を取り戻したようだ

「じゃあありがとう！信長さん！劉備さん！」

一刀は自分の陣へと戻っていった

「クク・・桃香よ。うぬらの求めておった天の御使いが見つかったぞ。ワシの元を離れていつでも構わぬ」

「え？うくん・・・もうそんなの関係ないよ」だって、私にとっての天の御使い様はご主人様だから」

「はい！桃香様のおっしゃるとおりです。確かに彼の服や、元の世界のご主人様を知っている様子から天の世界よりこられたことがわかりますが・・

やはり私にはご主人様がこの乱世を終わらせてくれるお人だと思っております！！」

「鈴々もなのだー！！お兄ちゃんがきつとこんな大陸をすごいやすくしてくれると思ってるのだー！」

「私もです。ご主人様はあの今、破竹の勢いの曹操にすこしもひけを取らずに話、そして曹操をも納得させました。そんな事ができるのは大陸広しと言えどもご主人様ぐらいでしょう。ね、雛里ちゃん」

「そうです。そして実際に戦いを経験し、私もご主人様の戦略眼や、武勇に触れて、この乱世を集結させるに足る実力をもっていると確信しました。天の御使い様が現れようが、私は朱里ちゃんと一緒にご主人様にお仕えします」

「そうか。ならばこの信長にこれからも仕え、存分にうぬらの実力を発揮せよ。それがこの乱世を集結させ、平和への近道となろうぞ」

「はい！……！！……！！」

魔王と霸王（後書き）

今、天下の英雄は、ただ使君しくんと操とのみ。

ちよつとこの名言を使わせてもらいました。

曹操が劉備いった言葉です。

実はこのあとに 本初の徒、数うるに足らず と続きます。
袁紹なんてとるにたらないってことです。

共同戦線

信長たちはこれから曹操と共同戦線を張り、黄巾の部隊と戦うことになった。

その際、曹操から兵糧、武具、兵を少し借りることを許され織田軍の兵は一万二千にまで達した。

早速軍議を開始する。まずは朱里が話し始めた。

「荀？さんから提供された情報によると、今から対峙する相手は黄巾党の中心部隊だそうです。しかしながら兵数はそれほど多くありません」

「あれ？中心部隊なのに兵隊さんが少ないの？」

桃香が首をかしげ、まず思った疑問をぶつけた。

「今、あそこには黄巾党の中心人物である張角、張宝、張染の三人がいないみたいなんです」

「ふむ・・・主力部隊は出払っておる・・・か。ならば曹操の狙いは兵糧か」

「はい。数では黄巾党が圧倒しております。兵力のみでの戦争をしていては負けは自明の理です」

「極力兵力を減らさず、黄巾党に痛恨の一撃を与えられるには補給を断つことが一番です」

「ふむ・・・しかし曹操はどのようにして、主力の不在を偵知できたのでしょうか」

愛紗もそこで疑問に思ったのだろう。その疑問を声に出す。

「恐らくは買収よ。黄巾は所詮賊どもの集まり。金は奴らが一番欲するものぞ」

「お金で情報を漏らすなんて最低なのだ!!」

鈴々がうがーッと声が出そうな勢いで声を荒げた

「だがそのおかげで敵を突く好機を得られたのだ。買収も有効な策の一つぞ」

「それはそうだね。・・・釈然としないけど」

桃香も分かっているのだろう。今がどのような時代か・・・

話し合っている最中、曹操軍からの伝令兵が近づいてきた

「織田軍は横隊を組み、号令と共に敵陣に向けて突撃せよ。我らは後方より弓による援護の後、すぐに後を追う！」

「ほう・・・ワシらを囷にする・・・か。して曹操は何を考えておる」

「まず織田軍に敵の目を引き付けておいてもらい、その隙に特殊部隊を潜入させ、備蓄されている兵糧を焼くのです。そうすれば敵は混乱に陥るでしょう。その混乱に乗じ、総攻撃をかけるとのことです！」

「なぜ兵力が少ない私たちがそのような役目なのだ！曹操殿たちの兵はよく訓練されており、私たちがやるよりも適任ではないか！」

愛紗が曹操軍の兵に詰め寄って抗議する。しかし、朱里が愛紗の前にたち、残念そうな声を漏らす・・・

「組織としての力の差がありますから・・・」

「あちらは組織化された軍隊で、こちらは義勇兵の集まりというこ

とか？」

その言葉に愛紗も力なく答える。

「有り体に言えば・・・」

雛里の言葉に愛紗は完全に黙ってしまった。これが今の自分たちなのかと。

「クク・・・これが義勇軍と軍隊との力の差か。よかろう。囹の役はワシらに任せよと曹操に伝えい」

「はっ！」

「そして、この代償はいつか返すとも・・・な」

「は？」

「ご、ご主人様・・・？」

桃香も曹操軍の兵も言葉を失った。

「曹操も気づいておるだろう。この乱世、群雄割拠の時代が訪れるということをな。そして曹操は馴れ合いでの天下を望むとも思えぬ。ならばあやつは全てを食らわねば気にすまぬ。」

「・・・無論、この信長おも・・・な。そしてその時にこの力を返す。そう伝えよ」

「わ、わかりました!!」

そして伝令兵は自分の陣へと帰っていった

「ご主人様!!何を考えておられるのですか!!まだ私たちは独立すらできていないのですよ。なのに、もうこの段階で挑発し、敵をつくるのですか!!」

愛紗が早速信長へと詰め寄った。その声色は少し怒気を含んでいる。

「ならばこの黄巾の乱を使い、ワシらが独立するまでよ。この乱が収まるまでは曹操もワシらを狙ってはこぬ。ワシらは義勇軍であり、今、ワシらが争えば誇りや、風評を重視する曹操は周りの諸侯から軽視されるからな」

「し、しかし何もわざわざ挑発しなくても・・・」

「クク・・なに、ただの戯れよ。ワシらはいつの日か、争う運命。しからばこれは早めの宣戦布告ぞ」

「宣戦布告ですか・・。とりあえず今はこの戦を終結させましょう。ではご主人様。私と鈴々は前曲を率います」

「うむ。しかと励めい」

「鈴々は無敵だから大丈夫なのだ！」

そついい、愛紗と鈴々は前曲へと、向かって走っていった。

「うむ。桃香、雛里、朱里！うぬらは本陣を守っておくのだ！ワシは別働隊を率い、戦況を見極め、敵の後方より奇襲を仕掛ける！」

「はわわ！ご、ご主人様、いけません！ご主人様も本陣で控えてください！！」

信長の言葉に朱里も雛里も必死で止める。

「ならぬ！今のワシらは一兵たりとも無駄に死なすわけにはいかぬ。ワシ自らが奇襲部隊を指揮し、敵の戦線を崩す。愛紗、鈴々、曹操の援護があれば負けはせぬが戦闘をより有利に運び、ワシらの損害を減らさねばならぬのだ！」

「確かに、別働隊による奇襲は効果的ですが・・・」

「朱里ちゃん。ご主人様を信じよう。ご主人様は一人でも死ぬ人を減らしたいって言ってるんだよ。それに・・・ご主人様は私たちのご主人様なんだから！きつと・・・うまくやってくれるよ」

桃香は信長の性格をだんだん理解していた。そして桃香は信長を信じている。

絶対の信頼を寄せているのだ。

信長が大丈夫といったならば大丈夫なのだ。だから自分たちはその言葉を信じて待っていれば良いのだ。

桃香はやさしく、朱里と雛里へ告げる。

「はあ・・・確かにただでさえ我が軍は敵と正面からぶつかり、兵の被害が大きいですね。今後の事を考えると一兵たりとも無駄にはできません。わかりました。ご主人様、どうかご武運を」

「うむ」

そして、信長は千人の奇襲部隊を率いて陣を出立していった。

前曲部隊では激しい戦闘が行われていた。黄巾党約二万人に対し、こちらは義勇軍一万一千。後方の曹操軍は五千人による援護射撃。

「うおおおおあー！！！！！！」

「死ねやこらあああ！！」

そこでは激しい戦闘が行われていた。武器と武器、力と力のぶつかり合い。

愛紗も鈴々もそこで己の武を振っていた。

「たかだが賊と言えども、二万という数は少々気圧されるな」

愛紗も人間であり疲れる。当然気落ちだっただけなのだが、その愛紗をたしなめるものがいた。

「何言ってるのだ愛紗！鈴々たちはこれからもっともっと大きくなつてくのだ！！だからこれぐらいで気持ちで押されちゃだめなのだ！」

「鈴々……。お前も日々成長しているのだな。ああ！その通りだ！ご主人様は天下を平定されるとおっしゃられている。」

きつと、これから先は何十万という兵を指揮されるだろう。私たちもこんなところで立ち止まってはられないな！！」

「そうなのだー！！うりゃうりゃうりゃー！！！」

「ぐああああー！！！」

「ぎゃああああー！！！」

鈴々が自慢の蛇矛を振り敵兵をなぎ倒す

「ふ、相変わらずお前は力任せだな」

「死ねや女あああー！！！！！！！」

「失せろ下郎が!!」

愛紗が敵の槍を自慢の青龍堰月刀で防ぎ、敵の首を切り落とす

「さあかかってこい!! 織田が一の家臣!! 関雲長とは私のことだ!! 貴様らの命! 悪行もろとも吹き飛ばしてくれる!! でえやああああー!!」

「にやははー! 愛紗も力任せなのだー!」

そして……

「見てください桃香様!! 黄巾党の陣地から黒煙が上がりましたよ!!」

朱里が桃香へとそう告げた。

「クク・・・時は来た・・・か」

そして、この男もそれを見逃さなかった。

「お・・・おい！！俺たちの陣から煙が上がってるぞ！！！」

「あ、あそこは・・・飯だ！！俺たちの飯が！！」

「な・・・マジかよ・・・」

「おいおい、どうすんだよ！！今日は何が食えるんだよ！！」

「うるせえ俺に聞くな！！てめえは砂でも食ってる！！！」

「お、おい、待て！！あれは・・・あれはなんだ・・・・・・・・・・で、敵だーーーー！！！」

「者共！敵は動揺しておる！！ここでワシらの奇襲により、敵をさらに混乱させる！！ワシに続けえい！」

信長が兵糧庫の襲撃に合わせ、敵の後方より奇襲をしかける

朱里はこの好機を逃さないように桃香へと告げる。

「桃香様。ここで全軍に突撃の命令を出しましょう」

「うん！伝令さん。全軍に突撃命令を出します。頼みますね！」

「御意！！」

朱里はここで自慢の統率力を発揮する。軍師たるものの兵を指揮し、絶妙なタイミングで兵を動かさなければならないのだ。

「私たちは前曲の部隊と合流後、桃香様は雛里ちゃんを連れて、敵を追撃してください。私はご主人様との合流を目指し、敵を一直線に攻撃します！それでは皆さん！全速前進！」

「応!!」

「桃香様!!」

「お姉ちゃん!」

桃香と愛紗、鈴々は合流したようだ。
だが、まだ喜んではいられない。戦は終わっていないのだ。

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、お疲れ様♪」と、私は敵さんの追撃に行かなきゃいけないんだった。行ってくるね」

「なっ、私もお供します」

「ううん、愛紗ちゃんは前曲で疲れてるんだからここで休んでて。私は大丈夫だよ。雛里ちゃんだっているし♪」

「はい。追撃の指揮はお任せください」

「そうですか・・確かに敵も投降するものが増えてきました。そして、戦う意思ももうほとんどないようですね。わかりました。どうかお気をつけて」

「ご主人様!!」

「朱里か。見事な判断ぞ」

「はい。曹操さんの部隊がうまく合わせてくれて敵を包囲できました。その際、敵が死兵にならないように逃げれるよう一箇所空けてあります」

「ふむ。敵の軍師もなかなかやりおる。そして、朱里お主もな。お互い打ち合わせをせずに包囲を築いたか」

「はい。ですが、これは曹操さんの軍は兵も指揮も将も軍師も優秀であることを表し・・私たちはそれを身をもって知ったわけであり・

」

「ふむ・・・強敵・・・ぞ」

「華琳様。劉備の部隊が追撃を行うようです」

「この戦況ならば当然でしょう。我らもこの機に乗ずる。春蘭、秋蘭。下郎どもを皆殺しにしておしまいなさい」

「御意」

「さて・・・桂花。織田軍をあなたはどう見る？」

「今はまだ弱小勢力ですが、仕える将はどれも一角のもの。また人氣も集まっているようですし・・・眠れる龍といったところでしょいか。」

そして、織田信長・・・あの者の戦略眼は飛びぬけています。そして統率力、武勇、知略。どれもまさに非凡」

「ふむ・・・あなたが男を高く評価するなんてね。まあそれも仕方ないか。」

巨竜が死に体の今、新しき龍が目覚める・・・か。この動乱の行く末、楽しみになったわね」

「楽しみ・・・ですか？」

「ええ。困難無き霸道になど、意味はないでしょう？障害無き霸道を邁進するよりも、難敵が待ち受ける茨の道を行く。」

それでこそ、霸道に臨む張り合いが出るというものよ。

そしてあの、男も群雄割拠が訪れることを予知している。そして、彼に力をいつか返すとも言われたのよ。ふふ・・・彼らの今の状況でよくそんなことが言えるわね。

たいしたものだわ、おもしろい。織田はいつか必ずこの天下に名を轟かせる大物になるでしょう。そして彼も私と戦うことを臨んでいる。これが楽しみといわず、何と言つかしら」

「さすがです華琳様・・・そのお志の高さ、感服いたしました」

「ふふっ、感服なんてしないで、ただ感じてくれば良いのよ」

「ああ・・・華琳様あ・・・」

平原の相

信長と曹操の共同戦線が終わり、曹操は他の地で暴れている黄巾党を滅ぼすため彼らとはここで別れた。

そして、信長たちもこの幽州で跋扈する黄巾党の小部隊を撃破する日々が続き、その成果が出ているからか、黄巾党の勢いが確実に萎えてきていた。

その時を待っていた、と言わんばかりに今まで頑なに動かなかった各地の諸侯が重い腰をついに上げ、彼らも黄巾党の殲滅に乗り出した。

そして、半年の日々が流れる・・・

その知らせは、大陸中に衝撃を与えた。

大賢良師 張角死す。

張角の死により、黄巾党は一気に勢いを無くし、今まで横暴を働い

ていた者たちも、黄巾を頭から外し、ただの農民の振りをする者まで出始めたのだ。

投降するものや、離脱するもの、戦ってもはや士気はガタ落ちであり、まともな戦いにもならず、圧倒的に殲滅されるだけとなった。

そして、長きにわたった黄巾の乱は幕を閉じたのである。

信長たちは乱鎮圧の恩賞として平原の相に任命された

信長は早速、政務に力を注いだ。もともと彼は大名であり、政務などを行っていたために特に問題はなかった。あるとすれば日ノ本とこの地での文化や基本となる政策の違いだろうか。

信長は徹底的に治安に力を注いだ。

夜の警邏は特に重点的にし、夜でも人が出歩けるような安全な街を徹底して作ることを目標にし、今は政策をしている。

当然朱里からは夜に回す、警備の者たちの給金はどうするのかと言われたが、

「ならばワシの給金を回せい、夜に民が出歩けるほど安全な街と商人たちに広まれば人がこぞってこの街に集まり、そして住みたがる。

そうなければワシの給金なぞいくらでも返ってくる」

と、朱里に述べ、しぶしぶだが朱里は了解した。

その他にも、警備隊の者たちにはゴミを入れるカゴを持たせ、ゴミを拾いながら警邏をさせた。

少しでも、街にあふれるゴミを少なくすることで、他の街から流れてくる商人や民にこの街への関心を高めてもらうのだ。

その他に最大の狙いとして街の衛生面を上げること、この街の感染症や疫病、病気をすこしでも減らさなければいけなかったからだ。

信長はこの時代の医療レベルを知って驚いた。信長の時代も一刀よりも各段に劣るのだが、この時代よりも良かったのだ。

信長には医療の知識はない。精々、戦での応急処置程度でしかないのだが、戦での応急処置は愛紗たちでも知っているため、たいして変わらない。

だから、少しでもこの街の衛生面を良くし、病気を減らすことに勤めた。

信長には暇などないが、信長は少しでも自分の時代の街との違いを理解し、どのような政策が一番いいのかを考えるため、よく自分で街へと足を運び改善すべき箇所を考えた。

「食べ物を出す店の周りに、屋台を密集させるでない。火は一気に燃え広がり店内の客が全員死ぬぞ。至急ばらけさせるのだ」

「ふむ。飲食店が多いが・・・まだ娯楽の類の店が少ない・・・か。まだそこまで余裕が無いと言うことか」

「警備隊の人員は・・・」

信長は街へよく足を運び、自分の時代との照らし合わせのために通い、政策を考えているだけなのだが民からしたらそのような事は知らない。

「お、旦那！今日もご苦労だねえ。頑張ってくれよ」

「あの・・・よく私たちのために自ら見回りして頂きありがとうございます」

信長の知らないところで、自然と民からの人気は高まっていた。それは魔王と呼ばれる人間が、民のために頻繁に足を運び自らこの街を警備しているとのギャップもあるのかもしれない。

その事に桃香たち家臣は全員が喜んだ。あの戦場での鬼神の如き戦働きを見て、信じられなかったが、街の警邏大好きな桃香が民から直接聞いたのだ。最初は信じられなかったが、愛紗も同じ事を聞いているからその通りなのだろう。

朱里や雛里は信長の政務の手腕にも驚かされた。桃香もやるのだが桃香はその量にすぐに根を上げたが信長はこの程度容易いともいうかのように着々とこなす。

信長は日ノ本の半分近くをしめており、当然その量も今の比ではなかった。そして作業スピードや効率もよかった。

そのことにただただ朱里と雛里は驚いた。自分たちの主はやはりただ者ではなかったと。

そしてここに、また新たな仲間が現れた。

「久しぶりですな」

「うむ。星か・しばらくだな」

「星ちゃん♪久しぶり♪」

「星なのだー！」

「星、久しぶりだな。白蓮殿の所にいたのではないのか？」

以前星とあったことのあるものは再開を喜んだ。
桃香は星と握手までしている。

「うむ。白蓮殿から暇をもらい、しばらく様々な諸侯の下で客將をしておつてな」

「うぬは自分が仕える主を探しているのだつたな」

「ええ。その通りですぞ」

「それでうぬの目に適う諸侯はおったのか？」

信長は星へとその質問をする。ずっと聞きたかったのだ。信長にとって星はどうしても欲しい将であったのだ。

「そうですね・・やはりただの凡愚とでもいえる諸侯もいましたな。しかし、候補が三つほどありますな」

「へゝ三つかゝ。っで、星ちゃん。どこどこ？」

桃香は急かすように手をパタパタさせている。

「一つは曹操殿ですな。あそこは兵力、財力、兵の質。どれをとってもすばらしかったですな」

「やはり曹操か」

「しかしあそこは、どうも百合百合しい。私はそのような趣味はござらん。ですからあそこは却下ですな」

「お姉ちゃん。百合百合しいってなんなのだ？」

鈴々はあどけない表情でその質問を桃香へと投げかけた。しかし、桃香は困ったような表情をしている。

「り、鈴々ちゃんはまだ知らなくていいかな。あはは・・・」

「ふむ。女同士でちよめちよめすることだぞ鈴々」

「ちょ！星！鈴々に変な知識を吹き込むんじゃない！」

「っはっはっは。いつか鈴々も知るのだ。遅かれ早かれ知るのなら早い方がよいではないか」

せつかく桃香がはぐらかせたのに、星はただおもしろいからと笑いながら話す。

「星。もう一つの諸侯を述べよ」

星が再び表情を正し、話の続きをはじめた。

「おっと、そうですね。あと一つは孫策もよいですね」

「江東の麒麟児・・・の孫伯符か。っで、星。おぬしからみてそこはどうだった？」

愛紗は星に孫策。呉のことについて聞いた

「ふむ。あそこは今は袁術により、分散されておるが、もし集結したら曹操に匹敵するであろうな。部下も非常に優秀だ。軍師の周瑜の才は曹操の所の荀？よりも上ではないかと私は思っておる。」

だがあそこは少々排他的な所があるのだ。あそこで仕えたとしても私の腕を存分に震えろとは思えぬ」

「ふむ。・・・して最後の一つはどこぞ」

「ふふ。分かっておられるでしょう信長殿」

星がふふつと笑みを浮かべながら信長の目を見る。

「え？え？ひょつとして・・・私たち？」

桃香は混乱したような表情で星へとたずねた。

「ええ。その通りです。信長殿。貴殿たちの評判は今一番鰻上りでしょう。黄巾での活躍、そしてこの街の治安の事も、商人たちがよく噂しておられる。」

貴方たちはいつか必ず他の二人に匹敵するほどの諸侯へとなれるでしょう。

そして・・・この趙子龍。貴方にかけてみたくなった。この槍を貴殿の天下への手助けに使っていただきたい」

「星・・・」

「星ちゃん・・・」

星は信長に片膝を突き、槍を信長へささげるような姿勢をとる。

「うむ。面を上げよ」

「はっ」

星はゆっくりと顔を上げ、信長へと視線を向ける。

「天下への道は厳しい。それでもうぬはこのワシの首を守りきれるか」

「はっ！我が身命を賭して貴方様の命をお守りし、必ずや天下へ駆

け上らせてみせます！」

「よかるう！趙子龍よ！ワシのために存分に働けい！」

「はい！ありがたき幸せ！」

「星！これから一緒にお前と手合わせができるのだな！」

愛紗は大変喜んだ。星とは何か通じ合えるものがあるのだろう。

「鈴々もなのだー！」

「ああ。ともに働こう。主！」

「・・・主？」

「ええ。愛紗たちが貴方をご主人様と呼んでいるではありませんか。ならば私の主ですぞ」

「構わぬ。好きに呼ぶがよい」

「っはっはっは。主はあまりこう呼ばれるのが好きではないように」

「そんなことないよね〜ご主人様♪」

「ふっ、朱里、雛里。うぬらは初対面であろう」

「ぶ〜ぶ〜、ご主人様話を逸らした〜」

桃香は頬を膨らませ、ジト目で信長を見る。

「はわわ！そうでした！」

「あわわ・・・」

「おお。このちびっこたちは確かに初対面ですな。私は趙雲。字は子龍。真名は星。これからよろしく頼むぞ」

こうして信長に頼もしい仲間がまた一人増えたのであった

反董卓連合

信長たちが内政に力を注ぎ、今までとは違う新たな仕事に奔走しているころ、この大陸の運命を変える大きな出来事が起こった。

漢の皇帝、霊帝の死である。

霊帝の死後、朝廷内では権力争いが勃発。

最終的には董卓が献帝と名乗った劉協を傀儡とし、自らを相国という位に付き、朝廷内を牛耳った。

そして、第二の権力闘争が開始される。

反董卓連合の檄文が各地で割拠する諸侯に飛んだのである。

信長たちにも袁紹からの要請が届いた。

信長たちは大広間に集まり、袁紹から届いた手紙を皆に回しながらこれからの方針を相談する。

そして、桃香が怒ったような声で第一声を発した。

「当然参戦だよ！董卓さんって長安の人に重税を課してるって噂を聞くし！そんな人を天子様の傍に置いておくなんて言語道断だよ！」

それに続き愛紗、鈴々も声を発した

「桃香様の仰る通り！力無き民に代わり、暴悪な為政者に正義の鉄槌を食らわさねば！」

「悪い奴は鈴々がぶっ飛ばしてやるのだ」

桃香、愛紗、鈴々はもとも力なき民の為に立ち上がったのである。このような情報を聞いて黙ってられる筈も無く、今すぐにでも出撃しそうな勢いである。

そのような様子を黙って信長は見ていた。そして、残りの三人にこう問いかける

「星、朱里、雛里、うぬらの意見を聞こう・・・ぞ」

そう言われ星が最初に声を発した。

「ふむ。確かに桃香さまや愛紗たちが言うことも尤もですが・・・」

「なんだ。星は反対だともいうのか？」

愛紗が少し怒気を含んだ声で星を睨む

「そうではない。ただな。少し気になるのだ」

「この手紙の内容・・・ですか？」

朱里が顎に手を当て、星へと問いかける

「軍師殿も同じか？」

「はい。敵対勢力について書かれているとはいえ、あまりに一方的すぎるかと・・・」

「一方的？？どういうことなのだ？」

朱里が少しうつむき加減で難しそうに答え、鈴々はよくわからないという顔で朱里に意味を請うように言った

「董卓さんは悪い奴。だからみんなで倒そう。とても分かりやすく

書かれていますけど、この手紙はそんな単純なものでは無いと思うんです」

「これは諸侯の権力争い。・・抜け駆けして朝廷を手中に収めた董卓さんへの諸侯の嫉妬が、このような形で現れたと見るべきです」

朱里が鈴々の質問の意味を答え、朱里を補佐するように雛里が答える。

「うー・・そんなに複雑に考えなくちゃならないのかなあ。今、董卓さんに苦しめられている人たちがいるってことだけで十分だと思うんだけど」

「董卓の圧政に皆が苦しんでいる。・・それが本当ならば桃香様の仰ることも尤もなんですけど・・」

「それは嘘の可能性があるということか？」

愛紗が少し怒気を含んだ質問を朱里へと投げる

「嘘と言えるかどうかは分かりませんが、逆にどこまでが本当なのか。その辺りを見極めなければならぬかと・・」

「あう・・・我々はすでに流浪の義勇軍では無く、一つの地域を支配する侯ですから・・・」

「それに、すでに漢王朝に崩壊の兆しが見えている以上、先のことを見据え動かなければ私たちのような弱小勢力はあつという間に大きな諸侯に飲み込まれてしまいます」

「・・・自分たちの理想を実現するためにも、その理想を客観的に見つつ、実現するために現実的な考え方をしろ。そういうことか」

朱里と雛里の現実的な答えに、愛紗は俯き、悔しそうな表情を浮かべ、理想と現実のギャップに悩みながらそう話す。
だが愛紗は再び目に光を灯し

「例え圧政の確たる証拠がないにしても、苦しむ庶人ががいる可能性があるのならば、私はその人たちを助けに行きたい！」

「・・・私とて本心ではそうなのだがな。・・・さて、どうする、主」

星が今まで腕組をしながら黙って様子を見ている信長へと、答えを求めた。皆の意見は出揃った。そんな意味を含めた表情で信長を見つめ口を閉じる。

そして、残りの者たちも自然に信長へと顔を向ける。

「桃香」

「な、なに？ご主人様？」

信長の突然の問いかけに困惑気味の表情で返事をする桃香。信長は真剣な目で桃香を見つめる。

「うぬはもし、この戦で董卓たちが圧政をしておらず、その董卓を桃香。うぬが討った場合どうする？」

「え？」

「仮に、何もしておらず、良き為政者であり、そしてただの権力争いに飲み込まれ、無念のまま討たれる董卓の死体を踏みつけ、それで本当にこれで平和になったとうぬは笑って申せるか？愛紗、うぬの理想もこれで実現するか？」

「そ、それは・・・」

「・・・・・・」

愛紗は信長の突然の問いかけに困惑気味にうつろたえ、桃香は黙って唇を噛みながら下を向いて悩んでいる。

「ふむ。・・・まずは情報の重要性について述べる。この時代、情報を制する者が天下を取ると言っても過言ではない。朱里、雛里。この一件が終わらぬうちから細作のさらなる向上を目指すため資金を回せ」

「は、はい！」

「それでも・・・」

黙っていた桃香が顔を上げ、突然言葉を発した

「それでも私はやっぱり参戦したい！黙ってみているなんて私にはできないよ！！

本当に圧政をしているなんてわからないなら、しているかもしれない！ううん！違う！噂があるならしている可能性のほうが高い！

もし、していなかったら・・・私は董卓さんを助けたい！！私は全ての人々が笑える世を作りたいんだもん！！
この大陸で苦しんでいる人がいない平和な世を作りたいんだから！目の前で苦しんでいる民が、董卓さん。

そのどちらかを見殺しになんて私はできない！したくない！！」

桃香が真剣な表情で、精一杯の力を言葉に込め、信長へと伝える。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

信長と桃香。二人は一切目をそらすことなく真剣にお互いの目を見つめる。

他の者たちはこの場の空気に吞まれてか一切言葉を発しない。黙って二人の成り行きを見守っている

「・・・ふむ。ならばしかとこの戦を目に焼きつけ、真実を知り、うぬの理想の実現への糧とせよ。

朱里、雛里。最悪の事態を回避するために、うぬらはあらゆる想定を仮定し、策を用意しておくのだ」

「分かりました！」

「・・・・（コクコク）」

「ご主人様・・・」

桃香は驚いたような表情からだんだんと満面の笑みへと変わっていき、

「うん！ご主人様の言うとおり、準備万端整えておけば、どんなことがあっても平気だって！ね？愛紗ちゃん！」

「はい。我が青龍刀は、弱き者を守るためのもの。圧政に苦しむ庶人がいるかもしれないのなら、この目で確かめ、そして正義の刃を振りたい・・・」

「鈴々もなのだー！！」

もともとこの連合に乗り気だった三人は、もはや笑顔で顔を見合わせ話し合っている

「星。うぬらはどうじゃ？」

「ふつ、私とて、苦しんでいるかもしれない民草がいるのなら助きたいという気持ちは愛紗らと同じ。困っている者の為に槍を震えるならば腕がなるといふもの」

「私たちだって同じです。困っている人がいるのなら助けたい。当然のことです」

「わ、私もです・・・」

「なんだ？お主たちも結局同じなのではないか」

星や朱里、雛里も結局同じ意見だったということもあり、愛紗は拍子抜けな表情で星に詰め寄る

「ふむ。理想に猛進しすぎる人間がいる以上、誰かが制動をかけなければ、その集団は暴走し、やがては自滅することになる。お主たちは特に理想への猛進がすぎる」

「見えていない事象に注意を喚起するために、反対意見を提起するのは軍師の役目でもありますから」

「うつ、お前たちからしたら、私たちはそう見えるのか・・・」

星たちの意見に愛紗は少し方を落とす。自分たちは猛進する猪のように見えるのかと。

「とりあえず方針は決まった。ワシらは反董卓連合に参加する！各自準備に奔走せよ！」

信長はその場にいる全員に対し、この連合への参加を表明した

（さて・・・この三国の英雄たちはどのような者たち・・・ぞ）

信長はひそかに楽しみにしていた。

本心ではこの後起こる群雄割拠に対し、まだ貧乏な織田軍の地盤を固めるために不参加に気持ちが悪く傾いていたが、やはりこの三国志を知るものならば誰もが知っているこの戦いに参加したかった。

そして、たくさんの諸侯が集まるこの連合に参加すれば袁紹や袁術、本来ならば孫堅などたくさんの英雄が一同に介する良い機会なのだ。是非会ってみたいと思ったのだ。

そして、桃香。彼女には熱い理想がある。この大きな大戦に参加させ彼女をもつと成長させたいと信長は思った。磨けば光る良い逸材。諸侯たちによる権力争いが勃発し、この連合自体も権力争いの延長。そんな者たちが多い中彼女は一つもぶれることなく民の為に戦う女。彼女にもつと乱世を経験させ、この世の全てを学ばせ、成長させたいと感じた。

ついでに信長の時代の忍び、忍者は非常に優秀である。だがこの時

代ではまだまだであつた。よき忍びを作るために訓練資金を回した
かったが朱里たちは納得してくれなかった。しかし場の流れのお陰
で上手い具合に納得させることが出来た。

軍議

信長たち一向は出撃準備を整え、平原を経った。

そして、反董卓連合が集まる合流地点へと到着したのであった

その場所には至る所に天幕が張られ、その周辺には諸侯の旗が所狭しと並び、色とりどりの軍装に身を固めた兵士たちがそこらじゅうを歩いている。

「主。恐らくあの陣地中央の大天幕の位置になびく旗が、河北の雄、袁紹の旗ですな」

「で、あるか」

「その横に荊州・南陽の太守にして、袁紹の従妹にあたる袁術の旗です」

星に続くように愛紗は指を刺し袁術の旗を信長に教えるように説明した。

「その奥には・・・江東の麒麟児、孫策さんの旗も見えますね」

「西涼の馬騰さんや官軍に所属していた方の旗もいくつか見受けら

れますね」

「あ！あっちにあるのは白蓮ちゃんの旗だー！」

雛里、朱里も信長に対し、旗の説明をするなか緊張感もなく桃香は親友白蓮の旗を見つけ喜んでいた

「ふむ・・曹操も必ずや来ておろう。曹操に孫策。英雄にして英傑。そして袁紹に袁術の良き噂は聞かぬが、財力や兵力は脅威である」

「確かにそうですね。私たちはまだ財力も兵力もこの諸侯の中で一番最下層でしょう」

「しかし、最下層だからこそ、期待されておらず、なにか功績を残せばその分名が上がりやすいでしょう」

信長の一言に、朱里と雛里はそれぞれの考えを話す。そしてそこに金色の軍装をした兵士が声をかけてきた

「長い行軍、お疲れ様でした！貴殿のお名前をお聞かせくださいますでしょうか！」

「平原の相、織田上総介信長である。連合の総大将へ取次ぎ願う」

「は！しかし恐れながら現在、連合の総大将は決まっておらぬのです・・・」

「なに？総大将がまだ決まっていらないと？」

兵士の一言に愛紗は驚きと困惑の声を上げた

「では・・・この場所に駐屯したい何をしているのだ？」

星がさらに、愛紗に続くように兵士に問いかけると・・・

「総大将を決める軍議をしているのさ」

「白蓮ちゃん！！」

後ろから懐かしい声が聞こえ、桃香が振り向くと、そこには白蓮が笑顔で手を振りながらこつちを見ている。

桃香は嬉しさのあまり、白蓮に向かって走り、抱きついた。

「よ、桃香。久しぶりだなあ」

「お久しぶりだねー」元氣だった？」

「おかげで無病息災さ。おっ・・、星じゃないか。久しぶりだな。元氣にしてたか？」

白蓮は桃香を体から引き離し、今度はかつての客将だった星へと話をふる

「ええ。あれからあちこち放浪し、今は信長様、桃香様の下にお仕えしております。伯珪殿もお元氣そうで何よりですな」

「まあ、お前が抜けた穴を埋めるのは大変だったけどな」

「おお、嫌味を言われるなどは、伯珪殿も成長なされたようですなあ」

「うるさい、ば〜か」

二人の口調はお互いを馬鹿にしているようだが、二人とも微笑みを浮かべており、どちらも楽しそうであった。二人の間には友情が垣間見えるようだ。

「ところで・・・まだ総大将が決まっていなと聞いたのですが・・・」

「ああ・・・残念ながら事実だ」

愛紗が、そして皆が気になっていたことを白蓮へと聞いた。

「どうということなんでしょう？やはり諸侯の主導権争いが泥沼化しているのでしょうか？」

「それがなあ・・・総大将なんて面倒な仕事はごめんだって奴らがほとんどでなあ。軍議が進まん。

やりたそうにしている奴はいるんだが・・・自分から言い出さないんだよ」

「あう・・・つまり、やりたそうにしている人間に押し付けるつもりなのに、やりたそうにしている人間が立候補せず、また他の諸侯も発言に対しての責任を負いたくないから進めない・・・ということですか？」

「ああ。ずばりその通りだ。腹の探り合いで疲れるよ、ホント・・・」

雛里の推測にずばりの射たようで白蓮は苦笑いしている。心なしかやつれているようだ。

「ふむ・・くだらん。こうしている間も董卓軍は軍備を整えておるう」

「その通りだよご主人様！！苦しんでいる人たちだっているんだから。軍議に乗り込もう！」

信長のもらした言葉を聞いて、桃香がズンズンと足音を響かせながら歩き始めた。それに続き、信長も早く諸侯たちの顔ぶれを見たいのだろう。桃香に続いて歩き出す

「ご、ご主人様！お待ちください！本当に軍議に乗り込まれるおつもりで！？」

朱里が信長と桃香の前に立ちふさがる

「当然だよ！戦争を遊び感覚でやってる人たちに、ビシッつと言言ってやるんだから！」

「し、しかしこれは諸侯の権力争い。弱小勢力である私たちが何を言おうと取り合ってくれるはずがありません！」

「でも朱里ちゃん・・・このままじゃ時間だけが過ぎちゃうよ・・・」

「そうですが・・・それに私たちがもし何かを提案し、責任を負わせる可能性だって否定できません」

「うゝん・・・ねえ、ご主人様。どうしよ・・・あれ！！！？ご主人様！！？」

桃香と朱里が話している間に信長はさっさと中に入ってしまったようだ。

「ま、待ってよ・・・」

「ご主人様ー！」

桃香と朱里は急いで信長の後を追って、天幕へと向かった

信長は驚いていた。今まで数々の英雄たちと出会い、戦国の世で何百と戦をし、そして何百と軍議を重ねてきた。

このようなものは見たことがない

「さて、皆さん。何度も言いますが、我々連合軍が効率よく兵を動かすにあたり、たった一つ、足りないものがあります。兵力、軍資金、そして装備・・・全てにおいて完璧な我々連合軍。そしてただ一つ足りないもの・・・さてそれは何でしょう？」

金色の鎧に身をまとい、天を突くほどのくるくるドリルヘア。沈黙する軍議の中でただ一人だけでもくと喋っている。

この女が河北の雄、袁本初である。

このような軍議は初めてであった。一人だけが喋り続け、そして、意味も無い言葉をただただ述べるだけ。これは遊びだ。

これが袁紹だと・・・

信長はその間に周りを見渡す。見渡す限り女だらけであった。ここにいる者たちは全員反董卓連合で集まった名高き諸侯。

つまり、名高い者たちは全員女であるということ。それはこの世界では男に優秀なものがいないことを明確に表していた。

（つくづく変わった世界・・ぞ）

信長のいた戦国ではほとんどが男で統一されたものであった。

優秀な武将、軍師、大名。ほとんどが男性。女性もいるにはいたが、本当にまれである。

信長は周りを見渡し、王たる者の気質や覇気を見る。そして信長の目に適う者達がいた。

（やはり曹操は霸王たる存在であるな。・・そして、もう一人・・）

信長は褐色肌の女性からも曹操と同じようなものを感じた。

（孫伯符・・か。クク・・江東の麒麟児、小霸王か。まだ開花しておらぬが、いずれはこの信長の天下布武の障害となろう・・ぞ）

信長がそう考えていると相変わらずとめどなくあの声が聞こえてく

る。

「まず第一に、これほど名誉ある目的を持った軍を率いるには、相應の家格というものが必要ですわ。

そして次に能力。気高く、誇り高く、そして優雅に敵を殲滅できる、すばらしい能力を持った人材こそが相応しいでしょう。

そして最後に、天に愛されているかのような美しさと、誰しもが嘆息を漏らす可憐さを兼ね備えた人物。

・そんな人物こそが、この連合軍を率いるに足る総大将だと思うのですが、如何かしら？」

「・・・で？貴女の挙げたその条件に合う人間は、この連合の中にいるのかしら？」

袁紹の長々とした、意味の無い無駄話に曹操が口を入れた

「さあ？それは私の知るところではありませんけれど。でも世に名高いあなた方ならば誰かお知りなんじゃありませんの？」

「そうね。案外身近にいるかもしれないわね」

「ええ、そうでしょう。そうでしょうとも。おーっほっほっほ」

高笑いする袁紹と、それを呆れた目で冷やかに見つめている曹操、そしてその様子を黙って見ている諸侯たち

「黙れい・・・」

その場に不釣合いな低くドスの聞いた声が響く。

「このうつけ共がああ！！！！！！！！！！」

信長が天幕の中央にある机を蹴り飛ばし、イスから立ち上がりながら周りの諸侯たちに喝を入れる。

隣にいた、桃香と朱里はあまりの突然の行動に驚き、一步も動けな
いでいた。

「な！？なんですのあなた！？」

「うぬらのくだらぬ話なぞ、無価値！！ここにいるは董卓を討つ為

の軍議であろう！こうしておる間にも董卓は軍備を整えておる。糞にもならん話なぞ無駄ぞ！」

信長は天幕の中央にたち、腕を組み仁王立ちで袁紹だけを睨み付けている。まさに、今言った無駄とは全てお前のことだと言わんばかりに。

信長の怒気、そして、王としての覇気に周りの名も無き諸侯たちは震えていた。

これほどまでに怒って怖い人間がいたのかと思えるほどであった。

今まで、一緒にいた、桃香や朱里でさえも恐れ、体が震えている。

袁紹も例外ではなかった。今まで袁紹を馬鹿にはする者はいたが、怒るものはいなかった。むしろ、袁紹の機嫌をとるために持ち上げ、貢物を送り機嫌をとるだけ。真剣に怒る者は誰一人としていなかった。

「な・・・なんですの・・・あなたは？」

「ワシは織田上総介信長」

「お・・・織田・・・と、斗詩さん！」

「は、はい！！なんですか麗羽様！」

袁紹が傍で控えているおかつぱの少女を呼び寄せる。
そして、なにやら耳打ちで話をしている。

すると一変、袁紹の表情が急に変わり、こちらをキツつと睨み付ける。

「あ、あなた！たかだか平原の相ではありませんか！この名族であるわたくしに何て口をお聞きになるのですか！」

「名族とやらは無駄に軍議を長引かせるのか？貴様もとつと申せ！申さぬならこのワシが連合の総大将となろう！」

信長が袁紹に一步も引かず、総大将になるといい始めた。すると周りがざわつく。

先ほどまで信長を恐れ、震えていた者たちも信長がたかだか平原の相、弱小勢力であるとわかったとたんいつもの調子に戻ったようだ。

「あ、あなたになれるわけないでしょう！！あなたがなるぐらいでしたらこの私、袁本初がなりましょう」

その時、その言葉を待っていたといわんばかりにある者が口を挟んだ

「なら決まりね。私は袁紹を推すわ。貴女が総大将になりなさい」

「私たちも依存はない」

孫策の傍らに控えていた、黒髪の女性もそう言った。

「妾も問題はないぞよ」

「あらあら？皆さんそうですの？おーっほっほっほ！やはり総大将はこんな貧乏軍の方たちには勤まりませんわ！」

袁紹がしてやったりといったような目で信長を見る。

「では、これで総大将は決まりぞ。すぐに軍議を始めよう」

信長がこれでやっと話を進めれると思ったところで

「私は陣に戻る。決定事項は後ほど伝えてくれれば良いわ」

「私たちも自陣に戻らせてもらう。曹操殿と同様、作戦は後ほど通達してくればそれで良い」

曹操と孫策たち一向は自分の陣へと戻るため天幕から去っていった。しまった。

「あゝあ、どうするんだ本初」

白蓮が袁紹へと話をふった。

「ふんっ、私に任せると言った以上、私の指示に従っていただきませう。」

さて、織田さんとやら。あなた、この私にとんでもない口を利きましたわね。まあ、私はこれっぽっちも怒ってはいませんが、あなたの実力が知りたくなりましたわ。

そ・こ・で。一つ貴方に提案というか作戦があるんですけれど、簡単なことですわ。

連合軍の先頭で勇敢に戦っていただければいいのです。あ、もちろんその後ろには私たち袁家の軍勢が控えていますから、何も危険なことはありませんわ。

貴方も武人でしょう？武人にとって先陣は栄誉ある持ち場。もちろん

ん喜んでお受けしますわよね？」

「う、ご主人様・・・」

朱里がクイツと信長の服のすそを引っ張った。

「私たちには先陣を受けれるほど兵の余裕はありません。仮にうまく運べたとしても後々、この戦が終わったあと影響がでます。いづれ訪れるであろう群雄割拠の波に乗り遅れてしまいます」

「ほう・・・うむ、袁紹よ。その役目引き受けよう・・・ぞ」

「う、ご主人様！」

桃香と朱里が目を見開いて驚いている。あなた今の朱里の話を聞いていたんですかといわんばかりに。

「あら？意外に素直ですわね。そうでしょう。この私、総大将からお願いですからね！おーっほっほっほ」

「ただ、一つうぬに協力してもいたいことがある」

「あら？協力？」

「うむ。うぬら袁家の兵を五千ほど貸してもらおう」

「ご、五千！？どうしてこの私がそんなことしないではいけないのです！あなた方の兵だけで戦えば良いではありませんの！」

「うぬは先ほどもワシらに申しておったであらう。ワシらを貧乏・とな。

兵も満足ではない。そんな貧乏なワシらに総大将は恥ずかしげもなく、先陣を任せるつもりか？

董卓軍に笑われようぞ。連合の総大将はなにをするものぞ・とな」

「つぐ、確かにそれは私たち連合どころかこの袁家にも泥を塗りますわね・・・」

「え、袁紹様！先陣は名誉な役と先ほどおっしゃってましたよね？ですがその名誉ある先陣の役目を見事にこなした私たち織田軍の中には、実は袁紹軍の精鋭部隊がいた！ということになれば袁紹軍の評判も上がるのではないのでしょうか？」

朱里がここぞとばかりに袁紹軍の有益になる話を間髪いれず説く。すると袁紹は軽く考え込み、

「・・・そうですね。確かにあなた方だけでは難しいでしょう。ならば貸してさしあげましょう。この名族袁家の華麗なる兵隊さんたちを！」

「ふむ。ならば兵糧もいただかなくてはな」

「つぐ、わかってますわよ。どうせあなたたちは食べ物すらない貧乏軍でしょう？華麗なる我が軍は兵も兵糧も困ってませんことよ！おーっほっほっほ！」

「ねえねえご主人様」

桃香が今度は信長にだけ聞こえるように小さな声で話しかけてきた。

「袁紹さんって扱いやすい人だね」

「クク・・・名族・・・か。しばらくは利用させてもらおうぞ」

二人で笑いあっていると、朱里が袁紹に話しかけた

「それで、作戦はどのようになっておられるのですか？」

「そんなの決まってますわ！！雄雄しく、勇ましく、華麗に進軍ですわ！」

袁紹が声、高らかにそう宣言した

「作戦・・・ですか？」

桃香が袁紹にそう聞いた

「ええ、まさしくたくしに相應しい華麗な作戦ですわ！これで勝利は間違いなしですわ！おーっほっほっほ！」

朱里と桃香は口をぽかーんと開けて絶句している。

「袁紹よ。その作戦を実行すれば後はワシらの好きに動いてよいのだな」

「ええ。貴方にできるかわかりませんが、雄雄しく、勇ましく、そして華麗であれば問題ありませんわ！」

「そうか、ならわかった。桃香、朱里ゆくぞ。袁紹、兵と兵糧の手配忘れるでないぞ」

「言われなくても分かっておりますわ!!」

不満たらしげに吐き捨てる袁紹に、もう一度頼むと声をかけたあと、
信長は桃香と朱里と共に軍議の場から立ち去った。

？水関（前書き）

初めての戦いの描写・・・むずいです

？水関

信長は桃香、朱里を引きつれ、自分の陣へと戻ってきた。

そして、軍議の内容を愛紗たちに話した。

すると愛紗は、軍議の内容に不満を述べており、星も雛里も呆れた表情を浮かべた。

そんな時に、袁紹からの兵五千と兵糧が届いた。その様子を見、信長が口を開く

「ふむ、朱里。敵軍の総兵力を述べよ」

「はい。忍びの情報、そして伝え聞くところによる情報、双方を照らし合わせても間違いなく、約二十万ですね。そして、我ら連合軍は約十五万です」

朱里はたんたんとして述べていくが、どこかその表情は暗いものがあった。

鈴々がどうしたのだー？つとでもいわんばかりの顔で不思議そうにしている。

その理由は雛里が話すことで理解ができた。

「あわわ・・・兵法の基本は敵よりも多くの兵を集めること。そして、敵よりも多くの兵で対峙すること。この二点を、連合は守っていませんから・・・」

「難里は連合軍が負けると思ってるのかー？」

「負けるとは思いませんけど・・・苦戦はするだろうなあって・・・」

「絶対苦戦するだろうね。・・・だからこそ、私たちの軍が生き残るために全力を尽くさない」と

桃香が胸の辺りでグツッと握りこぶしを作り気合をいれるポーズをする。

その姿を見て、愛紗も気合を入れたようだ。軍師たちに向かい疑問を投げかける

「さて、私たちが先陣を引き受けたが、これから向かう虎牢関とはどのようなものなのだ？」

「はい、虎牢関とはまさに、難攻不落絶対無敵七転八倒ですね」

「物騒な名前がいくつも並んでいるな・・・」

「あう・・・それほど強大で凶悪な要塞だってことです・・・」

頼りになる軍師が二人も揃って深刻な顔でそう話すのだ。決して侮ってはいけない。

織田軍の将たちの顔も自然に引き締まり、鈴々でさえも武将の顔をしている。

引き続き、朱里と雛里による虎牢関の説明が始まる。

「虎牢関は両脇に崖がそびえ立ち、洛陽に向かう一本道にいくつかの関が存在する。・・・これほど防衛に向いた土地は他に無いと言っても良いほどの場所ですね」

「・・・関の数は大小合わせて二桁あります。だけどそのほとんどが連合軍の進軍を阻むほどでは無いと思います」

「注意すべきは二つの関」

「・・・虎牢関と？水関。この二つこそ、私たちの前に立ちはだかる難敵かと・・・」

「難敵が二つ・・・か」

朱里と難里の説明に自然に愛紗の口から感想が漏れた。難敵が二つ。そしてその一つは難攻不落絶対無敵七転八倒・虎牢関。それに匹敵するからなのだろうか？水関も二人にとって難関だと言っている。

これはきつい戦いになるだろう。全員がそう思った。

「・・・して、敵の配置状況を述べよ」

「はい。斥候・・・いえ、忍びの者の情報によると？水関に立てこもる董卓軍は約五万。そのうち強敵たり得るのは猛将華雄と神速の張遼ですね。華雄約三万、張遼が二万を率いているとのことですよ」

信長は斥候や、細作という呼び方をやめて「忍び」という言葉を軍内に広めた

「ふむ・・・攻城戦では策は調略のみ。華雄と張遼とはどのような将ぞ？」

「はい、お二人とも武はまさに一騎当千と呼んでも過言ではないでしょう。しかし、華雄は根っからの武人であり、猪突猛進の気があるとのことですよ」

「華雄・・・そこを攻める手はあるか？」

「はい。華雄は己の武に絶対の誇りを持っているそうです」

「ならば・・・突くはそこぞ」

信長が何か閃いたのかにやりと笑みをこぼす。

「ワシらの後ろには袁紹が控えておる。彼奴は巨大な図体で下がることは難しい。

しからばワシらは攻めるのみぞ！進軍する！進めえーい！！」

信長たち一向は進軍を開始した。

途中何度か関が見えたが、どれも連合の進軍を阻むほどのものではなく、瞬く間に関を落としていく。

そして、ついに最初の難敵が姿を現した・・・

「これが？水関・・・」

「おつきいね・・・」

皆一様にその感想を述べる。とてもでかく、見るからにこの関を落とすのには時間と労力、そして兵を失わなければならないと予測できた。

「この関に籠っているのは華雄將軍であつたな」

星がそう、離りに話しかける

「はい。猛将華雄將軍です。兵士たちの人気も高く、まさに猛将で良将でしょう」

「ならば・・・その首が無くなれば兵は四散しよう・・・ぞ」

「どのようにして、華雄を討ち取るのですか？」

愛紗が信長に対し、質問をする

「まともに戦えばワシらに勝ち目はない。攻城戦では約三倍が定石。まずは敵を関より引きずり出さねばならぬ。

敵の武を罵倒で汚し、敵をこちらに呼び込むのだ」

「しかし・・・うまくいくでしょうか？」

「うまくいけばそれでよし。いかなばワシらが潰れるだけぞ」

「そんな・・・」

「クク・・・天が味方するは、この信長か・・・董卓・・・か」

信長が馬の上で腕組をし、空を見上げる。

「袁紹より借りた兵を、全て前衛にまわせ。失うわ、袁紹の兵だけでよい」

「はっ」

「愛紗！何としても華雄を一騎打ちに引きずりこめ！！うぬの武こそが策、何百にも匹敵することを見せ付けよ！」

「ご、ご主人様・・・はい！！そこまで信じていただけでこの関羽、恐悦至極です！必ずや華雄を挑発し、一騎打ちにて奴を討ってみせましょう！」

愛紗の顔が赤くなり、徐々にその顔には笑みが広がっていく。そこまで自分は信用されているのかと嬉しかったようだ。

「うむ。愛紗よ・・・」

信長が懷から何かを取り出す

「それは・・・酒ですか？」

何故、こんな時に酒を？愛紗は不思議に思った。
すると突然信長は徳利に酒を入れはじめた

「この酒が温ぬるくなる前に・・・この信長の元へ華雄の首を届けよ」

信長は真剣な表情で愛紗を見つめながらそういう。
愛紗にはこう伝わったようだ。

（お前ならできる。お前の武なら酒が温くなる前に華雄を一騎打ちで討ち取ることができる）っと。

「は、はい！！必ずや！必ずやお届けします！吉報をお待ちください

い！」

愛紗は馬に跨り一気に前衛へと駆け出していった。

「星、朱里。うぬらは右翼にて様子を見つつ、愛紗が華雄を討ったその瞬間、関へと突撃せよ。華雄が帰る為に関は開いておろう」

「御意」

「鈴々、雛里。うぬらは左翼ぞ。雛里、鈴々が暴走せぬよう、うまく手綱を握るのだ。関へと突撃する、星たち右翼の援護をするのだ。関にさえ、入ってしまえば、後はこちらのものぞ」

「わ、わかりました！」

「鈴々は猪じゃないのだー！」

「桃香、うぬはワシと共に本陣で待機ぞ。状況を見つつ、弓で援護するぞ」

「うん、わかったよ」

信長は全員への通達が終わった。この戦い、愛紗に全てが掛かっている。

敵が出てこないのなら、勝ち目が無い。

「さて・・・開幕・・・ぞ」

そして、ここは？水関前・・・一人の猛将が関の前に立ち尽くしている。

女は一人で関の前に立っている。馬にも乗らず、兵は彼女の五十メートルは後ろで控えている。

「すうー・・・はぁー・・・・・・・・・・」

愛紗は心を落ち着かせていた。自分の責任の重大さがプレッシャーとなって襲ってくる。

だが、彼女は決して重圧に負けない。

なぜなら、自分の尊敬する主に任されたからだ。自分の武を高く評

価してくれている。

桃香と鈴々と自分。たった三人だけだった自分が今は、この大陸を左右する戦に参加しているのだ。兵も万を越している。

そんなにまで自分の運命を変えたご主人様。

そんな彼に信頼されているのだ。必ず、成功させてみせる・・・

（ご主人様・・・この愛紗、必ずや勝利を掴み、この織田軍の名を連合に響かせてみせましょう。ですから、どうかお力を・・・）

愛紗は再び、深呼吸し心を落ちつかせる。そして意を決したように大きな声で叫ぶ

「聞けい！華雄！！そこにいるのはわかってるぞ！！」

愛紗の声が辺りに響く、しかし関はまだシンとしているようだ

「いつまで、関に籠っているつもりだ！どうみても私たち織田軍は貴様らよりも兵が少ないであろう。」

しかし私はこうして堂々と貴様の前に姿を現しているぞ！それは私は自分の武に誇りを持っているからだ。貴様には負けないとな！

どうだ華雄？貴様も武に誇りを持っているのだろっ？ならなぜこの姿を見ても何も思わない！私が怖いのか？

こうして、兵を後ろに下げ、将が一人で出ているということは一騎打ちを所望していると見てわかるだろう？

もしや、わからなかったか？なら貴様の為に説明して正解だったよ
うだな。さあ来い！この関羽の首、ここまで来ねば取れぬぞ！」

「ちょ・・待ちいや華雄！賈？つちの命令は？水関の死守やで！？
出撃してどないすんねん！」

「ふん・・亀のように甲羅に縮こまるのは性に合わんのでな」

華雄はもう既に手に武器を握っている。準備は万端のようだ

「だからって・・総大将の命令を無視して突っ走ってええんか？そ
りや料簡が違いすぎるやろ」

「私の中には武人の血が流れている・・もはや収まらん。やつの首

を取らねばこの滾りは引かないだろう。
何より、奴を討ち取れば、連合の士気はさがるだろう」

「・・・どうしても出撃するんか・・・？」

「くだい。貴様は後生大事に命令を守り、功名の場を逃せばよい。
私は私で好きにやる」

その言葉を聞いて張遼は表情が変わった。それは何か諦めたような
悟った様な、そんな表情だ。

「分かった・・・ならウチは虎牢関に退く。それでもええな？」

「勝手にしろ。じゃあな」

華雄はそのままその場を後にした。どうやら本当に出るようだ。
その様子を張遼は黙って見ている。そしてポツリと言葉を漏らした・

「さらば華雄。先にあの世で待つとき・・・ウチもいつかそっちに行
くからな」

「来たか・・それでこそ。武人だ。華雄」

関が開き、そこから華雄が歩いてこちらへと歩んでくる

「貴様こそ、この私に一騎打ちを所望するとはな。なかなか笑わせ
る」

華雄が自慢の武器を構えて戦闘の態勢をとる。

「言ってる。お主の言葉、後から後悔するなよ」

そして、愛紗も青龍堰月刀を構える。

「ふふ、董卓軍、華雄だ。お前は？」

「平原の相、織田上総介信長が一の家臣、関雲長とは私の事だ！」

「っはっはっは！そんな奴は知らぬわ！！でやああー！！！！」

華雄が走り出す。それに合わせ愛紗も走る。そして二人の得物が交差した

ガキン！！

「ぐうう・・・なんて重い一撃だ・・・」

「お主もなかなかだな・・・華雄」

二人がつばぜり合いの状態ですれぞれ感じた感想を言い合う

「いいだろう、その武！しかと認めよう！我が戦斧の血鎧にしてくれる！はああああー！！」

華雄が一步下がりをして、愛紗に強烈ななぎ払いをする

「つく！なかなかの力だが・・・だが、鈴々ほど重くはない！！！！でえやああー！！」

ガキン！！

「ぐう！相変わらず重い・・だが当たらなければどうということもない！！はああー！！！」

二人の攻防が続く、何度も攻撃を自分の武器で防ぎ、時には避け、そして、打ち返す。
そのやり取りが何十合と繰り返される

「どうだ！これが世に謳われた華雄の戦斧！その身で味わえ！！！」

「ならばこの黒髪 of 山賊狩りと呼ばれたこの関羽の青龍堰月刀！お前も私の戦歴の糧となれ！！！」

「ならば来い！！貴様の堰月刀の自慢の一撃、見事受け止めてやろう！返す刀でその素っ首、叩き落してくれろ！」

「やれるものならやってみろ！」

愛紗と華雄。二人の間には数歩分の距離があいている。そして、愛紗は体に力を込める。ありったけの力を・

「はあああああああ——！！！！！！！！」

ガキイイーン！！！！

「ぐああ！！重い・・」

「まだ終わらぬ！！この関羽の猛撃は決して止められはせぬ！！はあああああ——！！」

ガキンガキーン！！！！

「くっ・・・」

「まだまだあああああああ——！！！！！！！！」

ガキインガキイン——！！！！

「なっ・・・！？」

愛紗の猛撃により、華雄より先にその戦斧が耐えられなかったようだ。
刃が割れ、もはや攻撃を受け止めることも、攻撃することもできないだろう。

「そこだ——！！！！！！！！！！」

「ぐうあああああ——！！！！！！！！！！」

「はあ、はあ、はあ……？水関の猛将華雄！織田が一の家臣、関雲長が討ち取った……！！！」

辺りに一瞬の静寂が支配する。愛紗の叫びを最後に誰も言葉を発しない。董卓軍の華雄の兵たちは微動だにしない。

「今です！！今こそ好機！！さあ、攻めるのです！！」

右翼より突撃する星たちの部隊。目指すは一直線に？水関の門である。

「や、やべえ……！退け……！退け……！ぐあつ……！」

星たちの兵と当たる前に矢の雨が降ってくる。それは本体からの矢

である。

「鈴々たちは雑魚を片付けるのだー！！」

星たちが一直線に門を目指すなら、鈴々たちは星たちの行進を阻む雑魚を退治すること。

星たちは、少しでも時間が欲しい、ならばその進軍を阻むものを排除する者が必要なのだ。

直接の攻撃は鈴々たち、そして遠くの部隊は本体の矢で相手をする。

「でやあああー！！！！この常山の趙子龍の槍！！避けられはせんぞー！！」

敵はもはや、ただの雑魚であつた。華雄が死んだ時点で敵には指揮するものがない。

ただ四散するだけであつた。門に逃げれば助かる。という心理があるためか皆が一斉に目指しているため、そこは渋滞している。

敵はただただ、織田軍に対して背中を見せているだけであつた。我先にと逃げるために逆に自分たちの命を削っているのだ。

「クク・・・滅せよ。この信長の道を阻むものは全て殺せ」

そして、遂に？水関は陥落した。どうやら張遼が完全に退いており、兵はかなり減っていた。

関内にいた、華雄隊の兵も、華雄が死んで、この乱戦になったとたん、まずいと思い、脱走した兵もいたのであるう。

目の前で、味方が一斉に敵に背中を向け、門の前で大混乱しているのだ。

次々に殺される同じ部隊の者たち、そんな光景を目の当たりにしては脱走しても仕方ないであろう。

「ご主人様」

愛紗が戻ってきた。その手には華雄の首。愛紗は見事信長の命をやりとげたのだ。

「クク・・・」

信長がくーっと酒を飲み干す。そしてにやりと信長は笑みを浮かべ・・・

「美味・ぞ」

天下無双

信長は華雄の首を前に、酒を煽って袁紹からの次の指示を待っていた。

「しかし、主もなかなかおつな趣味をお持ちで」

星がにやりと笑い、この部屋を見渡す。主に華雄の首を中心に。桃香は、人の首などみたくないのかこの場にはいない。鈴々は桃香の護衛として、愛紗が部屋を出させた。あまり、見て欲しいものではないのだろう。

「クク・・・この首は愛紗の手柄。我が軍の大事な将が得た、戦利品よ。これを肴にしてみずいわけがなかるう。愛紗よ。まっこと大儀であった」

信長がそう言い、酒を一気に飲み干す

「はい！！この愛紗、これからご主人様の天下統一のため更に精進します！」

愛紗が頭を下げ、信長にさらに忠誠を誓う

「して・・・次の虎牢関の情報を・・・朱里！雛里！」

「はひ！はわわ、噛んじやった」

「あわわ・・・」

朱里と雛里も華雄の首が怖いのか、いつにもまして動揺している。

「え、えと・・・次の虎牢関は最大の難所と言っても過言ではありません」

「あう・・・虎牢関の守将は天下の飛將軍呂布奉先です・・・」

朱里と雛里の顔はとても暗い。信長もこの名を聞き、少し眉がピクツと反応したようだ。

「呂布・・・その武、天下無双とまで謳われている、あの呂布か！」

「はい、また？水関の守将の一人だった張遼さんの姿が、前の戦い

では確認されていません。恐らく虎牢関に後退していたと思われる」

「張遼・張文遠か。私も旅先でよくその名を聞いたが、どの噂も張遼を讃えるものばかりだったな」

「くつ・次は難攻不落の虎牢関に呂布、そして張遼か・・・厳しい戦いになるな・・・」

愛紗、朱里、雛里、星は暗い顔をしている。無理も無い。先程の戦いは華雄が猪突猛進であつたからうまくいったのだ。

いわば、奇跡の勝利であつたといつてもおかしくない。普通は、関に籠り、籠城するのが上策であるのだ。

今度の虎牢関では恐らくそうはいかないだろう。

次は間違いなく激戦だ・・・そして、苦戦も間違いないだろう。

そんな折・・・袁紹軍の兵士がこちらに近づいてきた。

「大本営より伝令！織田軍は速やかに前進し、虎牢関の前方に布陣せよ！」

その後は敵の動きに合わせ、華麗に敵を撃退せよ！以上！」

「クク・・・思ったとおりぞ・・・」

さすがの信長も袁紹の性格がもうわかってきたようだ。

「案の定というわけですね・・・それにしても華麗に敵を撃退せよというのは、冗談としては面白い」

星もわかっていたようだ。旅を続けていたため袁紹のことも知っている。そして、今回の連合での作戦で、袁紹の指示は全て当てにできないということも。

「もっと面白いのは、それが冗談では無いってことですな」

「あわわ・・・朱里ちゃん・・・」

「さすがにこうも続けられると、口も悪くなっちゃいます・・・」

「そうだね・・・相手はあの呂布將軍。それに張遼さんと・・・忍びからの情報では陳宮という軍師さんもいるようですし・・・私も朱里ちゃんと同じ気持ちだよ、はあ・・・」

突然の親友の黒さに雛里もびつくりしたようだ。だが雛里も気持ち
はよくわかるようだ。

朱里も雛里も、軍師としてこんな馬鹿な指示や作戦しかしてこない
総大将に疲れきったため息を漏らす。

「クク・・・一騎当千の呂布・・・知の陳宮・・・文武両道の張遼・・・
此度の戦いはなかなか面白くなりそう・・・ぞ」

信長は不適な笑みを浮かべる。敵に比べこちらは役に立たない総大
将。

そして、連合はどれも己の名をあげるため、そして、自軍の被害を
最小限に抑えるなどの企みがあり、連携がとれているようでとれて
いない。

数ある諸侯の中でも役に立つ者は少ないだろう。

この最悪の状況での戦いに信長は内心で燃えていた。

この天下を揺るがす大戦でさらに織田の名を広めなければいけない。
すでに、華雄を討った事で織田の名は知れ渡った事であるうが、信
長はまだ満足していなかった。

「呂布・・・か・・・。ものども！進軍する！虎牢関へ向け、全軍
前進ぞ！」

「・・・来る」

「ん？来るて・・・連合軍がか？まさか？水関を抜くにしてもまだ早いやろ？」

そこには背の高い赤毛の女性と、堰月刀を持つ、サラシを巻いた女性が会話していた。

「・・・（フルフル）来る」

「ふむ・・・こういつときの恋の勘は当たるからなあ・・・誰かおるか！！」

「はっ！」

サラシの女性に呼ばれ、董卓軍の兵士がこの場に来た。

「出陣や。準備しとき」

「へ？出陣・・・ですか？籠城をして時を稼ぐのでは？」

「籠城しても援軍なんざこん。なにせウチら以外の諸侯が連合を組んでるんやからな。・・・外に出て派手に暴れまわる方がええやろ？」

「それもそうですね・・・了解です！ではすぐに出陣準備を整えます！」

「おう、頼むで」

「はっ！」

兵士はその場をすぐに発っていった。彼女に言われたとおり出撃準備するのであろう。

「さてさて、張文遠、最後の大舞台や。派手に死に花咲かせたるでえ」

「・・・（フルフル）」

赤毛の女性が首を振りながら、張遼の服の裾を掴んでいる。なにか伝えたい事があるのだろうか

「ん？なんや？」

「・・・霞、死ぬの、良くない」

「恋・・・」

「戦って、生きる。それが良い」

「まあ、そりやそうやけど・・・ぶっちゃけ今の状況はウチらにとつて絶体絶命やで？生きるよりも死に花を咲かせたいってウチは思うねん」

「死に花咲いても、誰も喜ばない・・・。でも、生きていれば誰か喜ぶ」

「・・・そんなこと、考えた事も無かったわ」

「なら考える」

「・・・せやな。恋の言葉、心に刻んどく」

「・・・（コクッ）」

そして、この二人も動き出した。董卓軍を、そして、彼女たちが守ると決めた者のために死地へと赴いた。

「・・・む。止まれい！！」

信長の命令により、進軍を停止した。

「これは・・・虎牢関の前に敵軍が布陣していますね」

「あわわ・・・地の利を捨ててですか・・・何か策があるのでしょうか？」

「ふむ・・・朱里、雛里。うぬらの思い浮かぶ敵の策を述べよ」

「考えられるとすれば・・・伏兵・・・でしょうか？」

「あう・・・崖の両側に伏兵を配置し。突出してきた所を斉射でしようか」

「そのほかにも伏兵を使って私たちの戦力、戦意、そして目を釘付けにし、時期を見ての本陣急襲でしようか」

朱里と雛里による、説明により、全員が険しい顔になる。

「ご主人様！！ならば崖の上に別働隊を派遣しましょう！伏兵の危険性があるのならばべきです！」

「待て愛紗・・・まだ敵の考えの全てが出揃ったわけではない」

「っと・・・いいますと？」

「退却か・・・玉砕覚悟の決戦もありうる・・・」

信長が朱里と雛里の敵の方針にさらに、二つの可能性も追加した。それを聞き朱里も雛里も共に考え込む。

「確かにそれもありますね・・・」

「敵は決戦を持ち込む、こちらに痛手を与えた後、退却・・・あります」

「し、しかし！決戦したあと退却できるなどと、本気で考えているのでしょうか？」

愛紗が驚いた顔でそう述べたが・・・

「はい・・・それほどまでに連合軍がなめられているとしか・・・」

「あわわ・・・こちらの総大将が袁紹さんですから・・・」

朱里と雛里が再びため息をつく。二人の言葉に他の全員も納得したようだ。

「あ！でもでも！！逃げるつもりなら、虎牢関なんてすつごく堅い関があるなら、それに籠って戦って退却した方がいいんじゃないかな？」

桃香が珍しく、頭の冴えた質問をした。

「・・・城や関に籠り、戦えばその防御力に頼り時期を逃すもので。まだ戦えると過信してしまう。ならば、包囲される寸前での必死の逃亡の突破力の方がよほど生存の確率が上がるのだ」

「おっしゃる通りです」

「ほへへ・・・さすがご主人様だね」

「・・・朱里、雛里。ワシらが取る策を述べよ」

「そうですね・・・総大将の考えがどうせ、華麗に迎撃とかでしょうから戦略面での策は施しようが無いかと・・・」

「戦術面ではいくつか案はありますが・・・未だ敵の動きが読めないのです、なんとも言いようがありません。・・・ごめんなさいです」

「構わぬ。ならば今しばらく待機ぞ。敵の動き、袁紹からの指示、その両方を待ち、それから考えようぞ」

織田軍がその結論にいたり、しばらく待機していると・・・

「ご主人様！！敵が突撃を開始しました！！」

「・・・来たか。朱里、袁紹からの報告は」

「あるわけありませんよー！」

「クク・・・ならば好きにさせてもらおう・・・ぞ。

愛紗、鈴々。うぬらは前曲を率い相手の突撃を受け止めよ。星、
里。うぬらは二人の左右を固めよ。星、
桃香、朱里はワシとともに後曲ぞ」

「わかりました！！」

「ううー！！腕がなるのだー！！」

「張り切りすぎて怪我をするなよ、鈴々！」

「愛紗こそなのだ！」

「みんな、気をつけてね！絶対無事に帰ってこなくちゃダメだよ！」

「もちろんです桃香様！必ずお戻りします！」

「合点なのだ！！」

「ふっ、了解した。・・桃香様もお気をつけて。まあ、主ならばそれぐらい造作もなき事でしょうが」

桃香の優しい心遣いに皆の士気があがる。

「では皆さん。舞台を配置した後は雁行の陣を敷いてください！」

「敵の動きに合わせて陣を変えますから、本隊の合図に注意しておいてくださいね！」

「了解した。我等の手綱二人に預ける。頼むぞ、我等が軍師殿」

「はいっ！！」

「桃香。此度はうぬが号令を取れ。うぬの理想に兵は付いてきたのだ。しからばうぬの言葉こそが兵の力の源ぞ」

「わ、わかった。やってみるね」

そう言うと桃香は緊張しているのか一つ大きな深呼吸をした。そして、出来る限りの気持ちを言葉に込めた。

「みんな、この戦いに勝てば洛陽は目と鼻の先だよ！！勝って洛陽に行つて、困っている人たちを助けよう！」

「おう！……！」

「全軍前進！！頑張つて敵をやっつけよう！！」

桃香の言葉により兵たちは己を鼓舞した。武器を高く天に突き上げ大きな声で叫ぶ

「クク・・・飾った言葉よりも、桃香のようなわかりやすい口上の方がこやつらにはなおよし・・・か」

そして、敵との攻防が始まった。敵は天下の呂布。

「く・・・こいつら・・・なかなか強い。さすがは呂布の部隊といったところだな」

「うりゃうりゃうりゃー!!」

愛紗と鈴々が奮闘を見せている。しかし、敵は黄巾ではない。今まで戦ってきた黄巾兵であれば、この二人の豪傑の戦いに、敵は恐怖し、士気を失い、無力化していくのだが今回は天下の飛將軍の兵である。

愛紗や鈴々の武を見ても、一向に士気が落ちないのだ。それほどまでに呂布は強いのか

「だが、今はこちらの方が兵力が上だ!! 一気に行くぞー!!」

「おおおおおー!!!!!」

「うりゃー！！張文遠の騎馬隊！舐めたらいかんでー！！横ッ腹ががらあきやあー！」

「なんだと！？あいつが・・・張遼か！！！」

こちらは場所が変わり曹操軍。突如として張遼の奇襲が彼女たちを襲ったのであった。

「張遼・・・その行軍速度、そして統率の高さもさることながら武においても一流・・・欲しいわね」

「華琳様！しかし、張遼による横撃により軍が混乱しております」

「あら？なら敵を囲みなさい。そして、敵をも混乱させるの。そうすれば五分の条件。いえ、数ではこちらが勝るわ。桂花、できるわね」

「はい、やってみせます！」

「なんとしても張遼を手に入れるわよ」

曹操の目にはもはや張遼しか映っていないのだろう。その目はとてもおもしろそうなおもちゃを見つけた子供のように輝いていた。

「む・・・あれが呂布・・・」

信長は前曲に来ていた。朱里や桃香に止められたがもちろん聞くはずもない。

二人に後曲を任せると自らも武器を振り、前線へときたのだ。

「ご、ご主人様！！」

「お、お兄ちゃん！」

二人は何故ここにいるのかと目で語っている。少し、非難も混ざっている

「なぜここへ来たのですか！ここは危険です！下がってください！」

「クク・・・小言は後で聞こうぞ・・・今はあやつをなんとかせねばな」

信長の視線の先には、天下の武が振われていた。
当然前曲においた袁紹軍、もとい織田軍の兵が吹き飛ぶように蹴散らされている。

「これが・・・呂布・・・」

「すつごく・・・強いのだ・・・」

愛紗も鈴々も言葉を失っているようだ。
無理もない、見ただけで分かるのだ。

自分たちの武では勝てない。格が違いすぎる・・・

「愛紗、震えておるのか？」

「い、いえ・・・こ、これは・・・その・・・武者震いです!!」

「クク・・・隠すでない・・・それでよいのだ。あの武、普通に戦えば確実に死ぬであろう」

「で、ではどうすればあやつを止めることができるでしょうか？」

「・・・ワシら一人一人ではあやつには及ばん。しからは三人で戦うのみ。一本の剣では容易く折れるが、三本ならば折れぬ。ワシらのこの猛き心を刃とし、あやつを討つ」

「さ、三人ですか？しかし、それはいささか卑怯では？」

「構わぬ。お主はここで死んでよい器ではない。死するはワシが許可したとき、それはこの大陸が平和になったときぞ!!愛紗!鈴々!!往くぞ!!」
うぬらが誓った桃園の誓い!!この信長が破らせはせぬ!!」

「ご、ご主人様!!鈴々!!ご主人様を追うぞ!!」

「わかったのだ!!」

先に走り出した信長を愛紗と鈴々は必死におった。

（・・・この呂布との戦い。史実では劉備、関羽、張飛であったな。しかし、ここでの桃香は弱すぎる。ならばワシがやるしかない。本物の劉備がいかにどの強さであったかは知らぬが、この信長が死ねば、それは劉備より弱いということ。

死すればワシは英雄劉備に劣るということであるか。クク・・・面白い。劉備よ、この信長の力、しかと見届けよ）

「・・・敵」

「うむ、呂布よ。三人で悪いがうぬをここで止めさせてもらつぞ」

「・・・来い。恋は強い。同時に来い」

「・・・大層な自信だ」

「鈴々たち三人に簡単に勝てると思うなのだ!!」

愛紗と鈴々が舐められたと思ったからなのか怒気を含んだ声で武器を構える

「クク・・愛紗、鈴々。平静を保つのだ・・敵は雑魚にあらず。冷静さを欠けばうぬらの首が飛ぶぞ」

「・・・死ね」

呂布が方天画戟を力の限り、上から下へと振り下ろす。
愛紗は自慢の堰月刀でその攻撃を防ぐ

ガキーン!!!!

「くっ!?!」

たまらず愛紗の顔が歪む。

その味わった事のない衝撃に驚いているようだ。

愛紗に攻撃を防がれた呂布は目標を変え、鈴々へと方天画戟を左から右へと、振り回す。
斬るというよりはその重量をいかし、相手を吹き飛ばさんとするかのような攻撃だ。

鈴々は歯を食いしばり、蛇矛を両手でしっかりと握り攻撃を防ぐ

ガキーン!!

「おわわっ!?!」

その衝撃の強さに、鈴々の体が一瞬宙へと浮く。

鈴々の体の小ささと、呂布の攻撃の衝撃の強さにより、そうなったようだ。

鈴々も驚き、体勢が崩れる。

続いて呂布は信長へと攻撃を移す。

まるで、三人に一度攻撃を繰り出し、強さを図っているようだ。

鈴々への攻撃の際、右へと薙いだ後、その勢いを生かし、そのまま回転するように信長へと再び方天画戟を薙ぐ

ガキーン!!

「・・・く」

「・・・よく止めた」

「くっ・・・なんたる剛力・・・」

「あいたー・・・手が痺れてるのだ・・・」

「さすがだな・・・呂布よ」

三人の表情にも曇りが浮かぶ。

気づかないうちに、三人とも額に汗が浮かんでいる。
恐怖による冷や汗と緊張であろう。

だが、呂布の表情は変わっていない。

方天画戟を肩へと担ぎ、まだまだ余裕のようだ・

「恋、強い。・・・舐めてると死ぬ」

「確かに。だが・我等とて腕には多少の覚えがある。全力を持つて貴様を止めてみせよう」

「・・・来い」

「参る！でやあああああ！！」

「・・・・・・・・」

愛紗が飛び掛るように呂布へと、青龍堰月刀を力の限り、振り下ろす。
だが愛紗の攻撃は宙を斬るだけとなった。呂布は最小限の動きだけで愛紗の攻撃をかわしたのだ。

「なにっ！？」

「振りが大きい・避けるの簡単」

「な・・・なんだとお！！でやあああ——！！」

「・・・・・・・・」

それから愛紗が攻撃を繰り返すが全て避けられる。

呂布の言葉に怒りを覚えた愛紗は冷静さを欠いているようだ。

はたからみればただがむしやりに堰月刀を振り回しているようだ。

その様子に見かねた鈴々が前へと出る。

「愛紗！どくのだ！！ええーーーーい！！」

「・・・・・・・・」

鈴々が自慢の蛇矛で呂布へと突きかかる。

だが、鈴々の攻撃も避けられてしまう。

呂布は、愛紗へと移していた視線をチラリと鈴々へと向け、そのまま後ろへ下がるだけで避けたのだ。

「避けたっ！！??」

「・・・・軌跡が単純」

「にゃにおうー！！！！！」

呂布の言動に愛紗も鈴々も怒りをあらわにしてジリジリと呂布との距離を縮めていく。

だが、その光景を見ていた一人の男が叫ぶ。

「たわけが！！！！！！」

「！！！？？」

信長が二人に湯を入れる。そして、愛紗と鈴々は先程信長に言われた言葉を思い出したようだ。

呂布が再び、方天画戟を肩へ担ぎ、信長に視線を向ける

「あと一人・・・来い」

だが、信長はその挑発に乗らない。

「クク・・・貴様の言う通り攻撃したいところだが、ワシは愛紗や鈴々より弱いぞ。この二人の攻撃が効かぬならワシの攻撃は無価値。

しからばすることは一つ・・・ぞ。

愛紗、鈴々。呂布を中心に囲め。三点より攻撃する。常に、二人以上で攻撃せよ。

二人が攻撃し、一人は頃合を見て攻撃ぞ。決して奴に、攻撃させる暇を与えるな！

攻撃こそ最大の防御と心得よ！！愛紗、鈴々！攻撃せよ！！」

信長にそう言われ、三人は呂布を中心に三角形の位置取りをとった。

「でやああああー！！！！」

「うりゃー！！！！！！」

「・・・・」

愛紗と鈴々は二方向より呂布へ攻撃する。

愛紗は上から下へ堰月刀を振り下ろし、鈴々は愛紗とは違う、突き刺す攻撃をする。

ガキーン！！！！

だがしかし、呂布は二人の攻撃をもなんなく受け止める。

方天画戟で、同時に来る攻撃をその軌道にあわせ防いだのだ。

刃の部分で、愛紗の攻撃を。

柄の部分で鈴々の突きを。

二人の攻撃を防ぐ、その力の強さはまさに天下無双である。

だが、呂布に焦りの表情が一瞬見える。

「・・・!?!」

「・・・滅せよ!」

「くっ・・・」

愛紗と鈴々の攻撃を防いだ呂布の後ろから信長が斬りかかる。しかし、呂布はギリギリその攻撃を体をひねることで、かわしたようだ。

「まだまだ――!!!!」

愛紗が間髪いれず、攻撃を繰り返す。

信長の攻撃を避け、体勢が整わない呂布へと、堰月刀を再び力の限り振り下ろす。

「・・・・・・・・つ」

呂布が無理な体勢で攻撃を受け止める。

体勢が整っていなかったために、その衝撃を防ぎきれず、手首に無理な力がかかり、一瞬表情が痛みにゆがむ。

だが呂布への攻撃は止まない。

愛紗の攻撃を防いでいる、呂布へ二人が切りかかる。

愛紗は、そのまま二人の攻撃を邪魔しないようにと、移動する。

「隙ありなのだー！！！」

「死ねい呂布！！」

「・・・・・・・・くっ」

鈴々と信長は痛み顔が歪む呂布へと、二人で同時に武器を振り下ろし、その手へと衝撃を与える。

呂布は信長の村正と鈴々の蛇矛を方天画戟一本で同時に防いだ。

だが、一度痛みを覚えた手首にはその攻撃は効いたようだ。

二人分の体重が乗った、攻撃はさらに呂布の手首へと痛みを伝える。

再び、呂布の顔が苦痛に歪む。
だが、まだ終わらない・・・

「呂布！覚悟——！！！！」

愛紗が再び呂布の無防備な背後から斬りかかった。

今度は、上方で二人に振り下ろされた攻撃を防ぐために方天画戟を上に出している、呂布の腹へと、堰月刀で刺すように突き出す。

これが信長の考えた戦い方だった。

二人からの攻撃をされれば、必然的に防がなければならない。そして、それを武器を使い防げば、背中はがら空きなのだ。
強い相手に勝つためには、このような戦い方をするしかない。

「・・・つつ・・・」

「やった・・・攻撃が届いたぞ」

さすがの呂布も防ぎきれず、そのわき腹から血を流す。しかし、最強の武將の勘なのだろうか？

反射で、恐らく致命傷を避けたのだろう、まだ戦えるほどの怪我である。

「いかな呂布と言えど、斬られれば死す。ワシらはこの戦い方を変えぬ。そしてうぬは怪我を負った。最初のような動きはもう出来ぬぞ、呂布。いさぎよく降伏せよ」

「・・・・・・・・」

呂布の無表情な顔にも若干の曇りが見えた。この攻撃を続けられればまずいと思ったのだろう。

しかし、その時……

「……ちんきゅー……」

「はいですぞ……！火矢を放てー！」

「なにっ！？」

火矢が放たれた事により、あたり一面が火に包まれる

「呂布殿ー！！早く逃げるのですぞー！！」

「・・・（コクッ）」

「待て呂布ー！！逃げるのかー！！」

「・・・楽しかった」

「なに・・・？」

そのまま呂布は背中を見せ、その場を後にしていった。

「逃げられましたねご主人様・・・」

「構わぬ。初めからわかっていたことよ」

「え・・・？」

「クク・・・呂布。いずれまた会おう・・・ぞ」

董卓、賈？

「張文遠」

「な、なんや」

「これからは、貴女のその武を我が霸道のために捧げなさい」

「お、おうつ！」

「よろしく、張遼さん。俺は北郷一刀、よろしくね」

張遼は夏侯惇と戦い、その身を曹操に預ける事となった。
そして、曹操は張遼軍の兵隊たちをも、吸収し、その軍を更に高み
へのぼらせていった。

そして、虎牢関は隙を狙っていた、孫策軍により落とされる事とな
った。

孫策軍は着実に実をかかせていき、曹操軍は名をかさねていったの
であつた。

「ご主人様ー！！」

桃香、朱里、雛里、星が呂布と戦っていた、信長、愛紗、鈴々の元へとやってきた。

「ご主人様何を考えてるの！」

「まったくですな。皆で話していたあの天下の呂布と三人とは言え、自ら刃を交えるとは」

「ご主人様はもう少し御身の重要さを理解してください！！」

「あわわ……無茶はあまりなさらないくださいね」

桃香、星、朱里、雛里たちは信長につめよりその行動を指摘する。
織田軍の総大将として自重して欲しいとのことである。

「うむ……。うぬらがあまりに頼りになるでな、つい無茶をしたくなる」

信長が愛紗と鈴々の方を向き、にいつと笑みを浮かべそう答える。

「な！？あ、ありがたき幸せです／＼」

「にやははー！愛紗真っ赤なのだ」

「もうー！愛紗ちゃんたちだけずるい！！」

「クク・・・この二人だけではない。知、そしてその他の支えがあつてこそよ。皆大儀であつた」

信長は全員に労いの言葉を述べる。この戦い一番の修羅場を越えた。
？水関、虎牢関。朱里たちが最初に言っていた、難敵。
この二つを、誰一人将を失うことなく乗り越えたのだ。

「しかし主。まだ労ってもらつには少々気が早いはずぞ」

「はい。まだ洛陽が残っています」

「洛陽かー。・・・どれくらい敵が居るのかなー」

「相手の本拠地ですから、やはり今まで以上の兵数で待ち受けているかと」

「ふむ。ならば休息をとらねばな。洛陽までは数日かかる。ならばこの虎牢関が、決戦に備える最後の休息となろう。皆、休んでおけ。朱里、雛里。忍びたちに洛陽を調査させよ。そして、可能ならば董卓の顔を調査させるのだ。女を中心に調べさせよ」

「御意です！」

信長は思っていた。董卓は恐らく女なのではないかと。もちろん信長の知っている董卓は史実では男である。それも暴君、豚などと呼ばれている醜い男であることも。

だがしかし、そんな知識は信長はもう捨てていた。主に人物像を。この世界に来てからまったく役に立たないのだ。

劉備、関羽、張飛どころか出会う主要な人物は全て女性。男性の将には出会わないのだ。

そして、女尊男卑であること。女のほとんどが有力であり、一般家庭では正に言葉どおり力カア天下がほとんどである。

以前の張角の人相書きでは、身長は三メートルを越すほどの大男であり、まさに顔はバケモノのような男であると出回っていたが、そんなバケモノは存在しないと信長は考えている。だから恐らく、張角も女であつただろうと信長は確信していた。

目立つ将は全て女性。一般家庭でも女性が強い。ならば恐らく董卓も女であろうと信長は確信していた。

「おかしいですね・・・」

「確かに・・・洛陽に近づいているのに敵の抵抗どころか、影一つないとは・・・」

皆、腑に落ちない顔をし、洛陽までの道筋を行軍する。

抵抗らしい抵抗は何一つないのであった。敵の本拠地がもう目と鼻の先にあるはずなのだが、一つも何もおこらないのがまた怪しいのだ。

「ご主人様！袁紹さんから先行しろとの通達が届きました！」

「ちつ。また我らを便利扱いするつもりか」

「・・・まあ弱小勢力の悲哀としか言い様が無いだろうな」

「早く強くなりたいのだあゝ・・・」

「でも、私たちの部隊だけで先行して大丈夫かな」

桃香が不安な顔を見せる。無理も無い。ここまで何もなかったのだ。

逆に危険であり、敵の策の香りがする。

油断はまったくできないのだ。恐らく他の諸侯たちもこの異変に気づいているだろう。

完全に織田を生贄とし、この状況を打開しようとしているのだ。

「忍びからの報告は？」

「まだ、戻ってきていませんね・・・」

「そうか。ならば袁紹の残りの兵を全て出し、彼奴らだけで城門の前まで行かせよ。そして、反撃があればすぐに反転し、退却させる。安全を確認できるまで我らは待機ぞ」

「そうですね・・・まずは敵の動きを見なければいけませんし」

「でも・・・袁紹さんの兵隊さんたちばかり危険な目にあってもらってちょっとかわいそうだね・・・」

桃香がすこし悲しそうな顔をする。

「桃香よ。袁紹の兵の命、そして織田の兵の命、この二つを天秤に

かけよ。

うぬを信じ、うぬの理想に感銘を受け、うぬのために命をかける兵と、袁紹からの借り物の兵、この二つを同じ扱いにすることはできぬ。

彼奴らはワシらの兵の姿を見、不十分な装備と田舎や貧乏だのと馬鹿にする。

そんなものどもとワシらの兵を同じ扱いにしては、織田の兵が不満を持つ。

桃香。うぬが命を天秤にかける事に悔恨が残るのであれば、今はそれを受け止めよ。

そして、同じ思いを二度味わわぬようにすればよい。その苦しみがうぬの成長に繋がろう。」

そう信長に諭され、桃香は胸の辺りを手で押さえ、何かを決意するかのように目を瞑り、静かに言葉を口に出した。

「そうだね・・・こんな事、何回もあっちゃいけないよ。袁紹さんの兵隊さんも、私たちの兵隊さんも、ただ生まれた場所が違っただけで同じ大陸の人間だもん！」

だから、私は・・・この苦しみを覚えなきゃ。同じ人間同士で争い、手を繋げたかもしれない人と殺しあうこんな戦を無くすために今は我慢する！」

この幼く、甘く、何も出来ない少女が戦を経験し、どう成長するの

だろうか。

信長は桃香を一目見た後、またすぐに顔を前へ向ける。

今はこの戦である。

しかし、問題があった。

袁紹軍の兵たちが口々に文句や不満を述べているのである。

自分たちばかり、前線に送られ不遇な待遇をされている事である。

袁紹軍五千の兵はもはや千にも満たないほどに減っていたのである。
？水関、そして呂布との戦い。

常に先頭に立たされていたからである。

なんとかしなければならなかった。その様子を見た信長は彼らのさ
らに前へと歩み出て、そして彼らの方へ振り向き、こう叫んだ。

「うぬらが見るべき背中は袁紹にあらず。この信長の背中を追って
こい！

見せてやろうぞ！夢うつつではない、天下への軌跡を！」

信長は袁紹軍の兵へそう叫びまた、背中を向け、ゆっくりと洛陽へ
と歩いていった。

「な！？ご主人様！！お待ちください！！」

愛紗がそう叫び、信長の後を追う

「また貴方は無茶をされる！危険です！お下がりください！」

「しからばつぬらがこの信長を守ってみせよ。ここで死すればそれまで」

「うつ・わかりました。ご主人様を危険にさらす剣や矢。この愛紗が必ずや守ってみせます」

「鈴々もお兄ちゃんを守るのだ！！」

「主。私もいますぞ」

いつのまにか鈴々と星が信長の近くまで来ていた。彼女らも信長を守ってくれるのであろう。

彼女らを一通り見回した後、信長は満足したのか再び洛陽へと歩き出す。

袁紹軍の兵も織田の総大将自らが先頭に立ち、危険な道を歩き出したため黙って歩き出した。

だがしかし、董卓軍の伏兵はおるか、襲撃すらなく、なにもないまま洛陽へと到着した

「何もおこらなかつたね」

「敵の手中が読めませんね・・・」

「ふむ。・・・ならば入城するぞ」

「大丈夫でしょうか？」

「構わぬ。敵が何を考えておるかわからぬが、わざわざワシらを阻まず、ここまで接近させる事はないであろう。戦闘が起こらなければ兵たちに狼藉はさせぬよう徹底せよ。」

朱里、雛里は街の有力者を探し、交渉せよ」

「御意です」

信長が指示をとばしていると、忍びの一人が戻り、信長に街の情報伝えた。

どうやら、街は変わった様子は無く、悪政などといったことが行われた形跡がなかったらしい。

「ふむ。・・・董卓は権力争いに飲まれたということか」

「はい。そして董卓さんが処断されるまではこの争いは収まらないでしょう・・・」

「そんな・・・董卓さん・・・かわいそうだね・・・」

「殿」

忍びがさらに驚くべき情報を告げた。董卓がこの洛陽を捨て逃げようとしているとのことであった。

忍びたちはなかなか董卓の人相を調べる事が出来ず、今まで時間がかかり、そしてやっとわかったらしい。

この洛陽の街で、街には兵士がおらず、とある人物の周りにだけ、数人の護衛がついており、将らしき人物、女二人が今まさに脱走しようとしているらしいとのこと。

追跡すると、董卓と賈？という名前が出て確信したとのこと。そして、忍び十人が今董卓たちを囲い逃げ出さないように今は圧力をかけているとのこと。

「ふむ。・・・董卓はこの重荷を捨てるか」

「あう・・・確かに権力争いの火種は洛陽という都の存在。そして、劉協様を独占されるのを恐れるため・・・最良の選択です」

「しかし逃げても無駄・・・か」

桃香、愛紗、鈴々は悲痛な顔をしている。

悪性を働く董卓は実際にはそんな事しておらず、権力争いに巻き込まれただけ。

そして、自分たちもそんな罪無き董卓を討とうと言っていた。

董卓はこの街から逃げても追われ・・・死しかもうないのだ

「往くぞ」

「うん・・・」

「はい・・・」

「合点・・・」

そして、入場し・・・目指す場所は董卓の下へ

忍びに促され、信長たちは董卓の元へ向かった。その場所には六人ほどの護衛と、優しそうな雰囲気の少女と眼鏡をかけた少女が織田の忍びたちに囲まれていた。

護衛と忍びは一定の距離を保ち、囲んでいるため兵はうかつには動けなかったようだ。
そしてこの男が到着した。

「うぬが董卓・・・であるか」

「え・・・？」

「だ、誰よあんた！！」

眼鏡をかけた少女がきつく信長を睨んでくる。

「ワシは連合軍、織田上総介信長よ。うぬが董卓であるか」

「れ、連合・・・わ、私よ！私が董卓よ」

「黙れ！うめには聞いておらぬ！」

「うつ・・・」

信長は眼鏡の少女をきつく睨みつける。その信長の睨みに少女はたじろぎ、口を閉じた。

「もう一度聞こう。うめが董卓であるか」

「はい・・・。私が董卓です」

「ちょ、月っ！？」

「もういいよ・・・詠ちゃん・・・」

「董卓。うめらを逃がすわけにはいかぬ。ワシらはうめを見つけた以上取り逃がせば責任を負わされるであろう」

「くっ・・・」

賈？が周りを見渡す。信長の将のほか、兵、そして忍びまでいる。対してこちらは護衛六人のみ・・・逃げるのは無理であろう。

「じゃあ・・・私だけを捕まえなさい！！董卓に逃げられたとしても、賈？を捕まえたのよ！きつと責任は少ないはず！」

「うぬの要望は無価値・・・。うぬは董卓に生きて欲しいのであろう。しからは今、この時だけ生きたとしても連合は必ずや董卓を地の果てまで追いかけるであろう。うぬの死はまさに犬死にぞ」

「じゃあ・・・どうしろってのよ・・・」

「詠ちゃん・・・大丈夫だよ。詠ちゃんは生きて。私が死ねば詠ちゃんは生きられるでしょ？だったら私はそれでいいよ」

「だ、だめよ月！！そんなの駄目！！！！そんなの・・・嫌だ・・・うつ・・・うつ」

賈？は董卓を力の限り抱きしめ泣いている。
董卓は優しく目を瞑り、親友を慈しむかのように優しく背中を叩いている。

まるで、愛しい我が子を泣き止ませるかのように・

「ご主人様・・・」

桃香がもらい泣きしたのか眼を潤ませ信長の顔を見上げる。

「・・・・・・・・。朱里と雛里を呼べ」

信長は忍びに朱里と雛里を呼ぶように指示した。

それから数分後、朱里と雛里は息を切らせながら信長たちの元へや
つてきた。

「お、お待たせしました。うう、噛んじゃった」

「あわわ・・・貴女が董卓さんと賈？さんでしゅね。あう・・・」

「そ、そうよ！なんなのよあんなたちは！！」

「朱里、雛里。忍びから聞いたか」

「はい」

「うぬらの知恵で・・・可能か？」

「はい！お任せください！！私たちのお仕事は頭を使う事です！」

朱里は自信があるのか笑顔を信長に返す。

「董卓さん、賈？さん。貴方たちの顔を知っている人は連合にはいません。少なくとも私たち意外は」

「私たちも忍びさんたちを使ってやっとわかりました。そして、今お二人の顔を始めて見ました」

「そ、それがどうしたってのよ！」

「だから・・・お二人の存在だけ死んでもらいます」

「は？」

「死体を二つ用意します。そして、どこか燃やす事が可能な家が、小屋、どちらでも構いません。

そして死体には董卓さんと賈？さんが着ている服を着せます。そし

て火を放てば完了です」

「焼け残った家、もしくは小屋からは董卓さんと賈？さん、判別不能な死体が出てきます。同時に董卓と賈？は逃げ切るのは不可能と判断し、自ら小屋に籠り火を放ったと流せば恐らく連合は信用するでしょう」

「なるほどさっすが！朱里ちゃんと雛里ちゃんだね」

「董卓、賈？。後はうぬらの判断ぞ。ワシらを信用するか否か」

「一つ質問があります」

董卓が信長を見つめ、そう口にした。

「私たちを助けて、貴方たちになんの得があると言うのですか？」

「……。ワシはうぬらが死のうが生きようが関係ない。こやつがそう願ったからぞ」

そう言い、信長は桃香の背中を押し、桃香は二人の前に出る。

「私ね。……いつかみんなが笑って暮らせる世を作りたいの。その

ためには・・・たくさんの人を救いたい！いっぱい・・・いっぱい！
私の目の前で・・・死ななくていい、たった二人の人を救えないのに
この世の中のたくさんの人を救うなんてできないよ！

だから私は貴方たちを助ける！！絶対死なせない！！だから二人は
生きて！！

そして一緒に見よう？もう二度と貴方たちみたいな人が出ない平和
な世を！！」

そう桃香は必死に叫び、頭を下げ、手を二人に差し出す。

董卓と賈？は迷っていた。この手を掴んでいいのか悪いのか。

「ボクたちは・・・人の甘言に乗ってこんな権力争いに巻き込まれた・
・・・
その権力争いの一端を担っていた人間が、今・・・手を差し伸ばして
きたって・・・」

「・・・詠ちゃん」

「・・・え？」

「月・・・？」

董卓が桃香の手を握っていた。その行動に賈？は驚き、桃香自信も驚いた。

「詠ちゃん。私、この人たちを信じたい」

「でも・・・」

「うん、詠ちゃんの言いたい事、よくわかるよ？だけど・・・このまま涼州に帰れば、街のみんなを・・・母様と父様を巻き込んだんじゃう・・・」

「それが嫌？」

「・・・うん」

「・・・分かった。月の判断に従うわ」

「ホント・・・？」

桃香が顔を上げ、董卓の顔を見る。

「はい。私たちの身柄、あなた方にお預けします」

「や・・やったー！！ありがとうございます二人とも」

桃香は賣？の手も握り、二人の手を両手で優しく包み込む

「しからばうぬらはもう表舞台には出れぬ。袁紹と袁術は宮中に入りしていたであらう。おそらくうぬらの顔を知っているようぞ」

「そうですね・・姿を隠し・・あとは名前を捨ててもらう必要がありますね」

「・・だが名とはその人と為りを示すもの。おいそれと捨てる覚悟がつくかどうか・・」

「・・捨てます。少し、悲しいけど・・でも、それで周囲の人を巻き込まないですむのなら」

「別に名前を捨てる必要なんてないわ。ボクと月の真名をあなたたちに預ける。そうすれば名を捨てる必要はないわ。」

董卓の真名、月とボクの詠という真名を知っている人は少ないわ。

あんたたちに預ければ呼び名の問題は解決するはずよ」

「そうだね。でも・・・いいの？」

「ふん！私は構わないわ！こんな救って得もないような私たちを頭を下げてまで頼み込む酔狂な人間なんて珍しいからね」

「私も・・・」

「二人とも・・・ありがとう」

「それでは・・・私は董卓・・・字は仲穎。真名は月です」

「ボクは賈？、字は文和。真名は詠・・・ボクのこととはどうでもいいからとにかく月のことだけはちゃんと守ってあげてよ」

「じゃあ次は私ね。私は劉玄德。真名は桃香！よろしくね」月ちゃん、詠ちゃん」

そして、全員の自己紹介が終わる。だが、朱里と雛里はすぐにその場を去った。

月と詠の隠蔽工作のためだ。

街の有力者は最初、一つの小屋を燃やす事を渋っていたが、董卓の命を守るためだと告げたらすんなりと許可してくれた。
月がどれだけ街の者たちに慕われていたかがわかるようであった。

群雄割拠の始まり

反董卓連合と董卓軍の争いに決着がつき、早一ヶ月。

信長たちは平原に戻り、戦後処理や通常業務を行っていた。

そんな信長たちの元へ、使者が訪れ一編の書簡を提示した。

「平原の相、織田上総介信長。先の董卓討伐において多大なる功績をあげたことを認め、徐州の州牧を命ずる。かしこみて帝のご仁慈をお受けするように」

「あい、わかった」

信長は使者へ了解した事を告げ、使者は帰っていった。

「州牧ってな〜に？」

「以前は刺史と言われていたものですね。靈帝の時代に州牧という名に変更され、権限なども刺史や牧よりも大きなものになっています」

「太守みたいなものだと考えて良いかと・・・」

「太守・・・太守なんだご主人様・・・」

桃香が驚いた表情で、信長を見上げる

「皆、徐州へ移動するぞ。すぐに支度をせい」

「引越しなのだー！引つ越ししゝゝ新しい街はどんなところなのかな？」

「徐州は東は黄海に連なり、西は中原と隣接すると古くから五省に通ずる地として知られているところですね」

「高祖劉邦の故郷でもあります。桃香様にとっては、ある意味お里歸りに近いかもしれませんね」

「桃香は中山靖王劉勝が末裔であつたな」

「嘘かホントかはわからないんだけどね・・・唯一それっぽいのはこの靖王伝家だけなんだよね」

桃香が自身が持つ靖王伝家を手に取り、難しい顔をする。

「お姉ちゃん。ホントかどうかなんてどうでもいいのだ。大事な今は今なのだー！」

「……うん、そうだよね鈴々ちゃん」

鈴々の言葉に桃香は顔を明るくさせた。

「よし！じゃあ皆！次の徐州でも頑張って街を良くしてこー！がんばろー！おー！」

そして、織田軍は平原から徐州への旅支度を整える。

信長にとっても、劉備三姉妹にとってもこの地は、思い出深い地。

何もなかった流浪の身から、黄巾の乱を経て手に入れた大切な地。だが、こんなところで留まってはいけない。

信長は最後に、城門前から一度振り返り、街を一通り眺めた後、二度と振り返らず徐州へ向けて行軍を開始した。

場所は変わり・・・

「恋どのー！！！！吉報ですぞ！」

「ちんきゅー・・・」

「今しがた、袁術からの使いの者がやってきて、共同作戦を提案してきたのです」

「共同・・・？」

「そうですね。徐州に赴任したばかりの織田に対し、軍事行動を起こすのです。それで織田を追い払って徐州を山分けなのです！」

「・・・」

「我が軍は前の連合との戦いの後、徐州の端にあるこの城を手に入れましたが、兵を養うための兵糧も残りわずか。

このままではまずいのです。だから恋殿。袁術と同盟を組み、織田をやっつけるのです！」

「袁術・・・信用できない」

「そ、それは分かっておりますよお。だけど今は織田をやつつけないことには、みんな飢え死にしてしまうのです！」

「・・・お腹減った」

「です・・・だからこそ恋殿お。ご決断を」

「ちんきゅー・・・・・・・・・・出撃準備」

信長たちが徐州へきて、一ヶ月が経過した。

ようやく徐州の生産高や産業の状況などが纏め終わった。

徐州は平原とは比べ物にならないほど規模が違うため、信長や朱里、雛里、桃香は四苦八苦していたが、幸いにも信長や朱里、雛里は普通の文官たちとは違い、仕事が速かったため、一ヶ月である程度軌道にのれたようだ。

「朱里報告を述べよ」

「はいっ！えつとですね、徐州の生産力は平原よりも大幅に高く、

また鉄や銅などを産出することも可能です。

人口も多く、交通の便も良いことから商業も盛んですし・・・力を蓄えるには良い土地かと思われます」

「しかし、それだけ治政が難しいと言っても過言では無いと思います・・豊かさを目当てに諸侯が攻めてくる可能性が高いです・・」

「なるほど、じゃあすぐに軍備の拡張をしなくちゃね」

「だが、内政をしつつ軍備の増強を図るのはいいが、なかなか骨が折れそうだな」

「はい。軍備とは即ち兵。兵というものは基本的に非生産階級ですから、兵を充実させれば、生産力が落ちるのは当然です」

「その両者の天秤を平らに保つ事こそ、富国強兵の理想かと」

「うへ・・・なんか大変そう・・・」

朱里と雛里の説明を聞き、桃香はうなだれる。鈴々や愛紗、星は基本的に軍事関係を担当している。

桃香は軍事に関してはからきし出来ないため、桃香は内政面を手伝っている。

その難しいことを桃香はしなければいけないからだ。

「ふむ。難しくとも達成させなければ、ワシらはこの時代の波に乗れぬ。皆、しかと働くのだ」

「おー！（はい！）」

そしてこれから仕事に取り掛かるうとしていたとき……

「も、申し上げます！！！」

「何事だ！」

「ただいま城門にて、こ、公孫？様が！」

「伯珪殿が？ふむ。州牧就任の祝いにでも来てくれたのか？」

「いえ、それが多数の兵を引きつれ、信長様、劉備様に保護を求めていらっしゃるのです！」

「ほ、保護!？」

そこにいる全員が報告を受け、動揺している。桃香にいたってはもうその場を後にして走り出してしまっていた。

「ふむ。白蓮にはワシも含め世話になった。往くぞ、案内せよ」

「はい!」

信長たちは桃香の後を追うように、城門へと向かう。

城門ではすでに、桃香が白蓮と対面していたようで、焦った様子で白蓮と話していた。

白蓮の様子は、鎧のところどころに血の跡があり、そして、黒いすすの汚れも目立つ。

どうやらただ事では無い様子であった。

「信長・・・桃香・・・すまん。いきなりここに転がり込んでしまつて・・・」

「構わぬ。訳を申せ」

「麗羽が・・・袁紹の奴が奇襲を仕掛けてきて、遼東の城を全て落とされたんだ・・・」

「何っ!？」

「袁紹が攻めてきた・・・?」

「ああ。反董卓連合の後、私は本国に戻って内政に取り掛かっていったんだ。だけどもある日、宣戦布告の使者が来ると同時に、国境の城が次々と落とされてしまつて・・・」

「反撃したのかー?」

「したさ!だけど気づいたころには領土の大半を制圧されていて、反撃するにも兵力が足りず・・・」

「落ち延びてきたという訳ですな」

「恥ずかしながら、そういうことだよ」

「ふむ。白蓮。とりあえずうぬが無事で良かった」

「信長・・・」

「今のワシらがあるは、うぬのおかげ。此度はうぬを歓迎しようぞ」

「いいのか・・・？」

「気にしないで白蓮ちゃん♪今度は私たちが白蓮ちゃんに恩を返す番だよ」

「ええ、その通りです」

「お互いさまなのだー！」

「皆・・・すまない・・・」

白蓮は気が抜けたのか、その場で座りこんでしまった。

信長、桃香、愛紗、鈴々は白蓮に多大な恩があるため迷惑などとは一切思っていない。

皆、このなごやかな雰囲気笑顔をこぼしているが、軍師たちだけは険しい顔をしている。

「これから・・・戦が激化しますね・・・」

「そうだね。北方を抑えていた公孫賛さんがいなくなってしまったからには袁紹さんの背後を脅かす存在がいなくなっただってことだもんね」

「袁紹は西進か・・・南下か・・・ということか」

「クソ・・・私が甘かった・・・麗羽がそんなことするはずないって思ってたんだが・・・」

「クク・・・白蓮よ。この乱世で息つく暇なぞない。此度は完全にうぬの失策ぞ」

「ご主人様！」

信長の発言に桃香は声を荒げる。しかし、それを白蓮が制した

「いや、良いんだ・・・信長の言う事は尤もだよ私の完全な失策だ。信長・・・もう私には麗羽に対抗する事ができない・・・でも悔しいんだ！！自分にも！麗羽にも！！」

それで・・・お前が良かったら私を配下にしてくれないか？」

「白蓮ちゃん・・・いいの？」

「ああ。お前たちの元で一緒に戦えるのなら本望だ。それで・・・頼む！！」

白蓮はその場で頭を下げ、土下座の形をとる。

その様子を見ていた白蓮の兵たちも一斉に同じ形をとった。

やはり、白蓮は兵たちに好かれている、立派な将だったのだろう。

「お前ら・・・すまない・・・」

「ご主人様・・・」

「うむ。是非もなし！うぬらのようなものが我が元にくるのなら願っても無いこと。

これからは織田の一員として、しかと励むが良い。期待しておるぞ。公孫伯珪よ」

「ああ・・・、あり・・・が・・・と・・・」

「白蓮ちゃん!!??」

白蓮がその場で倒れてしまった。すぐさま星が白蓮の脈をみると、生きているようだ。

北方からの遠征で疲れてしまったのだろう。
すぐに医務室へと、桃香は白蓮を運んでいった。

「クク・・・混沌の時代がこれより始まる・・・か」

「あう・・・漢王朝にすでに諸侯を抑える力がありません・・・群雄割拠を迎えるのはまさに必然だったのかもしれませんが・・・」

「始まりますね・・・私たちの天下布武への道が」

その場にいる全員が感じていた。これから長い戦いが始まる事を。
空気が緊張している。

信長は腕を組み、目を閉じ、心の中で思う・・・

（日ノ本で果たせなかった我が野望・・・この三国の地にて、果た

そう・ぞ
(

世界の秘密（前書き）

読者様のご指摘で、信長は小姓の男性の趣味はマッチョな男がいたとの事で、信長様は例のあいつがあらわれても動じません。メンタル強いです。

世界の秘密

白蓮が織田軍の配下となったその晩、信長は自室にて残りの政務をこなしていた。

風の音が戸を叩く静かな晩、彼の仕事も捗るというものだ。

ガタガタ

ガタガタ

「今宵は風が強い」

ガタガタ

「はあゝいっ」

そこには下着を一枚身に着けた筋肉隆々の男？が戸を開け信長の部屋へと足を踏み入れる。

「汝・・・何者ぞ。答えようによつてはそつ首叩き落してくれようぞ」

「いやゝん、怖いわ・・・うふつ。私はしがないただの踊り子よ」

「クク・・・この信長、踊り子は幾人も見てきたがうぬのような踊り子は見た事がない」

そう言い、信長は村正を抜刀し男の首にあてがう

「滅せよ」

信長は村正を大きく振りかぶる。そして、今まさに振り下ろそうとした瞬間

「尾張のうつけ」

男がその言葉を口にした瞬間、信長は振り降ろそうとした村正の動きがピタリと止まる。

「織田上総介信長。天下布武を掲げ日ノ本の大半をを手中にした。だけど、部下の明智光秀の謀反によって志半ばにしてその夢が断たれた」

男は一切動じることなく、信長のことを話す。
それは一切間違っていない、まさに事実である。

「答えよ。なぜその事を知っておる。うぬはこの地の者ではないと
いうか」

「私は貂蟬。この名前知ってるでしょ？」

「うぬがか？あの傾国の美女の貂蟬と申すか！」

「あらいやだわゝもう、美女だなんて。ホントかわいいんだから。
そんなに見つめちゃ、い・やゝ」

貂蟬が体をくねくねさせながら照れたような仕草を見せる。

しかし、信長は動じず、腕を組み貂蟬について考える。

この地では男性の将が基本的に女性になっていた。

ならば、女性が男性に変わってしまったてもおかしくはないだろうと。

「まあよい。うぬがあ貂蟬であろうが無かるうが構わぬ。して、うぬは何者ぞ」

「そうね。まず、信長ちゃん。貴方は本能寺で命を落とそうとした瞬間、声を聞かなかったかしら？」

「うむ。そしてその声に導かれ、ワシは光の道を歩き、気づけば幽州の地にて倒れておった」

「そうね。その声は私よ」

「ほう。しからばうぬがワシの命の恩人と申すか？そして、今、その報酬を望むか？」

「そうね・・・あながち間違ってはいないかもね」

貂蟬がその体に似合わない、少し暗い雰囲気をかもし出している。恐らく、言いにくい事なのだろう。

「構わぬ。申せ。ワシが応じれるものであれば可能な限り報いよう。第二の生という奇跡をワシはお主からもらったのだ」

「そう、じゃあ単刀直入に言うわね」

そう言うつと貂蝉はたたずまいを正し、事を告げようとする。信長も自然に姿勢が伸びる。

風貌に似合わず、真剣な話であろうと直感した。

「信長ちゃんにお願いする事は唯一つ……」

天下をとって頂戴。それだけ」

貂蟬から告げられた報酬はここで天下を取るというものであった。それは、信長が目指すものと同じ、天下統一である。

「ほう。何故天下を望む？ワシがとつた暁には領土を寄越せということか？」

「いいえ。違うわ。私はただご主人様。そして曹操ちゃんに幸せになつて欲しいだけ」

「ご主人様・・・？曹操・・・？」

信長は聞いた事のある名前に少し戸惑った。曹操？何故ここで曹操

の名前が出る。

だが、貂蟬の話は止まらず、信長が考えている事の答えを全て話す。

「ご主人様・それは北郷一刀ね。そして曹孟徳。この二人はね。恋仲なの」

「恋仲・・・？」

「ええ。でもそれは別の外史でのお話。でも、この外史でも必ず同じ結果になるでしょうね。」

だって、二人は悔しいけどお似合いなのよ~~~~~ん！」

「黙れ」

信長が再び村正を抜刀し、貂蟬の首にあてがう

「も、もう！ちょっとくらい感傷に浸らせてくれてもいいじゃない！せっかちな男はもてないわよ」

「続きを申せ。全てうぬが知っている事をワシに話すのだ」

「わかったわよ。じゃあ話すわね」

「うむ」

信長はもうこの男はふざけないだろうと感じ、自分がいつも寝ている寝台に腰掛けて話を聞く体勢を整えた。

貂蟬もその場にドカッと座り、貂蟬は信長を見上げる体勢で話を進める。

「まず、外史というものについて話すわね」

「ああ。ワシに構わず話せ。分からないところがある度にその都度お主に問おう。途中で止まらず話し続けるのだ」

「わかったわ。まず外史とは正史とは違った別の世界の事。たとえばそうね・・・」

もし、劉備や関羽、張飛が女だったら？

曹操と夏侯惇　が愛し合っていたら？

孫策が死なず、存命だったら？

いろいろ考えたらキリがないわね。それらの世界。それが外史。つ

まりここもまた外史。

そして、私は外史の管理者なの。だから、私はいろんな外史を見てきたし、その中で手助けをしたりもしたわ。

その中でご主人様と出会ったの。そ・し・て・・いやん♪」

貂蟬が再び体をくねくねさせる。だが信長の姿勢は変わらない。今のこの空いた時間で整理しているのだろう。

「あら私ったら、ごめんなさいね。つい脱線しちゃったわ。

それで、私は北郷一刀の作る外史をたくさん見てきたわ。それこそ数え切れないくらいにね。

あの時、あれを食べた。

あの時、あそこに行かなかった。

あの時、戦で負けた。

それだけでも、外史はまた多く分岐する。でもね、歴史はそれをうまく修正して、結局は同じ終着点にたどり着くのよ。それまでの道程が違うだけ。

結局世界や歴史の力ってね、強いよ。

たかだが一人の男が、ましてやただの何も出来ない人間が介入しただけでは歴史はそうは変わらない。

この乙女だらけの三国志はね、やっぱり外史であって、正史とはたくさん差異が出るの。

まず一番の正史との違いは、赤壁。これが一番ね。

夷陵の戦いや五丈原。そんなものは無いの。赤壁がまさに天下分け目の戦い。最後の大きな戦いね。

ご主人様が桃香ちゃんたちの蜀に降り立った外史では赤壁で勝ち、呉でも勝つ。そういうお話だったわ。

それは何度繰り返しても同じで、百回あったら百回とも赤壁で勝ち、戦いは終わるわ。

そして・・・一番の問題は・・・魏。

魏に降り立ったご主人様はね、赤壁で勝っちゃうのよ・・・これは歴史や世界を覆す行為。

正史では歴史的戦いの赤壁では魏は大敗する。でもご主人様は正史を知ってるから勝っちゃうのよ。それがダメなの・・・

世界はその矛盾を許さない。結果・・・ご主人様は最後には消えちゃうの・・・愛した曹操ちゃんの目の前でね・・・うつ・・・ぐすつ・・・私見てられないわ・・・」

貂蝉が泣き出してしまった。だが信長は気にしない。

それよりも入ってきた情報が非常に多いことに整理するのが大変なのだ。

「消える・・・とな」

「ええ。作られた外史とは言え、やっぱり基本は三国志なの。その三国志を根本から覆しちゃうからね。でも赤壁で勝たなきゃ愛する曹操ちゃんや魏の面々を失っちゃうわ。優しいご主人様にはそれが許せないのよ・・・」

男としては愛する人たちの為にやったこととして満点だけど・・・

歴史や世界としては、許されざる行為なのでしょうね・・・」

「なるほどな。三国志の世界を曲げすぎでは世界に消されるという事か」

「ええ。そこで頼みたいのが信長ちゃん。あなたよ」

貂蝉がそのまっすぐな瞳を信長へと向ける。
なぜここで信長なのだろうか？

「この物語は天の御遣いによる、魏、呉、蜀のそれぞれの物語。

主役はもちろん天の御遣いの北郷一刀。

そして、魏での場合は主役は最後、歴史を大きく変えたことによる罪により、世界から消される悲劇の物語。

じゃあ、ご主人様が消えないためには？」

「世界を曲げてはいけない」

「そう。その通りよ。定軍山での夏侯淵 救出など、赤壁以外でもたくさんご主人様は世界を変えたわ。」

では、どうすればご主人様が消えないのか？答えは簡単・・・

信長ちゃん。あなたが主役になればいいの」

「ワシが・・・？」

「ええ。この物語の始まりは基本いつも通り、北郷一刀が魏に降り立った物語。」

だから、いつもと同じ事をご主人様は繰り返すわ。

でもね、そこに私が貴方を介入させたの。

そして、あなたはこの後、どんどんと活躍していく・・・そして、気づけばこれは主役は北郷一刀ではない。織田信長だってことにしてほしいの。

これは北郷一刀が魏に降り立った話ではなく、「織田信長が乙女だらけの三国志に介入した物語り」だ。ってことにね。

そうすれば、ご主人様は自らの手で歴史を変えない、変えれない。だって、自分の知ってる物語じゃないからね。織田信長なんて三国志にいなかったから。

そして、三国志との類似点はご主人様じゃなくて、貴方が変えるの。

たとえばそうね・・・例として貴方が魏の立場に立ってみるとか・・・？
そうすれば、本来曹操がいるべき場所に貴方が立ったら、それは北郷一刀によって変えられたのではなく、織田信長に変えられたということになるわ。

そうすれば、ご主人様の手で変えたのではないから、ご主人様が歴史を捻じ曲げた事にならないわ。

そうすればご主人様は消えない・・曹操ちゃんと愛し合うことができる・・・

これは織田信長による物語・・貴方の好きにして頂戴。世界をしつつやかめつつやかにして。
そして北郷一刀を脇役にして頂戴。

あなたならできるわ。貴方はただの人間ではない。
貴方は死ななかつたら必ず日ノ本の歴史が変わっていたであろう人物。

凡人ではない英雄。あなたならきっと世界すら変える事ができる・・

┐

貂蝉は長くしゃべった事に疲れたのか、傍にあつた水を一気に飲み干し、一息つく。

信長は黙って腕を組み、目を瞑り考える。
貂蝉の言いたい事はおおよそわかった。

そして、最後に気になったことを告げた。

「話は分かった。だが一つ聞きたいことがある」

「あら？なにかしら？」

「うぬの申した話では最後、主役は消えるのであろう？世界を大きく変えた代償として」

「そう・・・消えるわ・・・つまり・・・信長ちゃん。あなたが」

「ふむ」

「あら？驚かないのね？」

「元々ワシは最後にはここを去るつもりであつた。桃香に全てを任せてな」

「どうして？」

「あやつは平和な国の統治には向いていよう。そして、あやつには仁がある。

そんな人間の下には人が集まってこよう。

ワシは魔王として、人に恐れられておる。そして、ワシの隣には優しい桃香がおる。

ワシはこれより、天下を取るために様々な手をおおう。
その中には快く思わん、部下や民がいよう。

そやつらはワシを目の敵に思うであろうが、桃香はそんな者たちにも好かれよう。

桃香がおるからこそ、我慢できる者もいようぞ。

そして、天下をとった暁には、そやつらはワシがいることで不安になろうぞ。

「魔王が天下を取った。地獄が始まるのではないか・・・」とな。
そやつらにとっては桃香だけが頼み。救いである。

そんな時にワシが消えたらどうなる？
不安は全て消え、救いであつた桃香が残る。

民や部下らの不安や憂いは全て消える。さすれば不満を持つものは
おらぬ。

天下に長き安寧が訪れよう・・・ぞ」

「信長ちゃん・・・あなたそれでいいの？人々の不安や恐れを一身に
受け、そしてそれを全て抱えて消えることに」

「構わぬ。どの道ワシは最後消えることに変わりはない。ならばそれすら利用しようぞ」

「そう・・・わかったわ。ごめんなさいね、こんな役目を負わせて」

「構わぬ。ワシは志半ばで天下を諦めざるを得なかった。だがワシにもう一度天下を取れる機会をうぬは与えてくれたのだ。この信長が天下に通用しようか否か。それを確かめたかったのだ」

「信長ちゃん・・・頑張ってたね」

「クク・・・是非もなし。この信長の霸道・・・しかと見届けい!!」

「ええ。じゃあ今日はお暇するわ。じゅあね」

そう言っつて貂蝉は消えるように外へとつながる戸から去っていった。

（この世界をワシの物語に染め上げる・・・か。この信長の天下布武の物語・・・クク・・・しかと楽しませてもらおう・・・ぞ）

正体不明の部隊

白蓮が目を覚まし、白蓮の部隊の兵を織田軍の兵とし、組み込んでいいかと白蓮に聞いたところ、本人は構わないと答え、白蓮の兵たちも納得し、これからの事を話そうとしていた矢先・

「も、申し上げます!!」

「なにごとだっ!」

織田の兵が慌てて広間に飛び込んできた。その慌てぶりに愛紗が怒鳴るように聞く。

「え、袁術の軍勢が国境を突破し、我が国に侵攻してきました!!」

「なんだとっ!??ど、どういうことだっ!??宣戦布告も出さず、奇襲を掛けて来たと言っのかっ!?」

「はっ!国境の警備隊を突破後、猛烈な勢いで侵攻してきております!このままでは、州都に到着するのは時間の問題かと!」

「く・・・鈴々!星!すぐに迎撃の準備だ!」

「応！」

「合点！」

織田の軍勢は、袁術を迎え撃つために進軍を開始した。敵の袁術軍の兵力は織田の兵力を上回っており、兵力でいけばかなり苦戦するであろう。

数で勝る袁術軍は平野に陣を敷いているようであった。

「ご主人様。忍びの話によると、袁術さんの部隊の中には正体不明の部隊がいるようです」

「で、あるか」

「その部隊だけ、兵の錬度が段違いに高いそうです・・・誰が率いているかはわからないそうです・・・」

「錬度が違うということは、それだけ優秀な将が率いているということか。しかし・・・袁術のところにそれほど優秀な人材がいたのだろうか？」

星が眉をしかめながら、考えるそぶりを見せる。袁術のところに優

秀な将は大将軍張勳しかいないという話である。

それは皆知っていること、ではいったい誰が率いているのだろうか。

「もしかすると、客将という扱いで袁術さんに保護されている、孫策さんが出てきたのかも・・・」

「孫策・・・か。しからは何故正体不明にする必要があるう・・・。孫策が袁術軍にいることは周知の事実。恐らく他の誰かであろう」

「ふむ。朱里、雛里。この数の差を埋めるには何かしら策が必要であろう。何か無いのか？」

「まだ・・・情報が少なすぎてなんともいえませんね。敵の手中がまだ読めません」

「では袁術の情報を申せ」

「袁術さんのですか？えーっとですね・・・彼女は先の戦いの袁紹さんの従妹。寿春に居を構え、お世辞にも良い政策をしているとはいえませんが。」

まだ、幼く軍事、そして、知識もあまりない言われていますね。

ですので、実質張勳が政のほとんどを行っているかと。
あ、あと大の蜂蜜好きという情報も入っていますね」

朱里がたんと袁術に関する情報を述べる。

その言葉を一言一句聞き漏らさず信長は目を瞑り何かを考えているようだ。

「暗愚・・・であるか？」

「そうですね。この乱世に覇を唱える者にはふさわしくないかと・

」

「では、張勳の情報はるか？」

「そうですね。武勇についてはあまり高く評価はされていませんね。
一般兵より上くらいかと。

知については、実質一人で政、そして、戦での策を考えているようです。

実質、張勳一人で袁術軍はもっているかと」

「ふむ・・・では、張勳の策にのみ気をつければよいか」

「そうですね。そしてその張勳は袁術を溺愛しているという情報も

入っております。袁術の命令には決して逆らわないと」

「しからば、袁術が撤退を命じれば、優勢であつても撤退すると?」

「恐らく・・・」

信長が再び考え込む。

頭の中には今まで入った袁術、張勳の情報。
使えそうな情報は全て、引き出す。

この戦の穴、弱点。

軍事、知識無し。蜂蜜水。暗愚。・・・そして溺愛。
信長の頭に一つの策が思いついたようだ。
目をカッと見開き口を開く。

「ふむ。此度も忍びを使う・・・か」

「ご主人様。何か策が?」

朱里が信長に策の説明を求める。その問いに対し信長は

「クク、成功するか否・・・か。この策が成功するようでは袁術は本物の暗愚であるぞ」

不適に笑みを漏らす

「・・・？成功するはずがない策・・・？」

信長の策に首をかしげる朱里。

成功するようではこの乱世を勝ち抜けるはずがないという。いつたい、信長はどのような策を思いついたのか？

朱里は信長の策にはいつも驚かされている。

時には自分自らを罠にし、敵を誘い込んだりする。

いつも無茶をするご主人様。此度はいつたい・・・。

場所は変わりこちらは袁術陣営・・・。

「七乃々妾はお腹が空いたのじゃ」

「駄目ですよ！今は戦の前の準備中ですから」

「むむむ・・・」

袁術が張勳に対して駄々をこねている。

その様子を張勳は愛しそうに眺めているいつもの光景。

「はあ・・・まだ戦は始まらんのか？もう出発して二日じゃぞ・・・」

「そうですね、もうそろそろぶつかってもいいころなんですけど・・・やっぱり美羽様の軍勢が優秀すぎて敵はまだ準備できていないんですよ。足が速いのも困り者ですね」

「おう、さすが妾の軍じゃ！！」

「そうです、そうです。よ！天下ー！兵を鍛えているのは自分じゃないのに、さも自分が鍛えたかのような誇らしい姿さすがです！」

「わはははは！もっと褒めてたも！」

袁術が高笑いをし、張勳はそれを褒めているのかけなしているのかわからない、戦前とは思えない空気が流れている。
そこへ・・・

「報告します！」

「どうしました？」

そこへ、袁術軍の兵士が一人片ひざを付き、報告を述べに二人の下へとやってきた。

「織田軍は、いまだ行軍中。しかし途中で何かがあったのか、進軍を停止しているようです。
恐らく、この地に到着するにはあと二日ほどかかるでしょう」

「な、なんじゃとー！！あと、二日もかかるのかや？」

「はい・・・恐らく」

その報告を受け、袁術は驚き席を立ち、急にうなだれる。

よっぽど、ショックを受けたのだろう。

「うーん、どうしましょう。美羽様、敵になにかあったのならこちらはずぐに進軍し、その隙をつきましょう」

「嫌じゃ、嫌じゃー！もう動きたくないのじゃ！」

袁術がまた駄々をこね始める。その様子を張勳は困ったような、恍惚としたような不思議な顔をしている。おそらく後者のほうが大きいのだろう。

「袁術様」

「なんじゃ？」

「その・・・敵はまだこちらに来るにはあと二日ほどかかります・・・兵たち全員に休息を与えてはいかがでしょうか・・・」

兵が再び口を開いた。どうやら全軍に休息を与えてはどうかと提案してきたのだ。

「休息・・・？」

「はい・・・、戦が始まれば、当然しつかりとした休息を取れません・
しかし、今ならまだ余裕がありますゆえ・・・」

兵は顔をうつむかせ、いいにくそうにしている

「なるほどのお・・・だがしかし・・・」

袁術もわかつているのか、はつきりとした答えを出せないでいる。
答えを求めようと張勳の方に顔を向けると、当然の結果であるが首
を振っている。

「むむむ・・・やはり・・・敵を目前にして、警戒を解くなぞ」

兵が懷に手をいれ何かを取り出す。それは甘い香りを放ち、袁術の
鼻腔をくすぐる。

その香り、形を見た袁術は目をキラキラと輝かせ、その物に心を奪
われているようだ。

「実は先程、蜂蜜水を手に入れまして・・・袁術様のお疲れが取れ
るかわかりませぬが・・・」

「おお！！それはよい！ささっ！はやくこちらに渡すのじゃ！」

そして、兵の手から袁術の元へ蜂蜜水が手渡される。袁術はずっと我慢していたのかそれを一気に飲みほした。

「ぶはー！！やっぱりうまいのじゃー！！」

「もう・・・美羽様。あんまり勢いよく飲んだらお腹いたいいたいになりますよ?」

「うう・・・それは嫌なのじゃ・・・」

「袁術様。我が軍にはあの者もおりますゆえ、圧勝は間違いなしでしょう。ここは戦勝祝いということでしょうか?」

「むっ！そうじゃな！そうじゃそうじゃ！妾の軍が負けるはずがない！全軍に伝えよ。休息じゃ。皆戦の前にしっかりと疲れを取るのじゃぞ！」

「御意！！」

袁術は蜂蜜水に気をよくしたのか、あっさりと快諾した。
袁術から承諾をもらえた兵は、袁術に頭を下げ、その場を急ぎ後にした。

「も、美羽様いいんですか？」

「構わぬ。織田の軍勢はここよりかなり離れておるのであろう。そして、あやつもある。負けるはずがないわ」

「そうですね・・・」

張勲は不安そうな顔をしている。戦の前に全軍を休ませるなどしていいのだろうか？

だが、少し大きな大休止ということでもいいだろう。

兵たちも行軍で疲れている。兵全員を万全な状態で戦わせたほうがいいだろうということにした。

そしてしばらく時間が経ち・・・

「わははははは！」

「馬鹿じゃねーのかお前は!!!」

「なにおー！お前こそ！！」

袁術の陣営からは楽しそうな声が聞こえる。時刻はまだ昼。それにも関わらず、騒がしい声が鳴り止まない。その騒音に袁術と張勳は不思議そうな表情を浮かべた。

「む、騒がしいの」

袁術は張勳に頼み、また新しい蜂蜜水を飲み、くつろいでいた。

「少し、騒がしすぎますね……。美羽様。私少し様子を見てきますね」

張勳は何か胸に胸騒ぎを覚え、陣営を見て回ることにした。しばらく歩きまわるとどこも同じような光景であった。

皆、楽しそうに騒ぎ、しゃべり、なにかを食べている。中には服を脱ぎ、裸になっているものさえいた。

「いーやーさーさー！！」

「あ、それ、あ、それ!!」

「わーっはっはっは!! もっと踊れ踊れー!」

兵たちの騒がしい声は鳴り止まない。その行動はまるで・

「貴方たちまさか・・・っ!？」

張勳はハッっとかかに気づき、兵たちに近寄り、兵たちのそばに転がっているものを手にとった。それは・・・

「あ、貴方たち!!! 誰がお酒を飲んでいいなどと言いました!!」

「え? だって、袁術様と張勳様が許可したと・・・」

「してません!! 誰ですかそんな嘘を言ったのは!」

「えーっと・・・どの隊の者が存じませんが、そいつがお二人が許可

したと・・・」

「してませーん！！・・・ま、まさか・・・」

張勳は急に顔から血の気が引くのを感じた。血が全て失われるかのようで、めまいすら感じるようだ。

そして、聞きたくない報告が、行われた・・・

「ほ、報告します！！敵が・・・織田の軍勢が前方より突撃してきました！！」

「う・・・！や、やられた・・・」

張勳が前方をみると、大きな砂塵が上がっている光景が見える。その砂塵はどんどん大きくなっていき、その勢いはまるで天を食らわんばかりに広がっていく。

兵力では圧倒的に上回っている袁術軍であるが、張勳はその光景を見て、これからの我が軍を想像し、身震いがした。

「美羽様の下にいかないと・・・」

「ご主人様！うまくいきましたね！」

「クク・・・まさに暗愚ぞ袁術。やはりまだ童であつたか」

信長は策がうまくいったことに頬をにやつかせる。
戦の常識をしているものであれば、敵を目の前にして、距離が離れていようと警戒をとくとは愚の骨頂。

先程の袁術の兵は、織田が忍び込んだ忍びの者である。
休息で多少は騒がしくなるのは仕方のないことであり、酒が回り、騒ぎ出すまで気づかず、注意に来たころにはすでに兵は使い物にならないのである。

「クク・・・蹂躪せよ。滅せよ。断罪せよ！！彼奴らの冥土への手土産にうぬらの勇士を見せ付けてやるのだ」

「ぐわああああー!!」

「でやあああー!!」

「ぎゃああああー!!」

袁術の兵は逃げ回るしかできないものが大半であった。

ほとんどの者が酔っていたため、戦いにならず、なすすべもなく斬られていくばかりであった。

袁術兵の中には武器を持ち、戦おうとするものはほとんどいなかった。

大半が背中を見せ、一刻も早く逃げるものばかり。

中には、酔いが回り、歩けないものまでいた。

織田は敵をただ一方的に虐殺していくだけのまさに地獄絵図であった・・・

「相手にならぬな。これではつまらん・・・」

「ああ。酒に飲まれるとはまさにこのことだな」

「とつとと、終わらせてお兄ちゃんに褒めてもらうのだー!!」

星、愛紗、鈴々は敵陣深くに突撃し、数多くの兵を倒していた。

三人はつまらぬと、敵を斬るのを辞め、ただ陣の中を歩いていた。

だが、不意に後ろから、強烈な殺気を感じ、三人は後ろを振り向く

「……見つけた」

忘れるはずも無いその佇まい。

愛紗と鈴々はしっかりと覚えている。彼女の武を。

その天下無双の女性と戦っていない、星ですら感じるその武。

「なるほど・・・正体不明の部隊とは・・・」

「呂・・・奉先・・・」

「・・・こい。恋が相手する」

「呂布！虎牢関の借りは返させてもらおう！」

「三人同時で、ちと卑怯だな。だが我等とて負ける訳にはいかなのだよ」

四人は己の武器を構え、にらみ合う。
まるで蛇ににらまれた蛙。

三人と数ではこちらが上。だが一向に勝てる気がしない。
これが天下の武であるか。気を抜けば、三人で戦っても下手をすれば負ける。自分の首が飛ぶ姿が用意に想像できる。

「人それぞれ。気にしない・・・早く来い」

「よし！じゃあ鈴々が一番なのだ！いつくぞあー！」

鈴々が呂布に突撃する。

自慢の蛇矛をしっかりと握り、突き刺す構えのまま呂布へと向かい走る。

そしてその勢いそのまま蛇矛を呂布の心臓へと向け突き刺す。

ガキーン！！

金属音が激しくぶつかりあった音があたりに響く。

呂布はその攻撃をうまく防いだようだ。

「・・・くっ」

だが、しかし呂布はたったその一撃だったにもかかわらず、その表情が険しい。

「てや！てや！てや！てやあー！！！！」

鈴々は、その光景に疑問の色が浮かぶが、構わず突きを何度も繰り返す。

ガキン！！！！ガキン！！！！！！ガキーーーーン！！！！！！！！

呂布は何度も防ぐ、だがしかしやはりおかしい。

「・・・んっ、くっ・・・はっ・・・」

だんだんとその声、表情、動き、全てが前と違う。
まるで、呂布に思えない。

「でえーーーーーい!!」

鈴々は、これで最後と大きく体を動かす、体のバネと反動をうまくつかうように、一本足で体を引いて立ち、前に出る反動で槍をおもいきり突き刺す。

ガキーーーーーン!!!!!!!!!!

しかし、さすがである。

呂布はおかしいながらもしっかりとその攻撃を防ぐ。
だがやはり、その表情は険しいまま……

「ぐっ……」

「どうだー!……って呂布、手を抜くと承知しないのだー!」

鈴々は攻撃をやめ、蛇矛の石突きをドンツと地面に突き刺すように置く。

「・・・抜いてない」

「嘘なのだ！呂布はもっと強かったのだ！」

「・・・」

呂布の様子が何かおかしい。先程まで感じていた、覇気。そして最初に感じられた殺気がまるでない。

呂布を見れば、一目瞭然である。あきらかに足元がおぼつかない。

「何かしらの事情があるようだが・・・しかしここは戦場だ。容赦は出来ん」

「・・・分かってる」

「・・・」

「・・・強くない呂布と戦っても面白くないのだ！ちゃんと全力を尽くすのだ！」

「・・・ごめん」

「むー・・・」

「・・・呂布よ。いったい何があったのだ？どうも先程から精気に欠けているな」

いたたまれず星が呂布へと問いかける。
しかし、その行動に愛紗が不満を漏らす。

「星！戦いの場で、そんなことを気にかけてどうする！」

「いや・・・鈴々の攻撃を受ける呂布の姿があまりにも弱弱しくてな。どうも・・・」

「そうだそうだ！呂布は強くなkachいけないのだ。それで強い呂布を鈴々たちが倒す！そうじゃないといけないのだ！」

「呂布よ・・・この戦いで戦傷でも負ったのか？」

「・・・（フルフル）」

「ならばその弱弱しさは何だ？我等のことを舐めているのか？」

「・・・違う。お前ら強い・全力でやらないと負ける・・・けど・・・」

「・・・？？」

「・・・事情がある」

「事情だと・・・？」

グウー

「・・・」

その場に不釣合いな音が空気を急激に変える。
呂布は恥ずかしいのか顔を赤らめ、下を向く

「まさか・・・お主、腹が減っているのか」

「・・・（コク）」

「・・・それしきのこと、武の煌きを曇らせているのか貴様!!」

愛紗が腹の音を聞き、下げていた、堰月刀を再び呂布へと向ける。

「ま、待つのですー!!」

そこに陳宮が馬に跨り、呂布の元へ駆け寄る。

今の呂布では三人に勝てないとふんだのだろうか。勇敢にも呂布の前へと出てくる

「呂布殿は兵士たちがお腹を空かせているからと、自分の食事を兵士たちに分け与えていたのです！」

そんな心優しい呂布どのによってたかつて暴言を吐き、三人でいじめるなんて許しませんぞー!!」

「・・・ねね、下がる」

「いやです！ねねはお腹を空かせた呂布殿を三人がかりでいじめる奴らに、鉄槌を下してやるのです！」

「・・・ふむ。確かに今の呂布相手に、三人がかりで当たるのは卑怯だろう」

「だが、これも戦乱の習い。境遇には同情するが・・・その首貰い受ける！！！」

愛紗が陳宮の元へと歩み寄る。

呂布は再び武器を構えるがやはり、覇気が感じられない。

鈴々の攻撃を受けるのに、己の力を全て使い果たしてしまったんだろうか？

そんなおり・・・

「待つて待つて待つてーーーー！！！！！！！！その勝負待ったああー！！！！！！」

「と、桃香様っ!?!」

桃香が馬に跨り、この五人のもとへとやってきたのだ。
そして、呂布と星、愛紗、鈴々の前へと躍り出る。

「お姉ちゃん危ないのだ!!」

「ううん、大丈夫。もう戦いは終結に向かってるよ。袁術さんたちが逃げちゃったから」

「なんですとー!!それはどういことです!」

「どういことって・・・勝負にならなかったし、戦いが始まってちよっとしたら皆逃げちゃったよ?」

「な、なんですとー!!!!!!」

陳宮はその場にうなだれる。よほど堪えたのだろうか、ひざをつき、崩れ落ちた。

「で、では・・・この戦いは我々の勝利ということですか?」

「うん。あとはここにいる部隊だけ。今朱里ちゃんと雛里ちゃんが包囲網を敷いてるよ」

「ぬわっ！！包囲されているのです！！」

「・・・されてる」

陳宮よ呂布は気づかなかったのか、周りを見渡せば既に織田の軍勢が辺りを囲んでいる。

どうやらもはや、彼女たちの体力では脱出は不可能であろう。

いや、呂布一人であれば、可能であるかもしれないが陳宮がいる。しかし、呂布は陳宮をおいて、逃げるなどしないであろう。

呂布は再び視線を桃香へと向ける

「貴女が呂布さんですね。私は織田軍の劉備です。貴女に降参してほしくてここにやってきました。もう貴方たちには勝ち目はありません。」

こうして、この戦いに決着がついた以上、武器を下ろしてもらえると嬉しいですよ」

「桃香様。そんな説得をするために危険を冒して前線に来られたのですか？」

「うん。だって・・戦いはもう終わったんだもん。終わったんだから今はもう、武器を構える必要ないよ。だから皆で話あおう。ねっ」

グーーーーー

再びその場に呂布の腹の音が鳴り響く。桃香はその大きな音に驚いたのか目をパチパチさせている。

「お腹・・減ってるの？」

「・・・（コク）」

「そっか・・・。じゃあ・・一緒にご飯食べようか」

「と、桃香様！ー！」

「うっん。大丈夫だよ。誰か、ご飯持ってきてくれる？」

桃香の言葉に愛紗は驚きの声を上げる。なぜ敵に食料を与えるのか？しかし、桃香はそんな事にしない。兵に食べ物を持ってくるよう指示した。

桃香の言葉を聞いた兵は、言われたとおり兵糧を持ってくる。

呂布の目の前に置かれた食べ物には呂布、陳宮の二人にあつという間にたいらげられてしまった。

「まだまだ、あるからね。遠慮しないで食べてね」

「・・・（コク）」

呂布、陳宮はそれからもお食べ続ける。そして、二人が満足したところを見計らって桃香は話を続けた

「私はね。みんなに幸せになって欲しいの。この大陸の人みんなみんなが笑って暮らせる世。

だからね、当然その中には呂布さんや、陳宮さんだって含まれてる。みんなで平和な世がみたいの。

だからね、私の目の前で救える人はみんな救いたい。私は呂布さんを救いたい・・・
死ななくていい人を死なせたくないの。

この戦いは終わった・・・だから私たちは武器を収めるよ？だから呂布さんも武器を納めれば、ほら！誰も傷つかないよ？

そして、お腹が減ってるなら食べればいいんだ、呂布さんのところに食べ物がないのなら、私たちのところ来ればいいんじゃないかな？」

「・・・・・・・・」

呂布はジッと桃香の目を見つめる。桃香の心の奥底をのぞいているのだろうか。

彼女の言葉に嘘偽りがないか、信用していいのか？

桃香はその視線を受け、一切逸らすことなく、そして曇りの無い瞳を呂布へと返す。

「桃香様・・・まさか呂布を仲間にしようなどと考えているのですか？董卓や賈？のようにそう何度も上手くいくとは・・・」

「・・・・・・・・月？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ・・・」

「・・・愛紗」

星が頭を抑える。鈴々はウシシ、と笑いをこらえているようだ。
織田軍で決して喋ってはいけない、そして漏らしてはいけない機密事項を愛紗はすっかり喋ってしまった。

その言葉を彼女は聞き逃す事はなかった。

「・・・月も詠も無事・・・？」

やはり聞いてきた質問に桃香は答える

「うん。無事だよ。今はうちで侍女をやってくれているかな。月ちやんの入れてくれたお茶はね、すごくおいしいんだよ！」

「なんですと！？董卓殿も賈？殿も死んだと・・・」

「それは、うちの軍師ちゃんたちに頼んでそういう噂を流してもら

ったの」

「・・・二人は・・・無事？」

「うん。私たちのお城にいるよ。会いたい？」

「・・・（コク）」

「そつか・・・あのね。呂布さん」

桃香は深呼吸をし、一拍おき、呂布の目を見つめ口を開いた。

「私たちの・・・仲間になってくれないかな？」

「・・・仲間・・・」

「私たちにはあなたの力が必要です。一刻も早くこの乱世を終わらせたいの。そしてみんなで平和に笑って暮らそう？
月ちゃん、詠ちゃん、そして呂布さんと私。みんなで楽しく騒ぎたいよ・・・」

そんな世を私は実現したい！！だから・・・降参してください！
」

桃香は呂布に対し、頭を下げる。

その様子を呂布は黙って見つめる。

彼女を信用していいのか？それはわからない。だが、彼女の目はとても綺麗だった。

呂布がなかなか答えを出さないからか、桃香は更に深く頭を下げる。
頭がすでに地面に付きそうであった。

「・・・・・・・・お前・・・変」

「ええ！？」

桃香はその言葉に驚いたのか、顔を上げた。

「・・・降参させる側が頭を下げる・・・」

「・・・え、え〜っと・・・」

「・・・でも。それが良い」

「・・・あ、笑った」

呂布は口元に微妙に笑みを浮かべた。その笑顔はまさに歳相応の笑顔であつた。

「・・・恋」

「え？」

「・・・私の真名。お前に預ける」

「呂、呂布殿!..」

「・・・いい・お腹いっぱい。それが幸せ」

呂布は幸せそうな笑みを浮かべ、お腹をさする。さきほど食べた久しぶりの食事の余韻に浸っているのだろうか。

「むむ、確かに・・・我が軍には兵糧が無く、もうそれしか・・・」

「うん。お腹いっぱいにしてあげるね♪さ、行こう！月ちゃんと詠ちゃんに会いに♪」

こうして、また織田陣営に新しい仲間が加わった。

信長の天下への道は、彼女の加入により、大きく前進した事だろう。

戦場に混沌を

信長たちは袁術、呂布連合を撃破し、敵として戦っていた呂布、陳宮を無事説得し共に理想を共有し仲間となる事を快諾してくれた。

しかし、呂布、陳宮は信長よりも桃香を主君として見ている節がある。

信長としては、呂布は裏切りの将として有名であったことを知っており、信長自身もあまり近寄ろうとはしていないようだ。

信長としての考えは自分が呂布に主君と思われるよりは、桃香のその広い仁の心に任せておけばうまくいくのではないかと考えている。自分では恐らく松永や光秀と同じような結果を起こしてしまうかもしれない。

第二の本能寺を起こしてしまったては元も子もない、この第二の生では死ぬわけにはいかない。

ならば、桃香に部下を任せようと考えていた。

袁術軍は織田に戦いを挑んでいる間に、孫策たち呉の面々が武装蜂起し、袁術の本城を攻め落としたらしい。

結果としては、袁術は信長たちの領土を奪おうと戦いを挑んできたが、皮肉にも逆に自分が奪われる結果となったようだ。

織田軍は全員が広間に集まり、これからのことについて話し込んでいる。

月、詠、恋、ねねは懐かしい顔を久しぶりに見た事で楽しそうにしている。だが・・

ここにまた新しい情報が忍びによりもたらされた……

「官渡にて、袁紹軍と曹操軍が戦いを開始しました！」

忍びによりもたらされたこの戦いの情報。

兵力では圧倒的に袁紹がおしており、曹操軍は最大限の構えで戦っているとのこと。

どうやら、曹操も手を抜いて勝てる相手ではないようだ。

（ふむ・・官渡の戦いが始まったか・・。結果としては兵糧を襲い、曹操の勝ちであったな・・。

歴史をなぞればこのまま曹操が平原一帯を治め大勢力となることを止められぬ・・

北郷も恐らく全てを知っていようぞ・・この先の曹操の行動を・・そして、その行き付く先を・・）

「ご主人様？どうされました？」

愛紗が先程からずっと考え事をしている信長に声を掛ける。

「……………」

信長は返事すら返さず、椅子に座り、肘置きに肘を乗せ、こめかみの辺りにこぶしをあてずと目を瞑り考えている。

「ご主人さ・」

「やめておけ」

「星・・・」

星がさらに声を掛けようとする愛紗を止める。

「主はああしながらもずっと、考えておるのだよ。頭の中でこれから起こす行動の成否の結果をずっとめぐっておるのであるう。

きつと、今頃は一、二年後あたりまで考えておるのではないだろうか」

「確かにな。ここはそつとしておいたほうがいいかもしれないな」

愛紗と星はそう判断し、信長に一度目を向け、そしてまた皆の方に顔を向ける。

「朱里。私たちはこれからどうすべきなんだ？」

「そうですね．．恐らく、この官渡の決戦しだいではないかと．．」

「結果次第ということか？」

「あう．．袁紹さんが勝てば、次はそのまま曹操さんの本城まで攻め立てるか。曹操さんを滅ぼすまで私たちに牙を向けないと思われず。」

お二人には因縁があるようですから。袁紹さんはその後、西か南、つまり私たちがどちらかに矛先を向けると思われます」

「そして、曹操さんが勝てば．．袁紹さんを滅ぼした後に、恐らく私たちが．．」

「そうか．．。どちらにせよ、私たちも何か行動を起こさなければな．．。」

「じゃあ、今は内政に従事して戦力を高めるべきかな？」

「そうですね・・・それが無難かと・・・」

桃香の提案に朱里、雛里、愛紗は賛成しようとしていた。
他の者たちも、恋、袁術連合軍と戦ったばかりということで、その
考えに従おうと考えていたその時・・・

「官渡に往くぞ」

先程まで、ずっと黙っていた信長が突然口をひらいた

「官渡・・・ですか？」

「うむ。このままではワシらは曹操に飲まれるであろう」

「ご主人様は官渡での戦いは曹操さんが勝つと思われで？忍びによ
れば袁紹軍十万に対し、曹操軍は三万と圧倒的に兵力差があります」

朱里はこの戦い、信長は何故曹操が勝つと予想したのかと問いた
した。

他の者たちもこの兵力差ではいかに曹操軍の将が優れていようと
も、即決できるほど単純なものではないと信長に聞いた。

「ワシも北郷と同じよ。ただ知っているまで、曹操が勝つというこ
とをな。ワシは知っている知識は全て出す。
この戦の後の曹操の快進撃の事もな。

しからは曹操が肥大化する前に食らおうぞ。そうせねばワシらが彼
奴らの肥やしになる。

曹操を止めるには今が好機。

曹操が官渡に主力を集結させている今こそ・・・ぞ」

そして、信長が椅子から立ち上がり、部屋から出て行くとする。

「出陣ぞ。この決戦、ワシらは第三勢力として加わろうぞ。黄巾の
時に宣戦布告はすましておるわ」

そして、信長は部屋から出ていった。
信長が出て行った後、そこにいるものたちが話を再開する。

「そういえば、ご主人様は黄巾の時にしきりに曹操を挑発しておられたな」

「まさかこの結果を見越して？でも、いいのでしょうか？」

「あまりいい気はしないな。二人の戦いの邪魔をするわけであるからな」

やはり、みな少し、不満があるようだ。
だが、しかし桃香だけは信長を擁護する。

「でもでも！曹操さんが勝つてご主人様は言ってるんだよ？曹操さんが勝っちゃったら、平原を全て手に入れちゃうよ？
そうしたら、もう勝てないよ・・・」

大陸一の軍勢になっちゃうし・・・私たちにもう勝ち目がなくなっちゃう。
死んじゃったら・・・それで終わりだよ・・・」

「桃香様・・・」

桃香が伏目がちに思いを話す。その光景を全員が驚いた様子で見
ていた。

「ふっ・・・確かに桃香様のおっしゃる通りだ。勝てば官軍・・・
すな」

「その通りですよ桃香様！！ご成長されましたね！」

「お姉ちゃんの口から戦うなんて聞けるなんて思ってたのだ
！」

「確かにそうです！袁紹さんよりも曹操さんの方が明らかに優秀で
す。

ご主人様の仰るとおり、曹操さんが勝てば、明らかに次の目標は南
下。私たち徐州です」

「あわわ・・・この決断は、先を全て見据えた決断だと思います」

「うん。そうだね。やっぱりここは・・・官渡にいくしかないよね。
よし皆！！出陣の準備しよう！」

「御意！」

信長たちは城門前に整列する。

「出陣準備整いました。いつでも出発できます」

「うむ。皆往くぞ。敵は官渡にありぞ！！！」

「おおー！！！！」

「糜竺！糜芳！うぬらに城は任せる」

「はい！ご主人様！どうかご武運を！」

そして、織田軍は官渡に向け。出陣した。
行軍は長いものであったが、ついに曹操軍の国境が見えてきた。

しかし、国境には警備兵は最低限しか配置されていないようである。

やはり、曹操は袁紹との決戦に全力を注いでいるようだ。

無理も無い。曹操といえども、敵は強大であるのだ。

いかに、無能な袁紹といえども、慢心は身を滅ぼす。

なにより袁紹とは犬猿の仲。負ければ生かしてもらえないであろう。
むしろ曹操自身が生きる事を拒否するであろう。

絶対に負けられない一戦なのである。

「皆一斉に攻めたてい！！一人も生かすでないぞ！」

「おおおおー！！！！！」

「な、なんだあ！？」

「あれは・・・織田！？織田が攻めてきたぞおー！！！」

国境の兵たちは自分たちの兵数ではどうしようもないことを悟り、
一目散に逃げていく。

戦う事を放棄し、一斉に逃げ出すが、降り注ぐ雨のような矢に何人も死んでいく。

何人かは矢に当たらず、逃げおおせたようであったが

「逃がさぬ」

「ひっ！？い、いつのまに・・・」

すでに入り込んでいたのか、忍びの者たちが逃げる兵の眼前に出現する。

そうして、瞬く間に国境の警備兵は全員が命を落とした。

「このまま一気に攻める！時は無限にあらず。道中の城は無視して進めい！官渡の戦が終わる前にワシらは付かねばならぬ！」

そして、信長はさらに速度を上げて行軍する。

道中、城の付近を通るが、城内の兵は必要最低限しかいないのである。

城内の曹操軍の兵からの攻撃は微々たるものであった。

「くっ・・・さすがに兵力差があるようね・・・」

曹操軍は苦戦していた。

袁紹軍の攻撃はたいしたものではない。ただただ力の限り突撃してくるだけの美しさどころか野獣のような攻撃。だが、兵力差は三倍以上。数の暴力は恐ろしいものであるのだ。

「華琳様、ご無事ですか！」

「ええ。大丈夫よ春蘭。でも、麗羽の分際で伏兵とは少しは頭を使ったものね。褒めてあげなくちゃ」

「ふっ、恐らくたまたま兵がサボっていて、伏兵のような状態になっただけではないかと」

「あら？確かに秋蘭の言つとおりかもね。そのほうが麗羽らしいわ」

曹操、夏侯惇、夏侯淵は袁紹軍の兵を次々と切り捨てていく。
だが、その額には汗がにじんでいる。
殺しても殺しても減らない袁紹軍。

今現在では大陸一の大勢力なのである。
兵の練度は低いが、数だけは誰よりも優れている。

そこへ、荀？が息を切らせながら走ってくる。
その顔は疲れからか、苦しそうな表情であるが、とても輝いていた

「華琳様！鳥巢の兵糧庫の襲撃成功した模様です！」

「来たわ・・・ついにこの時が・・・聞きなさい！」

曹操が自慢の武器、絶を掲げ力の限りの声で叫ぶ。

「兵糧は全て焼き払った。貴様たちに食べるものはや何もない
！！

我が勇敢なる兵たちよ！袁紹に見せてやりなさい！！この曹孟徳と

袁紹の器の違いを！力の違いを！！
貴方たちの武を持って知らしめてやりなさい！！」

「おおおおおー！！！！！！」

曹操の鼓舞により、曹操軍の士気は天をつかんばかりに上がっていく。

そして、逆に袁紹軍の兵たちはその士気の高さと、兵糧が燃やされた事実により、飲み込まれるかのように、士気が低下していく。
この戦いの勝敗はまさに決定した事であろう。

だがその時……

「報告します！！第三の勢力が現れました！！旗印は木瓜！織田です！」

「な、なんですって……織田が！？」

「クク……戦場に混沌を……曹操よ、袁紹よ」

突如として官渡に織田軍が現れた事により、官渡に大混乱がおきる。これから烏合の衆に成り下がった袁紹軍を攻め立てようとしていた曹操軍はおるか、袁紹軍も織田の登場はまさに晴天の霹靂であった。

「袁紹の軍は捨て置けい！！まずは曹操軍を駆逐せよ！彼奴らこそ、我等の最大の敵ぞ！」

恋！うぬは旗印を隠すのだ！まだうぬの存在を知られるには早すぎる！

愛紗！鈴々！うぬらは曹操に当たれい！！敵は混乱しておる！朱里、うぬはその都度、最適の指示をだすのだ、判断はうぬに任せるぞ。星！白蓮！！うぬらは袁紹軍が攻撃して来た際の迎撃に当たるのだ！！離里、うぬも朱里同様指示を一任する！

ねね！うぬは戦場を広く把握せよ！戦況を見極めてこそ、戦に勝つ！！！！」

「御意！！」

織田軍の登場はまさに戦場に混沌をもたらせる結果となった。

敵の兵糧を落とした曹操軍の士気は最高潮であったが、新しい敵の登場により、士気は一気に低下したようだ。

織田軍の勢いは高く、袁紹軍にいなかった一騎当千の将が織田にはおり、その存在自体が曹操軍の士気を低下させた。

「きー！！なんですの私たちの美しき戦いに水を注すなんて！これだから下賤なやかからは嫌いですわ！皆さん！織田なんて華麗に滅ぼしてしまいなさい！」

袁紹はもう自軍の士気が下がりきっている事に気づいていなかった。兵糧庫を滅ぼされたどころか、織田にまで手を出した事で曹操、織田の二つの軍と戦う事になったのだ。

もはや、攻撃すればするだけ、兵が死んでいくのだ。兵糧がなく、明日が見えない、兵たちの攻撃などまったく効かないのだ。

「なんてこった・・・官渡に織田軍が来るなんて・・・こんな歴史知らないぞ・・・
いや、そもそも織田信長が居る事自体がおかしいんだ」

一刀も混乱していた。

自分の知る歴史では、曹操軍はこの官渡で兵糧庫を襲撃し、その勢いに乗って袁紹を滅ぼすのだ。
だが、今の状況はどうだろう？

教科書に、そして、独学で知った知識にもまったく知らない新しい結果。

官渡の戦いでありえない、第三勢力の登場。

勢いに乗って、滅ぼすどころか、織田が攻めかかってきたことによ

り、更に危険な状況ではないだろうか？

このまま戦いを続ければ、兵を無駄に死なせるだけであろう。

「くっ・・・春蘭！秋蘭！！ここは退くわよ！」

「ですが華琳様！」

「桂花！私の言う事が聞けないの！悔しいけど・・・ここは退くしかないわ・・・やられたわね・・・完全に漁夫の利をとられたわ」

「・・・わかりました。全軍撤退よ！！」

撤退の合図に曹操軍は速やかに退いていく。

さすが曹操軍である。まったく無駄な行動無く、兵は退いていく。曹操の采配は見事であった。引き際というものを完全にわきまえていた。

「ご主人様！曹操軍が撤退していきます！」

「うむ。愛紗、鈴々！そのまま曹操を追撃せよ！！この官渡より完全に追い払うのだ！朱里！ぎりぎりまで追撃させるのだ！深追いは

決してするでないぞ」

「御意！」

愛紗、鈴々、朱里はそのまま曹操軍の追撃へと向かっていった。
信長はその光景をジッと見つめる。

「曹操よ・・・この信長の首にたどり着いてみせよ・・・」

「・・・信長。貴方の首、必ずやこの曹孟徳がもらいうけるわ。今回譲ってあげましょう」

二人の会話は到底聞こえるはずがないものであったが、二人は会話していた。

霸王と魔王。二人に通じるものがあるのであろうか？
二人の因縁はさらに深まっていくのであった。

二枚看板

曹操軍は官渡より撤退した。

曹操の状況判断は見事なものであり、時期を見誤っていたら被害はもっと酷かったであろう。

三万の兵力は死者、負傷者を除いてもまだ二万弱と十分に戦える戦力である。

一方袁紹は策を練らず、ひたすらに全軍突撃を繰り返している。自らは遠くから高みの見物であり、兵の疲労や士気のことなどにも考えていないのである。

「なあ斗詩くこれってやつばまずいんじゃないか？」

「うん・・もうこの戦いは負けだよ・・織田軍の士気は曹操を撤退させて下がるどころか上がってるし、こっちは・・」

顔良が自軍の兵の顔を見渡す。

そのどれもが、暗く、まともに戦える状況ではない。

顔良は兵糧庫が燃やされた時点で、袁紹に撤退を命じるよう進言したが、袁紹はそれを却下したのだ。

織田の兵力は二万。対して、袁紹軍は八万。兵力だけ見れば、明らかに上回っているのだ。

そのことだけしか頭に無いのか、負けるはずがないと突撃を命じる。兵は先程から休み無しの突撃、そして、心理的疲労。もはや士気は地に落ちていた。

「聞けい袁紹の兵どもよ！貴様らは撤退せず、明日からは何を食うつもりだ！米一粒すらないのだぞ」

星がその事実を高らかに宣言する。その言葉を受けた袁紹の兵はまたさらに動揺する。

「まったく、お前たちの主は無能だな。戦況すら見る事ができないのか？」

「やっぱり袁紹は馬鹿なのだー！」

愛紗、鈴々による罵倒。

「速やかに投降してください。こちらに来れば少なくとも袁紹さんよりも生き残れますよ」

そして、朱里による説得。袁紹の兵は少しずつだが、武器を捨て投降するものが増えてきていた。

当然兵たちは袁紹の事を知っている。そして、織田の最近の活躍も。天秤にかければ一目瞭然で織田に下る選択が正しいのだ。

そして、戦況は決した。

織田に降らない兵は、そのまま武器をすて逃亡する兵が増えてきたのだ。

食べ物が無く、戦況も決したこの状況でまだまじめに戦う兵などほとんどいないのだ。

「な、なんですのこれ・・・逃げるんじゃないやありません！戦いなさい！」

袁紹の言葉がむなしく響く。袁紹の回りの親衛隊や本陣を守る兵たちはまだまじめに戦っているようだ。

そこへ、袁家の二枚看板の文醜と顔良が来る。

「麗羽様。もう私たちの負けです・・・どうか撤退してください」

「そうだぜ姫。アタイたちが殿を務めるからさ」

「キー！まったく役に立たない兵たちですわ！敵を目前にして逃げたり、降ったり！

そんな美しくない兵たちなどいません！袁家に無能はいりませんわ！

文醜さん、顔良さん。せいぜい貴方たちは役に立ってくださいね」

そういい、袁紹は馬に跨り、この官渡の地から撤退したのである。

「はあ・・・ひどい言い草だなあ」

「そうだね。まあでも一応私たちの主だし・・・」

二人はため息をはく。だがそこには笑みもあつた。

「ま！いいところは一応あるんだしな！」

「うん！たまゝにだけどね」

二人は長く袁紹に仕えている忠臣である。

やはり彼女ら二人だけは何があつても袁紹を裏切らないのであろう。

「すばらしい忠義だな。文醜、顔良」

「関羽・・・」

「関羽・・・」

愛紗が自慢の青龍堰月刀を構え、二人の下へとゆっくりと歩いてくる。

その体から発せられる闘気はまさに鬼か軍神。

彼女が近づいてくる一歩一歩がまさに処刑台がこちらに向かってくるようである。

二人の体は震えるが、その震えは嫌いではない。

彼女らも武人なのだ。自分ひとりでは勝てないだろうが二人なら戦える。

一人では決して闘おうとも思わない相手と武器を交える事ができるのだ。

「お主らの忠義・・・この堰月刀で武器ごとへし折ってくれる！はああああー！！」

「なめんなつての！！」

愛紗と文醜が武器を交差させる。文醜の武器である斬山刀は文字どおり刀である。

愛紗の堰月刀の柄をまるでレールのように滑らせ、愛紗へと斬りかかる。

だが、直前に愛紗が武器を引き、左へと避け、攻撃を回避する。

「やあああ——！！」

愛紗が回避した方へと、動き今度は顔良が金光鉄槌を振り下ろす。だがその攻撃は地面を振動させるだけにとどまった。

愛紗は戦いで培った、勘でわかったのだ。

二人で攻めてくるのなら、一人は必ず、自分が避けた先に回りこむであろうと。

「確かにお主らの連携は見事だ。だが、まだ実戦が少ないようだ。な。私がお前たちの攻撃を読めないとも思っただか？」

地面に陥没した金光鉄槌に愛紗は足を乗せ体重を掛ける。

顔良が力を込めても持ち上げらず、むしろ動かないといった方がいだろう。

「その武器は将と戦うには不向きすぎる。一対多を想定した武器だろう？」

そんな武器でもなお、袁紹を逃がすために闘うとは・・・見事だ」

そう言い、愛紗は堰月刀を逆さに持ち、石突きで顔良の眉間を見事に突いた。

「っ・・・・・・・・」

眉間を突かれた顔良はそのまま意識を失い地面に崩れ落ちた。

「やつろー！ー！！よくも斗詩を！！だあああああー！！！」

怒り心頭で文醜は愛紗に斬りかかる。

上方から真つ二つにするように斬山刀を振り下ろす。

「怒り、力任せに振り下ろすとはまさに愚だぞ」

「うるさい！！ぜってーアタイはお前に負けない！」

文醜が今度は右、左、と振り回すように攻撃する。

何も考えず、本能のままに攻撃しているようであった。

そんな攻撃など愛紗に通じるはずも無く、いとも簡単に堰月刀で受け流す。

「いい友人関係なんだなお主たちは。文醜！お前はきつともっと強くなれるはずだ。」

私が桃香様の為に強くなれるように、お主もな。見せてやろう。

強いってのはこういうことだ・・・でやあああー！！！！」

愛紗が文醜が右から左へとなぎ払う斬山刀を、体勢を地面ぎりぎりまで低くし避ける。

重い斬山刀はそのまま空を斬る。今までずっと攻撃を防いでいた愛紗が急に避けたために文醜は体勢を崩したようだ。

その崩れた体勢に愛紗はしゃがんでいた体勢から起き上がるように右の拳を文醜の腹めがけて突き上げる。

「ぐはああ！・あ・・・あ」

文醜の意識はそこで途切れる事と為った。

「袁家が二枚看板！文醜、顔良！この関雲長が捕らえたり！！」

愛紗が高らかに宣言する。

「お・おい・・・」

「も、もう駄目だ・・・」

「に、逃げろー！！！」

袁紹兵はさらに逃げ出すものが後を絶たなかった。

実際、袁紹よりもこの二人のために戦っている兵がほとんどであった。

兵たちにも優しく、そして話しかけてくれる文醜と顔良。

その二人が今、捕らえられたのだ。

兵たちの心をつなぎとめるものはもう無くなったのだ。

「見事ぞ愛紗」

「ご主人様・・・お褒めいただき光景です」

愛紗が片ひざをつき頭を下げる。

「主もつと、部下を褒めることができぬのですかな？」

星がその場に口を挟む。

「褒めておろつ」

「いえいえ、まったく主は女心がわからんのですな。兵法や戦法はわかってても女の扱いをご存知ないようで」

「女の扱いぐらいしておるわ」

「いや、主の世界での将は男だらけだったようで。男の将であれば褒められるだけでうれしいでしょうが、あいにく私たちは女の将。主、ちよつと耳を貸してください。．．．」

星が信長の元へ近寄り、なにやら信長に策をさずける

「こうすればきつともつと主に忠義をつくすでしょうな」

「ふむ．．．愛紗」

「はい？」

そう言われ信長はゆつくりと愛紗の元へと歩みよる

「よくやった」

「なっ！？ご、ご主人様！？」

信長は愛紗の頭を優しくなではじめた。

そして、信長の手つきはとてもやさしく、気持ちよかったようであり、愛紗の顔は一瞬で真っ赤になり、そして顔がとろけている。

信長には市と言う妹がいる。

信長は市の頭を撫でていたこともあり、その手つきにまったく無駄がなく、ただ相手を喜ばせ、褒めることに特化した撫で方であった。

「ほぐら、主。愛紗が喜んでおりますぞ」

「うむ。このようなことで忠義がますのであれば、他の者も成果を挙げた暁にはなでてやろうぞ」

その言葉を聞いた、織田軍全員の顔がほころぶ。

愛紗を見るとまだ、幸せそうな顔をしているのだ。

普段難しく、怖い顔をしている信長とのギャップが女たちの心を掴む。

「さて、皆よ。袁紹を追うぞ。袁家を滅ぼす。往くぞ!」

「御意!」

「む・・」

信長があるものを見つける。袁紹が城を攻める際に持ってきたのであろう。

「投石器・・・か。クク、こいつを次は使うとしようぞ・・・」

仁の心

織田軍は袁紹を撤退させることに成功した。

袁家二枚看板である文醜、顔良を捕縛することにも成功し、袁家の力を大いに削る事にも成功した。

袁家は、ほぼこの文醜、顔良でもっているようなものであり、事実上袁家の完全無力化にも成功したのだ。

後は、士気の無い兵のみ、そして、無能な袁紹。

残された課題はどれだけ被害を最小限に留めこの平原を制するかである。

「投石器・・・ですか？」

信長が不適に笑いながら、使つと称した投石器。

恐らく、朱里は普通に使うのではないだろうと予測し、その方法を信長に問う。

「クク・・・袁紹の兵をほぼ無力化することが可能ぞ・・・まずは袁紹の兵の死体から鎧を剥げ。そして忍びを百人ほど呼ぶのだ」

信長の命令で忍びが百人ほど集まる。

「うぬらに命ずる・・・」

そして、信長の作戦が提示される。

その内容を聞いた忍びたちはすぐにその場を後にした。

「うむ。では皆往くぞ・・・今日ここに名族袁家の滅亡を宣言しよう・
ぞ」

そして、織田軍はさらなる進軍を開始した。

信長は愛紗、恋、雛里、ねねを官渡城に残し、曹操軍に備えた。
まだ曹操には恋の存在がばれていないため、大いにその効果は期待
できるであろう。

そして、ついに袁紹を追い詰めたのだ。

城の前には袁紹を守る兵たちが並んでいる。
数で言えば、まだ三万はいるであろう。これだけ残っているだけでも
上場であろう。

「クク・・・この信長を迎え撃とうというか袁紹よ・・・愚かなり。戦
は兵でやるのではない。ここでやるもの・・・ぞ」

そついい信長は人差し指で頭をコツコツと叩く。
それが意味するものは戦は頭でやるということ。
確かに兵数ではまだ袁紹に負けている。策で袁紹に勝とうというの
だ。

「さあ・・・開幕ぞ・・・」

信長が右手を上にあげる。

ヒュッヒュッ

信長の合図に投石器から黒い何かが放たれた。

「お・・おい！投石器だ！！岩が飛んでくるぞ！！」

「お、おう！！」

袁紹軍の兵たちが身構える。だがその結果に反し、黒い何かが地面に落ち、破裂する。

「な、なんだ・・・岩じゃない・・？」

「これは・・・首だ！！人の生首だ――！！！！！！！！」

そこに転がるのは人の首。首。首。
信長は岩の変わりに、人の首を五、六個縄で縛り一塊にし、飛ばしたのだ。

「う、うわああああー！！！！」

「う、おえええええ・・・」

「うわー！目が！目が合っちゃった！！」

グチャ！　グチャ！！

袁紹兵にぶつからず、そのまま地面に直撃したものはつぶれ、血が飛び散り、酷い臭いを放つ。
まさに地獄であった。

袁紹兵からは悲鳴や、恐怖により泣き叫ぶ声が広がる。

「ほ、本当に人間か・・・あ、悪魔だ！！鬼だ！！」

「い、いったい何人の首を刈ったんだ！まだ飛んでくるぞ！」

「ま、魔王・・・織田信長・・・」

降り注ぐ人の生首。留まることなく飛んでくる人の顔。まさに、一生忘れる事の出来ない光景。地獄の再現。

「汝ら、次は誰の首が飛ぶ事になろう・・ぞ。新しき生首になりたくなければ我が元へ来るが良い。
この信長にさからう者には死、あるのみ」

信長が袁紹の兵たちにそう宣言する。
そこでは一瞬時が止まる。袁紹を裏切ってよいのかどうか考えているのであろうか？
腐っても袁紹の本隊にいた兵や、親衛隊クラスのものたちがいるのだ。

だがそこで一人の兵が・・

「お、俺は嫌だー！死にたくない！助けてくれー！！」

織田軍に向けて走り出す。その光景を見た兵たちは

「お、俺も！！」

「助けてくれー！」

「袁紹なんかに命を預けられるか！！」

次々と織田軍に走っていったのであった。

もちろんこの兵たちは信長が仕込んでいた忍びたちである。

集団では最初に動くには抵抗があるものである。だから、信長は先陣をきつて投降する兵を忍びにやらせたのだ。

百人近い忍びが次々と投降する演技をしたため、袁紹兵もその流れに乗って大量に投降してきたのであった。

「お、おい！！何をやっている！！貴様らは誇りがいいのか！？」

「うるせー！！死んじまったらもともこもねーんだよ！！」

「でめーだって袁紹のためにそこまでする義理はねーんだろぅが！！」

「貴様ああー！！」

遂には袁紹軍同士での同士討ちにまで発展したのであった。

「クク・・・袁紹よ。やはりうぬも凡愚であったか。兵の心すらまとめることができぬものに勝利はない」

「ご主人様。今こそ好機です。城を包囲しましょう。袁紹さんを逃がすわけにはいきません」

「うむ」

そして、ついに袁紹は捕らわれることとなった。この戦いが終わるころの袁紹軍はぼろぼろであった。

死を恐れた兵が、袁紹を縄で縛り、信長に差し出したのだ。袁紹は自分の兵に裏切られた結果となったあたりが袁紹の器を表すかのようであった。

そして、広間で袁紹、文醜、顔良の処分を決定することとなった。

「クク・袁紹よ、惨めなもので。自分の部下に裏切られるとはたいした名族ぞ」

「おだまりなだい！！きつとあの方は我が軍にもぐりこんでいた敵ですわ！そうでなければこのわたくしを縄で縛り差し出すなんてありえせんわ！

さあ！さつさとこの縄を解きなさい！！このわたくしにんたる狼藉ですの！」

「ひ、姫、自分の今の立場をわきまえましょうよ」

「そうですよ姫、ほかに言う事とかあるんじゃないですか？」

「命乞いなどわたくしがするはずありませんわ。なんと醜い」

「ほう。しからばうぬは斬られる事が望みであるか。名族という誇りの為に生きることが拒否すると」

「ええ、その通りですわ」

「ほう・・・」

その言葉を聞いた信長は辺りを見回す。
その目には文醜と顔良がうつる。

「文醜。顔良。うぬらはまだ生を望むか？」

「そ、そりゃまあ」

「はい・・・私も・・・」

「しからは袁紹を斬れ」

そういい信長は二人の前へと歩み寄る。
そして、信長は村正を鞘から抜き出す。

「この刀を貸してやろうぞ。この刀を二人で持ち、袁紹の首を叩き落とし、その首を持ってこの信長に忠を尽くすのだ」

信長が二人の目をみながらそう話す。

袁紹を殺せば、生かしてやろう。そして、お前達が新しく働く場所も提供すると言っているのだ。

信長はこの二人を欲した。

袁家が大陸一の勢力にまでのぼれたのはその名家とこの二人の将によるものであった。

袁紹一人ではすぐに勢力は亡びたであろう。この二人がいたからこそ、兵の心や戦いを勝ち残れたのだ。
その二人を信長は手に入れたかった。

だが二人はその誘いを首を降る事で拒否した。

「その誘いは嬉しいけどさ・・・アタイは・・・麗羽様を殺すことなん

てできないよ。

麗羽様を殺してまで生きようなんて思っていないんだ・・・」

「私もです・・・そこまでして・・・生きたいと思いません・・・」

その二人の決意は固いものであった。

この短い言葉の中にはとても深い忠義が詰まっていると信長は感じた。

「で、あるか・・・しからばうぬら三人には死、あるのみ。ワシ自らが袁家に亡びの鉄槌をくだそうぞ」

信長が村正をゆつくりと上方に構える。

三人は死を決意した。短い人生であった。もっとおいしいものをたくさん食べたかった。報われなかった。想いをさまざまに三人は目を閉じる。

そして、断罪の瞬間を迎えようとしたとき・・・

「待ってください」

一人の少女が信長と三人の間に庇うように両手を広げ立つ。

「・・・桃香。うぬは何を考えておる。このワシの前に立つか」

信長は村正の矛先を桃香に向ける。

「大丈夫です。これは私が必死に考えて出した結果の行動です」

「で、あるか。ならば申してみよ。うぬの決断を！」

「えっと・・・まずはごめんなさいご主人様」

桃香はその場でペコリと腰を曲げて頭を下げた。

「ご主人様は私にいろいろ教えてくれたよね。戦の事、今の世のこと。そして、私が甘すぎるってこと。

こんな考えじゃいつか人に裏切られ、絶望するのが見えてるって。それでご主人様は私にたくさんの事を教えてくれた。そして、私も目をそらさず真正面から見た。

だから・・・私はいっぱい考えたよ。今までにないほどたくさん悩んで考えた・・・」

桃香は胸に手を当て、目を瞑り、思い出を振り返るかのようにたんと話す。

だがその言葉の一つ一つには大きな思いが乗っているようだった。そして、目を開き。その想いを語った。桃香の決断を。

「私は・・・やっぱり馬鹿でいい。これが私の出した答えです！」

桃香はもう一度両手を広げ、袁紹たち三人を庇うように立つ。

「私は力も無い。頭だって悪い。なんにもできない！でも、私にはこうやって人を助けるように懇願する事ぐらいはできる！」

何も行動しないで、目の前で人が死ぬのは見たくない！！だって私が一生懸命お願いすれば助けられるかもしれないから！結局昔と変わらないけど、私が決意して選んだ結果です！」

「出会ったころのうぬと同じであって、同じでは無いと申すか」

「はい。私はこれからも馬鹿で、甘くて、お人よしの理想家であり続けます。自分の決意に誇りをもって」

桃香は信長から目を逸らさず、想いを口にする。

だが桃香の足は震えていた。信長の威圧、そして突き刺すような視線に体がこわばるのだ。

それでも桃香は袁紹たちを救うために信長の視線を一人で浴び続ける。

「だが我が織田に無能はいらぬ。うぬも知っておろうその袁本初を無能を養うために民から、税をしばらくとるか？うぬは一人の無能の為に何百もの民から金を奪うか？」

「お金で人の命は買えません！！どれだけの大金を積んでも返って

こない命だつてあるんです！
きつと、民のみなさんだつて袁紹さんを助けるためならきつと納得してくれる！」

「だが、その袁紹には何もできぬ！！武も知も！兵をまともに率いる事すらできぬ！」

「だったら袁紹さんには侍女として働いてもらいます！私がきつと袁紹さんを無能だなんて呼ばせないようにお手伝いします！！だからお願いします！！！」

桃香は力のかぎり叫ぶ。自分が決めた決意のために、ここで袁紹を死なせてしまえば自分を裏切ることになる。

目の前で、助けられる人は助ける。なにもしない自分ができることはそれしかないため。

困っているたくさんの人を助けたい。ただそれだけのために。

「劉備さん・・・」

袁紹の心が揺れる。先程まで殺せといていた自分が嘘のようだ。

「何故そこまでして庇う」

「私は・・・ただ皆で平和になった世を見たいだけです。」

袁紹さんも曹操さんもそして私たちも目指す先は平和な世だと思います。

それまでの掲げる言葉や文句が違っただけ、結局はこの大陸のために戦ってるんだと思います。

だから・・・」

そして、桃香が後ろに振り向き三人を見つめる。

「私は袁紹さんとも、文醜さん、顔良さんとも平和な世がみたいですよ。」

だって貴方たちも平和な世の為に戦った同士なんですから」

桃香が三人の手を合わせ、両手で包み込むように三人の手を握る。

桃香の手は優しく、暖かった。

その死を目前にした三人にはその手は暖かすぎた。

「りゅうび・・・さん・・・」

「あれ・・・おかしいな・・・斗詩。アタイなんだか涙が止まんないよ・・・」

「私も・・・初めてこの人のために・・・理想のために戦いたいって思った・・・」

三人の心は折れた。ほとんど見ず知らずで、虎牢関の時には馬鹿にしていた自分たちの為に懇願してくれる劉備の優しさに。その慈悲の深さに。

三人はもう死のうなどとは頭に無かった。ただただ生きたかった。自分たちのために体を張ってくれる劉備の為に生きたいと思った。

「・・・たわけが・・・鈴々！うぬは桃香のようなうつけになるでないぞ」

信長は剣を鞘に収め、振り返り椅子にもう一度座ろうと歩き出す。その途中鈴々にそう話した。

「うっん・・・お姉ちゃんは馬鹿じゃないのだ・・・。
お姉ちゃんは最高にかっこいいのだ！！」

「・・・・・・・・」

「っはっはっは、主。これでは悪者ですな」

その光景を見ていた星が笑い出す。

「仁・・・か。これが桃香とワシの違いか」

信長が見つめる先には泣きながら桃香と話している三人が見える。
この三人は決して桃香を裏切ろうとは思わないであろう。

三人の事は深くは知らないが決して裏切らないといえるほどの自信がある。

自分にはあのような忠臣はいたであろうか？

（ホトトギスが鳴かぬなら・・・殺すのではなく、鳴かせてみせるわけでもなく、答えは単純であつたか。
ただ優しくすればよい・・・感謝の意で、喜ばせようとおのずと自ら鳴く・・・か）

信長は椅子に座り、そう心の中で思った。
そして、白蓮にこう話す。

「白蓮。ワシが袁紹を殺し。うめの復讐のため、その骸で酒を飲ませたらうめはどうする？」

「な、なんだそりゃ！？ずいぶんな話だな・・・
とりあえずいくらかついていようが、嫌に決まってるだろ！！」

もし無理やり飲まされたら、キレてお前の寝てる部屋に火を放つかもな」

白蓮は冗談交じりで、笑いながら話す。

だが、信長にはその答えを笑ってきけるものではなかった。

（クク・・・人の心とは難しいものよ。やはり桃香はワシには足りないものを持っているようだな。

ワシもあやつから学ぶものがたくさんある・・・か）

そして、信長はゆっくりと立ち上がり、桃香たちの下へと歩み寄る。

「桃香に免じ、うぬらを不問とする。ワシらの元へ来るか。流浪の身となるか好きに選ぶが良い」

「え！？本当！ありがとうご主人様！！よかったね♪三人とも」

桃香は自分のことのように三人の無事を喜ぶ。

その行動にも三人は驚く。自分たちのためにここまでしてくれるなんて・・・と

「わたくし、劉備さんのために働きますわ。何もできないわたくしですが、劉備さんのためにおいしいお茶を勉強しますわ」

「アタイも、劉備のために劉備を邪魔する敵をぶった切ってやるよ！だから仲間になってくれ！」

「私もです！劉備さんのために一生懸命がんばります！」

三人の心は決まっていた。その目にはもはや光が宿っていた。ただただ、自分たちのために体を張ってくれて劉備への恩へ報いるため生きると。

影

袁家の三人を仲間に入れ、全員で今は官渡城に居を移している。曹操を見張り、けん制するためにこの城が一番いいためである。

麗羽は一流の侍女となるために月、詠の指導を受けていた。

だが、やはり今まで人に茶などをいれさせていたためか、まったく仕事が出来ないのである。

掃除にいたっては手が汚れるのを嫌い、やろうとしないのだ。

「まったくあんた馬鹿じゃないの！」

「手が汚れてしまいますわ！こんな汚いものに触れてしまえば病におかされてしまいますわ！」

詠と麗羽の言い合いは続く。そんな光景を月は困った顔で見ている。

「え、詠ちゃん、麗羽さん……。早くしないと他の部屋をお掃除する時間がなくなっちゃうよ」

そんなおりにこの部屋の主が帰ってきたようだ。

「あれ？月ちゃんに、詠ちゃんに……。麗羽さん？どうしたの？」

そう。この部屋は桃香の部屋であった。

掃除をしたくないと言い張る麗羽であったが、桃香の部屋であればするだろうと月と詠は考えたのであった。

だがそれでも、駄目であった。麗羽は埃すら触る事ができないのだ。

「へう・・麗羽さんが、お掃除をしたことがなくて、それで全然してくれなくて」

「そうなんだ。ちよつと貸してみて」

そう言い、桃香が使われなくなった布で作られた雑巾を手に持ち、自ら机などを拭き始める。

「と、桃香さん!？」

「ごめんね、麗羽さん。私の机ちよつと散らかりすぎだよ。今までお掃除したことがないなら、ちよつと抵抗あるよね」

「い、いえ!そ、それよりあなた自らがやることはないではありませんの!」

「ううん、違うよ。お掃除は気づいた人がやればいいんだよ。」

そうすれば、あまり汚れないでしょ？ そうしたらお掃除をしてくれる人だって仕事が少なくてすむでしょ？

だから、他にいっぱいいろんな事に手が回るでしょ？

はい、麗羽さん。次は貴方が拭いてみて、ここならあまり汚くないでしょ？」

桃香が自分が使った雑巾を麗羽に渡す。

そして麗羽は雑巾を見つめ、次にすでに綺麗になった机を拭き始める。

「どう？これならあまり抵抗ないでしょ？」

「そ、そうですね」

その流れのまま袁紹は他の場所も拭き始める。

一度触ってしまえば、汚い雑巾でさえも抵抗がなくなったのか、次々と部屋を拭き始める。

その様子を眺めていた月はにつこりと笑い、詠はやれやれといった表情を見せ、二人も掃除を始め、桃香も一緒になって掃除を始めた。

「うん。綺麗になったありがとうね麗羽さん」

「い、いいえ。わたくしなんてまだまだですわ・・・それにいらない

お時間までとらせてしまつて・・・」

「ううん、気にしないよ。麗羽さんはお掃除をしたことがなかったんでしょ？」

だったら、仕方ないよ。それに私が時間を割く事で麗羽さんがお掃除を出来るようになったんだし、いいことづくめだよ」

そういい、桃香が麗羽に向け、にっこりと微笑む。

「フフ。相変わらず素敵な笑顔ですわね。貴方の笑顔を見るとなんだか力が湧いてきますわ。」

さあ、月さん！詠さん！次の仕事に行きますわよ！」

そう言い麗羽が掃除用の水が入った桶を持ち部屋から出て行った。

「まったくあいつつてば、本当に現金な奴ね。あんな奴にボクは負けたのか・・・」

「ま、まあまあ詠ちゃん」

落ち込む詠をなだめながら、一礼し月と詠も部屋から出て行ったようだ。

その二人を手を振りながら、桃香は見送る。

この光景を眺め怪しく光る目に気づかず・・

場所は変わりここは訓練場。

猪々子と斗詩は愛紗に任せられている。

「でやあああー！！！！」

「おるあああー！！！！」

堰月刀と斬山刀が交差する。

お互いの武器が激しく火花を散らせる。
つばぜり合い。力比べの状態である。

「・・・はっ！」

「なにっ！！??？」

不意に愛紗が今までこめていた力を抜き、猪々子の左へと回り込む。

猪々子は急に愛紗が力を抜いたために、力の行き場を失い、前のめに倒れそうになる。

「猪々子。ここまでだ」

愛紗が猪々子の首に堰月刀を突きつける

「ちつくしょく……またアタイの負けかよ」

「文ちゃん。これで三連敗だね」

「猪々子。お前は力任せすぎるんだ。すぐにお前は挑発にのる悪い癖を直すんだな」

「だけどよ愛紗く……力比べになったらさ、やっぱり自分の力を見せ付けたいじゃん？」

「それが駄目なんだ。まったく……お前は鈴々か？ 気が合いそうだな」

愛紗がやれやれと首を振るが、逆に猪々子は嬉しそうに笑う。

「鈴々か、あいつとは昨日一緒に食べたラーメンがうまかったな」。
あ、そういえば今日の昼も一緒に食う約束してたっけな」

「文ちゃん・少しは反省しようよ」

「はは、斗詩も苦勞しているようだな」

「まあ・麗羽様の方が酷いですし。
それに前は私一人で二人を相手していましたが、今はだいぶ楽で
すけどね。

麗羽様は月ちゃんと詠ちゃんに任せてあるし」

「はは。どつりで最近詠の怒る声が響くと思ったたらそういうことか」

「はい。みたいです」

二人は仲良く笑いあふ。苦勞人同士、気が合うのである。
そこに猪々子が何を笑っているのかと、二人に詰め寄る。
この三人は気が合うのか、最近をよく笑いあふ光景が見られる。

斗詩は常識人でありまじめであるため、愛紗を怒らせることがまったく数少ない人物である。

対して猪々子はまるで手のかかる妹がもう一人増えたみたいだ。

鈴々とも仲良くしてくれているために、愛紗からしてみれば世話になっっているともいえる。

「なるほど・・・袁家が亡び、織田陣営に・・・」

またここで怪しい目が光る・・・

彼女は先程からこの官渡城を調べている。

時には聞き耳をてて、時には天井裏に上り、穴を空け覗き見る。

（ここには・・・いない）

先程から誰かを探しているようだ。

今は各武将たちの部屋の天井裏に潜んでいる。

（ええっと・・・いた！）

彼女の目に映るのは魔王 織田信長である。

（織田上総介信長・・・今、尤も勢いのある織田軍、総大将・・・）

彼女は信長の行動を観察する。

今信長は部屋で書簡を読んでいるようだ。

そして、立ち上がり部屋からでていったようだ。

（戦術書・・・さすがですね。持ち歩き、暇があれば見て勉強するわけですね）

信長は廊下を歩き、傍にいた侍女に紙切れを渡す。

（何を渡したんだろ？見えないや・・・）

尚も信長は歩き続け、一つの部屋に入ったようだ。
その部屋は何もない空き部屋のようだ。
机はおろか、何もない。まさにただの部屋、空間。

（なんたる・・・こんな部屋で何を？）

「クク・・・影よ。この信長に何を求めるものぞ」

（バレた！！！？）

「無駄ぞ。すでにうめは袋の鼠・・・やれい！！」

天井裏にいる彼女の周りには既に忍びが二十人はいるであろうか？
彼女を取り囲んでいるのだ。

（まずい・・・囲まれている・・・！？）

突如として、彼女の足元から槍が突かれる。

彼女は必死でそれを避ける。忍びに囲まれているためその範囲でしか避けない。

どうやら、部屋に何も無いのはそこに箆笥や机など荷物があれば、自由に部屋を動き回り、槍で突けないためであろう。

（ここに誘導させられたわけですか・・・！？）

彼女は尚も避け続けるが、回りを敵に囲まれているため、彼らを気にしながらの回避である。

うまく避け続けるが、その行動は長くは続かなかった。

突如として、床が抜ける

どうやら槍で床を突き、穴がたくさん空いた為に抜けたようだ。

いや、そうさせられたようであつた。

部屋では信長が不適な笑みを浮かべ、彼女を見つめる。

「闇に生きる影よ。うぬはこの者ぞ」

「・・・」

信長は彼女の首に槍を付きつける。

だが彼女は何も答えない。

そうしている間に忍びが天井裏より下りてきて、彼女を縄で縛る。

「私は拷問されても何も答えませんよ。今すぐ殺したらどうですか？」

「殺すか否かはこの信長が決める。うぬに何を見出せるかはわからぬがな」

「どうして・・・私に見られていることがわかったんですか？」

「日ノ本はここより優秀な忍びが数多い。もちろんうぬよりも優秀な者もおったわ。

そのような時代を生き抜くためには、ここ以上に気配に敏感に生きねばいかんのでな」

「そうですか・・・ならば尚更覚悟ができました。

私がまだ未熟であるゆえの結果。殺してください」

彼女は目を瞑り、上を向き殺せと口にする。

信長も彼女は何も口を割らないだろうと思い。槍を持つ手に力が入る。

だがそこで一人の忍びが口を挟む。

「殿。彼女は呉の者ではないでしょうか？」

「ほう。なにゆえそう思うか」

「私たち忍びたちの中では、呉の周泰と言う者の技術の高さは有名です。

私たちよりも隠密、偵察に優れていると聞きます。

実質私たちの警備を抜け、ここまでやってきました。

殿が侍女に私たちを集めるよう、伝えるまでは私たちは彼女の侵入に気づきませんでした。

面目しだいもありませぬ・・・」

忍びが全員頭を下げる。

警備をしていながら、自分の主の元まで進入を許してしまったのだ。

「呉の者が・・・おもしろい、周泰よ。目を開けよ」

そう言われ、周泰は目を開け信長を見る

「うぬの命。殺すわけにはいかなかった。しばし、そこで待て」

そして、信長が侍女を呼び、紙と硯を用意させ何かを書き始める。

「この手紙を持ち、呉へと戻るが良い」

信長は周泰の縄を切り、今書いた手紙を周泰へと手渡す。

「この手紙を・・・ですか？」

「うむ。うぬら呉にとっても大事なことぞ」

「・・・、わかりました。ではこれにて失礼します」

その選択肢しかないようだ。

周泰は再び天井裏へと入っていく。

その速さに忍びたちは驚きの声をあげる。

だが信長だけは驚きはしない。

信長はよく知る半蔵という伝説クラスの忍びを思い出す

「ただいま戻りました」

「明命!どうだった?」

「はい、織田はどうやら袁家を滅ぼした後、袁紹、文醜、顔良を引き入れたようです」

「なるほど、どんどんと将を吸収していつてるのね」

「ここは呉。周泰は言われたとおり呉へとすぐに戻ってきたのだ。そして、信長に託された手紙を主である孫策へと渡す。周瑜もその場にいたため二人で内容を確認している。」

「同盟・・・か」

「それも期限付き、半年か」

信長は呉へと同盟を持ちかけたのであった。

信長たちの領地と呉は比較的近く、いつ、何が原因で争いが起きてもおかしくないのだ。

「私たちにとってはまだ地盤を固めたいところね」

「ああ、独立したばかりだからな。それに今織田とは争えない」

「織田にとつても今は曹操とにらみ合っているものね。つまりどちらにとつても争えない状況というわけね」

「だが、期限は半年……。つまり、半年すぎれば」

「あとは知らない・・・」

孫策と周瑜がにやりと笑いあう。

おそらく、半年もあれば織田も呉も地盤を固め終え、争う準備は十分だということの意味するのであろう。

半年と一日が経てばすぐにでも出陣してもよいということである。

「さて、織田がこの半年でどれだけ成長するか見ものね」

「ああ。我らもな」

影（後書き）

桃香の麗羽への呼び方は 麗羽さんか麗羽ちゃんどれですかね？
さすがに麗羽ちゃんはおかしいか・

皆さんどうでしょう？

麗羽さんでいいですかね？

曹操と劉表

織田軍は全員が広間に集まり、これからの方針を考えていた。

「まず、この官渡に進軍した際に、見逃していた曹操の城を落とさねばなるまい。

徐州からこの官渡までを全て制圧せねばいかぬ。

星、うぬはねねをつれ制圧してまいれ。

ねね、うぬはまだ経験が足らぬ。敵は小勢。

兵を一万ほど連れていけば敵が抵抗したとて負ける事はない。城を落とした後、近くにあった砦も落としてくるのだ」

「御意」

「うゝ・・・恋殿と一緒にではないですが仕方ないです・・・」

ねねはしぶしぶだが了承してくれたようだ。

ねねはこの織田軍の軍師の中ではまだまだ実力が足りない。

いや、並の軍師と比べれば彼女は優秀ではあるが、この織田には諸葛亮、鳳統、そして賈馱という名軍師がいるのだ。

だが、詠は世を忍ぶために姿を一目にさらすわけにはいかない。

朱里と雛里だけではまだ軍師は足りないのだ。

そのため、ねねを信長はもっと鍛えたかったのだ。

そして、星、ねねがこの官渡城を出発した二日後。
思いも寄らない知らせがもたらされた。

「ほ、報告します！曹操、劉表が同盟を組み！二方面より進軍を開始しております！」

その数、曹操は二万五千！劉表は五万です！」

「な、なんだと！曹操と劉表が同盟・・・？」

織田軍の将たちは全員が驚いた。

二つの軍勢を合わせればその数七万五千もの大群。
しかもその二つは分かれ、二方面からの攻撃。

こちらも軍を分けねばならないのだ。

「クク・・・曹操め。奴は恐らく呉の連中にも同盟を持ちかけたであろうな。」

このワシを包囲殲滅せんとしたのであろう。

そして、この星たちが出立してからの進軍。見事ぞ」

信長はかねてより後方の呉が気になっていたのだ。

そして、最近結んだ同盟。

後顧の憂いがなくなって良かったのだが、こんな形でもこの同盟が役にたつとは思わなかったようだ。

「ふむ・・星に引き返すよう申しても遅すぎる。しからは星たちはそのまま城攻めを続行させる。この戦いで兵に多数の損害がであろうぞ。」

城攻めでは降伏する兵が出るであろう。今は少しでも兵が欲しいところ。

星には状況を伝え、そのまま続行せよと伝えよ」

「はっ！」

報告に来た兵に星たちに状況と、なるべく敵兵を吸収する方向にせよと伝えるために兵は急ぎその場を後にした。

「まず、ワシと朱里、鈴々、白蓮、恋は劉表とやりあう！そして曹操は桃香、愛紗、雛里、猪々子、斗詩だ！

ワシらは四万、そして桃香たちは三万であたれ。曹操は強敵ぞ、兵だけでも有利な戦況でなければ勝てぬ。皆心してかかるのだ！」

「はっ！（御意！）」

「出陣だ！！」

そして、織田軍対曹操劉表連合軍との戦いが始まったのであった。

こちらは信長と劉表との決戦の地。今はその戦前である。

信長は本陣で椅子に座り、軍議を行つたため將たちが揃うのをまっている。

ヒュッ

「・・・っ!？」

ガッ!!!

一本の矢が机に刺さっている。

その矢は信長に向けて放たれたものであった。

「クク・・・やりおるわ。のう・・・黄忠よ」

信長は小高く聳える丘に向け、一人ポツリと呟く。

「遅れて申し訳・・・ご、ご主人様！！??」

朱里が急いで信長の元へかけよる。

その信長の頬には赤い線が走っている。

その線より、ぽたぽたと赤い液体が流れ出る。

魔王と呼ばれようと彼も人間であり、そして死ぬのだ。

「朱里。敵には弓の名手がある。恐らく弓隊の錬度は高いであろうな」

「弓の名手・・・？黄忠のことでしょうか？なるほど・・・」

朱里が顎に手を当て、考えるポーズをとる。

そのおり、織田軍の武将が全て揃い軍議が始まった。

「今回、忍びの偵察により、敵の情報はつかめました。敵はどうやら、伏兵を多く用いていますね。」

右翼、左翼。両方に伏兵を潜めています。
その数は5つにもおよびます」

「そんなにも伏兵を置いてどうする気なのだ？」

「恐らく・・・本隊から兵を削るためでしょう。
右翼、左翼に伏兵を置き、機を見て姿を出す。
そうすれば、おのずと迎撃に向かわなければいけません」

「そして、本陣から兵を削るわけだな。
と、いうことは・・・敵の作戦は・・・」

「ええ。全て読めています」

そして戦いの火蓋は切って落とされた。

「ご主人様！敵の伏兵が姿を現せました！！」

「うむ。ならば、迎撃に向かわせよ」

「殿！！左翼の方でも伏兵が姿を見せております」

「クク・・・そちらも迎撃に向かわせよ」

戦いが開幕し、お互いの兵と兵とのぶつかり合いが行われている。
そんな中、敵の伏兵が右翼、左翼とともに出現する。

前曲ではすでに戦いが行われているため、兵を裂くことはできない。
伏兵の数は二千や千ほどの小さな部隊であるため、後曲である信長
本隊より兵が送られる。

「また現れました！およそ五百ほどの小さな部隊です！」

「クク・・・そろそろ・・・か」

信長の本隊からどんどんと兵が切り離される。
そして・・・

突如慌てた様子で伝令兵が本陣に転がり込んできた

「た、大変です！！後方より敵の奇襲部隊が現れました！！」

「うおおおおー！！！！！！」

敵の高らかな雄たけびにも似た声が響く。

織田軍本陣ではざわめきの声があがる。敵とはもうすでに交戦が行われているようだ。

「朱里よ。うぬは下がっておれ。あやつが控えておろう。守ってもらうのだ」

「わかりました。ご主人様、どうかお氣をつけて」

朱里はとくに慌てた様子も無く、走るように去っていく。
信長は臆することなく、腕を組み、椅子に座り続ける。

そして、この時が来た。

「我こそは文聘！！織田信長覚悟せよ！！！」

ついに馬に乗った奇襲部隊。文聘が信長の元へとやってきた。それでも信長は動じない。ただ、椅子に座り文聘の顔だけを見つめる。

「はっはっは！本陣が手薄だなあ！

ずいぶんと簡単にここまでやってこれたぞ！

織田信長！その首もらいうける！！

でやああああー！！！！！」

そして、文聘は全速力で信長に向けて切りかかる。

「覚悟おおー！！！！！！っ！！！！？」

斬りかかろうとしたその時。地面が揺れる。

「なっ！？なんだとっ！？」

突如として、暗くなる視界。
おぼつかない平衡感覚。
背中にかんじる衝撃。

「クク・・・火に居る夏の虫・・・ぞ」

上から声が聞こえ見上げるとそこには信長が顔を覗かせる。
落とし穴だ。文聘はその時悟ったのであった。

「ぐっ・・・がはっ・・・ひ、卑怯だぞ・・・信長・・・」

「クク・・・総大将は安易に敵と斬りあいをするものではない。
うぬらの策。ワシの軍師の前では全てが手のひらの上ぞ。」

うぬの奇襲も全て読み。本陣の奇襲であれば直接ワシの首を狙いに
来る事もな。

だから仕掛けたのだ。必ずかかるとな」

「くっ・・・くそがあ・・・」

「クク・・・文字通り死に花を咲かせよ・・・やれい！」

ザッザッ

「ぐっ、がはっ！や、やめろおおー！！！」

突如として、土が上から落とされる。

この落とし穴を仕掛けるために掘った土であろう。

ザッザッ

「や、やめ・・・」

ザッザッ

ザッザッ

ザッザッ

そして聞こえなくなる声。動かない、土。彼はもう窒息したのであろう。

「クク・・桜がこの地にあらば、うぬから綺麗な桜が咲いたであろう・・ぞ」

信長は埋められた地を見て、そう呟く。

「ご主人様。予定通りあの方に守ってもらいました。ちゃんと顔を隠して戦っていましたよ」

「そうか。あやつの存在をまだ知られるわけにはいかぬ」

「そうですね。・・なるほど。うまくいったみたいですね」

朱里は埋められた落とし穴を見て、そう呟く。

「では次の策を実行するぞ!!恋!!」

「ん？あれ・・・織田だ！織田信長の本隊が前に出てきたぞ！！」

「織田・・・信長・・・」

劉表軍は突如として前にでてきた織田軍本隊に動揺が走る。
黄忠も例外ではない。

「どづいうことかしら・・・」

「とにかく攻めましょう！！今が好機です！！」

「あ！待ちなさい！！・・・っもう！！」

黄忠は冷静に考えるが、周りがそうはいかない。
彼女も環境に恵まれない将であった。

「木瓜の旗・・・確かに織田信長が用いるものだけど・・・」

黄忠は進軍しながらも不安が抜けきらなかった。

なんであろう？この不安は・・

「黄忠殿。向こうの連中も気づいたみたいです！

このまま挟撃し、敵の本隊を一気につぶしましょう！」

自分たちと織田軍を挟んだ向こうの部隊も信長に気づき、共に追走する形になっている。

「挟撃・・・なんだか怪しいわね・・・」

「クク・・・釣れおるわ。さすがワシ自らが餌となった釣りよ」

信長は馬にまたがりながらそう呟いた。

実際信長本隊は確かに前にでているのだ。

「ご主人様。そろそろ頃合です」

「よし！皆よ一斉に後退だ！！退け！！」

信長の合図に、本隊は一斉に後退を始める。
だが敵はその後退を逃すはずがない

「敵が逃げるぞ！！追え！追えー！！」

「待ちなさい！！これは明らかにおかしいわ！！」

黄忠は思った。これほどまで前に出てきて、何もせず、背中を向けるとはおかしいと。

だが、黄忠の制止も聞かず、周りの部隊は一斉に信長の追撃を始める。

前を走る信長の本隊。

二つの軍は走り続ける。

気づけば、その差は縮まっていくな。

そして、もう少して追いつこうというその時。

本隊から一つの部隊が反転し、迫ってくる敵へと突撃を開始する。

旗が今になってかけられる。

そのかけられた旗印は・・・呂

二つの部隊がぶつかった瞬間、時が止まる。

その赤い髪に、力強い攻撃、方天画戟

不思議なことに何人もの人が宙を舞うのだ。

「りよ、りよりよ・・・呂布だー！！！」

突如として出現した呂布の部隊に敵は大混乱におちいる。

「呂布ですって！？まさか・・・何故こんなところに？」

「クク・・・釣られた敵は全員予想だにしなかったようだな。

ワシらも反転するぞ！！恋の登場のためだけに打った芝居だからな」

「ですがその効果は大きかったようですね。

敵は大慌てで、反転を開始しています」

「今度はこちらが追いかける番ぞ！敵の動揺が続いているうちに少しでも削るぞ！」

先程とは打って変わって状況が逆になる。

敵は混乱し、まともに統率がとれない状況である。

信長を殲滅せんと、攻め立てていた部隊が今は逆に追いかけられているのだ。

後ろにはあの赤い悪魔がいる。

兵たちは恐怖と混乱により、ただ背中を見せるしかできないのだ。

「落ち着きなさい！混乱しては敵の思う壺よ！」

黄忠は叫ぶ。だが混乱は静まらない。

それほどまでに呂布が与える戦場の効果は大きいのだ

「クッ・・・だめか・・・ならば！！」

黄忠は三本の矢を引き絞り、その鋭い目で一点のみを見る。

狙いはもちろん呂布。彼女は同時に三本もの矢を放つ事ができるのだ。

もちろん、狙いは外さない。

（当たり前なさい・・・）

呂布は今兵を斬っている最中である。

そして、こちらからは50メートルは離れているであらう。
気づく様子も無い。

（ごめんなさいね。これも乱世・・・）

指にこめる力が増える。

この矢を放てば、あの天下無双を討ち取れる。
そうすればこちらの混乱も収まる。

そして・・・勝てる！！

（っ！？）

ありえない……

どうしてこちらを見ているの？

その何を考えているかわからない、つぶらな瞳でこちらを……どうして？

（そんな……気づかれるはずなんて……あ！？）

突如走った動揺で矢が放たれる。

黄忠の矢はまっすぐ呂布の元へと飛んでいく。
そしてその矢は……

「……………」

呂布は先程斬った死体を盾にして防いだのだ。

その兵の体で防がなかったら、矢は全て呂布に当たっている。
首、心臓、腹

「まさか……本当に気づいてたって言うの……？」

黄忠の顔から一すじの汗が流れ落ちる。
そして、手が震える。手も汗でぐっしょりとぬれている。

これが呂布・・・天下無双の・・・武人

「駄目ね・・・退きなさい！！撤退するわ！呂布と戦っては駄目よ！
」

黄忠は悟った。彼女と戦ってはいけない。
あれは並みの武人じゃ次元が違う。
戦って勝てる相手ではないと。

その後の戦況は一方的であつた。
この劉表軍での一番の武人であり、優秀な指揮官は黄忠であるのだ。
彼女こそが劉表軍の要。

その彼女の士気は呂布の登場により大いに落ちてしまっていたのだ。
そんな彼女を見た兵たちの士気も自然と下がってしまう。

織田軍への奇襲部隊も、すべてやられてしまった。
文聘の生死も不明。

劉表軍全体の士気も落ちてしまっている。

対して織田軍には一騎当千の張飛がいる。

彼女の武は、劉表軍に恐怖を与え、味方には勇気を与える。

公孫？はその馬の技術。そして、彼女の部隊の騎馬隊の錬度はまさに人馬一体であるのだ。

その突撃力は今や、織田家一である。

劉表ももう勝敗は分かっていた。

策はやぶられ、黄忠の士気も落ちた。

敵に勝てる要素はもうないと。

彼の決断は早かった。

そこには黄忠からの進言もあったのだろう。

呂布の出現から一時間もしないうちに劉表軍は撤退を開始した。

無駄に兵を減らしたくはなかったのだろう。

劉表軍には圧倒的に優秀な将が少なすぎたのだ。

そこが、織田軍との一番の差であつたであろう。

「クク・・・身の程を知ったか劉表よ。聞けい！！我らの勝利だ！！」

「おおー！！！！」

こうして、織田軍は劉表軍を退けることに成功したのであった。

殿軍

劉表軍に勝利し、勢いに乗る織田軍

「徹底的に殲滅せよ。織田に二度と逆わぬよう彼奴らの本能にまで恐怖を植えつけるのだ」

信長の指示により、敵を追撃し、殲滅せんと織田軍の士気はもはや天を突かんがばかりであった。

「ほ、報告します!!」

だがそこに伝令兵が息を切らしながら転がり込んでくる。そして、息もたええに驚くべき報告を口にした。

「そ、曹操軍と戦っていた、劉備様による別働隊が・・・は、敗走しました!!」

「なんと・・・ぐっ・・・やはり曹操は一筋縄ではいかぬか・・・」

信長の頭のなかにあつた負けるのではという想像が当たってしまった。

こちらは劉表軍五万という大軍であるため、戦力を減らすわけにい

かなかった。

そのため、まだ誰にも知られていない呂布という最強の策を劉表に使うか、曹操に使うか信長は悩んでいたのだ。

その結果、信長はこちらの戦力を劉表より、一万も減らす代わりに恋をこちらにおいた。

その代わり、向こうには曹操軍より五千多い状態で戦いに挑ませたのだ。

だが、曹操は強かった。

五千という戦力差ではものとしなかったのだ。

では向こうに恋を送っていてはどうだったであろうか？

勝っていたかもしれない。

だがこちらはどうか？

恋がいなくても勝っていたであろうか？

いや、そのようなこと考えるだけ無駄である。

大事なのは結果である。

どちらが勝っていたかなどどうでもよい。

今は劉表軍には勝てて、曹操軍に負けたという結果である。

今最善のすべきこと、それは……

「退け！追撃はよい！官渡城へ急ぐのだ！！敗走し、生き残った者があの城へ逃げ帰るはずだ！
全軍撤退じゃ！！退け！退けー！！」

「くっ、これが曹操軍か・・・。見事だ」

桃香たち織田軍は窮地にたたされていた。
数では勝っていた織田軍だが、戦略では負けてしまったのだ。
いくら、雛里が優秀とはいえ、向こうには3人の名軍師がいたのだ。

敵の連携は見事なものであった。

あの3人の軍師は離れていようと、仲間の頭のうちを読み、その場で打ち合わせでもしているかのように部隊を展開していくのだ。

そして、名だたる武将の数。

夏侯惇、夏侯淵、許緒、典韋、張遼、樂進、于禁、李典
よくここまで集めたものだ。

「桃香様！私たちの負けです！官渡城へお引きください！」

「そうだね・・・悔しいけどここは逃げるしかないね・・・」

「あわわ・・・申し訳ありません・・・」

雛里が今にも泣きそうな顔をしている。

しかし、泣けば更に兵たちに動揺を与えてしまうと、必死に帽子をめぶかにかぶり、顔を見られないようにしている。

そこへ桃香が優しく帽子の上から頭をなでる。

「うつん、雛里ちゃんが悪いわけじゃないよ。誰も悪くない。

悪いのは今の世の中だよ・・・言葉も通じて、同じ大陸に住んで、同じ人間同士で殺しあうこんな世の中。

そんな世の中を正す為に、私たちも武器を持って戦ってるなんておかしい話だけだね」

桃香は困惑した表情だが、元氣付けようと笑顔を雛里に向ける。

殺し合いを無くすために、殺し合いで解決する。

武器を持ったまま、相手に握手を求める。

桃香は昔言っていた、理想ごとを完全に理解したようだ。

そして、今はその負の連鎖から抜け出せないことも理解していたのだ。

相手に話を聞いてもらうためには、勝って、そしてそれから相手と話あうと桃香は決めたのだ。

自分の理想ごとや思想を相手に無理やり押し付けると言われようが、自分の気持ちを理解してもらい、少しでも同じ気持ちになってもらえればと、少しでも争う気持ちを無くしてもらえればと考えたのだ。

「でもさ、愛紗。敵がそんな簡単に逃がしてくれないみたいだぜ」

「文ちゃんの言うとおり、敵の追撃が・・・」

「ならば・・・私が殿を引き受けよう」

愛紗が一人、背を向け敵の方へと歩いていく。

「ま、待てよ！だったらアタイも！」

「駄目だ！誰が桃香様と雛里を守るんだ！私はお前たちを信じている。」

お前たちが桃香様を思う気持ちは私と同じ。私を安心させてくれ・・・そうすれば私はここで安心して敵の追撃を食い止めることができる」

愛紗はもう一度振り返り猪々子と斗詩を見つめながら優しい顔でそう話す。

最近には訓練をし、そして武器を交えこの二人ももう立派な織田軍の一員だと愛紗は実感したのだ。

だから、この二人に安心して桃香を任せる事ができると。

「さあ！もう行け！敵は優秀だ、そんな簡単に逃がしてはくれないぞ！」

愛紗が再び敵に向け走り出す。

その背中には迷いなどが一切感じられない。

美しく、女性らしい背中だがその背中はとても大きく感じられる。

「愛紗ー！ぜってー死ぬんじゃないぞおおー！！！！！」

「愛紗さーん！必ず、必ず戻ってきてくださいねー！！！！！」

二人はその背中に向け大声で叫ぶ。

二人にとっても愛紗はもう大事な親友となってしまったのだ。

「愛紗ちゃん……」

「桃香様・・・今は、愛紗さんに任せましょう。私たちはここで死ぬわけにはいきません」

愛紗を心配する表情で見つめる桃香。

だが今は雛里の言うとおり撤退するしかない。

桃園の誓いを胸に桃香はこの地を去る。

愛紗には千人の兵が託された。

その千人で曹操軍を迎え撃ち、桃香たちが逃げる時間を稼ぐのだ。

「くっ・・・さすがに数が多いな。そして兵の錬度も高い・・・これが曹操か」

愛紗は自分の持てる限りの力で敵を斬る。

堰月刀を止めている時間が無いほどに、常に振う。

自分が多く倒さねばいけない。兵は千人しかないのだ。

「ここは一端退くぞ！退けー！！」

愛紗たちが撤退の動きを見せる。

だが敵も逃がしてはくれない。

愛紗たちを殲滅せんと敵は全速で追いかけてくる。

「今だ！やれー！！！！！！」

突如、池から鎧を纏わず、武器だけを持った兵が現れる。

「うお！なんだこいつら！池に潜んでいたのか！？」

愛紗は先に池に兵を潜ませ、そして期を見て奇襲させようと撤退したのだ。

「よし！よくやった！敵は混乱している、攻め立てようー！！」

そして、また攻撃が始まる。

だが、数が違いすぎる。少数での奇襲であるため、どうしても敵の持ち直しが早いのだ。

「くっ・・・このままでは全滅してしまう。なんとかせねば・・・」

愛紗は敵を斬りながら、考える。

兵たちの疲労もある・・・なんとか一度休まねば、自分も死ぬわけにはいかない。

城に戻るまで、一睡もせずに戦い続けるのは不可能だ。

「そつえば林があつたな・・・よし！皆、退くぞ！撤退だー！！」

再び愛紗たちは撤退する。

だが、今度は敵も少し慎重気味に追撃を開始する。

愛紗たちは必死に走り、林へと入り身を隠す。

「皆よく聞け、ここでなんとしても敵と距離を引き離す。いいか、一度しか言わん。しっかりと聞いてくれ」

「やつらはどこだ！探せー！！」

「隠れても無駄だぞ！！全員皆殺しだ！」

曹操軍の兵たちは林に入り、愛紗たちを探す。

愛紗たちは木の陰や草むらに身を隠している。

そして、そこで期を見ているのだ。

そして、両者の距離は少しずつ縮まっていっく……

「今だ！やれー！！！！！」

「うおおおおおー！！！」

「な！？なんだー！！！？？」

「木、木が！？」

一斉に曹操軍へと倒れてくる木。

その数は二十はあるだろうか？一斉に同じ方向へと、同じタイミングで一斉に倒れてくるのだ。

愛紗たちは、身を隠し、そして木に切り込みを入れておき、接近してきたら一斉に倒したのだ。

曹操軍は一斉に倒れてくる木につぶされるものや、その光景に驚き完全に意識は木へと持ってかかっている。

愛紗たちはその混乱している隙にその場から撤退していった。

うまく、曹操軍の追っ手から距離を離し、愛紗たちは休憩している。

だが、状況は最悪だ。

休まなければ、戦えない。だが休めばその分また追いつかれる。そして、戦ったびに更に状況は悪化していく。

死者のほかに脱走兵もいる。

もう愛紗たち殿部隊は三百ほどしかないのだ。

「お前たち、すまないな。こんな部隊に選ばれてしまった」

愛紗はその場にいる全員に聞こえるようにそう話す。

「いいえ、関羽將軍と共にこんな修羅場を戦えて光栄です。一生の思い出になりますよ」

「俺も、帰ったらガキに話してやりますよ。」

父ちゃんは関羽將軍と一緒にこんな戦いをしてきたんだぞって

「俺もです。帰って彼女に話してやりますよ。きつと、惚れ直してくれますよ」

兵たちの顔には酷い疲れの表情が見えるが皆笑ってそう話してくれる。

愛紗はその言葉に少し心が軽くなる。

こんな死地の部隊に選び、つき合わせてしまっただけ責を感じていた。

「そうか・・・皆共に生き残ろう。・・・・・・よし！皆見ておれ」

愛紗はなにやらごそごそやっていたが、突如硬貨を取り出す。
ただの硬貨ではないか？その様子に兵は首をかしげている。

「硬貨には当然表と裏がある。私は今から7回連続で表を出そう」

そんなことできるはずがないと兵たちは口々に言う。
だが、愛紗はできると言う

「私たちはあの信長様の軍だぞ。

この地の者ではない、私はやはりあの方は天から来た、天の御遣いだと思う。

だから私たちには天の加護があるのだ、見ろ！」

愛紗は指で硬貨をはじき、手の甲で硬貨を受け止め、そしてもう片方の手で落ちないように抑える。
そして、ゆっくりとその手をどける

「見ろ！表だ。もう一度やろう、それ！」

愛紗はそれからも硬貨をはじく。

2回、3回・・・そして・・・

「な、七回とも全て表・・・」

「どうだ！！私たちには天の加護があるのだ！
この修羅場、きつと乗り切れる！皆力をあわせ一緒に帰ろう！！」

「おおおおー！！！！！！」

愛紗の行動とその言葉に皆元気を出したようだ。
暗かった顔をしていた者も、この結果に元気を出したようだ。

「ふふ・・・朱里から教わった人身掌握術・・・まさか使うときがこ
うとはな。

だが、そのおかげで皆士気を取り戻してくれたようだ。

人身掌握・・・か、聞こえは悪いが、それも使い方しだいだな」

愛紗はその言葉を口にしながら硬貨を見る。

その硬貨は二枚重なった硬貨であった。

裏面と裏面を合わせ、表しかでない硬貨。

だが、たったこの二枚の硬貨で兵たちの士気は大いに上がったのだ。

「ぐふっ・・・」

「大丈夫か！」

「すみません・・・俺はもう駄目みたいです・・・どうか・・・生きて・・・
ご武運・・・を・・・」

「くっ・・・」

愛紗は顔を背ける。昨日話していた兵だ。

また一人減った・・・

昨日、皆で話し合い、兵とも心の距離が縮まった分愛紗はつらかった。

「なんとしてもこの修羅場を切り抜ける！！皆、頑張ってくれー！！
！！うぉあああー！！！！！！」

愛紗は悲しみを胸に敵へと斬りかかる。

愛紗は奮闘する。堰月刀を振えば敵は一度に3、4人は死ぬ。

だが、こちらは明らかに劣勢。

敵が3、4人死ねば、こちらも数の暴力で同じだけ死ぬ。

「く・・・、なにかないか・・・。あれは！？」

愛紗の目に映るのは峽間。

愛紗の脳裏にいつぞやの光景がよみがえる。

「おい、お主。脱走する振りをし、あの峽間に向け走るのだ。そして・・」

「わかりました！」

兵が数人の仲間を連れ、走っていく。

「た、助けてくれー！！！」

「もう付き合ってられるか！！！」

その光景に敵はあざ笑うかのように攻め立ててくる。

だが、愛紗はそれでも戦う。

自分が奮闘し、時間を稼がねば。

「お前たち！最後の力を振り絞れ！私が付いている！だから、今だけは耐えてくれ！決して諦めるな！」

「おおおー！！絶対死なねえ！！絶対帰るんだ！！！」

愛紗の言葉に兵たちは再び、力が入る。

「大丈夫だ。帰れる。きっと帰れる！！」

「私が付いている。大丈夫だ」

「辛くなれば、私を見る！私の折れぬ心や姿を見て再び自分に渴を入れよ」

愛紗はずつと言葉を兵たちに掛け続けた。

自分の言葉を聞いて、生きる希望が沸くのであればとずっと声を掛け続ける。

そして、時間は十分に稼ぎきった。

「よし！退けー！！退くんだー！！」

愛紗は再び撤退する。

峡間へ向けて必死に走る。

だが敵は逃がすまいと愛紗たちを再び追撃する。

愛紗たちは峡間を必死で走り抜ける。

そして、出口へと差し掛かったところで愛紗は叫ぶ

「やれ！やるんだー！！！！！！」

「な、なに！？」

「い、岩が・・・岩が降ってくるぞー！！！！！！」

愛紗の言葉で一斉に振ってくる岩。

愛紗の指示で、撤退した振りをした兵たちは、崖を上り、岩を集め、待機していたのだ。

「よし・・・皆今のうちに逃げるぞー！！」

愛紗たちと、曹操軍の間には岩という壁が出来た。

岩をよけ、進むために時間がかかるだろう。

愛紗たちは今のうちに距離を離す。

愛紗たちは走り続け適当なところで休憩を取る。
だが、そこで愛紗は驚いた。

もう数は30にも満たなかったのだ。

昨日まではその十倍はいたであろう兵たち。

最初は千人もいたが、ここまで減ってしまった。

昨日話していた、父親と思われる兵も、彼女に自慢すると言っていた兵も皆死んでしまった。

愛紗の心が折れそうになる。

兵たちの心もう絶望しかない。もう生き残れるとは思えないのだから。

愛紗は兵たちの顔を見渡し、そして、決断した。

「・・・・・・・・。皆、聞いてくれ」

「殿部隊の追撃かゝあんな、もう少ない部隊をなぶり殺しにするっちゅーのもいい気がせんなあ」

張遼はその神速の名で先行して追撃部隊に選ばれた。

曹操がなもつぶす事ができない、殿部隊に落石などでいらぬ損害をおったことでついに張遼を任命したのだ。

そしてついに追いついたのだ。

敵兵は残りわずかだと聞いていた。

そして、もう戦ってから、30分はたっただろうか？

だが、移動すらない。普通戦えば、こちらの兵力であれば圧倒し、
どどん前へと進むものである。

しかし先程からずっと移動がまったくないのだ。

それに、なにも報告すらない。

張遼は兵を呼び、状況を聞いた

「なんやずいぶん時間かつとるやん。それに進まんし・・・毒蛇で
もでたんか？」

「い、いえ・・・毒蛇というより・・・鬼というか・・・」

「鬼・・・？」

張遼は不審に思い前方へと出る。

そして、そこで張遼は呆然とする。

「しょ・・・正気かいな・・・」

そこには鬼がいた

燃え盛る炎を背景に愛紗がたった一人で曹操軍と戦っているのだ

「背水の陣ならぬ背火の陣ちゅーわけか・・・野を焼いてウチらの進軍を止めたんか・・・」

愛紗は兵に野を焼かせ、そして逃がしたのだ。
これ以上仲間を死なせるわけにはいかないと、孤軍奮闘しているのだ。

「張遼か・・・私は今、炎よりも熱く燃えている・・・来い」

愛紗がゆつくりと張遼に歩みより、そして張遼に向け青龍堰月刀を構える。

「おもしろい・・・その炎ウチの堰月刀で消したるわ・・・」

張遼も飛龍堰月刀を構えるが汗が止まらない。

（ウチがびびつとるんか？震えがとまらへん・・・）

「でやああああー！！！！！」

愛紗が張遼へと走り、その武器を上から下へとおもいきり振り下ろす

「そんなもん効くかあー！！んたっ！！??」

張遼は武器を横に、その攻撃を受け止めるが愛紗の一撃はなんとも重い攻撃であつた

（なんちゅー重さや・・・まるで恋とやりあつとるみたいや・・・）

愛紗はなおも攻撃を繰り返す。

堰月刀を右から左へ、そして上から下へ。

張遼に攻撃させまいと、まるで無茶苦茶に振う。

その攻撃はどれも単純なものであるが、張遼は防戦一方である。

それでも愛紗の攻撃は効果が大きかった。いかんせん攻撃が重いので

だ。

張遼の手はもはや限界である。

（だ・・駄目や・・なんちゅー攻撃・・無茶苦茶やけど・・。関羽・・どんだけ重いもんを背中にしょつとるんや・・）

張遼は武器を交え、愛紗の気持ち伝わる。
絶対に退かんと。

張遼の額には汗がにじむ、そして、手は震えている。
対して、愛紗の顔はまるで変わっていない。
この場は完全に愛紗のものとなっていた。

兵たちも愛紗の気に完全に飲まれている。
誰もが思っていた。

今の愛紗を止めることは誰もできないと・・・

そして、張遼は一步下がり武器を下ろす。

「ウチの負けや。今のアンタには勝てへん。
それに・・・アンタは今死ぬべき人やないってお天道さんもいつとる
みたいやで」

張遼が上を向き、手のひらを上に向ける。
愛紗もつられて上を見上げる。

「雨・・・か」

降り注ぐ雨が火を消していく。
まるで、愛紗の奮闘をたたえるかのように、火が消え帰り道を作っているかのようなであった。

「くっ・・・」

愛紗は力が抜けたのか、ひざをつく。

「ウチも義の将なんて、言われとるけど・・・アンタほどじゃないわ。
ほらっ、肩貸したる」

張遼は愛紗の元へ駆け寄り、愛紗に肩を貸し、愛紗を立たせる。

「誰か！馬を！」

そう言われ、兵は馬を持ってこちらへとやってくる

「ほら、仲間の下へ帰り」

「いいのか・・・？」

愛紗はそう張遼へと告げるが、張遼はにっこりと微笑む。

「ウチは霞。真名は霞や。アンタの心意気に惚れたわ。
だから、アンタへの贈り物や。受け取ってな」

「・・・そうか。さすが義の将だな。
私は愛紗。真名は愛紗だ」

二人は握手をかわす。

「愛紗。いつかアンタとゆっくり酒でも飲みたいわ」

「そうだな、そのために今は戦おう。いつか実現させるために。さ
らばだ！霞！」

愛紗は馬に跨り、この修羅場から姿を消した。
愛紗の長い殿は終わりを迎えたのだ。
一人の熱い将の思いによって

「さうって・・・なんて説明しようか・・・」

「そうか・・・愛紗は一人で戦っておるか・・・」

「愛紗ちゃん・・・」

官渡城では、愛紗によって逃がしてもらった兵たちが愛紗の状況を告げる。

愛紗の命令により、野に火をつけ、その向こうで愛紗は一人で曹操軍を食い止めていると。

この場には暗い雰囲気が漂う。

愛紗の生存は絶望的であると・・・だが、そこに

「ほ、報告します！！関羽將軍が・・・関羽將軍が官渡城へ向かっております！」

一人の兵が関羽を見つけ、報告に来たのだ

「なんと・・・灯りを灯せ！！もつと城に灯りを灯すのだ！！
修羅場を潜り抜け、帰還する愛紗をこんな暗い城で出迎える気か！！」

信長の命令により、松明の量をさらに倍にする。
城は一気に明るさをますこととなった。

「あれは・・・」

愛紗は馬に跨り、官渡城へともうわずかなところまできていた。だが、その城の前で不思議な光景を目の当たりにした。

「おかえりなさいませ関羽將軍！！！！！」

「おまえら・・・」

兵が二列になり、松明を手持っている。

愛紗はその間をゆつくりと闊歩する。

城まで続く、松明の赤いゆらゆらした灯り。

そして城はさらに明るく照らされている。

愛紗は光り輝く道を通り、さらに強い光へと向かう。

その輝きはまるで愛紗の生命力を現しているかのようだ。

「愛紗！！！」

「ご主人様・・・ただいま戻りました！！！」

愛紗は馬から下り、膝を突く。

「・・・大儀であつた」

「はい・・・」

「主。こういうときは・・・いえ、お耳を拝借しますぞ」

城の制圧を終え、戻っていた星が信長の耳を拝借し、こにゅこによと耳打ちする

「愛紗・・・大儀であつた」

信長は愛紗を片手で抱き寄せ、抱き寄せた手で愛紗の後頭部のあたりから自分の胸へと抱き寄せる。

「大儀であつた・・・大儀であつた・・・」

「あ、ありがとう・・・ございます・・・」

愛紗は幸せそうな顔を浮かべ、目を閉じ、力尽きたのかゆっくりと

眠りに入っていた。

殿軍（後書き）

あれれ・・・なぜか愛紗がヒロインみたいになってる。

愛紗の活躍の場がなぜか多いな・・・

それと、この時代硬貨なんてあったのかどうか知りません

華琳の苦悩

曹操軍は愛紗が無事官渡城に撤退すると、軍を反転させ、そのまま撤退していった。

織田軍の主力メンバーが全員、一つの場所に介するとなると勝てないとは認識し、退いていったのだ。

愛紗の帰還祝い。そして、全員がこの城に在ることによって桃香が企画し、全員でご飯を食べようという事で全員が食堂に集まっているのだ。

そして、信長は考えていた。

今の状況。そしてこの世界の事を。

信長はチラリと桃香を見、こう思う。

（劉玄德・・・本来ならば官渡の戦の後、荊州にて曹操軍の大軍から逃げる、長坂の戦いとなり、そして赤壁となる・・・

だが、貂蟬は赤壁こそがこの物語の最後の大戦と申しておったな。

しかし、曹操に追われる気配はない。なにより劉表とはワシら是对立しておる。

最後の大戦・・・か、しからはもつと後に起こるか・・・）

信長は桃香に向けていた視線を鈴々へと向ける。

（長坂の戦いは起こらぬな・・・故に張飛の仁王立ちも無い。
しかし、その代わり愛紗による仁王立ちはあったか・・・

官渡の後の撤退戦での仁王立ち・・・か。鈴々に変わりに、愛紗が行ったか）

そして、信長は白蓮、麗羽、恋、猪々子、斗詩と順番に見渡す。

（公孫？が生きて袁紹と共にいる三国志。呂布が死なず、劉備を裏切る事の無い三国志。

そして、関羽により討たれる文醜と顔良が仲良く関羽と食事している三国志・・・

クク・・・良き具合に狂っておるわ。貂蝉よ、うぬの申した通りこの世界に混沌をもたらしたぞ。

ここは三国志にあらず。うぬがいう、「織田信長が乙女だらけの三国志に介入した物語り」となったであろうか？

うぬの申した通り、ワシがこの世界の主役となったであろうか）

信長は今のこの風景を記憶にとどめようとする。

町娘のようなおなたたちが武器を持ち、一騎当千の武を振う、元の世界ではありえない日常。

自分は今、奇跡のような経験をしている。

最後、自分が消えようとも悔いはない。

天下に向けて邁進し、そして誰も経験し得ないであろう体験をしていることに。

「一刀、あなたは私に幻滅するかしら？」

「いいや、しないさ。華琳、お前には死んで欲しくないからさ。お前の力になれるなら俺は喜んで話すさ」

ここは、曹操たちの居城。

今、二人は華琳の私室で二人っきりで話している。

華琳は悩んでいた。

織田軍の強さ、そして信長本人の強さ。

自分たちがこのままでは負けてしまうこと。

幼き頃よりずっと夢見てきた、霸道について・・・

「私は貴方に、貴方のしっているこの世界。三国志とやらのことは一切話すなって言ってきたのにね」

華琳は聞いてしまったのだ。一刀に三国志の物語を。自分がふがないばかりに、追い詰められている。仲間を危険な目に合わせてしまっている。

予定では、官渡で勝利し、今頃は天下にその名を大きく轟かせる大勢力となっていたはず。

だが、実際は織田に滅ぼされる危険性が非常に高い。

確実に織田はこの曹操軍を真っ先につぶしにかかってくるであろう。

劉表と組み、軍を二つに分けてもこの結果である。

主力が全て集まった織田には太刀打ちできないであろう、向こうの兵力はこちらよりも上。

正に危機的状况なのである。

華琳は現状を少しでも変えられるならと、一刀について禁断の歴史を聞いたのだ。

三国志の事、そして信長の日ノ本での事もだが・・・

「もう、歴史は大きく変わってしまったている。

信長さんだつて、知ってるんだ・・・だから官渡で俺たちに横槍を入れ、曹魏の肥大化を阻止したんだ」

「そして、彼は包囲網の危険性さえも知っていたから背後の孫呉に同盟を結び、三方向からの攻撃を防いだのね」

「かもな。でも、歴史が大きく変わったことで信長さんももう、歴史の知識が役に立たないことだつて気づいてるだろうな。後は、もう自分の力だけだ。」

本来なら、官渡の後、劉備は荊州の樊城にいて、そして劉表が死んで劉？が跡を継ぎ、劉？が俺たちに降伏するはずだったんだ。そして、俺たちは劉備を倒すために後を追う予定だった。

だが、実際はもう全然違う。
劉表だつてまだ死んでない、なにより、劉備たちと仲が悪い。
そして、華琳たち曹操軍が追いやられている・・・」

一刀は頭を抱え、うずくまる。
自分にとっての最大の武器、なにより華琳たちは一刀が持つ、未来の知識が役に立つという理由で一刀を自分たちのもとにおいていたのだ。

だが、実際はどうだろう？
彼はたかが、学生。仕える知識などほぼない。

そして、三国志の知識が今はもうまったくつかえない。

一刀はその悔しさや、華琳たちへの申し訳なさとで胸がいっぱいであった。

一刀は立ち上がり、握りこぶしをつくり、壁を殴る。

「すまん・・・華琳。俺・・・ほんと駄目だな・・・」

一刀は手に走る痛みで顔が歪む。

誰も責めない自分を、この痛みだけは責めてくれる。

だが、突如その手にもう一つの手が重なる。

壁を殴った事で赤みがかかる手を優しく、いたわるように。

「・・・えっ？」

「駄目なのは貴方だけじゃないわ。私もよ」

一刀に優しい笑顔を見せたあと、その手を離す。

そして、何を思ったのか曹操もこぶしを握り壁を殴る

その衝撃は一刀よりも強く、彼女の手からは血が流れている。

「お、おい!？」

「私はこの魏の総大将、曹孟徳よ。

私の元を集う者たちを全て守り、彼らを導く義務がある。

そして皆の苦しみは私の苦しみ。貴方が苦しいのなら私はもっと苦しいわ」

そして、曹操は壁から手を離し、一刀と真正面に向き合う。

「一刀、ありがとう。私は他の者の前では弱音を吐くことができないわ。

貴方の前でなら私は、一人の少女になれる・・・

こうやって、悔しさや、ふがいなさから壁を殴れるおちゃめな女にね」

フフッと曹操はかわいらしい、歳相応の笑顔を見せる。

「でも、これで終わり。私は元の私に戻るわ。
ただの少女じゃない、魏の曹孟徳へ」

彼女の顔が覇気に満ち、引き締まる顔へと戻っていった。

「すつきりしたわ。壁を殴るなんて情けないことをたまにはしてみるものね。」

手が痛いけど、おかげで考えが整ったわ」

「ど、どうするんだ・・・？織田と戦うのか？」

「いいえ・・・次の目標は」

「ほ、報告します!!」

「どうした？」

伝令兵が信長たちの集まる広間へと息を切らしながら入ってきた。肩で呼吸をし、息もたえたえに話す

「そ、曹操軍が全軍で出陣しました!!」

「なんだと!?!?で!どこに向かっているのだ!」

愛紗が驚き、その伝令兵に掴みかかるような勢いで、次の言葉を待つ

「え・・・益州です!!!!」

「え、益州だと・・・なぜだ？」

その言葉に愛紗は考える。

他の者たちも何故、曹操は全軍で益州へと向かったのか。益州といえば、劉璋だ。

何故劉璋を？

「まさか・・・」

「どうした朱里？」

突如声を上げる朱里に星が声をかける。

だが、雛里も何かに気づいたのかアツと声を上げた。

「天下三分の計・・・」

「天下三分の計？」

朱里の言葉に皆が首をかしげる。

意味を理解できていないのだろう。

「天下三分とは、以前私が考えていた名前の通り天下を二つの勢力にし、みつどもえを狙う計です。」

恐らく私たち織田が大陸の上部を占め、そして東が孫呉、そして西が曹操軍にしようと狙っているのだでしょう」

「あう・・・これが成れば私たち織田は天下布武。つまり、天下統一を成しえるにはかなり難しくなります・・・」

織田、曹操、孫策の三人で睨みあいが続く事になり、誰かが手を出せば、誰かがその隙を狙います。

ですので、うかつに手が出せず、長いこう着状態が続く事になるかと・・・」

「な、なるほど・・・」

朱里と雛里による説明により、皆が納得したようだ。

信長はその説明中ずっと、黙って目を瞑り考えているようだった。

（天下三分・・・やはり歴史は似た道筋を辿るものであるか・・・
クク・・・歴史よ。この信長を阻む事ができよう・・・か）

そして、信長は目を開き、答えを出したようだ。

「出陣ぞ！曹操が城をワシらに明け渡すというのなら、貰ってやるうぞ！

そして、後ろより曹操を襲おうぞ！

劉璋と交戦する、曹操を攻撃し、劉璋との挟撃だ！！」

「御意!!」

そして、織田軍は主力部隊で出陣した。

曹操軍の後を追いつ、まずは洛陽へと入城することとなった。
だがその道中はとても簡単なものであった。

兵は全ておらず、反撃がない。

曹操は完全に城を捨てたようだ。

被害無く、信長たちは城を得、その勢力を伸ばす事ができたのだ。
だが問題があった……

「備蓄庫には何もありません……」

「町中の食料を買い占めたようです……備蓄された食糧が無く、民
たちも生活ギリギリのようです」

曹操は、彼女らしくなく、城を出る直前に大徴収をしたようだ。
食料は街にほとんどない状態であったのだ。

もちろん、城の宝物庫などからも全て持ち去ったようだ。

それはこの街だけではなかったようだ。
ほかの城も全て同じ状態である。

「ご主人様・・・」

「クク・・・曹操め。なかなかやりおるわ。
施しじゃ！民をこのままほおっておくわけにはいかぬ！
ワシらの兵糧を民に分けてやるのだ！」

信長たちは各地で徴収され、生活が苦しい民たちのために、必然的に内政を重視することとなったのだ。
そのために動く事ができないのだ。

信長は黙って、曹操軍全軍に攻撃を受け、劉璋の敗北の知らせを聞くこととなるのであった。

「クク・・・歴史よ。うぬは天下三分を好むようじゃな。
このワシとて止めることができないんだか・・・」

華琳の苦悩（後書き）

ついにきました天下三分の計。
もう、お話も中盤を過ぎるころでしょうか。

一人の少女として

私は城の長い廊下を歩く。

心にはいろいろと嫌なものが詰まっている。
その嫌なものが溜まりすぎて吐き気がする、
気持ち悪い、頭がいたい・・・

早く楽になりたい・・・あそこへ行けば私は一人の少女へと戻れる。
辛い事も、苦しい事も、厳しい現実も全て忘れさせてくれる。

・・・私は今日もあの部屋へ向かう。

「はあ・・・」

「またため息か？」

一刀の部屋にやってきた曹操は、一刀がいつも使っている寝台に腰

掛け、一刀もその隣に座っていた。

最近毎晩、曹操は一刀の部屋へと訪れていた。

「やっぱりぬぐいきれないわ。

桂花に稟に風が三人が述べた同じ策・領地全てからの大徴収。

私が幼いころから歩んできた、霸道・終わりね。

麗羽じゃないけど、凛々しく、雄々しくないわ」

「でもしょうがないだろ？ああしなれば俺たちは確実に織田につぶされていた！

後ろを取られて、劉璋と織田の両方に挟まれる事になるんだぞ？」

「ええ、わかってるわ・あれは仕方のない処置だったってわかってる・

でも、私の心がそれを許さない。

貴方たちを守る当主としてはあれは最適な判断だった。

でも、曹孟徳としてやってはいけない禁断の判断だったのよ！」

曹操は立ち上がり、悔しそうな表情を浮かべる。

決してやってはいけないことを自分の判断で下したのだ。

結果としては成功だった。

劉璋を見事倒し、成都を手に入れたのだ。

信長も、曹操の旧領地を手に入れたが、その大徴収の為、民の暮らしはギリギリだった。

そのためその後始末に終われ、広い範囲での施しが必要であった。

広く食料を配り、足りなくなれば徐州などからも食料の輸送が必要であった。

つまり、曹操は広い領地の食料や、全ての城にためていた資金を持ち、それを成都へと移す事に成功した。

だが、逆に信長は大量に資金や食料を手に入れた領地全てに移さなければいけなかったのだ。

そのために、大量の時間、兵たちの振り分けのため曹操を追撃することができなかったのだ。

しかし、民たちの食料はギリギリであった。民の不安はピークに達していた。

信長がこなければ、その二日後には民たちの食料はなくなっていただろう。

曹操はそれを見越し、信長が来る日を予想し、見事的中させた。

つまり、実質民は何も苦しんではいない。

信長が来るまでちゃんと食事は取れていたのだ。

ただ、曹操が予想した日から二日分だけの食料を残し、あとは徴収したのだ。

そして、信長はちゃんと予想した日に到着した。
だが、民にはそんなこと何もわからない。

いきなり、曹操がやってきて食料を大量に奪っていったようなものだ。

ただ、「安心なさい。織田が来れば大丈夫よ」とだけを言い残していったのだ。

それは曹操の信長への信頼だろうか？
信長なら確実に来る。

自分を唯一こんなにも苦しめる最大の好敵手だから。

そして、その結果どうりとなったのだ。信長は見事民たちへと施しをしたのだ。

「あの時の・・・民たちの私への目がね・・・苦しいわ」

曹操の肩が震える。

泣いているのだろうか？だが曹操は一刀に背を向けているためわからない。

一刀はそっと、自分も立ち上がり後ろから曹操を抱きしめる。

「華琳・・・ありがとう」

「・・・えっ？」

曹操はその思ってもいなかった言葉が耳に聞こえ、驚く。そして、首へと回されている一刀の両手を優しく握る。

「俺はそう思っているよ。そして・・・きっとみんなも」

「どうして？」

「だって、君は一人で誰もやりたくない汚れ仕事を負ってくれたんだ。」

桂花や、稟、風だってあんなことしたくないさ。

でも、軍師として最良の判断を下さなければならぬ。

彼女たちも苦しんだした策だったんだよ。

だけども・・・実際に判断を下すのは華琳だろ？

そんな一番苦しくて・・・誰もやりたくない事を華琳は俺たちのためにやってくれたんだ。

俺たちを助けるために・・・そして、君はたった一人で皆の苦しみを

背負ったんだ。

だから・・・ありがとう」

一刀はさらに抱きしめる力を強める。

決して離さないように・・・今にもその責に押しつぶされ壊れてしまいそうなその小さな体を。

たった一人で皆の苦しみを背負う、小さな背中を強く強く抱きしめる。

少しでも震える彼女の心を暖めるように。

「・・・そう。ありがとう」

「え？なんで華琳がお礼なんていうんだよ？」

「貴方はいつも私を励ましてくれるわ。

曹孟徳として、この曹操軍の当主として悩み、苦しみ、辛いとき。いつも貴方だけは私を励ましてくれる。

春蘭や秋蘭、桂花たちとは違う、一人の友や人間として・・・ね。

対等に私に接して、そして私の心を軽くしてくれる。

それに何度私は救われたか・・・貴方は気づいていないでしょうけどね」

曹操はフツツと笑い、気づけば彼女の顔には笑みが浮かんでいた。その顔を見た一刀も自然と笑顔になる。

彼女はもう大丈夫だろうと判断し、一刀は彼女から手を離そうとした。

「駄目」

「え？」

「もう少し・・・このままで居させて」

「ああ。華琳が望むならいつでもいつまでもやってあげるよ」

二人の間には暖かい空気がゆっくりと流れる。

まるで、この空間だけ時間が止まっているかのようだ。

「ねえ一刀」

「ん？なんだ」

「・・・愛しているわ」

「ああ、俺もだ。愛しているよ華琳」

そして、二人は口付けをかわす。
ついに二人の心が通じあうこととなったのだ。

一人の少女として（後書き）

短くてごめんなさい。

でも、みんな前回の曹操の処置にいろいろ思う事があつたでしょう。
です、この話だけは早く乗せなくちゃいけなかったんです。

西涼（前書き）

かなり遅れましたね。

その理由についてはあとがきで書きます

西涼

その日、大陸の南西を支配する曹操がその国号を蜀と改めた。

曹操自信はかねてより自分の中で考えていた魏を候補としていたが、自分が支配する地域は蜀地方。

それではおかしいということで蜀と宣言することに決めたようだ。

それに対し、信長も自らが収める地域を魏と称した。

そしてついにここに魏、呉、蜀が誕生したのである。

魏の織田信長。

呉の孫策。

蜀の曹操。

この大陸の天下はもはやこの三人の英雄で決まったといっても過言ではないだろう。

しかし、まだ大陸の全てが埋まったわけではないのだ。

南東、南西はほぼ、呉、蜀が支配しているが、大陸の中心、荊州は依然として劉表が収めているのだ。

「ぬ・・・」

信長は城の廊下を歩いていると、その体に強烈な頭痛を感じた。その痛みに体のバランスを崩し、廊下の壁へともたれ掛かる。

「クク・・・もはや何度目ぞ・・・」

信長はもうこれで何度目かの頭痛を体験していた。
最初は、官渡での乱入の時であつた。

官渡へ出撃すると宣言したときに、一度ピリツと頭に違和感を感じたのだ。
だが信長はそれはただの疲れから来る体調の変化だということにしたのだ。

しかし、出撃準備を終え、城門の前で馬に跨ったときにまた頭痛がきたのだ。

今度は、一瞬だけではない、慢性的に続く長い頭痛。
それは官渡へと近づくことに酷くなつていくのだ。

そう、それはまるで官渡へと行くなというように・・・

それから何度も小さな頭痛が信長を襲つた。
やはり、天下状勢が変わるときである。

北方から西方へと曹操が動くたびにそれは確実におきた。

そして、今日・・・信長が国号を魏とすることを宣言し、強烈な頭痛が信長を襲う。

曹操が蜀を宣言し、もう、曹操が魏であることがないことが確定した今日。

今度は今までとは違う吐き気までもよおすほどの強烈な頭痛。

信長は廊下の壁にもたれかかりながらこの頭痛について考える

（ワシは、この歳のころ頭痛の病など持っておらんのだわ・・・これはやはり、世界を変えたことによる代償か。

しからはワシの体は破滅へと向かっておるのだな。
この大陸を統一するのは晋・・・決して魏が・・・

曹操ではないワシの魏が統一する事はあつてはならぬこと・・・待っておるのは・・・クク）

信長の表情に不適な笑みが浮かぶ。まるで楽しんでいるかのような。

（おもしろい・・・ワシの野望。霸道、天下布武。たとえこの身が滅びようがワシは止まらぬ！

天下の代償がこの身なら喜んで捧げようぞ！夢、幻に消えた、あのかなわぬ夢をもう一度見せてくれるのであればな！）

信長は体を壁に預けずりずりと這うように歩く。

「ご、ご主人様!？」

朱里がちょうど通りかかり、信長の元へと急いで駆け寄ってきた。そして、信長に懇願するような表情で、今にも泣きそうな顔で信長へと詰め寄る

「だ、大丈夫ですかご主人様!？はわわ・・・お体のごかげんがよろしくないのですか!？
え、えゝつと・・・」

「構わぬ」

「そ、そんな!もつと御身の重要さをご理解ください!もはやご主人様の体は、数十万の民や兵の生活を左右する身なのですよ!」

「心配はいらぬ。一日休めばこの頭痛は去るのだ。それよりも朱里」

「は、はい！」

「広間に全員を集めよ。これからの方針を話し合っぞ」

「うう．．ぎよ、御意です！！」

朱里は信長の顔をちらりとみ、本当に信長に仕事をさせてよいのかと迷うが、信長の真剣な表情が許さない。

朱里は嫌々ながらも了承したようだ。

信長の指示を受け、朱里は急いでその場から走って皆を呼びに向かった。

そして、それから数十分後、魏の主要人が広間へと集まった。

「ふむ．．南蛮も蜀がついに収めたか」

「はい。私たちが内政に従事している間、蜀は領地を拡大することに奔走していました。

恐らく、完全なる天下三分を目指しているのでしょう」

「そうか．．」

やはり、歴史どおり蜀は蜀でありつつけたのだ。
たとえ、当主が曹操に変わろうとも、南蛮は蜀によって治められる
こととなった。

なら、自分もやることは決まっている。

「朱里、雛里。ワシは西涼を手に入れようと思う。うぬらの考えを
申せ」

「西涼ですか・・・」

朱里と雛里はその言葉を聞き、考え込む。
そして、最初に朱里が口を開いた。

「確かに、今が好機かもしれませんね。馬騰は今、病に伏せている
とのことですよ。」

ですので、今はその娘。馬超が軍を指揮しているとの事です」

「あう・・・馬超はあまり知略に優れていないとのことですよ・・・
彼女の戦いは強力な騎馬隊による突撃を主とした力攻めです」

「ふむ・・・騎馬隊・・・か」

信長は顎に手をおき、思案にふける。
懐かしい戦いが頭をよぎる。

あの赤備えの・・・戦国最強の軍団。

そして、信長の口元に笑みが浮かぶ。

「クク・・・生憎ワシは騎馬との戦いは経験積みでな」

「ですがご主人様！西涼の騎馬隊はそこらの騎馬隊と一緒にしてはいけません。

その突破力は大陸一とも噂されています！」

「ふむ。確かに厄介よの。だが、今指揮しているのは馬騰にあらず。知略無き戦なぞ戦ではない。

ワシが馬超に見せてやろうぞ。彼奴とワシの違いを。
力で戦をすることの愚かさを身をもって教えてやろう・・・ぞ」

信長は馬超を欲していた。

自分たちが魏であろうと、構成されているのは史実の蜀の将たちである。

ならば、きっと彼女は相性がいいであろうと考えていた。

だが、馬騰を殺してはいけない。

そして、馬超本人にも嫌われてはいけない。

もし、戦う事になれば、今回の戦の最大の目的は領地を得ることにあらず。信長は彼女の心を攻めるため、知略による完膚無きまでの勝利を得ようと考えた。

「朱里、鎧を出すのだ」

「鎧・・・ですか。ついにご使用なさるのですね」

「うむ。優秀な騎馬民族ならば、彼奴らにこちらの騎馬の力を見せつけようぞ。」

ワシらの騎馬の力を身をもって知れば、馬超も納得しようぞ。

早速、騎馬隊に装備させよ。すぐに慣れさせるのだ」

信長はこの時代に来てから、すぐに作らせた鎧を使用しようと思いに決めた。

鐙は官渡の戦いの際にはもう完成していたが、信長は使用を見送った。

この時代には決して存在しない鐙。

中国では四世紀中ごろから存在したのだ。

まさに、こちらの切り札といえよう。

敵に知られれば、確実にまねされるであろうため、信長はここぞというときまで使用しないと決めていたのだ。

「ご主人様。使者が戻ってまいりました」

数日後、西涼へ送った使者が戻ってきたようだ。

愛紗が信長にそう告げ、使者からの言葉を信長へ伝える。

「どうやら私たちの降伏勧告を断ったようです。そして、馬超の口から受けて立とうとのことですよ」

「で、あるか・・・」

信長はゆつくりと席を立ち、その場に居る全員に高らかに宣言する

「西涼へ往くぞ！織田が戦、彼奴らに身をもって知らしめん！」

「御意！（なのだ！）」

「では、いきましょう。西涼へ！」

ここは城門前。主だった将たちは全員出立するようだ。だが・

「・・・みんな、頑張つて」

「恋。城はうぬに任せる。何かあればすぐに知らせよ」

「・・・（コク）」

信長は今回の戦、恋を参加させなかった。
なぜなら彼女は強すぎるのだ。

恋が戦いに加わり勝利すれば、馬超はきっと納得しないだろうと考えた。

恋がいたから勝った。そう思われてはいけないのだ。

信長の力。織田の戦で勝ち、そして馬超を感服させなければ彼女はきっと仲間になってくれないと考えたのだ。

今回の将は信長、愛紗、鈴々、朱里、雛里、星、白蓮、猪々子、斗詩ほぼ、織田の主力全員での戦いである。

この後に大戦が控えているのは目に見えているため、白蓮や猪々子、斗詩には経験を積ませたかったのだ。

550

「ご主人様。進行速度などを考慮すれば潼関の辺りで戦闘となるでしょう」

「ふむ。・・・しかし敵は関に籠るとは思えぬ。ならば敵にあった戦いをしなければな」

信長は兵を呼び、かねてより考えていた策を伝えその準備をさせた。

「ご主人様！まもなく潼関です！忍びの情報によればやはり、潼関で敵とぶつかりましょう！」

「クク・・かまわぬ。ワシも潼関で戦うことになるかと確信しておったわ」

そして、織田軍は潼関へ向け、さらに進軍速度を速めた。

西涼（後書き）

リアルが忙しいです・・

その上、プライベートな時間があれば戦極姫3をプレイしたいため、どうしてもこちらに時間を割けません。

やはり、面白いです。戦極姫3・

私個人としては無印、2の信長のグラが好みだったんですが、今作も慣れれば悪くない。

かなりめだかボックスのめだかちゃんに信長似ていますね。性格も凜としていてまさにめだかちゃんです。

それにしても、あのクソゲーオブザイヤーに輝いた無印がここまで進化するとは・・かなりおもしろいです。無印もよかったですが、今作は改良された2にさらに改良して悪いところがほぼ無いといってもいいですね。

ちなみに好きなキャラは片倉景綱、鬼庭良直

ロリ粹として、織田信行、最上義光

お姉さん粹として、織田信長、前田慶次ですね。

ヤンデレとして、筒井順慶もすてがたい・・・

錦馬超

織田軍は陣地を敷きそこで軍議をしている最中だ。

「敵は5万の軍勢です。そのうち3万が騎馬隊、残り1万が歩兵、そして最後に弓隊となっています」

忍びの報告により、西涼軍の内訳が分かった。

だが、やはり予想していた通り騎馬隊中心の構成であり、明らかにその突破力を中心とした突撃主体であることが容易にわかる。

「ここまで騎馬に偏った軍も珍しいですね。

ご主人様、まともに正面からぶつかってはこちらが不利です。

奴らにたいしてこちらも5万。

弓隊が2万5千、歩兵が2万、騎馬はたった5千ですよ？

これでどう敵の騎馬隊と戦うつもりですか？」

「ふむ・・敵は騎馬に偏っているがこちらは弓隊に偏っておるな。弓と騎馬・・突撃されればこちらが一気に総崩れですな。

槍をもった歩兵なら少しは抵抗できますが、敵は大陸一と噂の涼州の騎馬隊。

ぶつかればこちらが負けますな」

愛紗と星がこちらの軍の編成と敵の編成を見て各々の考えを述べる。他の将たちも口々に「これでは駄目だ」と話している。

「クク・・先も言ったであろう。知略無き戦など、戦にあらず。戦は兵ではない、頭でするものぞ」

信長は不適な笑みを浮かべ周りを見渡す。その誰もが信長を見つめ、彼の言葉を待っている。

「それこそ・・身内の将ですら分からぬ策であれば敵も分からぬ。『まさか』、『ありえぬ』この言葉を述べ、驚き、驚愕すればするほどその策は極上・・ぞ」

そして信長は今回の戦で使う策を皆に述べる。その策に皆は驚く。

それこそ、「ありえない」や「無謀です！聞いたことがありません！」などと言う言葉が辺りを飛び交った。それは正に信長が聞いたかった言葉であった。

「は、母上！何やってんだよ！」

「翠。大丈夫よ。私はこの戦いを見届けたいの」

馬超は驚いた。彼女の母、馬騰が病をおし、この戦場へとやってきたのだ。

そして、馬騰は兵が用意した椅子へと腰掛け、ゆっくりと口を開き、愛娘へと言葉をかける

「翠。私はね、貴女の戦をこの目で見てみたいの。私ももう歳よ。だからね、貴女の戦をこの目でしっかりと見届け、貴女が次にこの西涼を収める人物に相応しいか見てみたいの。」

貴女の采配、兵への指示の仕方、そして流れる戦況にあわせてしっかりとした状況判断。

今回の相手の織田は強敵よ。

そこらへんをうまくできなくちゃこの戦は負けるわ。だから、私に見せて頂戴」

「任せてくれ！あたしだってもう立派な武将さ！

織田が強敵だろうが、あたしたち西涼の騎馬隊にかかればイチコロさ！」

「まったく貴女はほんと自信家ね。

どこからそんな自信が出てくるのかしら。蒲公英！」

「ん？」

馬騰は隅に控えていた、馬岱を手招きして呼びよせた

「翠のことしつかりと見てて頂戴ね」

「まっかせて！お姉様をしつかりと見張ってればいいんですよ」

「な、なんだよ母上！あたしの事が信用できないってのか！」

「そうねえ・・・うん。できないわ」

「な、なんだってー！？」

馬超はショックのあまりその場に崩れ落ちる。

その様子を馬岱は口元に手をあてウシシと笑って見ている

「貴女は昔からその自信家で、まっすぐな所が駄目なのよ。
まあ、それがいい所でもあるんだけどね。
でも、戦ではそれは別。むしろ悪影響しか与えないわ」

「うゝ・見てろよ母上！！あたしの戦見せてやるよ！！
西涼の騎馬隊の力、そしてあたしの采配！全部見てあたしへの考え
を改めさせてやるよ！母上はそこで見ててくれ！
蒲公英！いくぞ！」

「あ、待ってよお姉様〜！」

馬超は馬岱を連れ、その場を後にした。
その光景を黙って見ていた馬騰はその場で一つ大きなため息をつく

「ふう〜・・・さて、どうなることやら。
天よ・・・どうかあの子達無事に帰してください」

そして、戦いの火蓋は切って落とされた。

開戦が始まると同時に馬超たち西涼の部隊は大きな怒号にも似た叫びとともに騎馬隊ほぼ全軍による突撃を開始した。

「皆突撃だ！あたしに続けー！！！」

馬超はその騎馬隊の先頭を走る。

「ちょ、ちよつとお姉様！なにもこんな大軍で突撃しなくつても」

「いいか蒲公英。よく聞けよ。

騎馬はその突破力が武器なんだ。

敵もこんな大群で来るなんておもっちゃいないさ。

それに、分かっているてもこんな大軍を持ちこたえるなんてできないさ。

てきのだ真ん中に穴を開けて敵軍を真っ二つにし、連携を立つ。

そして、敵本陣へまっすぐだ」

馬超はまっすぐな瞳で遙か彼方、織田の本陣があるであろう遠くを見つめながら馬に跨っている。

「でも、そんなうまくいくかなあ？」

「ばーか、3万もの騎馬隊だぞ？その突撃を食らえば、うまくいかなくとも敵をかき乱すことができる。

そうしたらおたがいもただの乱戦さ。

それに最初の初撃。その勢いを受けた敵はものすごい被害さ。

よーし皆！全速前進だ！さらに速度を上げろ！！
敵にあたしたちの突撃力を見せてやれ！！」

「おおおおおおおー！！！！！！！！！！」

3万もの声が辺りを響かせる。

まるで地震でも起きているのかと疑うほどである。

「敵の士気は高いな」

「にやははーここまで響くのだあ」

織田軍は守りの構えを見せていた。
馬網柵や敵の進入を防ぐ、高い柵。
そして、5メートルはあろうかという長槍隊による構えを見せている。

普通の軍ではこれが普通であらう。
しかし、織田は違った。

「しかし、弓隊が前線とはな・主と朱里、雛里が揃えばまったくおもしろいですな」

そう、弓隊が一番前へと出ているのだ。
その数、こちらも全て。弓隊2万5千。

「敵の士気は大いに上がり、その勢いは正に天を突かんばかり。
勢いはまし、速度も上がっており、まともに受ければその初撃はこちらに大きく食い込まれ、分断されてしまいかもしれません。
私たちはその勢いを利用します。
さて、私はそろそろ行きます。皆さんも防御の構えを崩さないでくださいね」

そういい残し、朱里は前へとゆっくり歩んでいった。
その背中、小さいが、朱里を知っている者が見れば、まさに今は一番大きく見えた。

「あ！お姉様あれはなに！！」

「な、なんだありや？」

馬超たちは進軍を続けている最中、前方に不思議なものが見えた。そのため、少し速度を落とす。

「干草が・・・大量に積まれてるな・・・なんなんだこりや？」

あたり一面にある大量の干草。

干草が大量に積まれたものが点々と、並べられている。敵は何をたくらんでいるのか、まったく分からない。

「燃やす？いや・・・意味が無いだろ。」

こんな平地で焚き火でもする意味が無い」

「ならお姉様落とし穴じゃない？干草で穴を隠しているとか！」

「ああ！たぶんそうかもな！」

みんな！この干草を避けて進め！気をつけろ！！」

馬超は全員に伝え、進軍を再び開始する。

そして、馬超たち西涼の騎馬隊は巧みな技術で華麗に干草を避けて進む。

その速度は多少全速よりも遅いが、普通の騎馬隊の全速に勝るとも劣らない速度であった。

「いんです」

朱里が合図を出す。

そのタイミングは、敵が干草地帯のちょうど中ごろにさしかかろうという時であった。

その合図に弓隊は一斉に火矢を放った。

「皆！気をつけろ！！火矢が飛んでくるぞ！」

馬超たちも一斉に身構える。

だがおかしいのだ。

どうもこれは兵を殺す矢ではない。

狙いは・・・

「干草・・・か？」

織田軍の火矢はそのどれもが干草を狙っていた。

多少は兵に辺り、落馬するものがいたが、やはりそのほとんどが干草を狙っているように見える。

実質、干草が勢いよく燃え上がっているのだ。

「なんか嫌な予感がするな・・・皆！ここを一気にぬけるぞ！」

馬超の合図で、騎馬隊は一斉に走り出し、速度を上げる。

「なんだ？何も起こらないじゃないか？本当にただの焚き火か？」

しかし、何も起こらないのだ。

そして、先頭を走る馬超が干草地帯を抜けようとした、その時

パ
ー
ン
！！！！！！

「な!？」

パーン、パーン……パーン！！！！

パー
ー
ー
ン

パン

「う、うわわ!!」

急に鳴り出す、大きな破裂音。
どうやら馬超の真横から聞こえたようだ。

「ほ、干草? いや、これは・・・竹か! 竹が中に隠されているのか
!」

パーーーーー

「う、うわー!!」

パン、パーーーーー

「お、落ち着け! 落ち着け!!」

パーーーーー！

「ぐああー！！」

尚も成り続ける破裂音。

あたり一斉に鳴り響く、竹の爆ぜる音。

竹は中が空洞になっており、中には空気に似たガスが入っているのだ。

竹は燃やせばそのガスが暖められ急激に膨らむのだ。そして、膨らんだガスが耐え切れなくなり、壁を吹き飛び、一気に放出されて音が鳴るのだ。

この出来事に馬は驚き、一斉に暴れたす。

馬術にもそれぞれの差があり、暴れる馬を乗りこなせなかったものは転倒し落馬する。

「ぐああー！！」

「なにやってんだー！！」

一人が転べば、後は玉突きに後続が次々と、落馬する。
その現象が各地で起きているようだ。

「くそつ、おい皆大丈夫か？」

馬超は一度進軍を停止し、後ろへと振り返る。

「お姉様、わたしは大丈夫だよ。でも後ろが・・・」

後ろの光景は酷かった。

実際自分たちも危なかった。いきなりあのような大きな音が鳴れば、自分だって驚くし、馬だって驚く。

だが、そこはさすが馬超に馬岱。

暴れる馬を見事に乗りこなしたのだ。

彼女たちは先頭を走っていたため大丈夫だったが、もし自分たちの前に兵がいて、彼が転倒していたら、自分たちもその馬に足をとられ落馬していたであろう。

「い、いてええ・・・」

「こ、腰がぁあああぁ」

「腕が・・・折れました・・・」

勢いよく走っていたために、その落馬の衝撃は激しいものであった。落馬したものは皆、大怪我を負ってその場を動けないようだ。だがそのとき・・・

「いんです」

小さな軍師が再び合図をする

「な、なんだ・・・空が・・・矢だ！！！！みんな気をつけろ！！！」

突如として、降ってくる空を覆いつくさんがばかりの大量の矢。
その数、2万5千もの弓兵による一斉射撃。

そして狙いなどない。そこに大きく寝そべっている兵たちにそれに
抗う術などないのだ。

大怪我をおい、体を動かし、避ける動作すらまともにできないのだ。

「ぎゃあああ——！！！！！」

「ぐっあああああ——！！！」

「ぐふっ・・・」

「くそっ・・・これがねらい目だったのか・・・」

「すまない！！！！前進するぞ！！！！奴らに私たちの力を見せ付けてやるぞ！！！！」

矢の一斉射撃は一度で終わった。

あれだけ放たれば一度で落馬したものはほぼ死んだであろう。それに、大怪我を負い、もう戦闘に参加できないであろう為、放っておいてもよいのだ。

「くそ！くそ！！私のせいだ！！！！」

「お姉様仕方ないよ。たんぽぽだって気づかなかったんだし・・・」

「あたしは今はこの兵たちの命を任されているんだ！だから……」

馬超が伏目がちに下に視線を移す。

(ん………?)

馬超はその鋭い勘で何か危機を感じ取ったようだ。

そして……

「ぐあああああ————！！！！！！！！！！」

「がああ————！！！！！！！！！！」

またも起こる大転倒。

先程とは違い此度は完全なる全速前進。

その勢いは、乗っていた者が数メートルは飛ばされるほどであった。

「な、なんだああー！！！！！！！！」

「お、お姉様見て！！これ！！！！！！」

馬岱が地面を掘り、怪しい場所を見つけたようだ。

「これは・・・馬用の落とし穴か？」

深さは10センチほどの小さな落とし穴。

馬の蹄ほどのサイズであり、深さだけは10センチ。完全に馬だけを狙っているようだ。

たった・たった、これだけのこと。

深さ10センチほど穴を掘るだけでこれだけの惨状が起こるのだ。

馬超が後ろを振り返ると、先程にも似た光景、地獄。今度は勢いが強く、騎手は勢い強く放り投げだされ即死しているものもいる。

馬はどれも、足が折れ苦しそうにしている。もう、騎手も馬も使い物にならないだろう。

馬超、馬岱はその天才的な勘で綺麗に避けていたようだ。

「くそ・・・」

「いまでも」

尚も起こる、この非常なる鉄槌

「また・・・矢か」

再び降り注ぐ空を覆いつくすほどの矢

「い、いやだ・・・」

「し、死にたくねえよおお」

負傷し動けない者たちに降り注ぐ矢雨。

彼らはなすすべなくそれをその身に味わうしかなかったのだ。

「行くぞ・・・皆、落とし穴に気をつけるぞ。
ゆつくりと進軍だ」

馬超は悲しい表情を見せ、進軍を開始した。

「お姉様・・・」

馬岱もその後ろを続く。

「くそ……矢が……」

今度は先程とは違い、矢が降り注ぐ。

落とし穴を警戒して進軍するため、どうしても速度を出せないのだ。地面を見つつ、盛り返した跡が無いかをしっかりと確認し、移動するのだ。

そのために、速度は遅く、格好の的となるのだ。

「ぐあああー!!」

「ぎゃあああー!!」

何人も矢に当たり死んでいく。かなり、兵数は減ってしまった。

長い長い矢雨の中の進軍。
そして、遂に見えた。

「皆！！見えたぞ！！敵軍だ！！」

馬超の顔に笑みが見える。

「おつるあああー！！！！突撃だー！！！！！！
あたしたちの勢いを見せてやれー！！！！！！」

馬超たちは騎馬全軍による全速の突撃を開始した

その光景を見た、織田の弓隊は後続の長槍隊と後退しているようだ。

「舐めんじゃねー！！！！どれだけその矢に苦しめられたか！！！！
今吹っ飛ばしてやるぜー！！！！」

だがその時

後続の騎馬隊がまた
大転倒を起こしているのだ。

今度はなんだ・・・？

あれだ。

馬超は見た。

馬の足元に張られている長い長い縄が

全長100メートルはあろうかという長い縄、ロープ。

砂の中に埋もれさせておき、騎馬の大軍が着たら両端で引っ張り合う。

まるで、綱引きのように。

騎馬の勢いは強く。両端それぞれ100人ほどで縄を引っ張り合い、

その衝撃を受け止めたのであろう。
その効果は高かった。またも全速による速度であつたため、酷い惨状だ。

「くそくそくそー！！！！なめんじゃねー！！！」

馬超は勢いにまかせ一人で突撃する。

「うつるあああー！！！！」

馬超は長槍隊を切り伏せ、一人陣を駆け抜ける。

「ばかめ、進入を防ぐ柵があるんだよ」

「あたしを・・・西涼の錦馬超をなめんなー！！！！！」

馬超と馬はまさに人馬一体。

「な、なんだとおおー！！」

高い高い、馬の侵入を防ぐ柵を飛び越えたのだ。

「敵、馬超が柵を飛び越えました！！！
お気をつけください！！！」

「お、お姉様……こんな状態でどうしろっていうのー！！！」

馬岱の後ろには先程の光景。
だが、まだ無事なものもいる。

「よーし！！無事な者たちではと攻撃するよ！」

まずは長槍隊を！！」

馬岱の背後に騎馬隊が整列する。
そして、長槍隊へと攻撃を開始した。

だが、

「な、なに？」

馬岱の首に何かがかかる。
馬岱は急ぎそのものを斬った。

「え？縄？？」

だが、馬岱の横の兵士は縄を切るのが遅れたのか、敵兵の中に引っ張られていく。

「え？え？えーーーー！？」

織田軍から飛び交う投げ縄。
縄の端が、人の首が入るように丸く括られているのだ。

何百と飛び交う投げ縄。

「ぐあっ」

「ぐえっ！」

首に縄がかかり、そのまま引っ張られ、敵陣へと引きずり込まれていく。

長鎗隊の長い槍の矛先が向けられているために下手な行動はできない。

だが、動かなければ投げ縄の餌食になる。

もはや、騎馬隊に勢いは無かった。

予定では、勢いにのり、全速の速度で敵陣に突撃し、勢いに任せた攻撃をする予定であった。

だが、今はその騎馬の勢いである足が止まっている。

助走をつければ、また速度が上がり、そのスピードを生かした攻撃ができるが・・・

背中を見せれば・・・

「くっ・・・あ！？しまった！！！！ぐうっ・・・」

馬岱の首に投げ縄がかかる。

思案にふけてしまった隙をつかれてしまったようだ。

「は、離せー！！」

無残、馬岱は一人で敵陣へと引きずりこまれてしまった。

一方馬超は一人果敢にも戦いを続けている。
その進行方向はただひたすら奥。

本陣はたいていは奥だからだ。

「おっるあああ——！！！！！！」

馬超は強かった。

一人でも十分に戦えていた。

そして・・・

「見えた！！！！あれか！！！！」

馬超は本陣らしきものを発見した。

「あたしは錦馬超！！織田信長！！！！覚悟しろ！！！！」

馬超は騎馬に跨ったまま、本陣へと入る。

だが・・・

「誰もいない……」

そう、誰もいないのだ。

「そ、そんな……じゃあ。どこなんだよ……
そして、お前たちは何を守っていたんだ」

「何も守ってないのだ」

「誰だ？」

「鈴々は張飛なのだー！」

鈴々が蛇矛を構えゆつくりと歩いてくる。

「何も守っていない？じゃあ空の本陣を？守るべき総大将がいないのにここを守っていたのか？」

「そうなのだー！鈴々も最初誰もいない本陣を守るなんて馬鹿らし
いって思ったけど・・・
しつかり馬超も騙されてここを狙って攻撃してきたのだー！」

「そ、そうか・・・あたしは・・・確かに騙された。じゃあ信長は？
いまどこなんだー！」

「お兄ちゃんは今ごろお前たちの本陣なのだー！」

「なに！？」

「クク・・・」

信長は馬に跨り、崖から西涼軍の本陣を見下ろす。
信長の背後には5000の騎馬隊。
皆、鎧を装備している。

「と、殿・・・本当にこの崖を下りるので？」

「無論」

「む、無茶ですよ！こんな崖下りられるはずがありません！..」

「できる！！」

「し、しかし・・・」

「鹿も四足、馬も四足・・・ぞ。皆ワシに続けい!!ワシの背中、
そして勇士を見よ!!
怯え、怯んだ者は死ぬぞ!!」

そついい残し信長は断崖といってもいいほどの崖を馬で下り下りる。

「おお!!殿が馬で崖を・・・」

「わ、ワシらも行かぬわけにはいかぬ!!ええーい!!覚悟を決
めて下りるぞ!!」

「おおー!!!!!!」

信長の後続である騎馬隊も信長に続き崖を下り下りる。

「な、なんだと！！！貴様らどこからきおった！？」

「クク・・ワシが来た方向を見れば分かるうぞ・・・」

「ま、まさかあの崖を・・・」

「うぬに用などない。無価値！」

信長はその兵を切り捨て、騎馬隊全員で西涼軍の本陣へと突撃した。敵は大混乱であった。

まさか来るはずの無い場所からの、そして五千もの騎馬隊。馬に乗って崖を下りるなんて自分たちでも出来ない芸当を織田がやってのけたのだ。

そして、二人は出会った。

「うぬが馬騰か」

「ええ」

「しからば、この後のことは分かるう・・・ぞ」

「はい」

そして馬騰は信長に背中を向ける。

それは早く切り捨てると言っているようだが、信長は切らなかった。

その代わりに喋り始めたのだ

「うぬは・・・天下を見たいか？」

「・・・え？」

馬騰は後ろを向いたまま信長の問いを聞く

「うぬも当主であろう。しからば夢見たはずぞ。自らの手によるこ

の大陸の安寧。統治。

ワシは今、夢見ておる。そして、夢は一度手放せば決して二度と手に入らぬもの。

故にワシは全力で力を欲しておる。

馬騰。ワシに力を貸すのだ。うぬはその命、先程手放したであろう。しからばその命、どう扱おうがワシの勝手ではあるまいか？」

「・・・フツ。そうですね。

確かに私は先程生を諦め、切られることを望みました。でも、私は今生きている。

じゃあ、私の命は今どこにあるんでしょうね？」

「クク・・・我が手中にあるわ」

「そうですね。でしたら私は貴方に従うしかないようですね」

馬騰がウフフと優しい笑みを浮かべる。

信長も釣られ戦いに勝利し、そして馬騰を味方に引き入れたことで信長の口角も大きく上がった。

錦馬超（後書き）

鹿も四足、馬も四足

義経の一の谷での戦いでの名言ですね。
崖から馬に二頭落とし、

「見よ、一頭は立ち、一頭は動かず。鹿も四足、馬も四足、各々方それぞれ手綱を引き締め、捌き給え」

と、義経自ら突撃したって話です。

張飛VS馬超（前書き）

戦極姫3で一週目クリアしました。

信長様生存しました！！

本能寺が起こらず、信行と信長の仲も良好。

今度は本能寺ルート目指します！

ですが、龍が如く OF THE ENDが面白い。

極道かけー！！真島の兄さんやべー！！

このシリーズ全作やってるんですよ。

やっぱり一番は見参ですかね。

張飛VS馬超

話は戻り、ここは織田軍本陣（しかし、兵どころか、信長もいない信長が西涼連合本陣へ奇襲を掛ける前

馬超と鈴々は互いに向き合い話し合っている。

だが、馬超の表情、行動はどこか落ち着きが無く、対して鈴々の表情はすがすがしい。

（やっぱりお兄ちゃんが天の御遣いなのだ！錦馬超の名前は鈴々でも知ってるし、その馬超がこんなあたふたしてるのだ！）

「あ、あたしたちの本陣に奇襲したのか？そんな馬鹿な！？だってあそこは周りが」

「崖に囲まれてるのだ。それも断崖に近いほどの」

「そ、そうだ！だから後方からの奇襲はありえないし・・・」

「そのありえないって言葉が出るのが最高の策だってお兄ちゃんがいつてたのだ！」

鈴々はもう勝利が確定したであろうため、馬超にこちらの最後の切り札である、敵本陣への奇襲の策を話した。

「そ・・そんなアホな！・そんな・・あんな崖を馬で駆け下りるなんて・・西涼の騎馬隊どころか・・あたしや蒲公英・・母上だってできないぞ！」

「でもお兄ちゃんはあるって、お兄ちゃん自らが騎馬隊を率いてお前たちの本陣へ向かったのだ」

「ぐっ・・、は！な、なら母上が危ないじゃないか！！」

馬超は思い出したかのように母の安否を気遣う。
そして、すぐさま馬に跨り、踵をかえそうとするが

「いかせないのだ」

鈴々が自慢の蛇矛を横に伸ばし、馬超の進路を阻む。

「邪魔をするな！そこをどけー！！」

馬超は騎乗から鈴々にむけて、その槍で何度も突く。

「そんな攻撃効かないのだ！よつ、にやにやー！！」

鈴々はその攻撃を巧みな槍さばきで防ぎ、そして、馬上では動きづらいため馬超に目いっぱい力をこめた突きを繰り返す。

「ぐっ！なんつー力だ・・・こんな小さな体にどこにそんな力が・・・」

馬超は鈴々を侮っていた。

見た目が幼い鈴々。当然その力は見た目そのものだろうと考えていた。

だが、それはまったくの予想外。

自分に匹敵するのではと思うほどの怪力、豪胆。

「馬に乗ったままじゃ鈴々には勝てないのだ」

「ぐっ・・・くそお・・・」

馬超は悔しいながらも馬から下りる。

確かにその通りだと思った。

恐らく、鈴々はすばしっこいであろうとも予想した。

ちよろちよろ動き回られ、そしてあの攻撃が来てはたまらないと思
ったのだ。

「さて、これならまともに戦えるよな。あたしは一刻も早く母上の
救援に向かいたいんだ。

だから・・・本気でいくぞ」

「おもしろいのだ。鈴々だってお兄ちゃんの作戦の邪魔して怒られ
たくないもんねー！

お兄ちゃんを邪魔するお前をぶつとばして、いっぱい褒めてもらっ
たー！！」

「はは！褒めてもらっ・・・か。単純な理由だけど、一番嬉しいよな」

「お、馬超。お前もなかなか分かる奴なのだ」

馬超と鈴々は互いに視線を逸らさず、語り合う。

そして、馬超の鬪気が一気に膨れ上がる

「ああ。だから・・・あたしは行かなくちゃいけない！！
西涼の錦馬超！！！！！！！！！！」

「鈴々は張飛！ 燕人張飛なのだ――！！！！うりゃうりゃうりゃ――！！！！」

二人は走った。自分の邪魔をする者を討つ為に。
馬超は大事な母を助けるため、鈴々もまた大事なお兄ちゃんと慕う自分たちの夢に付き合い、協力してくれた大好きな男のために。

ガキーン

二人の武器が交差する。

「ぬぬぬぬぬ．．．」

「ぐぐぐぐ！！」

二人は武器を交差させた状態で力比べのように押し合う。
二人の力を見る限り拮抗しているようだ。

（なんなんだこのちびっ子．．あたしと張り合うなんて．．
蒲公英のやつがいつも馬鹿力だって馬鹿にするけど．．あたしも力
には自分で自信があつたのに．．）

（ぬぐぐぐ、さすがなのだ馬超．．．鈴々と張り合えるなんて
く．．．．く）

二人は心の中で敵を賞賛する。
二人には相手が敵だからと言う嫌悪感ゆえの殺すと言う気はもうま
ったくなかった。

馬超は思った。

できるならば、この者とちゃんとした場所で、そして、自分の状態が最善の状態で闘いたいと。今の馬超は心が乱れている。

何度も敵の策にはまり、自分への失望、母との裁量の差、そして母への安否。

その全てが馬超の力を制限してしまっていると言ってもいいだろう。

「どうしたのだ馬超――！ やっぱり鈴々の方が強いのだ――！！」

「やろゝ・」

だんだんと馬超が力で押され始めている。

馬超もそれを感じ取ったのだろう

「しゃー!!んろー!!!!!!!!!!」

馬超は距離をとり、上から下へと思い切り槍を振り下ろす

「にゃ！！？？」

鈴々は慌ててその攻撃を横へかわす事で防いだ。
だが

ドゴーン！！！！！！

馬超の槍があたった地面は大きく抉られている。
当たったものは鉄球か？とも思わせるほど地面に空いた大きな穴。

「す、すごいのだ・・・」

鈴々は上手く避けたが、地面の衝撃で尻餅をついてしまっている。

「あたしを舐めるなよ。さあ、そこをどけ！あたしは母上の下へい
がなくちゃいけないんだ！」

馬超は威圧をこめた目で鈴々を睨む。

「それは駄目なのだ。鈴々はここでお兄ちゃんに言われたのだ。
馬超がここにきたら相手をしてやれって」

その言葉を聞き、馬超は落ち込んだ。

そう、それはつまり馬超がここへ来ると言う事を信長は予想してい
たと言う事だ。

「はは・・・そうなのか。あたしは・・・織田の掌の上だったって訳だ
な・・・」

馬超がすこし悲しい表情を見せる。

「すげーなあ・・・お前たちの大將は。あたしとは大違いだ・・・
あたしは・・・お前たちの策に見事に嵌り、たくさんの仲間を死なせ
ちまった大馬鹿野郎さ。」

二人は相手の攻撃を避けたり、防いだ後に、自分の攻撃をするということの繰り返しであった。
二人の戦いは時間がたつことに、その綺麗な体に赤い傷跡が増えていった。

「はあ・・・はあ・・・」

「なかなかやるのだ・・・ばちよく」

二人の戦いはまだ終わらない。
二人はまだ向き合い、立っているのだ。

「ぐぐぐ・・・くそー！！なんで倒れないんだ！！！！そこをどけー
ー！！！！！！」

馬超が再び鈴々へ向け、走り出す

「んなろー！！！！」

馬超が再び、上から下へと槍を力いっぱい振り下ろす。

「その攻撃は見切ったのだ!!!」

鈴々は横へ避けるだけでは衝撃でまた尻餅をついてしまうと学習したため今度は

「思いっきり避けるのだ!!!」

横へと数歩分走った。

ドゴーーーーーン！

馬超の槍の衝撃で再び地面に大きな穴が空く

「鈴々もやるのだー！！ええー！！い！！！！！」

鈴々も馬超のように蛇矛を上から下へと思い切り地面にたたきつけるように振り下ろす

ドゴーーーーーン！！！！

「くっ・・・」

馬超は横へ避けた。

鈴々のように体は幼くないため、軽く体勢を崩す程度であった。だがその衝撃には驚かされた。

（こいつ・・・やっぱりつえーなあ・・・でも、楽しいぜ！！）

馬超の表情に再び笑みが浮かぶ。

馬超の心からは母への安否はだんだんと薄れていった。

それは武人としての性なのか？

この戦いを楽しみたい。この時間を大切にしたい。

自分とまともに戦える相手と命のやりとりを。
力の制限無く、思う存分自分の武を試したい。

この小さな一騎当千の猛将と

「にゃ！？急に強くなったのだ」

馬超の体からあふれ出る一騎当千の。万夫不当の豪傑の鬨気

「張飛。あたしが馬鹿だったよ。お前は強い。

あたしが今まで戦った誰よりも強い。

だからあたしは本気で前と戦わなくちゃお前に失礼だったな」

馬超の心は平静を取り戻していた。
人生に一度あるかないかの一騎討ち。

自分とほぼまったく互角の将の、誰にも邪魔されない、そして模擬
刀でもない本物の武器での命の駆け引き。
馬超はこの天が与えてくれた機会に感謝した。

「鈴々も本気で行くのだ」

「ああ。頼む。あたしも本気で行く。
もう迷わない。あたしはこの戦いに無用な感情を挟まない。
母上が死ぬはずがない。」

だからあたしは自分のことで精一杯さ。
だってこんな楽しい戦いはもうきつとこないさ」

「鈴々も愛紗や星と戦うよりもこの戦いが楽しいのだ。
なにより馬超と武器を交えると楽しいのだ」

「はは。そうか。
あたしも張飛と戦うのは楽しいぞ」

二人の表情は笑っている。

純粹に二人は楽しんでいるのだ。

手に持つ武器と場所が違えば誰もこの二人が命のやり取りをしているとは思わないだろう。

まるで親友と楽しく語り合う、学生のような。

「来るのだ・・・馬超」

「ああ・・・いくぜ」

そして二人は走り出す

場所は変わりここは織田軍の前衛

「名のある将と見た。名を名乗れ」

「……………」

少女はなにも喋らない。
名乗りたくないようだ。

そこへ現れる一人の少女

「西涼の馬岱さんですね」

「……………あんたは？」

「私は織田軍の軍師をつとめております諸葛孔明です」

朱里が馬岱の元へ歩み寄る。

馬岱は地面に仰向けに倒れており、周りの十人ほどの兵に槍を突きつけられている。

「つで、その軍師様がわたしになんのよう？」

「馬岱さんには降伏してもらいたいのです」

「翠姉様はどうなったの？」

「馬超さんのことですか？馬超さんは私たちの軍の張飛さんと今、戦いを繰り広げています」

「そっか。お姉様は生きてるんだ」

馬超の生存を知った馬岱はうれしそうな表情を浮かべている。

「もしお姉さまが負けたらお姉様は殺されるの？」

「いいえ。決して死なせません。私たち織田軍は二人の方によって治められています。」

一人は織田上総介信長様。

信長様は魔王、冷血、非道。

人によつて様々な言い方をされていますが決して噂だけの方ではありません。

現に私たちはそんな噂どおりの方にはお仕えしません。

私たちは実際にあの方を見て、そして自分の才をあの方の為に生かしたいと思えるからお仕えしています。」

そしてその信長様が貴女たち二人を欲しています。

天下布武のため、大陸の安寧、平和の為に二人の力を欲しています。

私も貴方たち二人の力を欲しています」

「へえ。大人気だね」

「ええ。それほどお二人のご活躍を拝聴していますから。そしてもう一人のお方。劉玄德様。」

あのお方はたいへん人の命の尊さをご理解なさっています。命の大切さ、尊さ、大事さを常日頃より心の刻んでおります。あの方は敵をも尊重しており、そして庇い、守ろうと考えております」

「敵を？ずいぶんお花畑な人だね」

「はい・・・。」

それは私たちも思っておりますが・・・ですがそれゆえにあのお方に悲しい顔をして欲しくないのです。だって・・・こんな乱世ですからそんなお方がいてもいいんじゃないかと・・・」

「どういこと？」

「こんな時代で皆が笑って暮らせる世にしたいって真顔で言えますか？

夢物語な・・・人に笑われるような理想を諦めず、ずっと唱え続ける

事ができますか？

自分に牙をむく相手を殺さないでって・・・その人を庇うように前に出て、両手を広げて命の懇願を請えますか？敵だった相手の為に！」

「そんなことしてたんだ・・・」

「はい。全て事実です・・・そして、そんな方だからこそ私は馬岱さんを、马超さんを死なせたくありません。

貴女が死を望んでも、劉備様はきっと何時間も貴女を説得するでしょう。

貴女が槍で自らの首を突こうとするならば、劉備様はきっと刃を手で押さえ馬岱さんの首が傷つかないようにするでしょう。

そしてきつと笑顔で怪我しなくてよかったねと笑顔で言うでしょう。あの方はそんなお人なのです。

だから私はあんな優しい方に傷ついて欲しくない。誰もが下を向く、この世の中でもあの方にはずっと笑顔でいて欲しいんです。

だから私は何度でも貴女に言います。言い続けます。

馬超さんを、そして貴女を死なせません」

「・・・・・・・・」

馬岱はその言葉を聞き、頭の中で描いた。
劉玄德という人物像を。

こんな時代で平気で言う、理想論、机上論。
誰もが笑顔なんてありえない腐れきった世の中。
黄巾はいなくなったが、まだまだ減らない賊。

それでも何度も唱え続ける理想家。妄想家。

だが、先程孔明が言った言葉が頭に響く。

こんな乱世だからいてもいいんじゃないか

確かに皆が一様に諦め、下を向く時代、世の中。

だからこそ一人ぐらい上を向く人がいてもいいのではないか？

でなければ笑えない、楽しめない。心が持たない。

だからこそ、その人が下を向かない様に周りが支えてしまうのだらう。

私は諦めてしまった。だからお前だけでも頑張ってくれと。

その人が諦めたとき、きっと周りの者たちも今度こそ諦めてしまうだろう。

世のなかに抗うことはもうないだらう。

「信長様。 劉備様。」

お二人は貴方たちの力を求めています。

皆が笑って暮らせる世の実現の為に。

ですが、それは簡単なことはありません。

ですから今は私たちは天下を一つにしようとしています。
武によって。

天下布武です。

信長様は大陸を一つにしなければいつまでも民が笑って暮らせないとおっしゃっています。

事実私もそう考えています。

劉備様もそれをご理解なさっています。

ですから私たちは今、武を必要としています。

馬超さん、そして馬岱さん。貴女たちお二人の武を！！

どうか・・・お力をお貸してください！！！！

民、そして私たち・・・この大陸の為に！！！！」

朱里は馬岱に向かって頭を下げた。

「力をお貸しください、お願いします!!!!」

それと同時に兵たちは槍を下げ、その場にいる兵たち数百人は一斉に馬岱に頭を下げた。

馬岱はその光景に絶句した。

先程まで自分に槍を向けていた者たちが今度は自分に頭を下げたのだ。

自分の命を握っていた者たちが、今度は自分に頭を下げたのだ。

馬岱は思った。

きっとこの軍師によって指導されていたのだろう。

最初からこの事実は決まっていたのだろう。

自分がこうやって仰向けに寝そべる光景は軍師の頭の中で決まっていた事なのだろうと。

あまりにも綺麗に決まりすぎているのだ。
兵たちは練習されていたかのように、乱れず綺麗に頭が一斉にさがっていた。

「・・・ふふっ」

馬岱は笑った。

ならば最初から自分は死なないと決まっていたのではないか。
最初から、仲間になってくれと頼まれると。

つまり、彼らの中に敗北の二文字は最初から無かったと。
負ける気がないから、兵たちにこの頭を下げる練習をさせる余裕があったのだろうと。

なんだ・・・最初から私たちは負けていたのか・・・

あんなにも訓練したのになぁ・・・お姉様にさんざん負かされて・・・

宣戦布告を受けてから、軍はピリピリしていて・・・
兵たちは連日連夜訓練をして・・・

皆疲れた顔をして・・・

お姉様もぜんぜん相手してくれなくて・・・冗談も通じないほどに、
笑ってなくて・・・

でもこいつらは、最初から勝つって自信があっただろうなぁ・・・
兵数もほぼ同じに合わせてくれて・・・

そして、私たち騎馬隊を完膚無きまでに叩きのめして・・・

強いなあ
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

わたしも・こいつらみたいに強くなれるかな？

お姉様のように・
・
・

「・・・うん」

「・・・え？」

朱里はその言葉を聞き、頭を上げた

「・・・なるよ。わたしは。降伏する」

「・・・では」

「でも、お姉様を死なせないで・・・」

「わかりました。馬岱さん。これからよろしくお願いしますね」

「こっちこそ」

馬岱の顔には笑みが戻った。
それは久しぶりの笑顔だった。

宣戦布告を受けてからずっと浮かばなかった笑顔がこの日、久しぶりに浮かんだ。

「はあ．．．はあ．．．」

「し、しつこいのだあ．．．．．」

二人の一騎討ちはまったくの互角だった。
もうすでに百合あまり打ち合ったであろう。

だが、決着が付かない。
それほどまでに二人の武は拮抗しているのだ。

「つ、つええなあ．．．．張飛．．．はあ．．．」

「ば、ばちよーこそ強いのだ．．．はあ．．．」

二人は完全に疲れきっていた。
もうどれだけ打ち合ったかわからない。
だが決着がつかない。

二人は傷だらけで、体力はほぼゼロ。

「張飛・・あたしたちが打ち合ってからもう一刻近い・・
体力も気力ももうからっきしだ・・」

馬超が肩で息をし、呼吸も荒い。
そして馬超は再び呼吸を整える。

その顔は真剣に、そして覇気に満ちた猛将の顔

「残っているのは・・お互い最強を守り通してきた引けない意地だけだ」

馬超がその自慢の槍の切っ先を鈴々へと向ける。

お互いに守り通してきた最強の称号。

実質呂布とは引き分けであり、負けてはいない鈴々。
西涼でその名を知らないものはいない馬超。

どちらも負け知らずの最強対最強の意地の勝負。

「わかったのだ。ばちょー！！鈴々は強い！！！！燕人張飛！！！！参
るのだ！！！！！」

鈴々と馬超が再び走り出し、お互いの武器を交差させる。

「でやあああ——！！！！！」

「来るのだ——！！！！！！！！！」

馬超が張飛にありつたけの力を込めて、槍を上から下へ振り下ろす。
張飛はそれを真正面から受け止める

ガキーーーーン!!!!!!

金属音が鳴り響く

「だああああー!!!!!!」

「にゃにゃにゃー!!!!!!」

またもおこる力と力の勝負。

馬超は上から、鈴々は下から

「ははは！楽しいぞ張飛！！あたしは今最高の気分だ！！！！
あたしとともにやりあえる奴がいなかったからな！！！」

「鈴々も楽しいのだ！！
でも、こっちには愛紗や星がいるのだ！！！」

「そっかー！おまえんとは強い奴がいっぱいいるんだな！」

「そうなのだ！だから鈴々は毎日が楽しいのだ！
お兄ちゃんだって、鈴々がいっぱい頑張ったら頭を撫でてくれるのだ！」

「そうか・・・こっちは厳しいよ。
母上は怒ったら怖いし、蒲公英はいたずら好きで手がかかるし・・・
なにより強いやつがない・・・」

「だったら馬超もこっちにくればいいのだ！
そうしたら毎日馬超と鍛錬ができるのだ！……！」

「それもいいな……」

「けど……お前んとこの奇襲はもうとっくに始まってるだろ？
時間的には……もう決着がついてる。」

「もし……母上が死んでいるようなことがあつたら……あたし
はきつとお前たちを許せない。」

「きつと一生恨んでしまう……」

「頭ン中が真っ白になって……混乱して……暴走して……泣い
て……」

「きつとお前たちの敵の所に転がりこんで……きつと復讐したいっ
て……思っちまう……」

馬超の瞳に涙が浮かぶ。

頭の中で最悪のシナリオを描き、泣いてしまったのだろう。

「ばちよー・・・」

鈴々も彼女の気持ちに槍を伝い、移ったのだろつ。
鈴々の表情も暗くなってしまった。

「張飛・・・あたしは翠・・・真名は翠だ」

「え？」

「お前に受け取ってほしい。
もし、最悪な事態になってもあたしはお前を恨んだりはしない。
たとえこの先、また敵同士で戦場で出会ってもお前を仇だと思わ
ない。」

友としてお前と武器を交えたい。
憎しみに彩られた、戦いではなく、この楽しい、最高の戦いを再び
楽しむためにな！」

馬超の顔に笑みが浮かぶ。

彼女の笑顔はこの戦場で咲く、一輪の花のような笑顔だった。
この笑顔には敵、見方、関係なく、一人の人間が友へと送る屈託ない笑顔だった。

「鈴々は・・・鈴々は鈴々なのだ!!」

「そうか! 鈴々か! まあさっきから聞いてたけどな。
よろしくな! 鈴々!!」

「うん! よろしくなのだ翠!!」

二人は笑顔で笑いあった。

だがそこに一人の兵が現れた。

それは翠にとっては何も知らないために最悪の伝令だった。

「張飛様報告します!!!」

敵、馬岱! こちらに降伏し、仲間になることを了承しました!!!

同時に、敵本陣陥落しました！！！！
我らの勝利にございます！！！！」

「・・・え？」

翠の顔は一気に青ざめた。

蒲公英が・・・？

母上は・・・？

負けた・・・？

「す、翠！！！！大丈夫かー！？」

翠は疲労、心労、様々なものが一気に押し寄せその場で気を失った。

張飛VS馬超（後書き）

張飛VS馬超

有名な戦いです。

ちなみに張飛はこの前日に馬岱の武器を軽くふっ飛ばします。
張飛強いです。

3回戦います。

一回目は百合打ち合っても決着が付かず先に馬がくたびれて終了。
二回目は日が沈んで終了

三回目は馬超からの挑発。かがり火を炊いてナイター試合です。
しかしここで劉備が二人の命を惜しんで終了。
結果引き分けで終わりました。

つまり二人の武は互角です。

恋姫では馬超はギャグ担当みたいですが、実は張飛並に強いんですね。

長坂で仁王立ちできる強さですね。

馬一族（前書き）

久しぶりの更新です。

蒲公英の口調が分からない・・・

また恋姫をプレイするしかないのか？
だけど今は忙しい。

戦極姫、そして龍が如くOF THE ENDがある・・・
ゲーマーは辛いぜ・・・

馬一族

織田軍は見事敵本陣を陥落させた。

崖に囲まれた本陣では前からしか警備を強化しておらず、後ろの、崖への注意をまったくはらっていなかったのだ。

その穴を付いた騎馬隊による奇襲によって陥落したのだ。

その報告を受けた、西涼の部隊は驚愕した。

誰もが不可能だと思う崖からの、そして馬で駆け下りるといふ神業。誰も頭の中でそのような方法思いつかないであろう、ましてや実行しようとしても、土壇場で臆してしまうだろう。

こんなことできるはずがない、自殺行為だ。

そして、自分の部下までも道連れにし、殺してしまうという、心の抑止力までもかかってしまう。

それをこの男はできると確信し、実行し、そしてやってのけたのだ。

馬騰は思った。

（今の世はこの魏、呉、蜀の三国が天下へ手を伸ばしているわね。そして、もつとも手を伸ばしているのがこの男。織田信長……彼の魏。

彼の大胆でありながらも、確実に功を残した戦。

私は負けたけども、逆にそれ以上大きなもののとの繋がりができたのかもしれないわね)

「ご主人様。此度の戦も勝利しましたね。

最初は無謀だと思っていましたが、心のどこかでご主人様なら可能なのではと思っておりました。

お見事な奇襲。私は感服いたしました」

「うむ」

愛紗が尊敬の眼差しで信長を見つめている。

この二人のやり取りを馬騰は口元に指を当てながら見つめる

(あら？この娘の眼・・・これは尊敬する者を見る眼とは別の感情が入っているわね)

馬騰は口元にニヤリと笑みを浮かべ二人のやり取りを見つめる。

そして別の人物がこの部屋へとやってきた

「ご主人様ただいま戻りました」

朱里が信長の元へ馬岱を引きつれ戻ってきたのだ。

「ふむ・・・その者が・・・馬岱か」

「う、うん」

馬岱はビクツと緊張ぎみに反応する。

その反応を見た信長はククツと笑いながら感想を述べる

「クク・・・鈴々ともそう歳は変わらぬか。やはりこの世はワシの境界とは違うな。

まだ、遊び足りぬような年頃の娘が豪傑・・・か。

おもしろい。馬岱よ。朱里から話は聞いた。

うぬもこの信長の天下布武のため、力を貸せい」

「わ、わかった。ご主人様！

それからわたしは蒲公英！真名は蒲公英だからそうよんでね」

馬岱は信長の圧力、魔王としての貫禄に若干緊張しているようだ。

彼女らしさの天真爛漫さがでないようだ。

そして、その時・・・

「お、おにいちゃ~~~~ん!!!!!!」

鈴々が慌てて信長の元へと走ってやってきた。
なにやら背中に誰かをおぶっているようだ。
生憎、身長が足りず、おぶられている方は足を引きずられている。

「す、翠が!!ばちよーが倒れちゃったのだ!!!!!!」

「お、お姉様!!!!!!」

「翠!!!!大丈夫!?!」

その知らせと、馬超の顔を確認した蒲公英と馬騰は慌てて馬超の元へと駆け寄った。

「お、お姉様は大丈夫なの・？」

「翠は大丈夫なのかー！？」

蒲公英と鈴々は二人顔を並べて馬騰の下へ詰め寄る。

「ふう・・・大丈夫よ。ちゃんと呼吸をしているわ。
ただ気を失っただけみたいね」

「翠は本陣陥落の知らせと、馬岱っていうのが降伏して鈴々たちの仲間になるって聞いたら倒れちゃったのだ」

「そっか・・・」

「翠には今回の戦でいろいろ背負わせすぎたのかもしれないわね。
私が見ている事、仲間を大勢死なせた事、そして私の安否と蒲公英

の降伏・・・

疲れがどつとでちゃったのよ・・・

でも、私は嬉しいわ。

翠に貴女のような心配してくれる友達が出来た見たいね」

馬騰は馬超から鈴々へ、その優しい笑みを・・・安堵の笑み、そして優しい笑みを移す。

「にやにや！？」

「もう真名も預けあっているみたいね。

翠に変わって私からお礼をいわせてもらっわ。

ありがとう。このまま地面に倒れたままだと体をきつと壊していたわ」

「にやははゝ翠とは槍を交えた仲なのだ！」

「え？なになに？わたしにも聞かせて！」

鈴々は馬騰と蒲公英に翠との事をありのまま話した。

馬騰は鈴々が幼いながらも馬超と互角の戦いを繰り広げたことに驚き。

蒲公英は自分と背丈すら全然変わらないのに、その武の違いに驚き落胆した。

そして、そんな折、当の本人である馬超が目覚めた。

「ん・・・あれ・・・あたし・・・」

馬超が起き上がりざまに辺りを見渡し状況の確認をする。

先程まで戦っていた鈴々、蒲公英、母上、そして知らない者たちが周りにいる。

そして、視界の180度を越え、体を反転させようとした時、

「馬孟起よ。眼を覚ましたか」

馬超はその低く、威厳のある声を耳にし、体を後ろに向ける。

そこには若いながらも王としての貫禄に溢れ、こちらを鋭い目つきで見つめる男がいた。

その男からは、あの蜀の曹操のような、絶対的覇王のオーラを感じる。

「ああ。あたしが馬孟起。西涼の錦馬超さ」

馬超はこの男に睨まれ、自分との格の差、器、人間性、全てを自分と比べても勝てるはずが無い、劣等感が体をめぐる。ただ言葉を交えただけでわかるのだ。

この男はこの荒れ狂う天下に抗うことができる唯一の人間だと。

「ふむ。ワシは織田上総介信長。うぬと戦い勝利したもの。そして、この魏を統べる当主であり君主ぞ」

「へえ、あんたが魏の魔王か」

「いかにも。して馬超。うぬはワシらとの戦いに敗れた」

「ああ。そうだな。そして母上はあんたに殺されず、何故か縄にも縛られていない。

蒲公英。馬岱に至ってはあんたらに寝返ったみたいだな」

馬超は気丈に振る舞い、そう答える

「さあ。斬れ。あたしは最後にいい戦いができた。
いい友もできた。この世に未練なんてないさ。
武人らしく、カッコいい最後だと思う。」

「さあ、斬れ」

馬超はその綺麗な瞳を閉じる。

背筋もピンと張り、その佇まいはまさに武人。英雄。
死を覚悟し、そしてこの世に一切の悔いや未練の無いものはこれほ
どまでに美しいのかと皆がその姿に見惚れる。

辺りは誰も言葉を発しない。発せない。

シンと静まり返る室内、緊張の空気だけが辺りを支配している。

そして、一つの言葉発せられた。

「え？」

「斬らぬ」

馬超は耳を疑った。

「斬らぬ」

馬超は両目を開いた。

「ワシはうぬを望む。それだけだ」

「あ、あたしを？」

「うぬの實力は欲するに値する。」

ゆえにワシは最初からうぬを殺すつもりなどない。

西涼の地などいらぬ、ワシはうぬの武、そして心が欲しい。
この信長に仕えるという、部下としての心がな」

信長がたんとんと話す。

「じゃ、じゃあなんで攻めてきたんだ？」

西涼の地がいらない？じゃあなぜ攻めてきたんだ？
同盟を組み、そしてあたしに協力を要請すればいいんじゃないのか？

「一つにならねば決して平和など訪れぬ。

ワシのいた日ノ本という国。

かように小さき島国でさえ、群雄が割拠し争いが耐えぬ。
同盟なぞ、無価値に等しきもの。

裏切りが絶えぬ、騙し、騙され散る大名の多きこと。

しからば一つにまとめねば決して相容れぬ。

思想、文化の違いという下らぬ理由で戦は起こるのだ。

だからワシは攻めた。そして勝った。

西涼を武により、手に入れたのだ。

これにより、ワシはこの大陸の北側をほぼ手中に収めたのだ。
魏という一つの国にな」

「そうか・・・そしてあたしは負けた。

捕虜だから、仲間になれってことだな」

「うむ。だがしかしうぬはそう簡単に首は振らぬともわかっていた」

「え？」

馬超はうつむいていた顔を上げ、信長を見る。

「うぬを手に入れるためにワシはあえて騎馬で勝利を得たかったのだ。

うぬら西涼の騎馬隊に騎馬をつかった戦での勝利をな。

うぬらでも真似できぬ芸当をし、そしてうぬに自ら仲間になりたいと思わせるためにな。

クク・おかげで崖から落ち死んだ者も数百おったわ」

信長はククつと笑い、馬超を見る

「はは・・そうか。やっぱり全員があんなことできるわけじゃないんだな。

びつくりしたよ。そこまで差をつけられてたらあたしたちの面目丸つぶれだもんな」

馬超もフフつと口元に笑みを浮かべ、ピンと張り詰めていた空気が少し緩んだようだ

「見事だった・・あたしたち西涼の完璧な負けだ。

騎馬隊をあんなにも手玉に取って・・そして大将が自らあんな危険なことをするんだもんな・・
自分だってその崖から落ちた一人になったかもしれないのに」

「翠。信長様は貴女を手に入れるために自らあの策を提案したそうよ」

「母上・・・」

「お姉様。良い友達ができたっていうんだからさ、死ぬのもつたいたくないんじゃない？」

「蒲公英・・・」

馬超は自分の親しき者たちに言われ考える。
そして、その視線を一人の少女に向けた

「翠・・・」

「鈴々・・・」

自分と互角の勝負を繰り広げた一人の小さな少女。
彼女の眼が潤んでいる。

「り、鈴々は翠ともっともーっと一緒に遊びたいのだ！……！」

鈴々があたりに響く大きな声を張り上げる。

「り、鈴々……」

その言葉は部屋だけでなく、彼女の心に響く。
その単純な言葉が心に何度も木霊する。

「馬超よ」

そして前から聞こえる男の声。

「ワシの配下となれ。そして．．．生きよ」

「はい・・・生きてます」

馬一族（後書き）

実際、崖から下る時に何人かそのまま死んだそうですよ。

部隊を指揮する義経に逆らえない兵たち、やったことのない崖くだり．．

怖かったでしょうね。

天下三分（前書き）

龍が如く OF THE END 終わりました。

エンドロールで「また会う日まで」

みたいな流れたんですけど、龍が如くシリーズはこれで終わりなん
でしょうか？

1 から 4、見参！、OF THE END と全シリーズやってきた
大ファンなんですけど・・・悲しすぎる。

天下三分

西涼と魏の戦いは見事魏の勝利に終わった。

馬騰、馬超、馬岱は魏の新たな将として加わる事となり、ますます魏の力は強くなっていった。

しかし、馬騰は自分の次の代として馬超を鍛えたいと考え、自分は隠居するように西涼の統治を志願し、信長も許諾し、馬騰は西涼ですぐす事と成った。

馬超は馬騰からの指示で、魏で得るすべての事を自分の糧とし、馬家の為に自分を成長させよということで信長たち主力組に加わる事となった。

信長も彼女の實力を認めており、初めから主力として加えるつもりであったためにすんなりと事は運んでいった。

そして、信長たちがその視線を全体へと移したと行き、すでに大陸は大きく動いていたのであった。

「まさか、蜀と呉が手を組んでいたとわな」

星の言葉で全員の顔が険しくなる。

「はい。蜀、呉が同盟を組み、左右からの怒濤の攻めにより、劉表さんは破れ荊州は蜀と呉の協議の結果半分ずつに分けられました。そして、この時をもって天下は三分となりました」

「あう・・・魏、呉、蜀によるみつどもえ。三すくみの状態で均衡がとれ、各々手を出しづらい状態となりました」

朱里、雛里による今の状況の説明。
確かに、手が出しづらい状態。

蜀へと手を伸ばしても、その主力に立ち向かうにはこちらもそれなりの将で挑まねばならない。
だがしかし、その隙に呉から攻められれば？
不運にも、呉との同盟はもう切れてしまっていたのだ。

つまり、いつ攻めてきてもおかしくないのだ。

しかし、蜀はつい先日呉と同盟をむすんだばかりである。
そして、魏は今大陸一の国家。

今、一番危ういのは魏と誰が見てもあきらかなのだ。

「クク・・悩む必要などない。ワシらが狙われておるのはもはや必定。

ならば攻めるのみ・・ぞ」

「しかし、ご主人様。どちらを攻めるのですか？

蜀を攻めれば呉が、呉を攻めれば蜀が私たちの居留守を狙ってきます」

「しからば、両方と戦うのみ。そしてこの大陸を決める重要拠点を治めるのみ。

荊州を敵に取られておるゆえにこの問題がおこるのだ。

ならばワシらが取ればすべて解決・・ぞ」

信長はこの大陸の中心。荊州を次の目標としたようだ。

「荊州・なるほど。そこに大軍で出陣すれば、呉も蜀も迎え撃つためにそこに主力を集めるしかありませんね。
荊州は両軍の収める地。その中心、国境付近を進軍すればどちらも眼を背けるわけにはいきませんね」

朱里がこの案について思案をめぐらせる。

だが信長の真の狙いは別にあつたようだ。

「クク・・決戦・・か」

その後、荊州へ魏軍は出陣した。
魏軍は今、大陸一の国である。
その数なんと八十万にも及ぶ大軍勢。

対して呉軍十五万。蜀軍は十万と両軍は合わせても三分の一にしか満たなかったのだ。
呉、蜀はやはり単独では適わぬと両軍は合流し、お互いに手を組み、魏を倒そうと決起したようだ。

だがやはり、数の暴力は強かった。
こちらは目も眩むような大軍。そして、統率に優れた信長、先を読む天才軍師の朱里、雛里がいるのだ。
多少のことでは統率は乱れず、兵ももはや負ける気がしないのである。

決して士気は下がらず、むしろ戦い、敵は数に推され後退をするたびにこちらの士気が上がっていくのだ。

そして、魏軍はどんどん先へと進む。

呉、蜀は勝負を諦めたのか少し戦い、そして撤退を繰り返すばかりだ。

そして、ついに魏軍は荊州の中間地点までその歩を進めたのだ。まるで、導かれるように。

運命は時の流れ、戦況の流れに任され進んでいった。

その地は赤壁。

魏軍の大量の船が浮かぶなか、信長は船首にて眼を瞑り物思いにふけていた。

天下三分（後書き）

今回短くてすみません

大喧嘩（前書き）

うーん・・・やっぱり蜀（桃香たちの本当の蜀）のキャラたちなら口調はわかるけど他の勢力のキャラの口調がわからない。
とはいっても、雛里も難しいんですね。

「あう・・・」をつけねばいいかなって思ってます。
だってそれ以外じゃ朱里と雛里はともに策を述べるから、どっちがしゃべったかわからないんですね。

大喧嘩

ここは赤壁。

貂蟬が言っていた終わりの地。決戦の地。信長は甲板で黙って対岸を見つめている。

魏軍の船は敵の何百倍もあるうか？

この川を埋め尽くすほどの大量の船だ。

信長の乗っている船は特別であり、他の船たちの数倍はあるうかという大きさだ。

信長は鉄甲船を作りたかったが、貴重な鉄を使う事をよしとせず、大砲や鉄砲などがこの地にはないため、あまり意味が無いと判断し、見せ掛けだけの船は必要ないと判断したのだ。

赤壁。

それはあまりにも有名すぎる戦い。

信長の元へ二人の少女が歩み寄ってくる。

彼女たちは信長へと問いかける。

「ご主人様。敵は本当に火計をしてくるのでしょうか？」

「あう・・・火計は風が無ければただの焚き火。彼らからすれば東南

の風が吹かなければ逆に被害をうけましょう」

その言葉に信長は目を開き、空を仰ぎ見る。

「今この地には数多の英雄が集まっておる。

劉備、曹操、孫策に孫権。

それだけではない。さらに各国のその他の英雄も一同に集まっておる。

関羽に張飛、夏侯惇に夏侯淵、周瑜に陸孫なぞ・・・な。

クク・・・風が吹かぬはずが無い。

天がかようにおもしろきこの状況を黙って見過ごすはずがないわ。

東南の風は吹く。必ず・・・な」

信長が笑みを浮かべながら語る。

東南の風は敵にとって利があり、こちらにとっては害でしかない。しかし、信長は風が吹く事を楽しみ、待ち望んでいるかのようだ。

「なら・・・私たちは風が吹く事を必然とし、策を練るまで」

「朱里ちゃん。私たちは私たちにできる事をだね」

小さな軍師たちは二人でまた部屋に籠り、考えられる全ての状況を踏まえ策を練るのである。

場所は変わりこちらは蜀呉同盟の陣営。

ここには蜀の曹操、北郷、夏侯惇、夏侯淵、荀彧、程昱、郭嘉などの主要人。

そして呉の孫策、孫権、孫尚香、周瑜、陸孫、甘寧、呂蒙がいる。

そこへ呉の周泰が颯爽と現れる。

「敵の士気は高く、数も我らを合わせた兵力の数倍でしょう。まともに戦えば勝ち目はありません。」

しかし、敵はそれでも警戒を解くどころか船上で訓練を行っており、まったく隙がありません。

時を与えれば敵に船に慣れさせることになりましょう。」

「なるほど・・・ね。さすがとでも言うべきかしら」

「まったくね。これだけの兵力差なら兵たちも浮かれて統制が厳しいでしょうに。」

馬鹿なら戦前に戦勝祝いとか始める奴もいるのにね」

「そこらの暗愚とは違うか。そうでなければここまでの大きさにまでならんか」

曹操、孫策、周瑜が険しい顔で話している。

この戦、厳しい事は誰もがわかっていた。
圧倒的すぎるのだ。

いくら水上戦になれている呉軍とはいえ、やはり多勢に無勢。
数でこられてはひとたまりもないのだ。

並大抵の策では意味が無いほどに兵力差は圧倒的なのだ。

そこへ一人の将が乱入してくる。

呉の宿将黄蓋だ。

「まったく揃いもそろって頭の固い連中じゃのう。
一介の武人なら答えは決まっておるうに」

「っ！？あなたは何を考えておいでですか！？
ここがどのような場か考えているのですか！」

そこで黄蓋と周瑜の口げんかが始まる。

「まったく頭脳よりも肉体を駆使して王に取り入った薄汚い売女風
情が！」

誇り高き我ら武官を愚弄するなど百年早いわ！！」

「・・・ぐっ！」

周瑜は怒り心頭である。

呉の軍勢はひやひやしながら光景を眺めている。
この場はまさに一触即発の状況だ。

だがしかし、この光景を平然と見つめているものたちがいる。

「
．．．．．
」

曹操と北郷だ。

しかし、それだけではない。

蜀の面々はその光景にいつさい動じていないのだ。
まるでこの光景を想定していたかのようにだ。

夏侯惇でさえ、平然としている。

呉の軍師、呂蒙でさえ、混乱しおろおろしているのに。

二人の言い合いは加熱を極め、ついに黄蓋は天幕を出て行ってしまった。

黄蓋が天幕を出て行くと周瑜は眼鏡を指で直し、一息ため息をついて

「申し訳ない。さあ、続きをしようか」

周瑜は表情こそは冷静だが、言葉の語気が強く怒りはまだ収まっていないようだ。

そして、終始気まずい空気のまま軍議は終わった。

「祭さまは何故あのような事を・・・」

周泰がうつむき、悲しい表情でそう呟く

「わからん」

甘寧も口調はいつもどおりだが、表情に若干の曇りが見える。

「それにしてもいったいどうなるのでしょうか？
こんな状態じゃあ魏軍に勝てませんよ・・・」

「策もまだ決まっていないうだからな」

周泰も甘寧も表情は暗い。
無理も無いだろう。

蜀の面々に恥ずかしい一面を見られ、呉の宿将である黄蓋と周瑜が
険悪な状態。
そして対岸には圧倒的兵力の魏軍。

まさに、最悪な状況。

しかし、悪い事というものは続くものである。

「た、大変です！！黄蓋將軍が兵を率い出て行かれました！！
恐らく、敵に投降するつもりでしょう！！！！」

一人の兵が慌てて、周泰と甘寧の元へやってきた。
その言葉を聞き、二人の表情は驚きに変わる

「えー！！！！ど、どうしましょう！！」

「今、陸孫様が追撃の兵を出し、矢により追撃しております！」

「そ、そんな・・・祭さまを攻撃するなんて・・・」

「お、おい明命・・・」

周泰はショックで膝から崩れ落ちた。

それを甘寧は支えるように肩をかし、彼女を立たせる。

「とりあえず今は天幕に行こう」

「思春殿・・・」

「話にならないわね」

曹操の一声は厳しくもあり、当然の言葉であつた。

「すまない・・・」

当然である。これから決戦を行うにあたり、仲間が敵に投降するなどとはまさに最悪。

呉軍の士気はガタ落ち、将たちですら戸惑い、混乱している。

「そんな・・・祭が・・・」

孫権でさえ、非常に暗い顔をしている。

まさに絶望

この出来事により、呉、蜀に動揺が走り全体の士気が落ちるかに思えた

だがしかし・・・

蜀の面々は一切気にしていないかのようだ。
それは、初めから起こりえたことを予想していたかのように。

曹操は慌てふためく呉の面々を見、静かに時を待っているかのようだ。

隣の北郷と一緒に、傍らで控える大事な将達と一緒に。

「ふむ・・・船を鎖で繋ぐ・・・か」

こちらは魏軍。

彼らのもとに一人の男がやってきた。

どうやら彼は魏軍の兵であり、そして漁師であったそうだ。

もともと出身がこの付近であり、船について詳しく、信長たちに提案をしてきたようだ。

「我らの兵は船になれておりません。

この揺れでは恐らく船酔いをするものが大勢出ましよう。

そうなってしまうては戦に影響を与え、大量の死傷者がでます。

ですから、船同士を鎖で繋ぎ、揺れを抑えるのです。
さすれば揺れが軽減し、船酔いをする者も大幅に減りましょう」

「なるほど、ご主人様。彼の言う事に一理ありますね」

「あう・・揺れが軽減すれば、水上戦に為れていなくとも多少は戦いやすくなると思います」

朱里、雛里がその提案を擁護するように信長へ話す。

「確かにこの揺れでは私たちも陸上のように武器を扱えませんね」

「鈴々はちよつと気分が悪いのだ」

「あたしも馬の上なら得意だけど、船の上なんて全然駄目だ」

愛紗、鈴々、翠もこの揺れには手を焼いているようだ。

「わかった。うぬの申す通り船を鎖で繋ごう。

朱里、雛里。全軍に伝えよ。船を鎖で繋ぐように指示するのだ」

「御意です!!」

そして、船同士をすべて鎖で繋ぐことになった。
その繋ぎ方の指南は漁師の兵に教えてもらう。

「このように結ぶと決して外れません。
途中で外れては意味がないですからね」

「おお！確かに揺れが減ったな」

「やるじゃないか。これなら陸みたいになぜ!!」

その効果に兵たち、そして将からも喜びの声が上がった。
船をすべて鎖で繋ぎ、まるで一つの巨大な戦艦のようだ。

「うむ。ご苦労であった」

「は！ありがとうございます！それでは部隊に戻ります！！」

そして男は信長たちの元から走って去っていった。

その後姿を信長どころ魏の将たちは見えなくなるまで見送った。

「朱里」

「はい。お任せください」

大決戦（前書き）

それにしても三国無双6つておもしろいですよね。
今作は私の中では名作ですね。

5は駄目でしたが、久しぶりの無双シリーズでの大当たりだと思います。

しかしながらストーリーで使えるキャラが決まっているのが残念。
ホウサンジョウとか使えませんしね。

せっかく新キャラなのにクロニクルモードとかでしか使えない。

大決戦

「ご主人様」

「朱里か」

信長の元へ朱里がやってくる。

「やはりご主人様の仰るとおりあの兵は魏軍ではありませんでした。忍びに後を付けさせた結果、どの部隊にもいかず岸へと向かい、そして馬に乗り去っていきました。」

十中八九呉により雇われたものでしょう。

恐らく金などで釣られ我らの元へ進入してきたのでしょう」

「クク・・・そうか。しからばいったい曹操は何を考えておる。連還の計を用い、船を繋げ、火計によりこちらを殲滅する。」

あやつは知らぬのか？いやしかし、彼奴らには北郷がある。火計を防がれる事ぐらい分かっておろう」

信長は悩む。

この赤壁での戦略を知っているのは信長、そして北郷のみ。信長はそれを将たちに全て話した。

つまり実質魏軍は敵の策を知っているのである。

そして曹操は北郷に歴史を全て聞いた。

曹操はもう悩む事をやめたのだ。

自分を守るために、愛するものたちを守るために、堅かった頭や意地を捨てたのだ。

すべては守るため。

そして、曹操は火計の事を戦の前に、将たちに伝えた。

そう、知らないのは呉軍のみなのだ。

曹操は知っていた。

まだ伝えられていない火計のこと、黄蓋の苦肉の策も。

周瑜と黄蓋のやり取り、焦る呉の将たちを見ながらこの光景はまさに自分の頭のなかでパズルのピースが出来上がっていくかのように進んでいく。

なるほど、こうなってそしてあれにつながるのか・・・と。

「と、殿！・・・！」

一人の兵が息を切らせながら信長の元へ走りよってくる

「呉の黄蓋が我が軍に降伏してまいりました!!」

「クク・・・で、あるか」

信長の口元になやりと笑みが浮かぶ

「さあ、開幕・・・ぞ」

「はい」

信長と朱里は歩き出す。

始まったのだ、この歴史に名を残す大決戦が。

「うぬが黄蓋か」

「ああ。魏の織田信長殿じゃな。
此度は儂を受け入れてくれて感謝するぞ」

「クク・・気にするでない。
役に立つのであればワシは全てを使う」

「うむ。そうか」

「しからばうぬはワシの隣に控えておれ。
ワシの指示を待つのだ」

その言葉に黄蓋は驚く。

「今しがた降伏してきたばかりの儂を隣におくのか？」

「いったであろう。ワシは役に立つのであればすべてを使う、とな」

その言葉を聞き、黄蓋の表情は驚きから口元があがり、目じりが下がります

「っはっはっは！魏の大將殿はたいしたものだ！あの軍師殿にも見習って欲しいものだ！！」

黄蓋はひとしきり笑う。

「あい、わかった。

この黄公覆、大將殿の指示を待とう！！」

「うむ。しかとその場で待っておれ」

そして、信長たちは決戦の時を待つ。

そして、時が過ぎる。
魏、呉、蜀は待っているのだ。
絶好の好機を。

戦場に吹く、風を。

「風が・・・」

孫策はこの風を感じ、勝利を予感する

「東南の風が・・・」

孫権は驚く。この時期東南の風など吹かないと思っていた

「天は私たちに味方したか」

周瑜はまさに今こそ好機だと体中の血が熱くなる

「始まったわね」

「クク・・・さあ戦を始めようぞ」

曹操、信長はお互いにどう出るかこの戦を精一杯楽しもうとしていた。

「黄蓋よ」

信長は隣に控えている黄蓋へと話をふる

しかし、そこにはいなかった。

黄蓋は誰にも気づかれないうちにその場から去っていたのだ。

「・・・」

しかし、信長の表情に変化はない。

逆に口元には不敵な笑みが浮かんでいた。

「誰にも気づかれなんだか？」

「はい、大丈夫です」

「俺たちの誰一人気づかれていません」

「そうか。よくやった！」

黄蓋は共に降伏した呉の兵たち、黄蓋の部隊の兵たちとともに身を隠していた。

「これが儂ら呉の・・一世一代の大喧嘩じゃ！
儂ら呉、蜀に勝利を呼ぶぞ！！」

「はっ！！」

そして、彼らは松明に火をつける。

火計だ。

周瑜の策は火計。それもとてつもなく大きな大火計であった。船同士を鎖で連結させる事によりすべての船を火で埋め尽くすというものであった。

しかし、周瑜はこの策が敵にばれることを恐れた。どこから、策がばれるかわからない。ばれてしまえばきっとこの策は失敗するだろう。

そして、策の失敗は敗北へとつながる。

だから、周瑜は鎖を繋がせる役の男に大金を用意した。男が10年以上掛けてやつとかせげるような大金。それでも、安いかもしれないと何度も周瑜は悩んだ。結果、一人の男が一生掛けて稼げる額の金を男に送った。

それほどまでに周瑜はこの策に掛けているのだ。

そのために誰にも話していないのだ。しかし、黄蓋は見事周瑜の策を見抜いたのだ。そして、一芝居つったのだ。

完璧だった。

一緒に生活している者たちでさえ気づかなかった

打ち合わせも何もない、心と心のやり取り。
まさに以心伝心だった。

「貴方たちは私たちの掌の上だったのです」

朱里がゆっくりと黄蓋の元へ歩いてくる。

「いんです!!」

「なっ!?!」

黄蓋たちの後ろに忍びが突如として現れる。
そして瞬く間に黄蓋を含むすべての者たちが取り押さえられた。

「やってくださいーい！」

ガキーン！……！！！！

雛里の合図で一斉に兵たちが斧を振り下ろす。

雛里はこの連還の計を破るためにすべての船に斧を準備させていたのだ。

ガキンガキン

何度も何度も鎖へ斧を振り下ろす

ガキンガキン

さすがになかなか鎖は外れない、切れない。

だが、それでも何度も斧を振り下ろせば

ガキーーーーン!!!!!!

外れないように施された鎖もいつかは壊れるだろう。

そして、自由になる船たち。

「ワシを・・・どうするつもりじゃ」

「黄蓋さん。貴女はこの船に火を放つつもりでしたね。そして、その後ここから脱出する予定だった。」

鎖により繋がれた我らの船は全て炎上。
私たちの歴史的な大敗北」

朱里がたんと話を

「ふふつ。本当に全てばれておったのじゃな。」

それで・・・儂をどうするつもりじゃ？」

黄蓋が睨みつけるように朱里へ話す

「手伝ってあげましょう」

「どづいつとじゃ？」

「やってください」

朱里の合図で船に火が付けられる。

「なっ！？」

「これで貴女の予定どうりですね。
ただ、船同士の鎖は外させてもらいましたけどね」

「どういっ……つもりじゃ？」

黄蓋の表情はわけがわからないといった表情だ。

「ふふ……貴女は呉に戻るつもりでしたね？」

戻してあげますね」

「火が上がったか。黄蓋殿はうまやったみたいだな」

周瑜の血が滾る。
全身の血が沸騰しそうだ。

うまくいった。策が成った！！！

「これで・・・これで勝てる！！全軍に合図しろ！！！！」

周瑜が大きく叫ぶ。

「ほ、報告します！！！！」

「なんだ！」

「船が・・・船がこちらへ突撃してきます！！！！！」

その言葉に周瑜の体が一気に凍る

そして周瑜は慌てて対岸に眼を移す

「ば・・・ばかな・・・」

火がついた船がこちらへ向けて一直線に突撃してくる。

「わー！……！逃げろー！……！！！」

「突っ込んでくるぞー！！！」

兵たちが一斉に慌てだす。

見れば敵の先頭の船にだけ火が付いており、その火が付いた先頭の船だけがこちらへと向かってくるようだ。

「き、きたぞー！……！！！」

そして辺りに轟音が鳴り響く。

ついにこちらへと船が到達したようだ。

そして、次々に火が燃え移りこちらの船を焼き尽くす。

パチパチと音が鳴り響き、この場所の温度が急激に上がりだす。

「くっ……ここは危険か。一端私も……………なっ!!!!!!!!!!」

周瑜は見た。

燃え盛る炎の中、敵の船の柱に縛られた仲間の姿を。

「さ……祭殿――！！！！！！！！！！」

周瑜は走り出す。

灼熱の炎の中を。

いつも、私に突っかかり、憎まれ口を叩き、仕事をサボり酒を飲むあの大好きな仲間の下へ。

「なんてむごいことを！祭殿！！！！
いま、今助けます！！！！」

熱いなどと言ってられない。祭殿はもつと熱いのだ。
柱に縄で縛られ身動きすら取れないのだ。

周瑜の体が焼ける。露出した肌の部分がヒリヒリする。

それでも、周瑜は走る。

きつと、絶望し恐怖しているだろう。
痛いだろう、熱いだろう。

恐怖や痛みで失神しているかもしれない。

今、見ても身動き一つしていないのだ。

そして、たどり着く。仲間の下へ

「はあ・・・はあ・・・。。」

ふふ、はははははは！…！

なるほど、どうりで身動きしないはずだ！…！
呼吸すらしていないのだからな！…！」

周瑜はその場で膝を突く。
そう、

黄蓋にそっくりに作られた木像の前で。

「祭——!!——!!」

「祭——!!」

「祭さま——!!——!!」

「祭殿——!!——!!」

「祭殿——!!——!!」

周瑜は聞いた。自分と同じように仲間を救うために走る聞きなれた声を。

そして、すべてを悟った。

「ふふ・・私どころか雪蓮や他の将達をも騙すとはな。見事だ。諸葛孔明・・・」

周瑜は黄蓋の木像の横に座り、赤い天を仰ぎ見る。

そして呟いた。

「ああ・・・、天はなぜ周瑜のほかに孔明を世にだしたのか」

大決戦（後書き）

天はなぜ周瑜のほかに孔明を世にだしたのか
または

天はこの世に周瑜を生みながら、なぜ諸葛亮をも生んだのだ

はい、なんとも悲しい名台詞。周瑜の諸葛亮への嫉妬や怒りなども伺える台詞ですよね。でもいますよね、何度やっても勝てない相手とか。

才能とは恐ろしいですね。

孔明と木像

これはあまりにも有名ですね。
まあ、この戦では使わないけどね。
とある、名言を生んでますよね。

今回の呉、まさにやられやくでしたね。

でも、この小説のストーリー的には呉には悲しい役目を負ってもらうしかなかったんですよ。

それにしても朱里が黒い。

英雄（前書き）

なんか・・週刊少年ジャンプのような熱いというか・・
くさいというか、奇麗きれいことな台詞がおおいようなきもしないでもない。

英雄

赤壁が燃えている。

この戦いはやはり史実通り火計によって支配された。

ただ、違うのはその火計は「魏」が起こしたというものであった。

「・・・・・・・・」

周瑜はただずっと虚ろな眼で赤い空を眺めている。

もう、この世に未練がないのであろうか？

戦況はもう決まってしまったであろう。

もともと兵力差はすさまじいものであったが、火計により呉の船は燃えた。

突然の状況に兵たちは慌てふためきただ岸に向かって一直線に走り出す。

そして、兵どころか将たちの士気も落ちるところまで落ちたであろう。

周瑜自身ももはや何もする気がなかった。

自分は知に自信があった。だが諸葛亮には及ばなかった。

連環の計と火による大火計。

それをあつさりと見破られ、逆に手玉に取られてしまったのだ。火計によって。

そして、極めつけは祭殿の木像。

私たちの絆が深ければ深いほどその策に嵌ってしまうという恐ろしい計・・・

助けたい気持ちが強いほど自らを死中に陥れる計。

「ふふ・・・、「絆の計」とでも呼ぶか。しかし、この私もまだまだであったな。理性を失い、考えればわかるものだが」

周瑜は隣の木像を眺める。

「雪蓮・・・後は任せたぞ・・・わ・・・わたしは・・・」

そして、周瑜は眼を閉じた

だが、そこに一人の女性の声が響く

「あきらめないでください！」

「祭の木像!？」

孫策は仲間の姿を燃え盛る船の中に発見し、急ぎ船へと駆け出した。だがしかし、それは恐らく敵の軍師による策であった。

「まずいわね・・・ちっ!」

孫策は後ろを振り返るが火の手が運悪く、退路は既に炎により塞がれてしまっていた。

いや、退路だけではない。

もはや火の手はその勢いを強め孫策の周りほぼ全てを燃やしている。

黄蓋の木像もパチパチと音をたて、赤く燃え上がっている。

「次は私か・・・迷ってる暇はなさそうね」

孫策は船の端へ走り、船から飛び降りその身を冷たい水の中へと移した。

しかし、状況は相変わらず悪いままだ。

周りの船も燃えている。

そして焼け落ち上から焼けた木材が降ってくるありさまだ。

なにより・・

「たっ・・助け！！誰かー！！！」

「沈む！！鎧がつ！！！」

「離せー！！俺まで沈むだろうが！！！」

自分と同じように飛び込んだ者たちが大勢居る。
その大半は自分が着ている鎧の重さによってもがき、溺れている。
そして、力尽きたものは装備の重さにより沈んでいつている。
重さに耐え切れず、仲間にしがみつかれたものは力で引き離すか、
剣で仲間を突き刺し殺しているものまでいる。

「私たち孫呉の結束も脆いものね・・」

孫策はこの光景をまるで光のないような冷たい眼で眺めている。しかし、悔しい気持ちの裏には仕方ないと思う気持ちもある。自分も生きるためには同じ事をするかもしれないからだ。

孫策の体温を冷たい水が奪っていく。

体がだんだんと動きずらくなっていく。

このままずっとここには確実に死んでしまう。

確実に死へのカウントダウンは始まっているのだ。

船には自力では上がる事ができない。

しかし、兵たちはこの騒ぎで岸側へと移動した。

孫策の表情にも徐々に焦りが見え始めていた。

そんな折・・・

ド――――ン

激しい音が辺りに響く。

船だ。

巨大な船が周りの船を壊しながら、突き進んでくるのだ。
その船は周りの船よりも遥かに大きく、頑丈に作られているようだ。
ところどころが鉄で出来ているのだろうか？

燃える船すらも、気にせず突き進んでいる。

他を寄せ付けずまるで王道、霸道を突き進む英雄のようだ。
その光景に孫策は眼を奪われた。

「生を望むか孫策よ」

「え？」

その船の船首に男は立ってこちらへと問いかけてくる。

「生を望むならばこの信長が拾ってやろうぞ」

「・・・信長」

信長が掌を上へ向け、右手を孫策へ向ける。

「それとも・・・うめの終幕はここか」

「・・・」

孫策は何も答えない。いや、答えない。

体は生を望んでいる。孫策の体温はとくに下がり唇も青くなってきた。

できることならその誘いを受け、早く布団にくるまり暖かいお茶でも飲みたい。

しかし、心がそれを望まないのだ。

敵の、そしてその君主にこの命を救われるなんて自分のプライドが許さないのだ

「うめがそこで死を望むなら構わぬ。

溺死が無様で嫌だと言っのならこの信長が自らうめの額へ矢を突き立ててやろっぞ」

そういい、信長は兵から弓と矢を受けとり孫策へ向けて引き絞る。

「ふふ・・そうね。それもいいかもね。

南海霸王も重いし、寒いし・・もう・・疲れちゃったわ。

それならいっそ、この戦で負けて、その敵軍の大將に討たれたほうが武人としてはかつこがつくかもね」

その言葉を信長は黙って聞いている。

「武人として・・か。クク・・くだらぬな孫策よ。

本音ではうぬは生を望んでおろう。

だがそのくだらん意地が邪魔をしておろう。

何故ここで死を望む孫策よ。

先代孫堅は何を望んでおった。

死すまでくだらぬ意地を通せと申したか？

それとも死すときは無様に死ねと？

ならばこの信長見届けてやろうぞ。

さあ、選ぶが良い孫策。溺死か？凍死か？即死か？

先代の望み、この信長がしっかりと見届けてやろうぞ」

信長の口元になやりと笑みが浮かぶ。

孫策は震える体で信長の言葉を聞いていた。
信長の言葉が頭を木霊する。

先代の望み・・・母様の望み。私の望み。

呉の・・・繁栄。呉の民たちが平和で、安心してくらせる国を作ることだった。

それをこの男は・・・

「ふざけないで！！母様を愚弄するなんて絶対に許さない！！！」

孫策の瞳に再び光が戻ってくる。
信長への怒りが込み上げてきているようだ。

「ならば追って来い。この信長の元へ」

「え？」

一本の縄が孫策の元へ落とされる。

先が輪になっており、もはや力のない孫策では縄を握ることすらできないであろう。

そのため輪に体を通すだけで、引き上げてもらえるよう配慮されていた。

孫策は呆然とその縄を見つめている。

この縄・・・孫策の生死を左右する一本の命の綱に手を伸ばしていいのだろうか？

私たちは負けた。

呉はこの戦いでもう戦う力なんてない。

魏に吸収されるだろう。

そうすればもう袁術の時のように独立の機会なんてこないだろう。

母様から続いた私たち孫一家の望み。

私が潰してしまった・・・まさに大敗。

やはり・・・責任をとって・・・

「死こそ極悪」

「え？」

「責を感じ、逃亡するものは悪。
死する者は極悪。」

そして、その責を取り返すほどの働きをする者こそが善。

クク・・・いつまでたっても沈まぬよう足をバタつかせておる者が死を口にするか」

そして孫策は今の自分の現状を確認する。

そう、ずっと浮いていたのだ。

体がどれだけ重かるうが、力が沸かなくとも必死にその足を動かし続けた。

だから孫策は生きているのだ。

そうか。本当にただの私の意地だったんだ。

本当ね、心の底では必死に生を望んでた。

母様の呉を潰しておいて、死んで逃げるなんてまさに極悪・・

だったら必死に生きて、今以上の呉をまた作ればいいだけじゃない！

蓮華には・・ふふ、荷が重過ぎるわね。

それに・・この男をぶちのめしてやらなきゃ！

この時孫策の意思は決まった。

最後の力をふりしぼるように輪を体に通す。

輪を体に通すという簡単な作業。

体がかじかみ、一度では通す事ができない。

それを何度も何度も必死に通そうと頑張っている。

そこには王や英雄としての覇気は無かった。

ただただ誰よりも生へと執着する一人の人間の姿であった。

そして孫策は魏の兵により船へ引き上げられた。

孫策はぬれた体で、体力などほとんどない体で一步一步信長の元へ歩み寄ってくる。

「ふふ・・・どう？たどり着いてやったわよ・・・」

そして、ゆっくりと右手を上げ握りこぶしにし、信長の頬へくつつけるように殴る動作をした。

「見事な一撃ぞ」

「孫呉の・・・母様の魂が籠ってるからね・・・」

そして孫策はその場で気を失った。

「頑張ってくださいーい！！！！！！」

桃香はさきほどからずっと叫び続けていた。
今にも沈み、力尽きそうな孫呉の兵たちを鼓舞し続けたのだ。

「さあ、今助けてあげますからね。あとちょっとです!」

敵兵だろつが関係ない。

桃香は孫呉の兵たちを救い続けた。

「あれ・・・?あれつて・・・」

桃香は見つけた。

「蓮華様・・・お気をしっかり持ってください!」

そこには大きな木材にしがみついている孫権、甘寧、周泰の三人がいたのだ。

彼女らもまた朱里の策にはまり、黄蓋の木像に騙された者たちなのだ。

そして、三人ともそれぞれ飛び込み、この場でたまたま合流したのだろう。

だが孫権はもう力がつきかけているようだ。

木材にしがみついているその手がずるずると何度も下がってきている。

「いま！今助けます！！」

桃香は大声で三人へと呼びかける。
その声に三人は気づいたようだ。

「お前は・・・劉備・・・なんのようだ・・・」

孫権は途切れ途切れの言葉でそう口にする。
体力が限界に近いのだろう。

「なんのようって・・・貴方たちを助けるに決まっているじゃないですか！！」

「ふざけるな！！我らを笑いに來たのであろう！
蜀と同盟を組み、そして貴様ら魏を滅ぼそうとし、そしてものの見事に貴様らの策にはまり惨めな姿をさらしている我らを！」

甘寧は力の限り叫び、桃香を睨みつけている。
甘寧の隣にいる周泰も桃香の方を見つめている。

「そんな！？そんなこと思っていないません！

私は！私はただ貴方たちを助けたいだけなんです！！」

「助ける？私たちをこのようにしたのは貴様らではないか！

私たちは戦で負けた、だから死ぬ。もしくは瀕死になる。

それは当然のこと。

なのに貴様はわざわざ勝利し、そして勝った相手の命を救うのか？
そんな戦どこにある！！」

「ここにいます」

桃香は自分の胸に手をあて、孫権、甘寧、周泰を見つめながらそう話す。

「私は・・・世の中を変えたい。

だから、戦であろうと今までの常識を変えたい。

だって今まで通りじゃ何も変わらないから。

結局いつも通りの繰り返しになっちゃう。
だから、変えたい・・・この、今の世の中を。
皆さんもそうなんじゃないんですか？

この世を憂い、少しでもよくしたくて戦う。
でも、今の世は戦で勝つことでしか自分の意見は通らない。
だから・・・今は戦うしかないんです！

そして私は、貴女たちに勝ちました！
だから言わせてください！私の意見を！！

私は貴女たちを助けたい！
私に貴女たちを助けさせてください！」

桃香は真剣な表情で、そして一切三人から眼を逸らさずにそう語る。
桃香のその雰囲気から三人はそれが桃香の心からの真の言葉だと感じた。

「・・・」

（蓮華様・・・）

甘寧は孫権を見る。

どう見ても今すぐこの冷たい水の中から引き上げなければ命に関わるであろう。

自分の大事な主君。なんとしても助けたい。
でもいいのだろうか？

「思春殿」

「明命・・・」

「私たちにとって一番大事なものは蓮華様です。
劉備はああ言ってます。

私たちの命に対してはどうかわかりませんが、きっと蓮華様は必ず生かしてくれると思いますよ。

ですので劉備の言葉を信じましょう。
今はそれしか蓮華様を救える道はありません」

「くっ・・・それしか・・・ないのか」

甘寧は悔しそうな表情を浮かべる。

だが確かに今はそれしか孫権の命を救う方法などないのもまた事実であった。

たくさんの呉の船が邪魔であり、岸までとても泳いでいける距離ではない。

装備が重く、水が冷たく体力の消耗が早すぎる。
選択の余地など最初からなかったのだ。

「劉備・・・お前を信じていいのか？」

「はい」

甘寧の言葉に劉備は即答する。
二人の目と目は一切逸れることはなかった。

「わかった。劉備・・・助けてくれ・・・」

「はい！頑張ってください！今すぐ縄を下ろします」

そして三人はこの冷たい水の中から脱出することに成功した。
三人にはすぐに毛布が与えられ、その身を包み、体温の低下を防いだ。

「よかった・・・無事に助かりましたね」

「ああ・・・すまない」

孫権も少し体力が戻ったようだ。

「だが、皆無事であろうか？」

私と思春、明命はいるが・・・」

「孫策さんはたぶんご主人様が向かってると思います。あとは・・・」

「劉備殿。冥琳さま・・・周瑜さまは？」

周泰が周りを見渡し、一人いない人物に気づいた。

「え？周瑜さん・・・」

桃香も周りを見渡し、まだ助けていない人物が居る事に気づいたようだ。

「周瑜殿は燃える船に走っている姿を私は見た。

それで私も何事かと思い、前方の燃える船に目をやると黄蓋殿の姿があつたんだ。

まさか、蓮華様や明命も同じ目にあつたとは・・・」

「そんな・・・それじゃ冥琳は・・・」

「冥琳さま・・・」

孫権や周泰、甘寧の表情が曇る。

そして、だんだんと絶望の色が濃厚になっていく。

だがしかし、桃香は違った。

「どこですか？」

「劉備・・・」

「まだ決まったわけではありません。」

私はたくさんの人を救うって決めてるんです！

この世を憂いだみんなで新しい世を見たい。

だってみんな目標は平和な世なんだから。同じ夢を追い求めてここまで頑張ってきたんだから！

もうこの乱世の終結は目の前なんです。

兵隊さんの救助は他の人たちに任せます。

私たちは周瑜さんを助けますよ！」

桃香は一つも迷うことなくそう話す。

その曇りない決意と表情が三人に希望と信頼を与えた。

その言葉を聞き孫権は桃香へすがるように近づき声をかけた。

「劉備・・・頼む。助けてくれ！冥琳は大切な仲間なんだ！」

その言葉を聞き、桃香はにっこりと微笑み、任せてくれと声をかけた

そして、劉備たちの乗った船は辺りを散策し始める。

「ここら辺だ・・・」

すでに全焼した船やまだ燃えている船がある。

「明命！」

「はい！」

周泰はまだ体力が戻っていないのかぎこちなく船首まで移動する。そして、ジッと周りの船すべてに目を移す。すべてを見通しているかのような芯の通った目で辺りを見渡す。

まばたきを忘れたかのようにずっと船を見つめる。わずか数十秒で周泰の首が動かなくなった。

「いました・・・まだあの船の中にいます。冥琳さまです！でも動きません！ずっと座ったまま動いていません！」

見つけたようだ。

だが肝心の周瑜は船から脱出せず、取り残されているようだ。

「ああ・・・なんてこと・・・」

「くっ・・・」

「・・・」

三人はまるで生気を失ったかのように力なく座り込む。

「・・・」

だが桃香は違う。

そのまま踵を返し、その場をあとにする。

「冥琳・・・。劉備、ごめんなさい。せっかくあなたが・・・あれ？」

孫権は桃香がいないことに気づく。

「劉備は？」

「そういえば・・・」

「あ！？な、なにやってるんですか・・・」

周泰が船の上の方を見つめ指をさしている。

そこには帆の辺りの木材に立ちながら縄を持つ桃香の姿があった。

「りゅ・・・劉備！そんなとこで何やってるの！」

「私は・・・私はご主人様みたいな力も統率力も、愛紗ちゃんみたいな武だつてない。

私にあるのはたくさんの人を救いたって気持ちだけ。

この気持ちだけは誰にも負けない！

だから私はここで後ろ向きには絶対ならない！

周瑜さんはきつと生きてる！

こんな・・・こんな私だって英雄だつてご主人様は言ってくれたんだ

からー！！」

桃香は縄を掴み、そして振り子の原理を応用して空へと飛んだ。
燃え盛る船の中へ桃香は臆することなく飛び移った。

常人では決して真似できないであろう。
炎により半壊状態の船へと飛び移ったのだ。
まさに自殺行為以外のなにものでもないのだ。

孫権、甘寧、周泰は驚愕した。
自分たちでさえ諦めかけていたのに。
敵である彼女が何故そこまでしてくれるか？
彼女たちの中には先程聞いた言葉が頭をよぎる。

英雄

その言葉だけが木霊する。
そして彼女たちは祈る。

彼女の安否を、友の安否を。

「う・・・熱い・・・」

桃香は無事船の中へと飛び移る事へ成功した。
だがこの船ももう数分すれば崩れ落ちるだろう。
もう船のほとんどが火により侵略されているのだ。

「周瑜・・・さん・・・どこですか・・・」

酷い熱気により、声すらともに発する事ができない。
ここで大きく息でも吸えば喉がやられてしまうのではないだろうか？

「いた・・・」

桃香は周瑜を発見する事に成功した。

周泰が事前に周瑜を発見していたためにある程度目星は付いていた。

だが、周瑜は目を瞑り座ったままだ。

生きる事を諦めたのだろうか？

しかし、それも仕方ないだろう。

周りは全て火に囲まれているのだ。

武官ではない彼女ではどう頑張っても岸まで泳ぐ事など不可能であろう。

そんな彼女を見た桃香は急ぎ声をかける。

「あきらめないでください！！」

桃香は周瑜の体を揺さぶりながら声を掛けた。

その行動に周瑜は目をあける。

口をパクパクと開き、言葉を発する。

「ぐ・・・うつ・・・誰だ・・・？」

「良かった・・・生きてた・・・私です。劉備です！」

「劉備・・・？なぜお前がここに・・・」

「貴女を助けに来ました。今は何も考えず私に任せてください！」

「助けるだと・・・？お前に・・・？」

「はい！うゝ・・・んしょ！！」

桃香は周瑜の肩に腕を回し彼女を立ち上がらせる。

その隣では黄蓋の木像が既に黒焦げに燃えていた。

それはまるであと少しでお前たちもこうなるのだぞと物語っている。だが桃香はそんな未来はありえないというように少しのわき目も降らず歩き出す。

炎は周りのほとんどを燃やしていた。
道などほぼなかったのだ。

「どっへ・・・？」

「ちょっと熱くて、その後冷たいですけど我慢してくださいね。」

「な!？」

桃香は臆することなく炎へと走り出し、そして水面へと飛び込んだ。彼女らの体を火が少し蝕んだがその後瞬時に冷やされた。

「ぶはっ！」

「ごほっ!ごほっ・・・お前は何をたくらんでいる・・・」

周瑜は桃香へと問いかける。
だが彼女は普通の。少し笑みを含んだ顔で答えた。

「いいえ。何も考えていません。
だから・・・どうしましょう?」

「ん・・・?どういうことだ?」

「あの・・・何も手筈を整えていなかったんです・・・。

ただ勢いのまま周瑜さんを助けに向かっちゃって・・・」

「なっ!？」

「でも・・・ほら!見てください」

目の前の船から縄が落とされ。

そして、船から三人の女性が顔を覗かせる。

「冥琳!!」

まるで最初から桃香が彼女を助けることがわかっていたかのような手際の良さであった。

二本の縄が投げ出され、そして二人を船へと引き上げる。

桃香が命を張って敵であった自分たちを助けたのだ。

ならば、間に合わないはずが無い。

間に合わなくとも、せめて彼女だけでも助けねばと孫権たちは桃香が飛び移った後、桃香を救うための縄を準備させたのだ。

周瑜、桃香は無事船へと引き上げられた。

そして、周瑜は三人の仲間の顔を見渡す。

「蓮華様、思春、明命・・・」

「冥琳！」

「周瑜殿！」

「冥琳さま！」

四人はその場で抱き合った。

まさかこの場で出会えるとは。

四人全員が命の瀬戸際を味わったのだ。

そして四人は奇しくも同じ、たった一人の少女に救われたのもまた事実であった。

猛将魏延

「蓮華！」

「雪蓮姉様！」

二人の姉妹は信長の船で合流に成功した。
その場には呉の重臣である周瑜、甘寧、周泰もいる。
そして・

「祭！」

「いやゝ、すまんかったのう。
諸葛亮はやはり侮れなかったわ」

黄蓋もいた。

「見事であつた」

「はい。我々はこの戦で勝利し、呉の主要である孫策、孫権、周瑜、
黄蓋、甘寧、周泰の捕縛に成功しました。

まだ呉を滅ぼしたわけではありませんが、敵の士気は著しく低下する事でしょう」

朱里が現状を述べる。

彼女の言うとおり残す呉の将は孫尚香、陸遜、呂蒙とほぼ文官のみ。呉ももう、力はないのだ。

「……………」

周瑜が周りを見渡す。

そして、不審な点に気づいたようだ。

「いない……」

「え？冥琳どうしたの？」

「雪蓮。気づかないか？不審な点に……」

「……………なるほどね」

孫策も気づいたようだ。

やはり彼女は凡人とは違うのかすぐに気づいたようだ。

「ねえ、信長

蜀はどうしたのかしら？」

そう、蜀の将どころか兵すらいないのだ。
普通の状況であれば、彼女たちと同じく兵たちは船から飛び降り、
そして一緒に救出されるであろう。

だがしかし、兵の一人もないのだ。

周りに居るのは全て呉の将や兵のみ。

まるで被害にあったのは呉のみ。

この光景は魏と呉の戦いであつたかのようだ。

そして、状況を変える言葉が届けられた・・・

「ほ、報告します！楽進率いる別働隊が漢中を突破！
西涼で交戦している模様です！」

「な！？なんですって・・・別働隊・・・」

「クク・・・これが乱世の奸雄か。
おもしろい。さすがは曹操ぞ」

「ど、どういことだこれは・・・」

孫権は状況がわからないといった様子で混乱しているようだ。
周瑜は難しい顔や、怒りに満ちた表情をあらわにしている。

「つまり・・・呉は利用されたんです」

「な、なんだと!？」

朱里が言葉を発した。

「蜀は呉と同盟を組み。

荊州で三国による決戦が行われるように、すべての目をこの赤壁に向けさせました。

我々は八十万という大群でこの赤壁に布陣しました。

この戦いすべてが終わる・・・まさに最終戦を行うつもりで。

ですので、ここ意外はほぼ無防備・・・迂闊でした」

「つ・・・つまり、私たちをだしにして曹操は魏の領地に進行したと
いうのか・・・」

「クク・・・やつらは初めからこの戦をする気なぞ無かった。
汝らにとっての神風。東南の風が吹いたと同時に彼奴らは撤退した
わ」

「じゃ、じゃあ・・・初めから・・・この戦で負けるつもりで・・・」

「いえ、蜀は負けていません・・・一人も被害を出さず、魏の領土を得たのですから大勝利です」

事実を知らされた孫権は膝から崩れ落ちた。

その傍に寄り添うように甘寧、周泰も膝をつき孫権の傍らで控える
が彼女らの表情も怒りに満ちていた。

孫策、周瑜はなにやら話し合いをしているようだ。

奸雄・・・奸知にたけた英雄。

悪知恵にたけた英雄。

まさに曹操に相応しい言葉であった。

周瑜をも騙し、この戦で奇跡の勝利を得た曹操。

「天下・・・二分ですね」

「天下二分か・・・」

その言葉に周瑜はもはや呉の未来はないと覚悟したのか、下を向いている。

「天下は縦に割れました。

恐らく西涼もじきに堕ちるでしょう。

東に私たち魏、そして西に蜀・・・天下はこの二国で争われることでしょう」

「魏と蜀の争いか・・・」

「あわわ・・・いよいよ、天下が決まります。

長かった戦乱の世ももう終わりが見えています」

「あと少し・・・あと少しだ」

雛里の言った戦乱の終わり。

その言葉を聞き、愛紗は右手の拳を握る

「それにしても悔しいわね。」

曹操は私たちの目の前にいたのに、無傷で逃がしてしまうことになるなんて・・・」

「いえ、逃がす事に関しては無傷ではありませんよ」

「どういうこと？」

「クク・・・ワシらは貴様らをここで完璧に包囲し、潰すつもりであった。」

将の多さを利用し、すでに退路に兵を潜めておるわ」

信長は貂蟬に言われた通りこの赤壁を最後の戦いにするべく、予め退路に伏兵を置いていた。

信長はここで火計を潰し、戦に勝利するつもりであった。

火計を潰されたとあつては蜀、呉は負け戦確定であるため撤退は当然である。

いくらかの殿を置き、そして曹操や孫策たち君主は退却する。だが、当然信長は逃がすつもりはないのだ。

そのため、信長は退路に伏兵を置き本隊と伏兵で挟み撃ちにし蜀、呉の完全撃破を狙っていたのだ。

「曹操・・・ただではワシから逃がさぬぞ」

「な!?!なんだこりゃあ!」

「ぶ・・・文ちゃん・・・」

猪々子、斗詩は伏兵として一万で潜んでいた。

信長に言われた通り曹操たち蜀軍が見事この赤壁から撤退しているのだ。

ただおかしいことがあった・・

「なんて数だよ・・こりゃあ撤退つてわけじゃあ・・」

「うん・・私たちが足止めなんて無理だよ・・
敵の数は10万ぐらいいるよ・・」

蜀軍は10万でこの戦に参戦し、そしてそのまま戦わず撤退したのだ。

信長の見立てでは、殿などを残しもつと撤退する兵は少ないと読んでいたが外れたのだ。

1万もの兵力と、退路での伏兵との遭遇戦と言う事で混乱も起こるため十分であるはずだった。

足止めさえすれば本隊80万という兵力での殲滅力は計り知れないであろう。

だから足止めだけでよかったのだが・・

「こりゃあ・・・あたいたちが全滅するかもな・・・」

猪々子たちは10万の軍隊に横撃を掛けた。

当初は敵軍は混乱していたが、すぐに体制を建て直し攻撃を仕掛けてきたのだ。

「こんなところに伏兵を置くんなんて・・・なかなかやるわね。でも、それでこそこの曹孟徳の相手に相応しい」

「華琳様。すぐにこの戦場を脱出しなければ何がおこるかわかりません。」

相手はあの織田信長。この伏兵を見る限り、戦闘が始まる前から勝利を確信し、私たちの退路に兵を伏せていたと思われる」

「そうね。今は呉が魏の目を引き付けてくれているわ。それもいつまで持つかわからないものね。」

あの伏兵は最近入った者たちに任せましょう」

「御意」

荀？は曹操からの提案を受け、指示を出す。

蜀軍に新しく入った黄忠、嚴顔、魏延である。

「貴方たち！あの伏兵を任せるわ。
ここで勲功を得、華琳様の信頼を自らの手で掴み取りなさい！」

「御意」

黄忠、嚴顔二人の武器は互いに遠距離を中心としたものであり、二人は遠くから仲間の援護の形で攻撃をする。
対して魏延の武器は鈍砕骨と言い、棍棒のようなまさに接近戦の武器である。

「桔梗様！ワタシに任せてください！
こんなやつらワタシにかければ余裕です！」

「焰耶。あまり慢心するなよ。
敵はあの織田じゃ。一筋縄ではいかん」

「そうよ焰耶ちゃん。気をつけてね？
危なくなったらすぐに下がるのよ」

魏延は少々自信過剰な気味がある。
その事を嚴顔はかねてより心配していた。
嚴顔の友人である黄忠は嚴顔からよく、魏延の話を聞いていたために魏延の性格をよく理解していた。

「大丈夫です！任せてください！！」

そして、魏延は一人敵中へと突撃していった。

「しょうがない焔耶のために兵を減らしておいてやるか」

そう言い敵顔は豪天砲を構え

「そうね。私たち年上が頑張らなくちゃね」

黄忠は颯鵬さつぽうを構える。

彼女らにとって魏延は娘のような存在なのであろう。

「くっそー！兵が多すぎてキリがないぜ」

「うん・・もう足止めになってないよ。

殿だけを残してほとんどの敵は私たちを無視して撤退していつてるね」

「アニキになんて言い訳すりゃいいんだよ」

「しょうがないよこんな状況じゃあ」

猪々子、斗詩はこの状況に苦戦していた。

敵の殿はもはや殿どころか一つの部隊とっていいだろう。

曹操は約1万の兵をこの場に残していったのだ。

曹操軍は一度も戦闘をしておらず、兵たちの士気は高い状態を保ったままである。

好戦的な兵はずっと戦いたくてうずうずしていることであろう。

対してこちらの兵たちは敵の数が予想以上に多かった事に驚き、最

初あつた勢いはもうなくなつていたのだ。
士気で言えばその差は歴然であつた。

「斗詩！やばいぜこりゃあ！完全に押されてるよ！」

「うん！このままじゃジリ貧だよお・・・期を見て撤退しなきゃ」

猪々子と斗詩は撤退する事に決めた。

そして退路を見極めるために周りに目を移す。

その際自分たちの目を疑つた

「な！？なんだありや！？」

「兵が・・・」

兵が吹き飛んでくるのだ。

まるでドミノ倒しのように先頭の兵が勢いよく吹き飛ばされている
ために後ろの兵たちもそのまま倒れてしまうのだ。

その他にも嫌な音が聞こえる。

グシャ　　グシャ

何かが潰れる音だ。

ベチャ

「あん？なんだこりや・・・ゲツ！？」

「の・・・脳みそだよねそれ・・・」

周りを見渡せば飛び散る肉片だらけだ。

前方では頭から血飛沫が上がっている兵もいる。

恐らく鈍器のようなもので頭を割られたのであろう。

そして一人の女性が歩いてくる。

兵たちは恐怖し、道を空けている

「お前たち織田の将と見た。

我が名は魏延。字は文長！いざ、尋常に勝負しろ！」

魏延が武器を構え二人を睨む。

その武器には肉片のような物がついている。

彼女の歩いてきた道には体が変な方向に曲がった死体や、頭が完全に潰れた者もいる。

一撃で即死すればまだいいが、体の四肢が潰れたまま生きてしまえばまさに地獄の痛み。

「斗詩い・・・斗詩の知り合いか？似たような武器を持って」

「あんなのと一緒にしないでよ！金光鉄槌は一撃で殺せるように面が広いんだから！」

「桔梗様から頂いたこの鈍碎骨を舐めるなよ！」

魏延が走り出す。

「おつらああああ！」

鈍砕骨を力の限り上から下へ振り下ろす。

その攻撃を二人は左右に逃げることで避ける事に成功した。

「あつぶね．．．地面が割れてんじゃねえか」

「こつちだって力じゃ負けないんだからー！」

斗詩が魏延へと接近し同じように金光鉄槌を振り下ろす。

そこ攻撃を魏延は右へよけ、鈍砕骨を突き出すように攻撃した。

「あぶねー！！」

猪々子がその突きを斬山刀で防ぐ

「ぐぐつ．．やっぱお前らの武器の攻撃は重いなあ．．」

「ならこれはどうだー！！」

魏延はすぐさま鈍砕骨を上へ掲げ振り下ろす。

「ぐっ！」

猪々子が防げばすぐに右から左へと薙ぎ払う。

「ちつくしょ・・・斗詩！」

「うん！やあー！！」

猪々子は攻撃を防ぐと苦い顔をし、後ろへ下がる。

そのすぐ後ろから斗詩が上に武器を構えた状態で魏延へと迫り振り下ろす。

「甘い！」

魏延はその攻撃を後ろへ下がる事で回避し、その後、地面をけり勢いよく斗詩の腹へと蹴りをいれる

「うつ・・・」

「やつろー！よくも斗詩を！死ねやー！」

猪々子は魏延の後ろから魏延へと斬りかかる。

魏延は回避する余裕が無かったのか、武器でその攻撃を防いだ。

「はっはっは！こんな程度か織田の将の実力は！」

「舐めんなよ！こんなの實力じゃねーんだよ！」

「ならば實力を出す前にあの世へ送ってやる。

この一撃を目に焼きつけ、冥土の土産にもってゆけ！」

魏延は後ろへ下がりが、再び鈍砕骨を上にも構える。

しかし、今度は先程とは様子が違う。

見るからにこの一撃にすべてをかけているようだ。

「いくぞ！」

魏延が猪々子に向けて走り出す。

「おっるああああー！！」

魏延が鈍碎骨を力の限り振り下ろす。

猪々子はその攻撃を回避することが出来ず、武器で防いだ。回避をしようにも、魏延の圧力に飲まれ、動く事ができなかったのだ。

並みの兵では防ぐ事すらできず、その姿に飲まれ命を失ったであろう。

愛紗のような猛将と普段から手合わせしていたために正気を取り戻し、防御の構えを取れたのだ

だが・・

「ぐああ！」

その一撃のなんと重い事か。

猪々子はたまらず後ろへ吹き飛ばされる。

「つつ・・ぐつ・・」

猪々子の相棒斬山刀がドスツと音をたて地面へ落ちる。

その攻撃の重さに手が激しく震え、痛みが走り、武器を持つ事ができなくなったようだ。

「はっはっは！武器すらともに持てんやつを殺すのは忍びない。
我が兵の出世の糧になってもらおう。

そのままそこで貴様の仲間が殺られる瞬間を見てろ」

魏延は斗詩の方へとゆっくり歩き出す。

「うう・・・」

斗詩はお腹を押さえながら立ち上がる。

「わたしだって・・・まだ戦える！」

その瞳に再び闘志が宿る。

金光鉄槌を再び強く握り構える。

「お前じゃワタシに勝てん。

元来その武器は一对一に向いていないだろう。

そしてお前の武とワタシの武では圧倒的な差がある」

「よく言われるけど・・・それを理由に一騎討ちを断ってたら武將を
名乗れません。

私は・・・元袁家二枚看板の顔良！

そして織田の軍神関羽の部下です！」

斗詩は走り出す。魏延も再び武器を構える。
互いに撲殺を主とした武器同士。

だが、斗詩の武器はハンマーの形状であり、魏延はまさに金棒。

魏延の言つとおり、斗詩の武器は大勢の兵を巻き込み殺すための武器である。

対して魏延の武器は一对一と多勢両方いけるのだ。

「やあーー!!」

斗詩は横へ薙ぎ払うように金光鉄槌を振り回す。

「駄目だな」

魏延はその攻撃を後ろへ下がりに避ける。

「何がですか？」

斗詩は今度は上から下へ武器を振り下ろす

「貴様の攻撃のことだ！」

魏延は斗詩の攻撃を再び横へ回避する事で避けた。

「攻撃ってのはこうだあー!!」

「ぐふっ・・・」

鈍砕骨を横へ薙ぎ、斗詩の体へと直撃させた。

「貴様の武器では振り回すしかできん。

そんな単調な攻撃しか出来ん武器で一騎討ちなどと笑止だ。

そして何より遅い。

貴様より強いものであれば十分目で見て攻撃を防ぐなど容易い事だ」

「うう・・・ゲホッ・・・ゲホッ」

斗詩が口から血を吐いている。

今の攻撃は効いたようだ。

「やつろー！！！」

猪々子が飛び出し、魏延へ殴りかかる。

「うるさいやつだ」

しかし魏延はそれを容易に避け、猪々子の顔を殴る。

「ぐあっ！」

猪々子はその場で倒れこむ。

その猪々子の体を魏延は足で踏む。

「・・・くそやろー・・・」

「なんとも言う方がいい。

ワタシは勝ち、そしてお前は地に伏している」

魏延は上から猪々子と斗詩の二人を蔑んだ目で見ている。
猪々子、斗詩は虚ろな目で地に伏している

「・・・つくつくく、はっはっは。あーっはっはっは！！
やった！やってやったぞ！織田の将二人をワタシは倒した！

桔梗様！ワタシはやりました！ワタシの武はここまで成長しました。
ワタシももう一介の将です！猛将です！
二人も倒したんですよ！」

魏延はたからかにそう叫ぶ。
そして再び周りを見渡す。

その目は周りすべてをゴミでも見るような、濁った目をしていた。

「お前たち・・・お前たちはどうする？
このワタシに挑むか？無理だろう。
この二人のように地に伏するのが関の山だ。

誰もワタシに勝てる者などいないのだ！
ワタシは最強だ！

貴様らの中にワタシを討てる者があるか！」

「・・・ああー！じじいぞおおおー！……！」

「な！？」

突如として現れた一人の兵。魏の鎧を纏った兵。

だがその兵は魏延を後ろから攻撃した。

「き・・・貴様・・・」

「わたしは馬岱！お前を討つものだ！」

蒲公英は鎧を脱ぎ捨ていつもの姿に戻る。

「ぐっ・・・くそ！・・・油断した・・・」

魏延は奇跡の回避で直撃は避けたものの、蒲公英の攻撃は確実に魏延の横腹を突いていた。

その証拠に魏延の横腹からドクドクと血が流れ地面を汚している。

「蒲公英・・・なんで・・・」

「イノちゃん！斗詩！わたしが来たからにはもう大丈夫！
こんな脳筋筋肉女なんてやつつけてやるんだから！」

「なんだとお！貴様もこいつらのように地面に這い蹲らせてやる！」

魏延は鈍砕骨を先程のように縦横無尽に振り回す。

「へーん！そんな遅い攻撃なんて効かないもんねー！」

蒲公英は軽々と避ける。

それもそのはず。魏延の攻撃は先程よりもずいぶん遅い。

魏延の額には大粒の汗が大量に浮かんでいる。

ズキズキと横腹が痛み、力に制限をかけているようだ。

「このお！ちよこまかと・・・」

「あんななかなか強いみたいだけど、そんな状態じゃ蒲公英に絶対勝てっこないよ」

「うるさい！」

魏延は怒りに震え鈍砕骨を思い切り振り下ろす。

蒲公英はそれを軽々と回避する。

「やっぱり脳筋は扱いやすいな」

蒲公英は槍の柄で魏延の怪我をしている横腹を思い切り突いた。
そして槍を捻る。

「!？　ぐあああああー!!」

魏延の体に電気が走る。

槍により怪我をしている箇所^{箇所}に槍の柄を突き刺され、さらに捻られたのだ。

怪我を無理やり拡張され激痛が体を駆け巡る。

「あ・・・あ・・・」

あまりの痛みに魏延は気を失う。
その体を蒲公英は受け止める。

「敵将魏延！討ち取ったあー!!」

「うおおおおー！！！！！！！！」

魏の兵たちの士気が大いに上がる。

「ま、まさか魏延様が・・・」

「お、おい・・・」

対して敵の士気は下がったようだ。

「イノちゃん！斗詩！！」

「蒲公英・・・なんでここに・・・」

「そんなの決まってるじゃん！

あつちよりこっちの方がおもしろそうだったからに決まってるでしょ！

でもバレちゃ戻されるから兵に変装してたの」

「そつか・・・でも助かったぜ・・・あ！早く撤退しようぜ！斗詩が・・・」

そう、斗詩は怪我を負っているのだ。

「ごめんね・・・蒲公英ちゃん・・・」

「ううん。大丈夫、早く撤退しよ。手当てしなきゃ」

魏延を縄で縛り、馬へと乗せる。

猪々子は一人で馬へ、蒲公英と斗詩は二人で馬に乗る。

そして、引き上げようとしたとき・・・

「焰耶ー！！！！！！」

敵顔が怒りにそまつた目でこちらへとやってくる。
彼女の武器からはすさまじい攻撃が発射される。

その攻撃に兵たちは次々に死んでいく。

「な・・なにあれー!!」

「や、やべえなありゃ・・」

「あんな武器見たことないよお・・」

三人は驚いた。彼女の攻撃はまさに怒りに任せ無差別に攻撃をし続けていた。

「おのれ小娘どもが――！焰耶を返せ――!!」

彼女の周りの兵たちが次々と死んでいく。
だんだんとこちらへと近づいてくるのだ。

「まっまずい!!早く逃げなきゃ！全軍撤退!!撤退――!!」

蒲公英の指示により一斉に逃げ出す兵たち。

「おのれ逃がすか！死ねい！！」

だが、彼女の武器からは何も発射されない。

「ちい・・・運のいいやつらめ・・・」

焰耶・・・慢心するなといったであろうが・・・」

こうして猪々子、斗詩、蒲公英は命からがらこの地獄から脱出することになった。

猛将魏延（後書き）

うーん・・魏延の口調が難しいですね。

それに性格がずいぶん悪者に・・

でも、やっぱり魏延対馬岱はどうしても書きたかった。

史実の赤壁では曹操たち魏が負けました。

そしてその退路に関羽が伏兵として配置されました。

ですがこの小説では猪々子と斗詩です。

だって愛紗が伏兵としていたら焰耶に勝っちゃいますしね・・義理もないからいるいみないし。

だから猪々子と斗詩には完全に負け役になってもらうしかありませんでした。

そして、それを利用してずっとやりたかったここにいるぞー！を書きました。楽しかったです。

ここにいるぞー！

馬岱の唯一の活躍とき。そして名言。

魏延を後ろから切り捨てました。

宝（前書き）

ちよつと短いかも。
最近忙しいです。

喧嘩番長5がおもしろくて・
このシリーズ1・2・3・4とプレイしてきました。
やっぱりPSS2の方がよかった・

宝

蒲公英、猪々子、斗詩は捕縛した魏延を連れ、信長たちのいる城へと戻った。

赤壁での戦いの後、信長たちは許昌まで戻った。

呉はもはや戦力が無いため、追撃する必要もなく、撤退を許した。

戦後処理を済ました後に、降伏勧告でもすれば呉はそれを受け入れるしかないであろう。

今日を向けるのは蜀である。

そのため、首都を許昌とし、今後信長たちは行動するとした。

そして、今ここに縄に縛られた魏延が信長の前にいる。

（こいつが・・・織田信長か）

魏延は信長のまえで後ろ手に縄を縛られ正座で座っている。

その横には愛紗、星がいつでも斬れるようにそれぞれの武器を手にした状態で控えている。

信長は椅子に座り、肘置きに右手の肘を置き、手は握りこぶしを作り頬の辺りにあて、魏延を睨むように、そして品定めするように見ている。

（くそ・・・凄い覇気だ。御館様と同じか？いや、それ以上かもしれない）

魏延は下を向きながら思索する。

そして一度チラリと目線だけをあげ、信長を見、そしてすぐ下へ視線を逸らす

（なんて恐ろしい目をしてるんだこいつは・・・震えているのか？このワタシが・・・）

魏延の肩が震える。自分との格の違い。

信長の王としての覇気が弱者を震え上がらせるのだ。

「汝、思い残す事はあるか？」

「・・・」

魏延は信長の声を聞き、何も喋る事が出来ない。

命乞いなど無駄だ。

戦とはいえ、信長の軍の将を二人も負傷させたのだ。

そして、下手な嘘をつきこの場を取り繕う事も無駄だろう。
信長に嘘は通用しない。

それだけはヒシヒシとを感じる。

「ワタシは・・・」

魏延が重い口を開いた。

「こんなところで死ねない」

魏延がその言葉を発し、そして黙る。

「続けい」

「ワタシはまだやりのこした事がいっぱいある。
師である桔梗様、厳顔様を超えていない。」

そして、曹操様の部下となつてからまだ何も功を得ていない。

弟子として、部下として、そして武人としてこんな生涯で思い残すことなんてあるに決まっているだろ！

なにより・・・なにより自分の慢心・・・くだらない思い上がりのせいでこんな不覚を・・・情けなさ過ぎるだろ・・・」

魏延の目元からポタポタと涙があふれ出る。

本気で後悔しているようだ。

猪々子と斗詩を倒し、心が高揚し、そして自らが作ってしまった思い上がりが彼女に最大の間隙を作ってしまったのだ。

「ワタシの人生はなんだったんだ？

ずっと武に励み、友も作らず、遊ばず、寝る間もおしんで鍛錬をしてきたんだ。

そして桔梗様に出会って、曹操様のような王に出会えて。

これから・・・これからだつてのに。

ワタシの死に様がこんな情けないなんて。

自分に・・・自分に負けるなんて・・・」

「負けてないよ」

その場に馬岱の声が響く。

「あんたは自分に負けていない。
わたしに負けたんだ」

蒲公英の言葉を聞き、魏延が顔を上へと向ける。
そして蒲公英へと言葉を發した。

「貴様にか？ 違う！ ワタシが慢心していなければ負けてなどいない
！」

「違うね！ あれはわたしの武だ！」

「なんだと・・・」

「この脳筋女・・・」

二人がいがみ合う。

ひたすら武に励んでいたのは魏延だけではない。
ここにいる乙女の将全員がそうなのだ。

故に蒲公英も同じ。

蒲公英にすれば彼女の勝ちも魏延が慢心したからだというのだ。
つまり魏延が本気で戦えば蒲公英は勝てない。
そういつていることになるのだ。

「ちょ、ちよつとたんぼちゃん。魏延さん！」

桃香がこの場を宥めようと二人に割ってはいる。
しかし二人はにらみ合い、今にも飛び掛りそうだ。

「ちよつと待つて、ちよつと待つて！
え〜っと・・・二人は自分の方が強いって言いたいんでしょ？」

「そうだ！（もちろん！）」

「だったらさ、また今度戦えばいいじゃない。ね？」

「また・・・今度だと？」

魏延がその言葉を聞き、桃香の顔を見る。

「うん。二人の気持ちはそれで治まるんでしょう？
魏延さんもたんぼちゃんも万全の状態で戦えばどっちが強いかわかるじゃない？」

二人にとって武は譲れないものなんだしね。
それにお互いにいがみ合えて、競え会える相手っていつのはやっぱり大切だと思うの。
生涯のうちでそういう相手は大切にしなきゃ」

「し、しかし・・・」

「と、桃香さま・・・？」

魏延、蒲公英が何かをしゃべろうとすると

「だゝめ」

桃香が自分の口元に人差し指をあて、そして片目を瞑る。

「魏延さんはたんぱちゃんとの勝負に備えて魏延さんは体を回復させなきゃ。」

さ、行こ。医務室へ案内するね」

桃香は魏延に肩を貸し、彼女を立たせる。

「と、桃香様！」

愛紗が桃香へと呼びかかるが、桃香は魏延と蒲公英の時のようにパチッとウインクをしその場を後にする。

そしてその場にボタンとドアが閉まる音が響き、その場の静寂が訪れる。

「・・・つぶつぶ。あーっはっはっはっはー!!!」

唐突に孫策が笑い出す。

「プツ、くすくす・・・」

「はっはっはっは！」

「フフツ」

彼女に釣られて皆が笑い出す。

朱里が、星が、そして周瑜までもが。

「・・・くすくす」

蒲公英もしばしあっけに取られていたようだが現状を理解したのか
その顔に笑みが浮かぶ。

しかし愛紗だけはおろおろしていた。

「う、ご主人様・・・」

「良い」

信長は目を瞑る。

そしてゆっくりとその口を開いた

「あやつにとっては大陸の人間全てが大切なのであろう。
いずれこの大陸は一つになる。

ならば魏延もワシや桃香の物となる。

そして、普通のものより抜きん出たものはそうおるまい。
ならばその者は大切にしなければならぬ。

殺してしまえば、魏延の代わりとなる者と出会えるのはいつになる
かわからぬ。

故に・・・

故に人は・・・宝ぞ」

「人は・・・宝ですか」

「うむ。有能、無能どちらも構わぬ。
人にとって宝だと感じる相手は違う。

夫婦、子供、客、上司部下、そして友。

その代わりになる者なぞ易々と出会えるものではあるまい。
ならば殺してしまえば時や浪費がかさむだけぞ。

大陸は一つになる。しからば全てを同じに考えねばならぬ」

「ご主人様・・・」

愛紗が信長を見つめる。

「変わられましたね・・・最初出会ったころのあなたとは・・・」

「で、あるか」

「はい」

「クク・・・そう感じるか。ワシも桃香に充てられたのかもな」

「それで、それでよろしゅうございます」

愛紗が信長に頭を下げる。

「なぜワタシを助けた？」

魏延が桃香へと問いかける。

「だって・・魏延さんが悔しそうだったから」

「悔しそう・・、そうか。そうだな。
確かに悔しかった」

「人はね。泣きながら生まれるの。
でも周りの人は笑顔で、その生まれる子供を見つめてる。

だから・・死ぬときは貴女が笑顔で、
思い残すことなんて何もない、
楽しかった笑顔で死んで欲しい。
そして周りの人が貴女の死を悔やみ、
泣いて、悲しんで貴女に死ん

で欲しい。

魏延さん。貴女はここで死んだらそうなれた？

貴女が悔やむことがいっぱいあって、険しい顔をして、世の中や自分を恨んで死んで貴女はそれで満足な人生だったって言えた？
きつと違うと思うの。

だから私は貴女に死んで欲しくない。

貴女がこの時代、大陸で生を受けてよかったって思ってたって欲しいの。
戦争や・・・人を恨んだりして死んで欲しくないな・・・」

桃香が魏延を見つめながら必死に語る。
魏延は桃香から目を逸らさずその言葉を聞く。

「お前は・・・何故ワタシに・・・
出会ったばかりのこんなワタシに」

「うん・・・出会いを大切にしたいからかな？」

「ど、どついうことだ？」

「だって、一生の友達や親友なんて誰がなるかわからないじゃない？
ちっちゃいころに出会った友達で、今はどこに住んで、何をしている
かわからない友達がたくさんいるんだよね。」

誰が一生の付き合いになるほどの親友になるかなんてわからない。
だから私は全ての出会いを大切にするの。

魏延さんが私の一生の親友かもしれないから」

「ワタシが・・・お前の？」

「うん。戦争中で、敵同士だからって後ろ向きじゃ駄目だよ」

桃香がちっちゃい子をあやすようなメツという仕草でそう話す。

「だから・・・友達になる？ね？」

「ワタシが・・・お前の、友達・・・親友・・・」

この言葉は日々武に生き続けてきた魏延の心に響く。
彼女には必要なかった言葉。

自分の命を救ってくれた人からの。
無償の、借りや偽りではない無垢なる誘い。

そんな彼女からの単純で明快な言葉。

「友達・・・ははっ！そうか！友達か！」

「うん！友達！友達だよ！」

魏延が笑う。その顔にはもう悲壮の色はなかった。
その顔を見た桃香の顔も自然に笑顔になる。

まるでひまわりのようなそんな笑顔。

「わかった。ワタシは魏延。字は文長」

「私は劉備。字は玄德。真名は桃香だよ」

「ま、真名を教えてくれるのか？」

「うん。だって私たちこれから友達じゃない。
大切なお友達。だから魏延さんに教えるね」

桃香の微笑み。

自分に心を開いてくれた魏延に対する精一杯の笑顔。
その笑顔に魏延はしばし見とれる。

「そ、そうか。ははっ、わかった！
私の真名は焰耶だ。よろしくな！」

「うん。よろしくね焰耶ちゃん」

「ああ。桃香！」

宝（後書き）

有名なお言葉を今回使わせていただきました。

『あなたが生まれたとき、周りの人は笑って、
あなたは泣いていたでしょう。
だからあなたが死ぬときは、あなたが笑って、
周りの人が泣くような人生をおくりなさい』

ネイティブ・アメリカンの言葉です。

あまりにも有名であり、様々なマンガや作品で使用されています。

今回桃香に言わせました。
彼女ならいいそうかなって。

閑話（前書き）

たまにはこういった話も必要かと思ひまして。
少し短いです。

ゲームでいう拠点のようなものも書いてみてとの要望がちょっとあったりしまして。

しかし、やはり私はこういった日常は苦手です。

閑話

翌日、大広間にて今後の話し合いが行われていた。
魏延は桃香にのみ、焰耶という真名を教えていた。

彼女の待遇は捕虜扱いなのだ。

しかし、牢に入れたりはずせず彼女に部屋を与えそこに軟禁している
といった形が正しいであろう。

そして呉の面々である孫策、孫権、周瑜、黄蓋、甘寧、周泰。

彼女たちもまた同じだ。

しかし、孫策は違う。

「ねえ信長」

彼女は黙って軟禁されているような人物ではなかった。

部屋を飛び出し自由にこの城内を歩き回っているのだ。

そして、驚くべき事は彼女、孫策は信長に真名を預けたのだ。

彼女は赤壁での戦いで自分たちを手玉にとり、自分をここまで追いやった信長を認めたのだ。

彼は王の器があり、真名を預けてもよい相手だと。

そして孫権。彼女もやはり雪蓮と姉妹であったようだ。

「桃香。ここのご飯はおいしいわね」

自分やその部下。

そして自分さえも諦めかけていた周瑜を敵である彼女が自ら体を張り命を救ってくれたのだ。

その優しい心。

この乱世で変わらない奇麗事を貫き通す清純さ。
その全てはもはや素晴らしいといえるほどであった。
故に彼女は真名を教えた。

そうなる・・・

「桃香殿」

思春や（甘寧）

「あ、桃香殿」

明命（周泰）

「桃香。ここの書物はいいものが揃っているな」

冥琳（周瑜）も同じ。

全員が桃香に命を救われた者たちなのだ。

だが、雪蓮は彼女に真名を教えていない。

そして逆に蓮華たちは信長に真名を教えていない。

それぞれ、認めた相手が違うのだ。

雪蓮からすれば桃香はただの理想家、そしてこの織田軍に相応しくない奇麗事をいう女であるのだ。

蓮華からすれば信長は非常な男、冷酷、そして桃香の主に対応しない魔王であるのだ。

そしてもう一人。

「蒲公英ー！」

「相変わらず馬鹿ね焰耶。その頭はやっぱり中身がないんじゃない」

時は少し戻り・・

焰耶はあれから傷が治るとすぐに蒲公英へ勝負を挑んだ。

桃香に立会いをお願いし、一対一を申し込んだ。

無論武器は本物の己の相棒。

桃香は危険だと主張したが焰耶のような特殊な武器の模造はない。それに刃を必要としない撲殺を目的とした武器であるため意味もない。

なにより蒲公英自身もあの時の戦いを再現したらしく彼女自身も真剣勝負を望んだのだ。

そのことを伝えられた桃香は黙って俯いたが、焰耶が必ず武器は寸止めをする約束をしたのだ。

友達である桃香の悲しい表情を見たくないのか、必死でそのことを焰耶は伝えた。

蒲公英も寸止めを了解し二人の勝負は始まった。

だが、その日二人の戦いは決着がつくことはなかった。

「くっ・・・はぁ・・・馬岱。貴様なかなかやるな」

「はぁ・・・はぁ・・・だからいったじゃん。あんた程度じゃ私を倒せないよ」

どちらも互角。二人の武は拮抗しているのだ。

その日は二人の勝負は引き分けとし、また後日再戦となった。

何度も二人は戦う。

だが勝敗が付く日もあつたのだ。

人間であるゆえに、体調が悪い日もある。

疲れている日もある。

時には蒲公英が勝った。

時には焰耶が勝った。

二人は自分が負けるとまたすぐに再戦を申し込む。
その繰り返しだ。

その日は引き分けで終わった。

「また引き分けか・・・これで5勝5敗23引き分けか・・・」

「引き分けばっかね・・・」

二人は地面に仰向けに寝そべっていた。
二人は黙って空を見上げている。

そして唐突に焰耶から口を開いた。

「強いな・・・お前」

「はあ？当たり前じゃん」

「そつだな。なら当たり前なお前と張り合っている私も強いな」

「なに？頭いかれたの？」

蒲公英はちよつと引いた顔つきをし焰耶の方を見る。

すると焰耶は笑う

「っはっはっは！そうかもな。最近武の向上を自分で感じている。それがたまらなく嬉しいんだ。

あの日、あそこで死んで、止まった時間がまるで動いているようにな。

私は桃香のために強くなりたい。

敵である私に情けをかけてくれ、そして友だと呼んでくれた。

私の体は蜀の魏延だが、心は桃香だけの将、魏延でありたい」

そして、焰耶は蒲公英の方に顔を向ける。

「馬鹿。悔しいが貴様との手合わせは私の武の向上に一番適しているようだ。

貴様になぞ言うのも癪だが、礼を言わせてもらっ

「ふんつ。あんたは精々私の鍛錬のためにこれからもかかってくることね」

「ああ。そうさせてもらおう。

貴様とはこれから長い付き合いになりそうだ。

それでここに・・我が真名である焰耶を預けさせてもらう」

「え？」

焰耶は蒲公英に右手を差し出す。
その行動に蒲公英は驚く

「・・・・・・バチーン！」

「ついたあ！な、なにをする貴様ー！」

蒲公英はその差し出された右手の掌に思い切り自分の右手の掌をぶつける。

「あはははは！私は蒲公英だよー！」

そう捨て台詞を吐き、蒲公英は場内へと走って逃げていく。

「蒲公英ー！」

「相変わらず馬鹿ね焰耶。その頭はやっぱり中身がないんじゃない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7615s/>

うつけ無双

2011年11月7日09時29分発行